明治四十五年一月二十二日印刷納本 毎月一回廿五日發行（本誌明治三十七年十二月二十九日第三種郵便物認可）

二月號

女子文壇



第八年第二號

（通卷第百十一册）

東京 女子文壇社 發行

最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦痛なく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して治療を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不姙娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡便に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進步は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて治療の目的を達するなり

獨乙の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は是等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尚梅毒消渴の疑ある人は唯一丸を併用せば其の効最も大なり

定價
八球入金五十錢
十八球入金一圓〇〇
四十球入金二圓〇〇
特製百十球入金五圓〇
內地遞送無料

東京市本鄉區湯島天神町壹丁目五拾參番地

唯一丸發行所 中西葆光堂藥局

振替貯金東京口座千五百番（電話下谷五四七番）

◎全國到る所の有名なる藥店にて販賣す

女子文壇二月號（第八年第貳號）目次

口繪

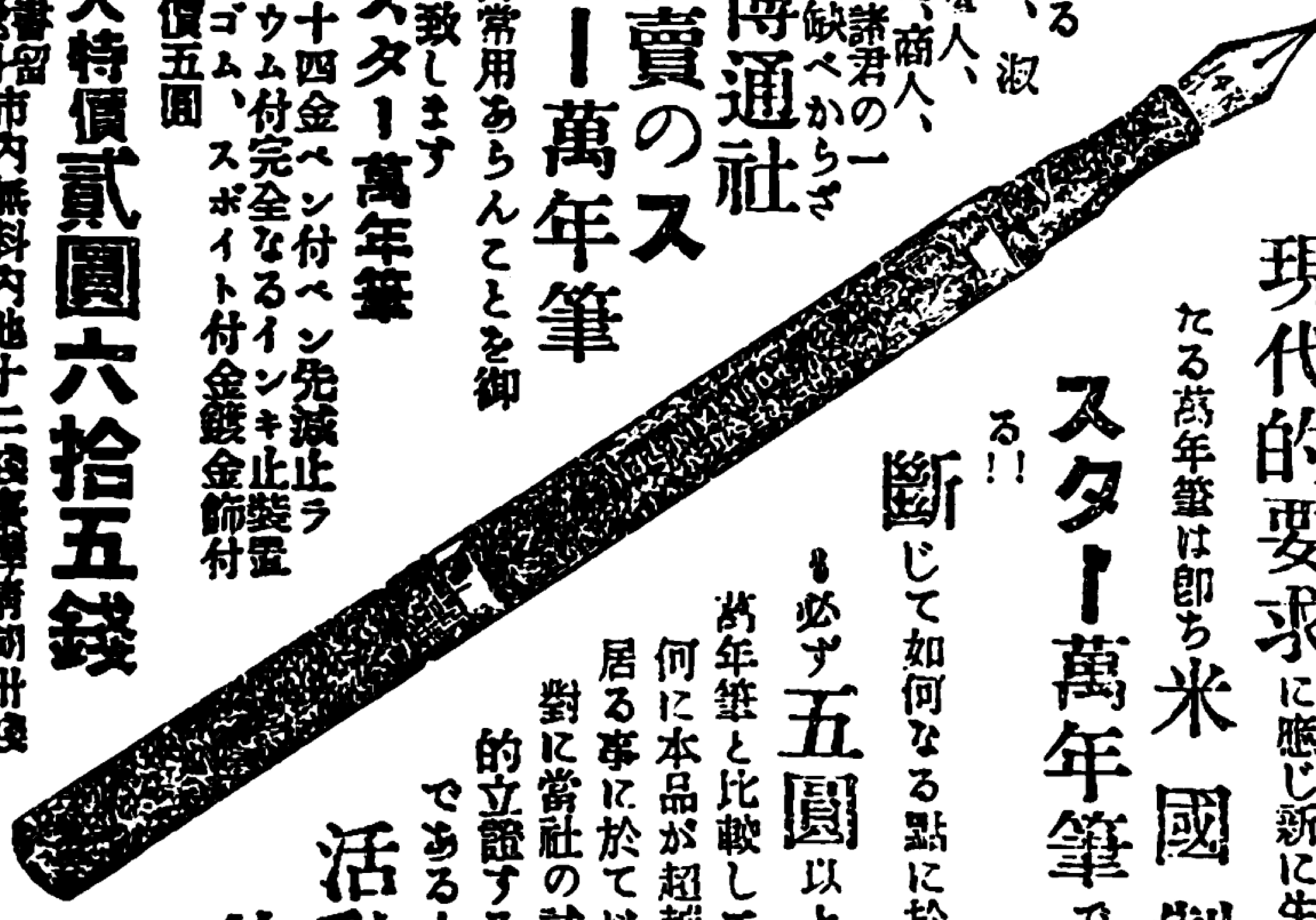
博通社 博 特賣品

◎安心の出來る買物は博通社に限る!!!

スター萬年筆

現代的要求に應じ新に生れたる萬年筆は即ち米國製スター萬年筆である!!

斷じて如何なる點に於ても必ず五圓以上の萬年筆と比較して如何に本品が超越し居る事に於ては絶對に當社の試驗的立證する處である!



活動的△社會に於ける紳士、淑女、軍人、官吏、商人、學生諸君の一日も缺べからざる博通社特賣のスター萬年筆を御常用あらんことを御勸め致します

◎スター萬年筆

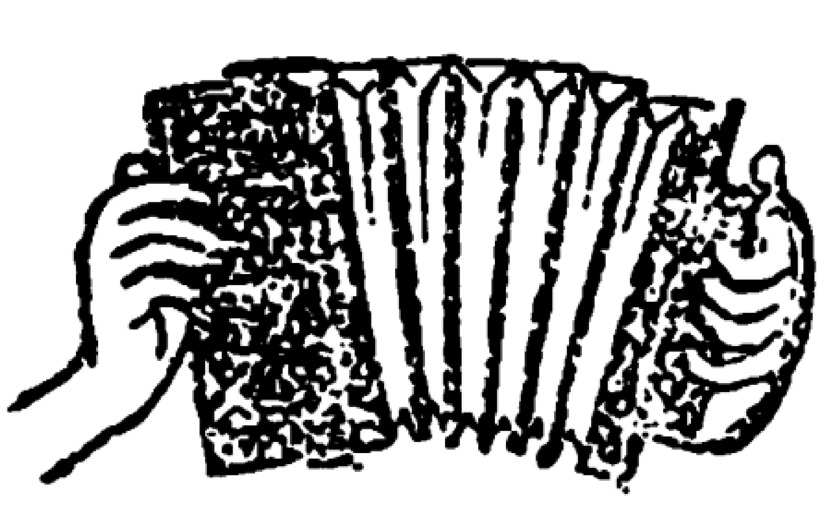
正十四金ペン付ペン先滅止ラヂウム付完全なるインキ止裝置付ゴム、スポイト付金鍍金飾付

市價五圓

最大特價貳圓六拾五錢

▲書留送料市内無料内地十二錢臺樺清朝卅錢

◎御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!



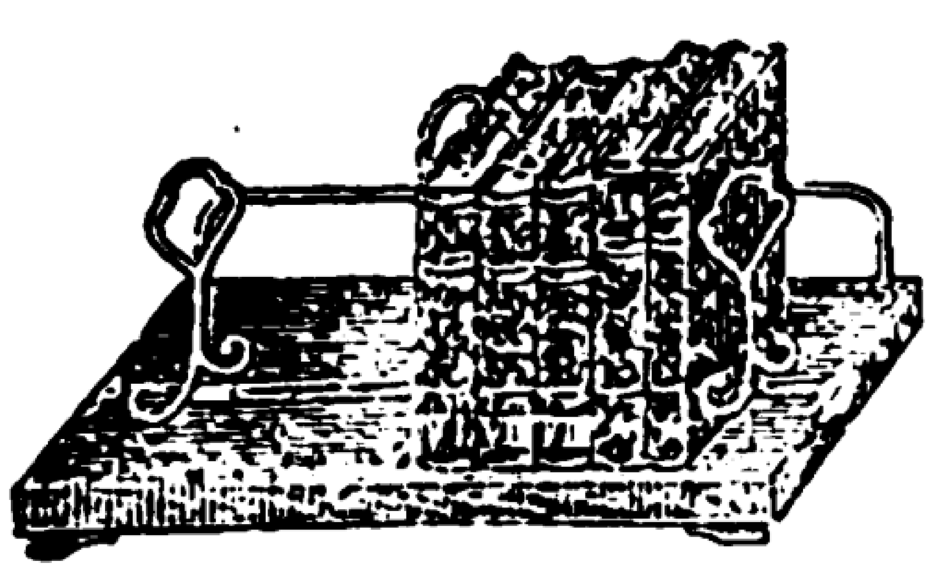
◎最新式ポケット手風琴

ポケット用手風琴として頗る好評を博せり!其の形狀尤も小にして携帶に便且つ體裁極めて優美なり、然も音律の正確なるは本器の尤も特色とする處である

◎美麗函入小型手風琴 壹個 特價八拾五錢

◎手風琴獨まなび 壹部 特價拾八錢

▲送料市内五錢内地十五錢臺樺清朝卅五錢



◎最新式自在本立器

堅牢にして體裁頗る優美、輕便にして高尚なる模範的本立器として非常なる好評を博しつゝあり、一冊の本でも數冊でも花形金具の調節に依り屹立自在全部を取外す時は一枚の板となり携帶に尤も妙

◎大形布製一花式 特價壹圓拾五錢

◎大形並製兩花式 特價壹圓四拾五錢

◎大形上製一花式 特價貳圓參拾錢

◎大形上製兩花式 特價貳圓八拾錢

▲送料市内四錢内地十六錢臺樺清朝四十五錢

博文館代理部

博通社

東京日本橋區本町一丁目

電話本局六百十四番

振替口座東京五〇番

若草



（大江製版印刷）

新學期開始

◎本會は眞面目に短歌を研究試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的知識を供給する。短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人の入會を待つ！

和歌講義錄

十ヶ月

卒業

此際至急入會者に限り入會金を免除す

見よ!!! 船來ラフ紙印刷は本講義錄唯一なり

科目

△短歌作法
△新派和歌講義
△新派和歌評釋
△歌話
△萬葉集評釋

△歌人評傳
△詩歌の流派
△詩の評釋
△新派和歌史
△新歌語と作例

▲添删實例
▲歌人經歷談
△講師は皆當代新派歌壇の名家！

見本 附き 會則 往復端書にて申込次第無代送呈

東京市神田區旅籠町一丁目

大日本短歌會

振替東京一九五五番

梅さく頃に生れいでし

少女画報

第一年第二號　定價十五錢郵税一錢五厘　六冊税共九十錢　十二冊一圓七十五錢

口繪

▽第二號の畫を御覽下さい美しく
▽面白くきれいに立派に出來ました
▽寫眞の數四十餘◎女王殿下御染筆並に
▽御眞影を初め◎女學校生活◎少女の遊
▽學校の前◎子守◎ピアノ◎禮法◎いたちごつこに◎女學生の雪こり
▽午前と午後◎習字のお稽古◎あみ物お稽古◎懸賞は『妙な寫眞』

◎梅が香　井川洗厓氏筆
◎兎の雪　渡邊與平氏筆

◎ぶつぶつ蟲……倉橋惣三
◎小説 養女……尾島菊子
◎文子さんのお洗濯……平塚かね
◎小説 みじめ繩……三宅花圃
◎田植歌に殘る哀な姉妹　遠山稲子
◎小説 花掘り……三津木春影
◎かくれんぼ……松山茶二
◎私の女學校生活……仙子
◎縫ひ直しの御衣を召したる兩殿下

▼繪ばなし……與平
▼鳥の先祖　村松元雄
▼一口ばなし……
▼頓智問答……
▼新案鼠の面
▼思て居る數の當て方
▼面白い砂の國……しげ子
▼お壽司の會
▼節分草の鉢植……
▼文學遊戯いろく……
▼少女時代の春日局
▼懸賞當選者發表……
▼女學校參觀

東京麹町區飯田町四丁目四番地
東京社
電話番町二三三九
振替貯金口座東京一一八一八

婦人画報

二月一日發行

二月卷一冊廿五錢

郵税二錢五厘 三冊八十錢 六冊一圓五十三錢 十二冊二圓九十四錢

附錄 おとづれ

高村眞夫氏筆油繪

畫報

- 東伏見宮妃殿下御台臨
- 二十年前の各宮殿下
- 名流婦人の新年會
- 山階宮安子女王殿下
- 寄宿舍にかへりて
- 諸婦人會の新年會
- 名流婦人の機織り

- 平田松堂氏と夫人の日常
- 諸名家の令孃かゞみ……
- 女學校の始業式……
- 光榮ある百五歳の老媼……
- 中山彩畝女史と其畫……
- 婦人の氷すべり……
- 新年のまないた開き……
- 花の如き新嫁花婿……
- 奥平伯と杉浦氏の家庭……
- 馬屋原氏の夫人と庭園……
- 婦人の武術 ◉若夫人鑑……
- 愛らしき令孃の稚子姿……

讀物

- 新らしき婦人 浮田博士
- 家庭を快樂ならしめよ……添田博士
- 婦人の服裝……幸田露伴、田代博士、吉田熊次、梶田半古
- 男と女とどちらが偉いか……榊博士
- 現代婦人の心 下田次郎
- 育兒衛生二月の卷……加藤博士
- 花嫁の家政のとりかた 高島平三郎
- てつくりさんとプランセット 久保良英

- 誤られた私の境遇 江木榮子
- お產の難易と心掛 岩崎產婆
- 最經濟的な生活法 井上秀子
- 古今名媛逸話……いね子
- 皇后陛下の御歌
- 梨本宮妃殿下の御事……
- 母親の顧問……黄雲女
- 古今の女歌人…… 佐々木博士
- 春の衣裝……をんな
- この頃のお惣菜……吉村里子
- 子供のしたばき……吉田しづ

臨時増刊 新家庭號

一月十五日 價卅二錢 税三錢

花の如き寫眞百有餘 記事何れも新家庭の重要適當のもの眞に花嫁及令孃の好侶伴

東京麹町區飯田町四ノ四 東京社 振替東京壹壹八壹八 （全國書店ニテ販賣ス）

花葵



（最近撮影）

德川家達公の二令孃

常盤樹



ドクトル伴野慶氏夫人榮子





ドクトル辻村貞義氏夫人清子

青年雜誌界の覇王

秀才文壇

（趣味體壹圓）

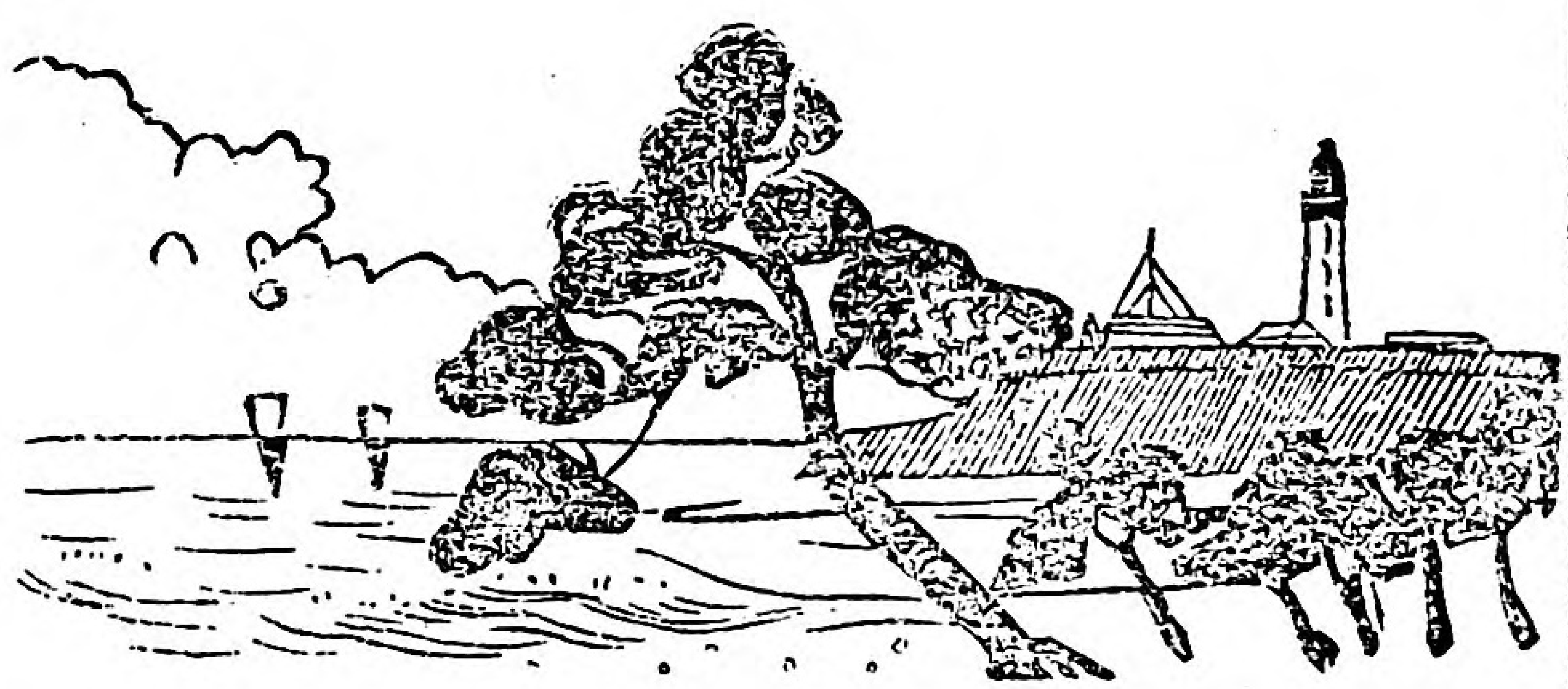
本誌の定價表

一册郵稅共金十六錢○三ヶ月分金六十九錢○半ヶ年分金一圓三十五錢○一ヶ年分金二圓五十錢（郵券代用壹割增）

特約販賣　東京（市）東京堂、東海堂、北隆館、至誠堂、上田屋、良明堂、大阪盛文館、其○他到る處の書店取次販賣す

山十印

銚子
犬吠岬と君が濱
之景



日本最上醤油

釀造元
千葉縣銚子港（電話銚子三〇番）（振替口座五七二番）
岩崎重次郎

醤油問屋
東京市京橋區南新堀一丁目（電話京橋三三五番）（振替口座二一一四一番）
岩崎重次郎

毛ぬき新劑

従來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘルーピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘルーピン
定價 壹圓
特製 參圓
内地送料 十五錢
海外 三十五錢

飲色白くなる薬

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ビオール錠は極て强度の淸血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を淸淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ビオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
内地送費十五錢

東京市牛込區北山伏町壹番地
百合園製藥所

みどり兒



寶樂家秋月德次郎氏夫人おき子と愛兒

鷲毛

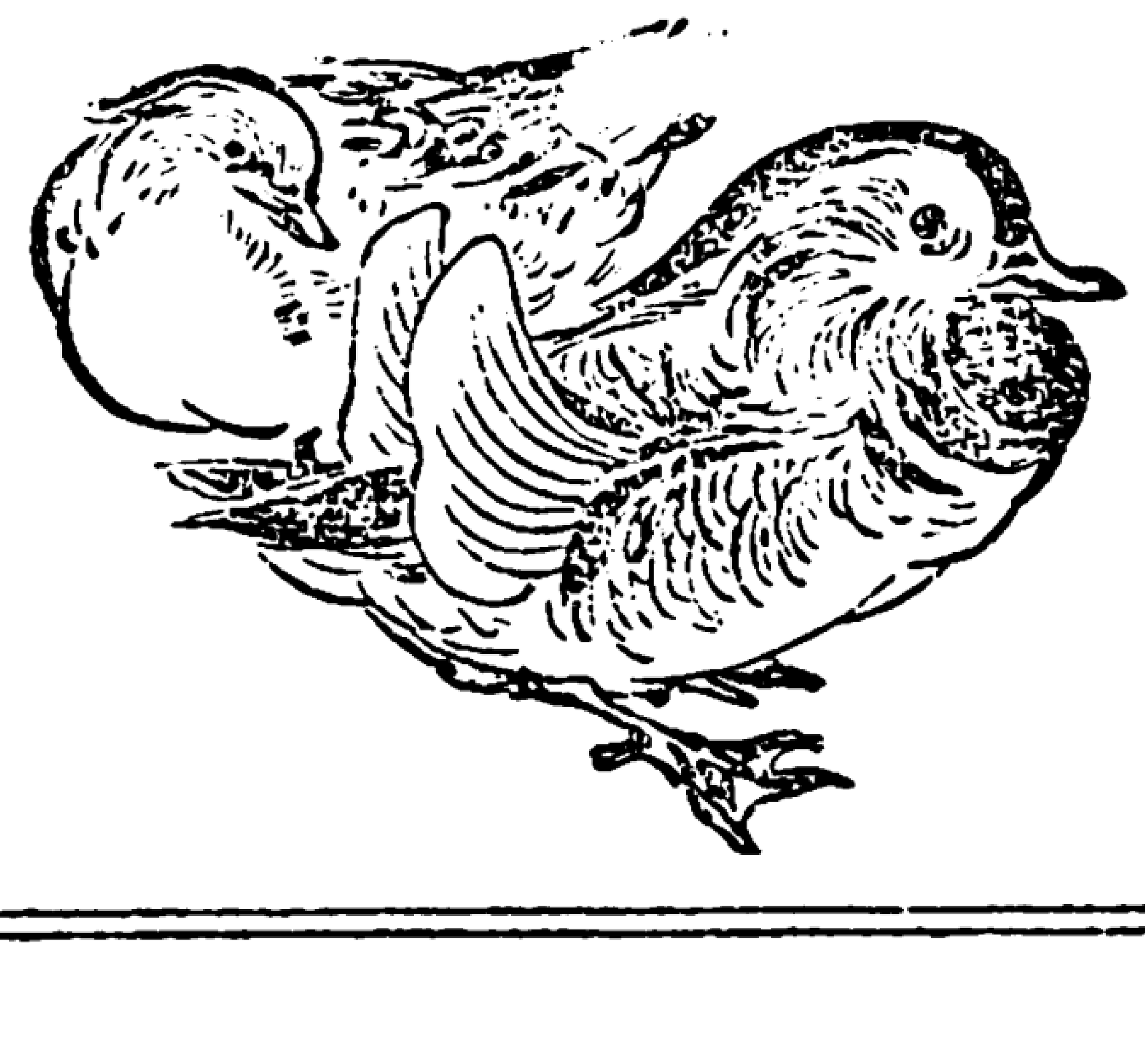


ドクトル　高橋義助氏夫人梅子

第拾貳卷第參號……二月一日發行

女學世界





菊判大判
紙数二百八頁
口繪…石版
寫眞版澤山
正價二十錢
郵税二錢

東京本町
博文館
振替東京二四〇

きさらぎ





實業家 鳥居嘉兵衛氏夫人榮子



實業家 立川某氏夫人いく子



水温む



藥學博士 高橋秀松氏令嬢富子





子爵 平田東助氏令嬢うのえ子

◎此の上なく面白い女子の必讀書出づ!!!

最新刊 結婚後 女宝手箱

◎本書を讀む面白さは筆紙につくし難し◎送料共金卅四錢一切手代用は二錢又は一錢五厘切手を卅八錢

◎目次◎夫を選ぶ注意◎自由結婚◎無理結婚◎早婚の弊害◎夫婦年齢の差◎夫婦の相性◎夫婦将来の和不和を前知する方法◎如何なる結婚は幸福なりや◎結婚の習慣◎法律と結婚◎嫉妬◎見合の方法◎結婚の問答◎結婚と衣裳◎結婚式の順序◎結婚當夜の心得◎結婚後の心得◎結婚届◎結婚後夫の衛生上の注意十二件◎結婚後妻の衛生上の注意十五件◎月經とは如何◎月經時の注意◎子のある法◎子のない法◎子を持つ月のくり方◎妊娠せし事を如何にして知るか◎妊娠中の心得◎妊娠中の悪食物◎妊娠中各月の變化◎出産した時ハ子の大きさ◎出産の日を前知する法◎子を産む時の注意◎如何にせば安産なるか◎生れたる子の取扱法◎出産屆◎子宮病の話◎梅毒の話◎淋病の話◎女子淋病の話◎梅毒淋病の傳染を豫防する方法◎夫婦の不和が害する種々の病氣の原因及療法◎ある若き女の懺悔談◎出産失敗談◎ある女の日記等右の外目次數十項皆無上の面白味ありて讀み始むれば途中にて止めがたき良書なり

發行所 東京市神田錦町三丁目 振替東京一六一一八番 學友社書店

◎色白くなる

私事色々化粧品や薬など用ねても効なき處今回ふとした事より色白くキメも細かになりました。嬉しさの餘り皆様に御教へ申します御望みの方は郵券封入御照會下さい

東京神田錦町三ノ二 高柳こう子

御禮

昨年中色白くなる法を御教へ申上げました方より御年賀のおはがきが山の様にまゐりました。又色が白くなつたといふ御禮状も澤山まゐりました。御厚意はありがたく存じて居りますが年末年首多忙のため一々御禮の御手紙はあげられませんでした略儀ながら誌上で御禮申上ます…

高柳こう子

◎◎肺病新劑◎◎◎

(ツベル丸)

肺病諸君ニ告グ

肺病ハ不治ノ症ニアラズ
速ニ本劑ヲ服用アレ奏効ス

!!!病魔ニ屈スルナカレ!!!

定價壹週間分參圓 貳週間分五圓 郵送無料

東京市本郷區駒込肴町一三 敷島館

中山

◎繪葉書目錄

ハガキで申込次第無代進呈◎注文に付切手收入印紙代用不苦割増ハ不要◎送料一切不要◎金拾

目錄式 貮文入小說繪態書◎隠退子◎琵琶歌◎己が罪◎乳姉妹◎金色夜叉◎月魄◎火生木◎伯爵夫人◎肉彈◎女夫波◎歴風戀風◎此一戰◎相

夫傑 野口男三郎 各十枚組各冊錢特價各 廿錢◎十四種登揃貳圓 脚本不如歸 八枚

組廿五錢特價拾六錢◎お湍インバネス◎色男の及京◎戀の試驗◎飛んた

寫生◎其分私引受けた◎縁むすび◎三つ巴◎相合傘◎戀の成功◎戀の失

敗栗◎小夜時雨◎夏子◎天風組◎栗菊◎メタル◎各六枚組各拾八錢特價松

の◎戀の夢◎噂の織◎細君の秘密◎戀祭流し◎郵便◎漂流美人◎

各拾錢 貮拾錢 貮錢

樂しき契 六枚組廿四錢特價廿四錢

ラブ 三枚組特價拾九錢

新婚 五枚組特價廿五錢 六枚組特價拾

裸體百美 十枚組特價各廿錢 五拾枚組特價各四拾八錢

美 六枚組特價拾八錢

戀 五枚組特價廿五錢

の結ぶり 一より六迄各冊各廿四錢 各拾錢

繪葉書帖 五十枚挾壹冊 本之部 三白

百枚挾壹冊廿錢 百五拾枚挾七拾五錢 百枚挾壹冊 之部廿五錢 台紙挾五拾錢 六拾錢

以上凡て拾枚につき特價四拾錢 直段は直段表による 普通十句 小五拾錢 十句直段 五錢 拾錢 四拾錢 四割位 如何様

歌句添削 ◎歌三十首廿錢 句十句拾五錢 ◎の宗匠なり

とも御相談に應ず

名所懸賞販賣

◎繪葉書倶樂部本部

前田夕暮氏序
近藤元氏著
正宗得三郎氏畫

歌集 南方の花

四六判二百餘頁
歌數六百餘首
定價金六拾錢
郵税金四錢

最新刊

著者曩に『凡ての呼吸』を出版せんとして世の俗惡新聞者流の爲に嘲弄せられその稿を燒きたり。今また『南方の花』は出版に日ならずしてその紙型原稿共に一夜の夢に灰となりたり。著者の胸は燒かれたり。著者の藝術は先天的に呪はれたり。今や更に新作數百首を加へて新春歌壇の爲に一層の光彩を添へ且つ久しき期待に酬いんとす。著者は生れながらの詩人なり。その歌風は世既に定評あり。その尤も進歩したる思想と洗練されたる技巧とは敢て贅せず。幸に愛讀を乞ふ。

本居文學博士閲
大町中内二文學士序

古今名家短文軌範

賣價（送料共）金三十四錢

大町文學士序の一節

○長文の一節が短文には非ず。短文には短文の作法あり、短文の美あり、寸鐵人を殺すの所あり。

※ ※ ※

嗚呼、短文を能くせむこと難い哉。

文學士大町桂月先生序
長谷川天溪先生校閲

立志訓

正價金二十錢
送料二錢

▲萬朝報　本書は、勸學、立志、修養、時間、讀書、立志龜鑑、酒色の七編に分ち、和漢古今に亙り偉人傑士の訓言訓誡を編集したる者なり、駄文を看るとは違ひ全編皆先哲の格言を聽くことなれば益する所少からざるべし

出版元　東京神田旅籠町一丁目　振替口座東京一九五五　文光堂　賣捌所　東京堂・北隆館・東海堂・益文堂・上田屋・至誠堂

淡雪





理學博士寺尾壽氏令孃敦子



（左の方）久保田譲氏令嗣夫人雪子　（右の方）田中ふじ子



エムパテー株式會社專務取締役梅屋庄吉氏家庭



女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗考發明

コールドクリーム

コールドクリームの美顔料として最も有効なことは世人の夙に認めて居る所、現に女子文壇の化粧問答欄に於いても、藤波芙蓉先生も續々これが有効なることを且つ其調製方並に原料までを御紹介になつて居らるゝ程の化粧料ですけれど、歐洲に於いて驚かれて居るコールドクリームは至つて高價なために日本にはまだ輸入も發賣されて居りません、偶々同名のものがあつても、似つかぬ粗製の贋造品で、そんなものを用ゐても何の益にもなりません、從來藤波先生は皆様方の中の御希望者の御依頼によつて調製して差上げて居られたのでしたが僅かづゝ何度にも原料を買ふと自然高價になり、矢張一度に澤山調製した方が皆様方の便宜ですから、これも本社に於いて同好の皆様方に御わけすることにしたのです、コールドクリームの効用は既に御承知のことゝ存じますが、第一はこれをお化粧なさる上によく御顔なり御手なりに摺込み紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、

アブラの出るのを防ぎアレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。

但し「コールドクリーム」は美顔劑で、世のクリーム類の如くお化粧下の用には立ちませんお化粧下用としては「艶肌劑」が適當で「艶肌劑」と「コールドクリーム」とは艶肌美顔の姉妹劑です。

定價 五十瓦入 金壹圓
送費 市内四錢 地方八錢 清韓臺灣三十錢

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

艶肌劑

文明とは時間を儉約することです、**「何か一品で、顔のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にもオシロイの下にもなり、而してオシロイのノリをよくし、お化粧を落付かせる、有効にして簡便な化粧料を考へて下さい」**との某侯爵夫人よりの御依頼で藤波芙蓉先生が永らくの苦心と實驗とを費して、見事に御創出されたのが此艶肌劑であります、右の某侯爵夫人の御望みは夫々御一人の御望みでなくあらゆる文明婦人の等しく御希望なさる所と存じ本社は特に先生に請うて、皆様方に本劑を御わけして差上げることにしたのです。

定價 五十瓦入 金六拾錢
送費 市内四錢 地方八錢 清韓臺灣三十錢

專賣元 東京京橋區大鋸町十三番地 振替口座東京第壹七貳九番 (電話京橋六〇七番) 女子文壇社代理部

◎興味と實益に富みたる日本一の理想的少女教育雜誌◎

面白い二月號

第四卷

第貳號

（通卷第參拾號）

◎少女と金錢問題◎

▼萬綠叢中紅一點……三輪田女學校教頭 三輪田元道

▼三十錢のリボンと五錢の筆……日本女子商業學校學監 嘉悅孝子

▼金錢一方の人と爲るな……東京女學館幹事 西田敬止

面白い少

◎帝の御陵の夢……長曾我部菊子

◎アンナの腕環……平塚白百合

◎ひとりつ子……松山愁雨

少年少女達への歳末年始によい贈品

佐々木邦先生著

滑稽奇抜珍本

二人やんちやん

全一冊

▲初版八月下旬發賣 忽ち好評賣切の處 再版十一月中旬出來發賣▼

▼中判美裝 武田壽氏石版彩色畫 木版色刷挿畫六葉入 定價金參拾五錢 送料金六錢

大人にも、小供にも面白い書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも爭ふて購求され。近頃の好著として、持て囃されて居ります。幸に左に掲げたる新聞雑誌の評判記を御覧下さい。

東京市京橋區大鋸町十一 振替東京壹七弐九 文子文壇社出版

どこの本屋でも取次販賣して居ます

二人やんちやん

◎新聞、雜誌の評判記拔萃◎

◉『少女世界』これは趣味ある少女小説です。太郎さんと花子さんといふ兄妹が、好きな叔父さんと一しよに、思ひ切つて無邪氣なことをする、その面白いことゝ數々が、輕い筆でさながらに描き出されてありますので、讀みゆく中に笑はずにはおられません。それからあまのじやく、お猿さん、仙ボコ、昔と今の四篇もまた面白い讀みものといふを憚りません。これを少女諸子にすゝむ。

◉『東京日々新聞』二人やんちやん初め、あまのぢやく、お猿さん、仙ボコ、昔と今の五篇を收む、惡戲小僧にはお馴染多き著書の筆なれば面白いこと請合ひ中には子供解る樣な諷刺や教訓を含むだ話も交つて居る。

◉『少女の友』これは、滑稽小説に有名な佐々木先生が、子供の滑稽な有樣を書かれた少女小説です。集むるところ、二人やんちやんの外、あまのじやく、お猿さん、仙ボコ、昔と今の四篇をかしいおもしろい本です

◉『やまと新聞』二人やんちやんあまのぢやく、お猿さん、仙ボコ、昔と今の五篇を收む太郎と花子とのやんちやん愈々出でゝ愈々甚だしく而も一點の邪氣を存せざる流石に子供の神の子たるを思はしむる少年少女の讀物として極めて面白きのみならず藥になればとて毒になる氣遣ひ無し。

◉『中學世界』曾て惡戲小僧の日記を評して大好評を得たるはこの著者なりとす。少年少女の天眞爛熳たる自然性を見ること明敏、これを筆に移してまた無邪氣なる精彩あり、斯くの如きは、實に著者の獨壇なるべし。「二人やんちやん」以下數篇皆な面白し。

◉『都新聞』二人やんちやん いたづら小僧で子供衆に御馴染の佐々木邦氏の作である、滑稽の裡に諷刺あり面白味の間に教訓を籠めてあるよい本。

◉『婦人の友』太郎さんと花子ちやんとはなか〳〵やんちやんで、十ヨばかりお留守居をして居た叔父さんは隨分困りました。此の十日間の出來事を面白く輕妙に書いたもの。

◉『中央新聞』いたづら小僧日記を出してより此著者の名は頓に坊ちやん孃ちやんの間に知られたり、此の書はあの樣なおもしろい得意な文章にて書きし少女小説、二人やんちやん、あまのじやく、お猿さん、仙ボコ、昔と今の五篇を蒐めたるものにて既に御馴染の坊ちやゝ孃ちやんもあらんが初秋の讀物としてはこよなきおもしろきものなり

◉『少年雜誌』これは美くしい少女小説であります。目次は二人やんちやん、あまのじやく、お猿さん、仙ボコ、昔と今とみんなで五つありますがどれも〳〵面白くて溜らない御本です

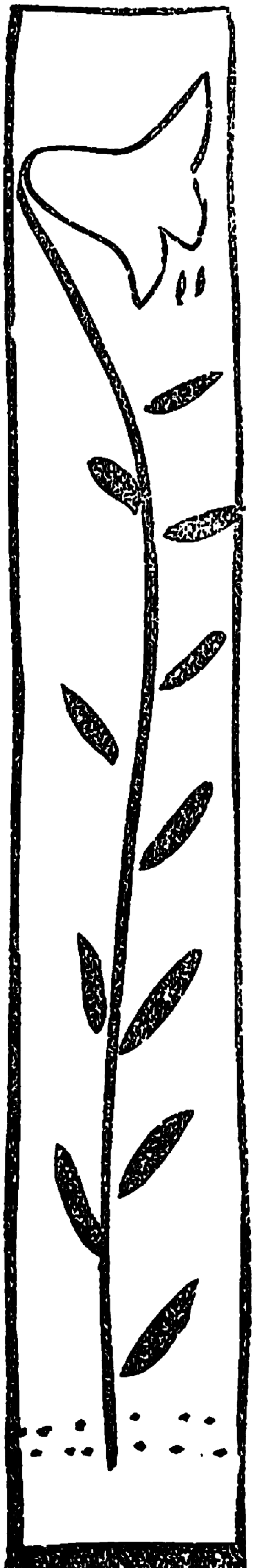
◉『帝國新聞』二人やんちやんの外あまのじやく、お猿さん、仙ボコ、昔と今、等雜誌「少女」に掲載したもの。斯う纏めてみると一氣に讀むことも出來れば、忙しき人々亦樂むを得可し。僕は試みに「あまのじやく」を讀みたるが、傳記保存の上よりも、著者に謝すべきものあるを覺えたり。文は輕快平明。

女子文壇



第八年第貳號

(明治四十五年二月一日發行)



婦人は感ずること強く考ふること鈍き者なりや

女子高等師範教授　吉田熊次

◎心の働きより見たる男女の相違奈何

數年來東京女子高等師範學校に奉職して居りまして女子の學業成績等を調査しました經驗によりますと、世間で傳へられて居る樣に、女子の心理と男子の心理とは違つて居らない樣に思はれます。よく試驗の答案等を見ましても隨分よく理論の通つものも少なくない計りでなく、教師に關する質問等も大分細かに議論に關するものが出て來ることもあり、又中には餘程抽象的な、理窟一偏の事柄に關する事も出てきます。又試驗の問題等には隨分ひねくつたのを出すことがありますが、それでも大分好い答が出ますが他の男子の學校に於ける成績と比較しましても、あまり相違は認めません。けれども女性に關する古來の研究を調べて見ますると、どうも此間に相違がある樣にも見えますが、私が女子研究と題して公にして居りまする本の中にも、大體は紹介して置きましたが、女性研究者の中には男

女の違ひを少なしと論ずる人もありますが、實際の處を見ますと、兩者の違ひを認めて居ります。例へばイギリスのシュンシチウラードミールにしてもやはり女性の特質を認めて居ります中にもオーストリアのワイニンゲル等は極端に女性の持つて居る心理作用が男子と全く違ふといふことを云つて居ります。ワイニンゲルの說によりますと女性の心理の働は感ずると云ふことゝ考ゆるといふことゝを一處にして居ると云つて居ります其理は一寸物を見たり觸れたり感じたりすることは、直ぐに女子を支配する力となるのでありまして、それについて現在の感と過去の經驗と、將來の結果と他の場合の類例等を比較しま



して、自己の思想感情を己れ自から分析することは出來ない、又女子は分析的、抽象的の力に乏しいと云つて、極端に女子の心理をあし様に論じて居ります。又ミルヤマリコンは、何れかと云へば女子をよく云つて居る側でありますが、それでも以上の根本原理より演繹して居りまして、女子の缺點には、大分同情して居る處があります。これなどは宜しく研究すべき問題だと思ひます。

◎人間の性格に二つあり

近頃人間の性格に關する研究が盛んになつてきて居ります、卽ちお互に持つて居る個人々々の性格の特質を調べまして、其の性質によつて之を分類するのであります。この人はどういふ性の人だといふことは其研究によつて確實に備はるわけであります。それについて或る學者は人の性格をまづ二つに分つて居ります、其一つは、外界の事物に對して、直接反應する人で、今一つは直接には反應しないで熟考をした上で定める人とであります。第一の性格の人は、自分の思ふが儘又は感じたまゝに、發表する人でありまして、第二の性格の人は、自分の爲したことが間違つては居まいか又他人に差支へはなからうかと、前後左右を顧り見て言ひ且つ行ふ人であります。世の中にはこの二つの性格があることは略實際の事情に合つて居りますが、扨て女子の性格をこれにあてはめて見れば、一寸困難を生ずるわけであります。ワイニンゲルに從へば、女子の性格は、第一種類に屬すべきで、分析や抽象がありませんから、直接自分の思ひついた所で判斷を定めるわけであります。處が女子は判斷といふ點から行くと隨分鈍い樣であります。よく買物に行つても、又仕事をするにしても、兎角どうしようか、かうしようかと考へる時間が多くつて、なか〳〵決定しない處を見てもわかります、して見ると第二種類に屬する樣にも思はれますが、かうなればワイニンゲルの說は無くなりますが、種々のことを考へに入れば、自づと分析的又は抽象的作用も行なはれるわけであります。

◎感ずること考へること

要するに女性に關する心理は未だ、充分に定まつては居りません。又女性中にも種々の種類があるかもしれません。然しながら其大體の傾向からしますれば、女子は考へることより、感ずることに長じて居る様でありま す。最も考への練習をやつたら出來るかもしれませんがフット感ずる方が勝つて居る様に思はれます。随つて女子の活動も分析的に研究するよりは直接に感ずるか、演繹的に考ふるが長所であると思ひ



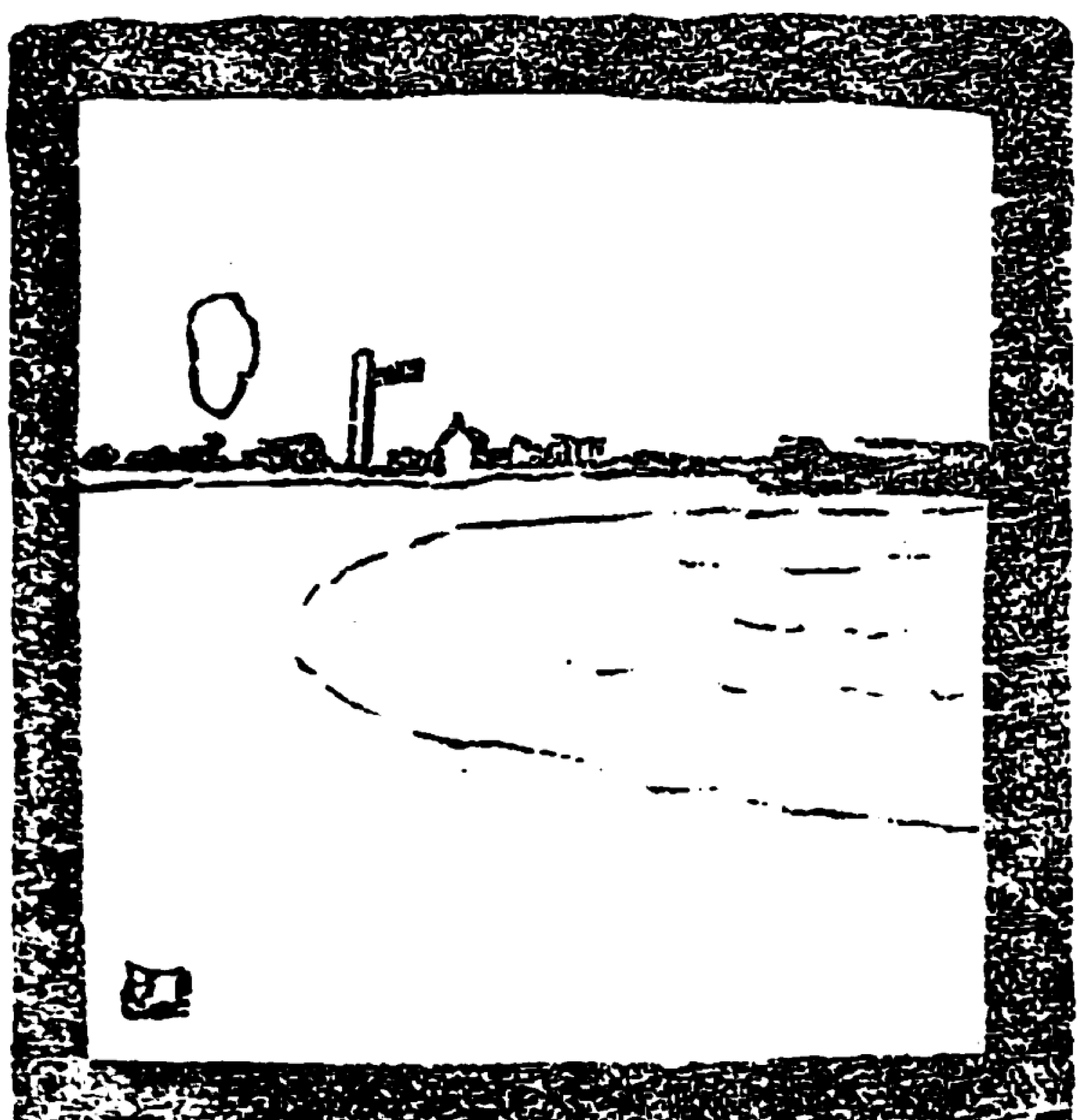
ます。今日でも、イタリーのマトムキウリーの如きは夫とゝもにラヂーウームを發見した程の物理學者ですが、將來學者の中には數學者も多いが、それよりも多いのは女子の畫家、文學家等でありますから女子の長所は物に感ずる方であります。從つて缺點もこれにあると思ひます。

◎男性的に導く必要あり

女子はある場合に果斷で、また怠惰でありますが極端に云へば之れ女子の特徴だと云つて居る學者もあります。これ又女子の短

所をしめすものであると思ひます。又女子一般の判斷は細に分析して考へるといふよりは、直接に感ずる力であります。一つの自分の主義より演繹的に行を極めることに長じて居ります。殊に敎育等を充分に受けない人にかう云ふ傾向がありはせぬかと思ひますけれど眞理に到達するの道は、分析的に此の思考をめぐらすといふのにありますので、只感ずると又演繹的だけでは眞理をあやまることがあります。かゝる故に女子は自己の長所を發揮するとゝもに、短所をさぐることに心掛けねばなりません。

現在我國に於ける女子敎育には、色々の議論もありますが、眞實に女子の爲を思ふものは、女子の長所を發揮するとゝもに短所を補ふてやるべきものと思ひます。今日女子の家庭に於ける仕事につきまして考へるのも、又女子一生の活動其他敎育のことなどについて思つて見ましても、女子をよろこばせようとするのは女子に對して親切なやり方とは思はれません。宜しく人間の生活の本義を基礎としまして、細かに事物の關係を考へ、しかも道理を基礎とした上、色々の問題を定めなければなりません。殊に日本の家庭敎育の有樣を見ましても女子に一任する樣にならなければ自づと女性の弱點をたすける樣になります。殊に若い女の子を敎育する時には、一方には母姉の情愛を以て導くのは必要でありますが、それと同時に男性的の窮屈な苦痛を加味して、其方針をあやまらせない樣にすべきことゝ思ひます。



三馬の浮世風呂

文學博士　幸田露伴

三馬の作中で最もよく其特色を發揮して居りますのは、浮世風呂と其後の作浮世床でありまして、この二つは所謂三馬式の書き方で、他の同時代の作者とは全く異つて居ります。そして徳川末期に於ける風呂屋の狀態は遺憾なく顯はされて居ると云つてもよい位であります。それ計りではなく風呂屋を通じて、當時の社會狀態は、丁度一幅の繪を見る樣に鮮やかに描き出されて居ります。

三馬といふ人は直接に實際の世間に立交り、其鋭利なる眼を動かして、其作物を作り上げた人でありまして、同時代に卓出した馬琴などが、あらゆる書を通じて人生を見、それに自分の思想を加へて小說を書いたのとは、又異なつて居ります。

若し、其時代の生きて居る狀態を窺がはうと思ふならば、馬琴の作を見るより、三馬の作についた方が適切で、殊に三馬の長所と其價値とを知るには、浮世風呂に優る作はありません。然し其以前にも、浮世風呂に類する作は無いではありません。三馬よりずつと前

ですが、山東京傳の作に『いれてみ湯屋浄瑠璃』といふのがありますが、やはりこれも實社會を觀察して、細かく描寫してあります。最も浮世風呂の如くに、數百ページを重ねたる長篇ではなく、只八九枚の小冊子には過ぎませんが、湯屋の光景を細かく寫した點は、浮世風呂に變りはありません。其湯屋浄瑠璃の一節に大工が湯に入りながら話をする處がありますが、其談話中に大工同志が符諜言葉を使ふ處を記してあります三馬の浮世風呂がこの湯屋浄瑠璃を見ての思ひ付きか否かは不明でありますが、しかし湯屋浄瑠璃を見ての思ひ付きではないかといふ樣な感がする處があります

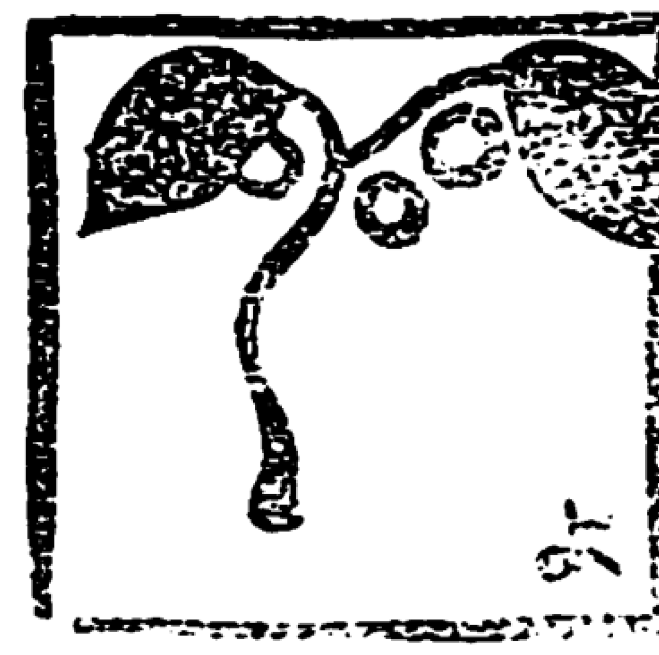
一體、小説中に符諜を餘計に書き入れるとか、叉或る社會の一部分の人のみ使ふ言葉を用ふるとか、叉は他の社會には通じない言葉を用ひなどして其一場の景色を明確にするといふことは餘り多い例ではありません。三馬は非常にさういふことに注意を拂つた人で、それを讀めば何人も氣付くことではありますが、稍もすると、よく一種の言葉、卽ち劇場に關係する人達、叉は音曲家同志の言葉、其他巫子達の間のみ用ふるものなどを取つて來て、それを面白く可笑しく綴ることは三馬の多く用ひたるところであります或は三馬も、湯屋浄瑠璃を見て、これらのことを思ひ付き、そして浮世風呂が出來るに至つたかとも思はれます。

其他に錢湯新話等いふものも浮世風呂以前にありますが、それらの内容については全く私の記憶から失して居りますから、別に話す程のこともありません。

兎に角風呂屋專門に書いたといふ本は餘り澤山はありません。德川初期の風呂屋が一種の贅澤機關であつた時代には、風呂屋者といふ一種の女がありましたが其頃の風呂屋に關する一場の書き物などは、時々認められますが、只普通の風呂屋專門に書いたのは先づ三馬の浮世風呂にとゞめをさします。

●●●●●●●

記者附て言ふ。三馬の『浮世風呂』を讀みたいと思ふ人は、活字本になつたのが博文館の『帝國文庫』を初め、世間に幾十種となく出版されてゐますから、成可く校訂の宜い本で御覽なさい。



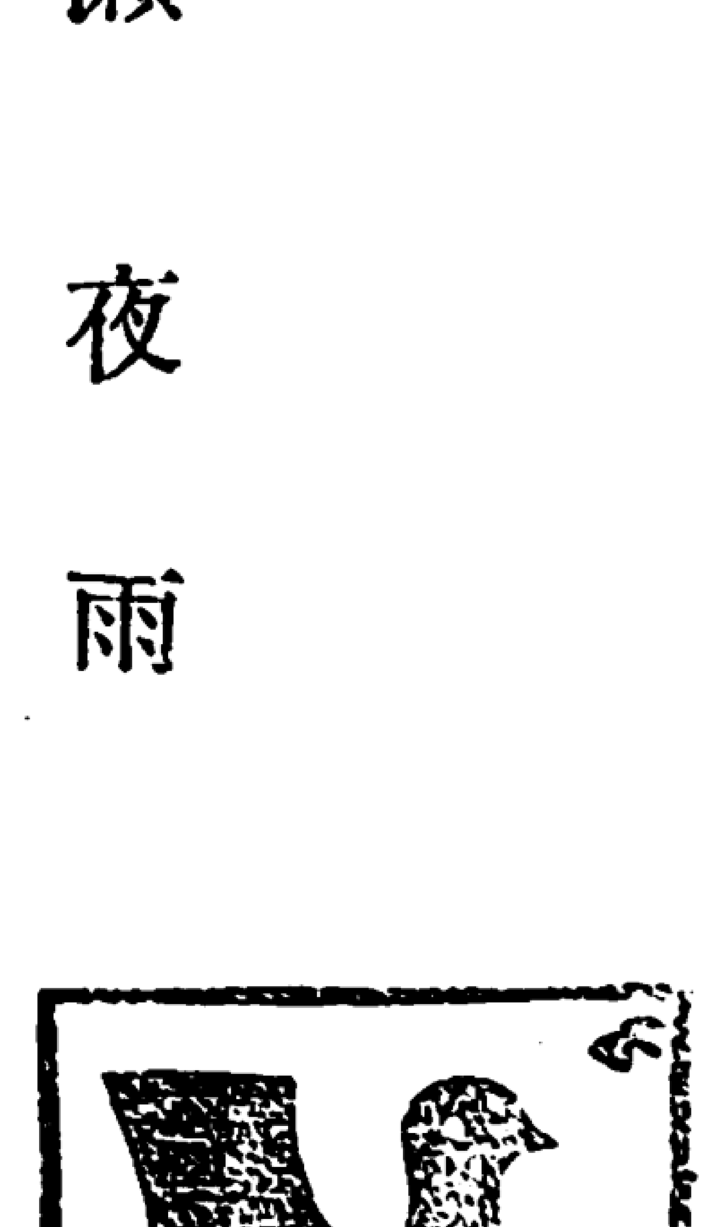
古事記を讀む

横瀬夜雨

讀書なる哉。

妖壽不或、世に百年の天子無し。或ふ勿れわれ等の日は短し。心有る少數の君達に告ぐ。彼等數多の華美な婦人雑誌を讀む時君は『著聞集』を見よ。彼等纖巧なる八代集を繙く時君は『萬葉』に行け。『源語』と『三鏡』との舌たるきに就くよりは先『伊勢』と『枕草紙』を取れ八犬傳に精を耗らさんは『平語』の朗々たるをたのしむに若かず。わが茲に侑めんとするは日本最古の書也。

天下讀むべき物まことに多し。醉茗は親しき君達に對しては新しき物を見よと勸めつゝあり。古事記の如き恐らくは其排斥する書籍の一ならん乎。人悉く學究に非ず。死語を學び死言を習ひて、今の世に何をか為んとは其意見なるべきを思ふ。



誤解する勿れ。われは古事記を釋くにあらず。又昨年來續出せる坊間の刊行物に倣ひて飣餖補綴を試むるのでもない。顧みるに女子文壇の君達にして指を古事記に染めし者、わが知る限りにありては初鹿野道子一人とす。三宅恒子も卒業したらしい。難句澁句相まじはりて蜀の棧道よりも猶けはしき文字を讀みをほせしこと先尊敬すべし。其得る所の奈何はしばらく問ふを要せず。我觀小景、わが文を讀んで卷をおほひてほゝゑむ者有らばそは二人であらう

古事記は飛鳥の淸見原におはせし天武天皇の詔を承けて太朝臣安萬呂が編める日本最古の歴史也。古きこと斑鳩寺の壁なる繪にも優り、尊き事夢殿にいつき奉れる佛にも超ゆ、序は美しき漢文なれど本文は鵺の

如し。

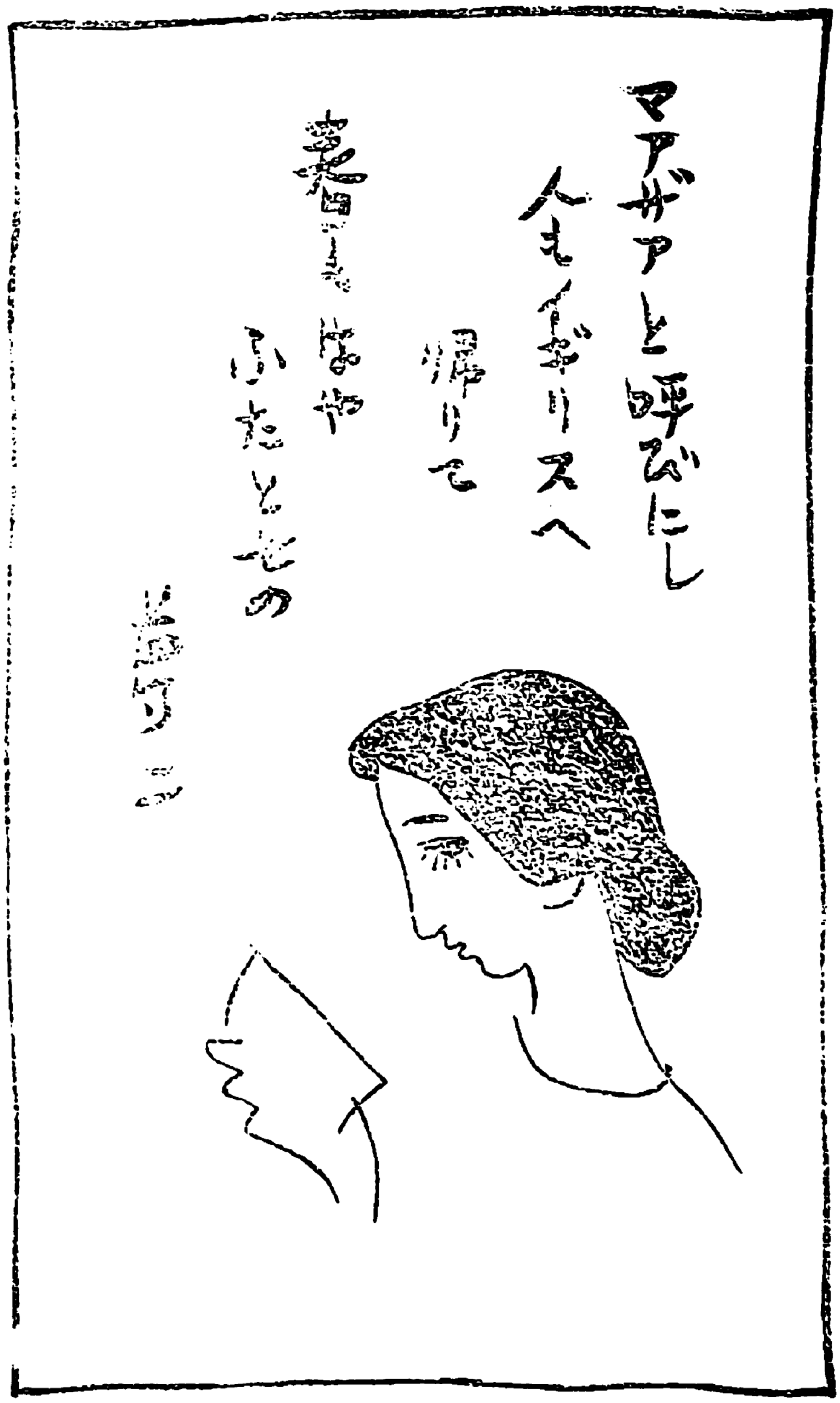
わが有てるは十三年前酔茗の藏書を寫せるものにして、假名無く註無し、わづかに反點を辿りて讀み得るに過ぎず、何者の放膽兒ぞ。これに據りて評論を試むる。

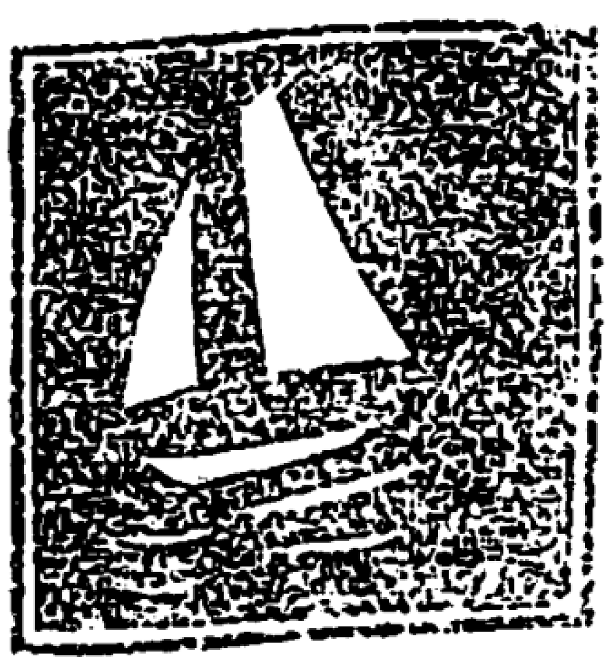
混元既ニ凝リテ（輕き物は昇りて天と爲り重き物は沈みて淵と爲り、流れて川と爲り、止りて山と爲る）氣象未效レズ（星辰未照さず）名モ無ク爲モ無シ寥々（寂々）誰カ其形ヲ知ラン、然レドモ乾坤、初テ分レテ三神（天御中主神 高產日神 神產日神）造化ノ首ヲ作シ、陰陽（男女）斯ニ開ケテ二靈（いざなぎ いざなみ）群品ノ祖ト爲レリ、所以ニ幽顯（よみの世 うつし世）ニ出入シテ日月（あまてらすおほみかみ つきよみのみこと）日日洗フニ彰ハレ、海水（日向あはぎが原）ニ浮沈シテ（みそぎ）神祇（天つ神 國つ神）身ヲ滌グニ呈ル。故太素古ノ杳冥ナル、本教（天神詔）ニ因テ土ヲ孕ミ島ヲ產ミタマヒシ時ヲ識リ、元始（太）古ノ綿邈タル、先聖（天神）ニ賴テ神ヲ生ミ人（天照大神）ヲ立テタマヒシ世ヲ察ニス。寔ニ知ル、鏡ヲ懸ケ玉ヲ吐キテ（天照大神）百王相續ギ、劍ヲ喫ヒ蛇ヲ切テ（須佐之男命）萬神蕃息スルヲ、安河ケ原（高天）ニ議リテ（八百萬神）天下ヲ平ゲ、小濱ニ論テ（建御雷神）國土ヲ清メキ。是ヲ以テ番仁岐命初テ高千ノ峰ニ降リタマヒ。神倭ノ天皇秋津島ニ經歷シタマフ。化熊爪ヲ出デ天劍高倉ニ獲、生尾（わけの子）徑ヲ遮リ大烏（からす）吉野ニ導ク、舞ヲ列ネテ賊ヲ攘ヒ歌ヲ聞テ仇ヲ伏ス。即夢ニ覺リテ（水垣の宮）神祇ヲ敬フ、所以ニ賢后ト稱ス。煙ヲ望テ（高津の宮）黎元ヲ撫ヅ、今ニ聖帝ト傳フ。境ヲ定メ邦ヲ開キテ（天）近淡海ニ制シ、姓ヲ正シ氏ヲ撰テ（允恭）遠飛鳥ニ勒ス。歩驟各異ニ、文質同ジカラズト雖、古ヲ稽テ風猷ヲ既ニ頽レタルニ繩シ、今ヲ照シテ典敎ヲ絕ムトスルニ補ハズトイフコトナシ。飛鳥清見原大宮ニ大八洲ヲ治シ天皇（天武）ノ御世ニ暨ビ潛龍元ヲ體シ洊雷期ニ應ズ、夢歌ヲ聞テ業ヲ纂ムコトヲ想ヒ、夜水（の横河）（伊賀名張）ニ至リテ基ヲ承ムコトヲ知ス。然天時未臻ラザリシカバ、南山（吉野）ニ蟬脫ケタマヒ、人事共ニ洽クシテ東國（美濃）ニ虎歩ミタマヒキ。皇輿忽駕シテ山川ヲ凌渡リ六師雷震、三軍電逝、杖矛威ヲ擧テ猛士煙起リ、絳旗兵ヲ耀シテ凶徒瓦解、未浹辰ヲ移サズ（十二日ならずして）氣沴自清マリヌ、乃牛ヲ放チ馬ヲ息ヘ愷悌

凱旋シテ華夏ニ歸リ、旌ヲ卷キ戈ヲ戢メテ儛詠シテ都邑ニ停リタマフ。歳大梁(酉)ニ次リ月夾鐘(二)ニ躔リテ、淸原大宮ニ天位ニ卽キタマフ。道軒后ニ軼ギ德周王ニ跨エ、乾符ヲ握リテ六合ヲ統ベ、天統ヲ得テ八荒ヲ包ヌ二氣(陰陽)ノ正ニ乘ジ五行ノ序ヲ齊ヘ、神理ヲ設ケテ俗ヲ奬メ英風ヲ敷テ國ヲ弘ム。重加智海浩瀚深ク上古ヲ探リ、心鏡煒煒明ニ先代ヲ覩タマフ。シカゞ、

凶徒死ノ如ク解ケヌの文字に注意せよ、壬申の亂をいふ也。

天武は天智と同胞にして、天智の女なる持統天皇を皇后とし、大江皇女太田衛女新田部皇女を妃とし更に其子草壁皇子の爲に阿閉皇女(元明)天皇を娶り、大津皇子に山邊皇女を迎へ、忍壁皇子に飛鳥皇女を配たらしめ、其子の十市皇女をば彼大友皇子(弘文)天皇に嫁がしめき後大津皇子の死を賜はりし時、山邊皇女徒跣して馳せ至り殉死したる事、姉君の大伯皇女が吾勢枯乎倭邊遣登佐夜深而鷄鳴露爾吾立所霑之と歌へる事など萬葉に見ゆ。(つゞく)





夜

若杉はま子

黒衣を被いだ美女のやうに、初冬の夜は何となく私の心を唆した。

今夜もNを送りながら、フラ〳〵と外に出ると。薄霧は夕べの街を柔かに蔽ふて、電燈の色、電車の響、すべての光りとどよめきとは、夢のやうに人を包む。果物屋の店頭に、交番の燈の色に匂ふ十二月の思出よ。

なつかしい冬の夜の、其素足に接吻して、私は思ふさま十二月の追懐を噛みしむる事を、許容されたかつた。

けれども、今、此の境にある自分としては、さういふ詩人のやうな感傷的な事は、どうも欲はれざる事のやうに考へられる。

息をつきたい、休めたいと絶叫したのも、遂昨日の事であつたのに、今は又一切のものから突き放されて暫くはこの靜けさにある事が出來るのであらう。しかし此の靜けさは沙漠に續く道である、辿れども〳〵沙漠は盡きず、軈て其處に自らを迎ふる。沒落の日があるであらう。こんな事を癖のやうに考へながら、私はいつか漬物屋の前に足をとめた。瓦斯の明るい漬物屋の店には、ほんのりと黄色い水を含んだ淺漬が並んでゐる。

新聞紙に包ました長い淺漬を私は受け取つて、またきざみ足に歩き出した。錆びたブリキの油壺の中からポッ〳〵と黒い焰を吐いてゐる露店のカンテラが、人なつこさうに、いぢらしさうに、人々の冷い頰を照らしてゐる。榮龍や玉蝶の顏が新年の繪葉書と一緒に重なり合つて、夜露にシットリと濡れてゐた。あゝいふ花柳界の人達に對する憐憫の情が、おもむろに動かされて、また某人の事が氣懸りになつて來た。

茂子は圓顏の小柄な、髮の毛と地藏眉の濃い、笑ふ

と可愛いやえ歯を見せる人だつた。其癖無口ではにかみやで滅多に快く笑つて愛嬌を見せるやうな事もなかつた。從つたお座敷は淋しく、餘り客好きのするやうな性質ではない。幼くて兩親に別れ貧窮な道具屋に養はれて、十四の年に賣られた。姉さん達の下駄洗ひやお使ひの用や、都々逸や俗謠の稽古それがまた不器用な彼女には至難な事で、凍傷や煙管で打たれた傷が、年頃になるまでは絶ゆる事もない。其辛い悲しい笞の下に、賣笑婦にはふさはしからぬ、暗いいぢけた性格を作つた。



『それで茂ちやんどうしやうといふの。』

『桂庵は田舍へでも行かなきや借金のかたがつかないつて云ふんですよ。でも私は何だか嫌だわ。』

情けなさうに煮え切らない事を云ひながら、赤い襦袢の袖口で吸ひ口のところを拭いて、私の前に煙草をすゝめた。

『どうしたものだろう。』と幾度も〳〵思案にくれて、茂子は獨りつぶやいてゐた顔色がだん〳〵暗い色を呈して沈んでゆく。

其後少しも消息はなかつた。私は時々茂子の事を思ひ出しながら半年も過ぎた。するとある朝、手紙が來

た、とNが渡した、千葉縣××町、河内家内しげ子と男のやうな字で太く書いてある。封を切ると表は代書を頼んだものと見えて、中は又金釘のやうなあて字で一寸申上候、さてとや、とあの社會の女のさだまり文句の冒頭語があつた。傍に人が見てゐると思ふと、冷々する程拙い字で危ふげな片言のやうな文句が、なが〳〵と綴つてあつた。讀み終ると胸を引き絞られるやうに悲しさが迫つて、思はずホロリとした。

都落をしてから茂子は、間もなく病氣になつたといふ、稼いでも〳〵養父が無心に來て借金を殖すとの事

もうあたしも年をとるばかりでだめです。まわらぬふでゆへおはんじ下さい。

と、一番お終にかう書いてあつた。容色は衰へるし、病氣はするし心配や借金の重荷が多いといふ嘆きが、おぼろ氣に動かない筆で書いてある。口をきかせればあの通り、角のない東京の言葉で、艶に云つてのけるものを、敎育を受ける事の出來なかつた許りに氣の毒だ。

あゝいふ女の生活の上なく悲慘な事も、充分悲んでゐながら、自分の生涯をどう開拓しようとの考へもないのであろう。

父母のふところの中に、生れた儘成長して、女學校位の敎育を受けると、「私は娘で御座い、處女で御座い」といふやうな、淺薄な誇りを以て、哀れなる彼等賣女を見る。

花柳界の女となる原因は、墮落もあろうけれど、十中の八九は、慘酷なる人の手に唆かされるか、父母の貧窮の爲とかである。何にも知らない純潔な少女は僅少の金に換へられて、女の誇りも青春の血潮も、持てるもの悉く黄金の前に奪はれてしまはなければならぬ人の子として、女として、彼等こそ眞に同情すべき人人であろう、されど

汝等は餘りに殘忍なる眼を有ちて、猥りがましく苦める者を見る。唯汝等の淫慾の姿を變じて同情と呼ばるゝのみに非ざるか。

と斯くツアラトウストラは語りしと聞く。而して又、

純潔は愚なることに非ずや。されど此の愚なる事は我等に來りき――我等は此の客に營舍と心情とを提供しき。今彼は我等にありて棲む。彼をして其の欲ふ限りを止まらしめよ。と云ひしと。純潔を保ち得たる人てそ幸なり。

寒月は冷い光りを地上に投げてゐる。私は其夜全身の冷えるのも知らず買物の風呂敷包みを提げて、長く續いたコンクリートの道を歩いて、茫然と家に歸つた。（ひと夜）



疲れた讀書ランプの光りが、卓子の青い布の上に、さまぐ\の影を浮かしてゐる。半身を椅子に、背を壁にもたして、艶やかな三味の音に耳を傾けてゐた。

奔放な清元の歌が、云ひ知れず胸の血を混亂させる柳さくらの仲の町、いつしか花もちりてんつとんとん――みせすがゞきの風かほる、たもと、

『オイロ三味線の鼻唄なんて、みつともない、お里が知れらア』と云はれる。

『ねえ、いゝでせう、達子さんだつて此の頃は長唄をなさいますもの、私も習ひに行つたつていゝわね。』

幼い時、何か父や母に強請でもしたやうな心持になつて、其顏色を窺ひながらおそる〳〵私は云つた。

『三味線の音は大嫌ひ、鼻ツつまりの音樂だよ。』
『そりや其味を解する事が出來ないから。』
『まあ何でもいゝ、大きなオーケストラへでも行つて見てから、お云ひなさい。』
『初まつた西洋ツかぶれ。』
私はくるりと嘯いた。

どうしても眠れない、眼を閉ぢてゐると、香代樣の顔が出て來たり、H伯夫人の意地惡さうな美貌が、私を見て嘲笑したりする。

香代樣の今日語る處を聞くと、H伯夫人は小官吏の娘であつた。美人と云へど羽子板の姉樣のやうな顔立で、表情に乏しい底意地の惡い令孃であつた。利害問題を打算する事に於て、最機敏で、且つ學校の成績も良しかつたが、少しも處女らしい若々しい生氣といふものがなかつた。すると或時學校の運動會で見初められて、H伯の夫人となつた。

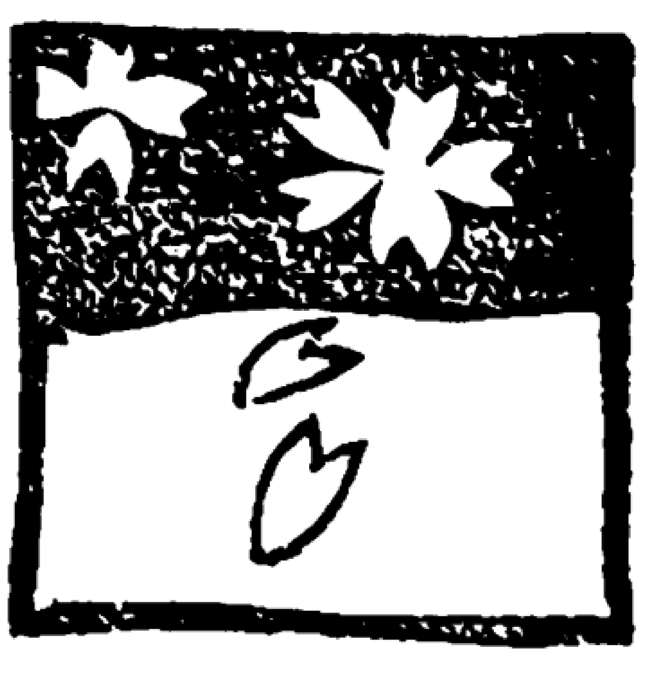
成上ると吝嗇、傲慢、虛榮、其の嫌な性情を暴露し初めて、何事にも顔自慢が鼻の先へぶら下つてならぬといふ、其生活と云へば、自動車を驅りて髮結に出かけ、萬金を投じて訪問服をあがない、自腹の痛まぬ限り、どんな贅澤もするといふ。それに趣味の低級な事と云つたら、其日常生活を見ればすぐ知れる。佛のシヤムフオールは、女性の等級に就て、婦人能く其狀貌の美を自負せずして、其の才性の美を自負するものは最上等なり。才性の美を自負せずして狀貌の美を自負する者は其次なり。若夫れ狀貌の美を置きて門族の高さを自負する者は最下等なりといへりと、友の某も亦某も、女學校の運動會で見初められて、玉の輿に乘りしが、道理で女學生がめかす筈である。又た若殿連の品評は、女學校の運動會にするものと聞く、これでは賣婦にも增して卑しむべき女が多くなる譯であると、香代樣いつになく大氣焰。

かねて噂に聞いてゐた、H夫人の猶太人のやうな鼻と、蛇のやうな眼とが、凝と此方を見つめてゐる、私もそれを睨んでゐると、うと／＼と眠くなつた、影は遁げて了つた。（あくる夜）



壁畫の話（つゞき）

文學士　澤村胡夷



さて日本の古い壁畫の中でも殊に寺院に關係した壁畫は後世の畫とは種々なる點に於て相異してゐるのですが、其中でも暈染の法と云つて、隈を取ること、卽ち陰影をつける事を古い壁畫にはやつてゐるのでありますが、是れは古い寺院の壁畫の著しい點でありまして、法隆寺の壁畫にはこの特色が最もよく現はれてゐるのです。此隈取の法は後世になつて來るに從つて壁畫に於ては次第に微弱になつて來たのであつて、以前にあげた寺院の中でも、時代が新しいものには此陰影法が殆んど失はれてゐるものもあるのです。此法は印度の壁畫のやり口が支那へ傳はつて是がまた日本へ傳つて來たものであります。アヂヤンタの壁畫は殊に法隆寺の壁畫と似てゐる事で有名でありますが、此アヂヤンタの壁畫を見ると、陰影が盛んに施されてゐて古代印度の壁畫には暈染の法といふものが如何に多く用ゐられて居たかを知る事が出來るのであります。陰影法は申すまでもなく實體的に見せる方法でありまして、殊に印度の壁畫に於ける陰影の法は餘程彫刻と深い關係があるやうであります。卽ち繪畫を以て彫刻に代用すると云ふ考が印度壁畫の陰影法に大關係を持つてゐるのであらうと思ふのです。印度壁畫の陰影はもと薄肉彫の壁面彫刻を繪畫とし、現はし、その代に強き陰影を施して薄肉彫と同樣なる効果を示さうとしたものであるのです。實際此例は少くないのみならず、現今印度と支那との中間に方る地方で發見せられつゝあるものゝ中にも彫刻と繪畫とを併用してゐる例を見

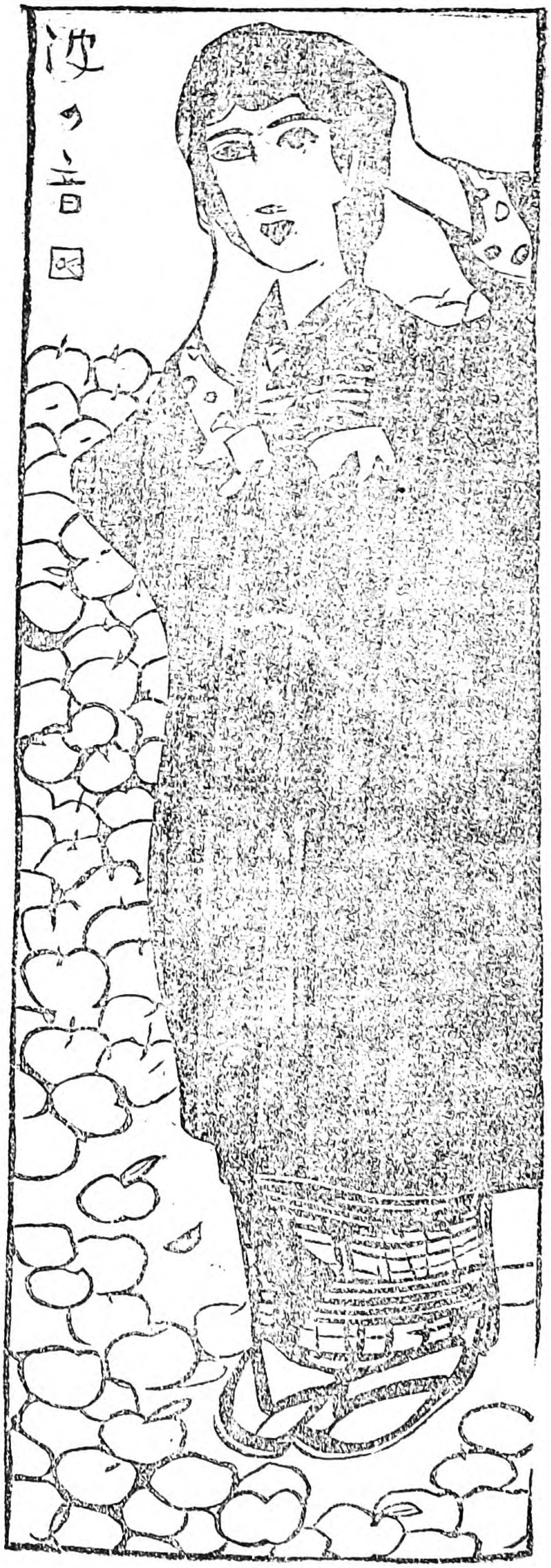
受けるのであります。

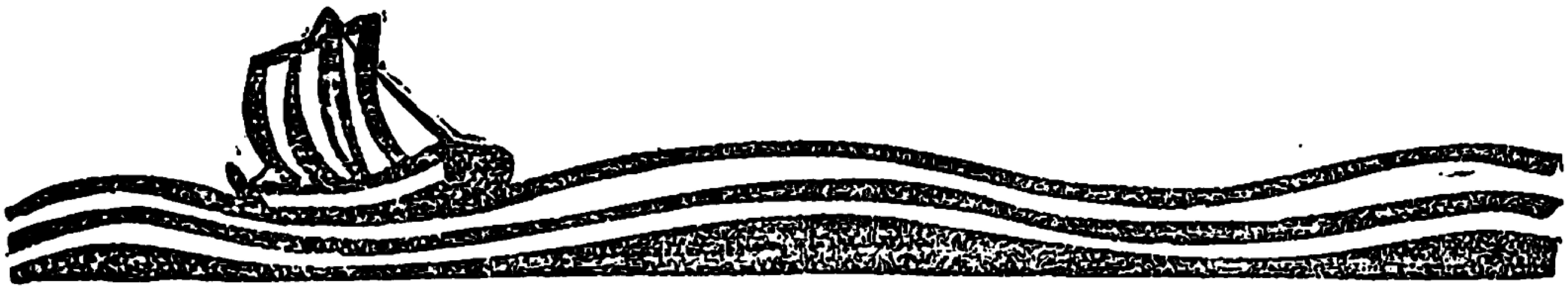
一體壁畫と普通の繪畫との相異する點は尠くないのですが、その最も著るしい事は彩色の點であります。元來壁畫は概ね光線の乏しい暗い場所に畫かれるものでありますから、普通の繪畫のやうに、割合に明るい場所で見るものと同樣には畫く事は出來ないのです。卽ち普通の畫よりは彩色を濃厚にして觀者の眼に對する刺戟を强烈にする必要があるのですから、壁畫の彩色は餘程濃厚であります。法隆寺の壁畫に於てもその彩色が甚だ强いのは此理由に因るのです。

倘一つ日本の古い壁畫に就ては注意すべき事があります。それは壁畫の線といふ事です。日本の古式の壁畫に於いては、後世の畫に見るやうに描線に肥瘦があつたり、筆の當りを示すやうな事をやつてゐませぬ。卽ち法隆寺の壁畫などに於いて最もよく分る事ですが人物の形や衣服の皺などを描く線が少しも太細がなく一樣の厚味で引れてゐます。つまり線には深い意味を持せずに、唯、物の形を作つて彩色をする時の境界に用ひてゐるに過ないのであります。是は古い佛畫には多く見受る所でありまして、古い佛畫の特色と考へられてゐるのですが、此描線が古式の壁畫には用ひられてゐるのであります。此描線も後世になつて來ると、大に趣が異つてまゐりまして、肥瘦のある線が用ひられてゐます。是は佛畫の方面に於ても宋元の畫風の感化を受けて次第にかくの如くなつて來てゐますが、壁畫も亦同一の感化を受けてゐるのであります。それと同時に一方には古い壁畫の特色たる陰影法も亦次第に失はれて行つたのです。

かくの如く古い壁畫が餘程後世の他の畫と相異してゐますが、是れが同じく寺院の壁畫に於いても後世のものと古いものとは異つてゐます。つまり古い日本の壁畫は壁畫としての起原が餘程意味の深いものでありまして、それが印度より支那を經て、我國に傳はつて來たのですから、繪畫の方面から見ますと大に特色があつて面白いのであります。然しながら此特色は鳳凰堂の壁畫などから旣に失はれつゝある事が分かのであり

ます。つまり壁畫も繪卷物の繪も何等の異がないやうになつて來て了つたのであります。勿論細密にしらべますと畫面の大小などによりまして自から畫のかき方にも種々なる相異が生じてゐるのですけれども、壁畫として特色ある起原をもつてゐたものは失はれて行つたのです。足利時代以後近世になると、その當時流行した墨畫などの感化を受けて墨繪の龍などを寺院の天井にゑがくやうになつて來ますが、是等は宗教の教義や時代の思潮や建築上の變動などにも關係が深いのでありますけれど、こゝには古い日本の寺院壁畫の大體だけにとゞめて置きます。（をはり）





電燈のあかり

兒玉花外

青空の白い雲をながめて居た私の部屋の窓を三日前から大きな物が暗くした。それは庭のすぐ向ふに新築が出來たのだ。

朝から晩までカン〱と鑿や槌の音がしてゐたが、何時の間にか瓦を被つた新木の家が空中を劃つて、私の眼には惡魔のやうに突立て居る

流石に廣い青空は覗はれるが、慥かに前の新築は、天上を流れる白雲の姿のいく分を隱してわたしの瞳を哀ましめる、……柔らかな雲と私の瞳とは濕むで似たもの丶二つだ。

今ではモー空行く雲に見限りを付けて了つて居る。

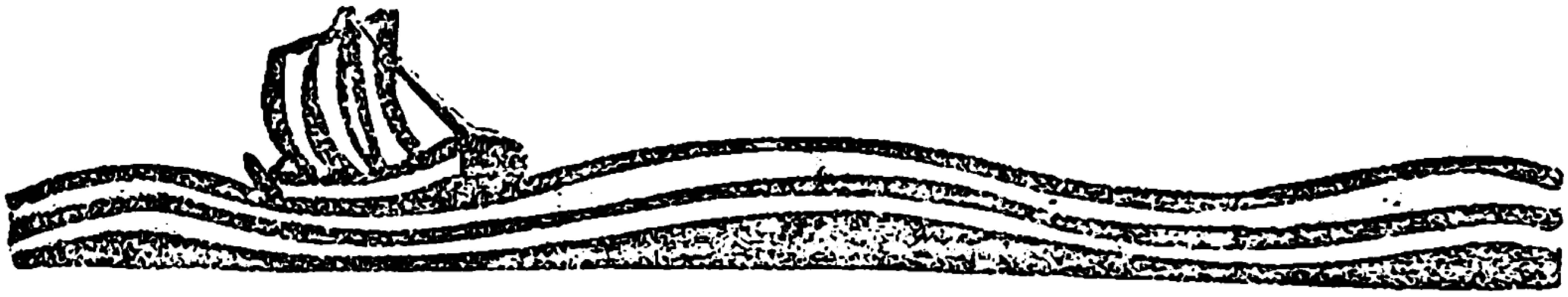
夜の薄赤い電燈の灯はわたしは眞に愛きだ、これを夜の花とも紅い夢とも親しむで居る。天井からや丶低く電燈の柔かな靜かな光がソッと點り落ちる時、わたしの重い頭腦に明るい綺麗な花が咲き、悲しい暗い瞳はうれしい色に美しく輝やく、……白い小さい陶器の傘に護られて愛らしい女の赤い瞳の如な珠硝子に、わたしは暫らく凝と見惚れて居る。

電燈の赤い灯の光線に照された、机の上の赤いインキ壺のきれいさ！今、愛に充實した心は毒でもかまはず赤インキを舐めたくなる、女の紅い溫かい血が戀しく成つた。

我が日本にも以前は、赤い燃える牡丹の花を喰つた狂亂の詩人が居た。いまの醒めきつた私にも夜は電燈の光で赤インキを吸ふ情熱が釀した、眼がクラ〱と赤い灯に醉つて、乾き丶つた小穴から嬉しい紅い泪が零れて來る。

男の住む寂しい、物皆が硬い空氣がけば〱しい部屋でさへ、夜分の電燈の明るい灯には斯のやうに華やぐ……。

私は女の居る溫かく柔かな空氣の間、手廻りの色彩の豐かで綺麗な夜の一室を想像した。



王妃と薔薇

森川葵村

炷きてめた王妃の裳裾のさばきに咽せ返りながら禁衛兵は答へた。

『王妃よ、若し卿の胸を飾ッて居る首飾を賜はるならば、卿の望むとほり、扇の房を染める紅いインキを造りましよう』

王妃は優しく首飾を取ッて、色白の禁衛兵の首へ懸けてやッた。

禁衛兵は滿足の微笑を泛べて

『それでは今夜、上弦の月が西の山へ沈むだとき、再び此の園へお出で下さい。私は花壇の中に、暗にも判るやう此首飾の一番大きなダイヤモンドを置いときます、そしてそこへ、赤い薔薇を一本植ゑて置きます、その薔薇の赤い蕾を切れば卿の望まるゝ紅い、香ぐはしいインキが得られましよう』

王妃はうれしさに其宵、月の沈むを待ちかねて、約束の花園へ行ッた。重い闇が草花の香を泛べて流れる。黄や紫や白やの見えない花の模樣が色々に入り混ッて幻のやうに暗の中から浮き上ッた。その中からひたと王妃の胸に閃いたものがある——目印のダイヤモンドが。見ると約束に違はず一と本眞紅の薔薇が暗に光ッて、咽せかへるやうな強い香を息苦しさうに吐いて居る。

王妃はそれと覺ッて、象牙のやうな白い手をさし伸べ、眞紅の蕾を探ッた。王妃の胸は何時に無くふるへた——咽せ返るやうな花の香に、暈ましい色彩の交錯に……

王妃は遂に一と思ひに紅い蕾を摘むで、勝利者のやうに之を星光にかざした、蕾には熱い生

命がときめいて居るやうに見える。王妃は懐からナイフを取り出して、心臓のやうな紅い蕾に冷い銀の刃をぐさと刺した。そして香ぐはしい紅いインキを緑玉の小皿に搾ッた。

　王妃は望みどほり扇の房を紅いインキに染めて、殘る滴を紅筆に染めながら扇の表に歌を書いた。

蛇の鱗の日に光る
アンダンテよゝ美しく
アラビヤ人が貢獻する
沒香よりもかぐはしく
胸にしむるは罪と戀。

一夜の熱き歡樂に
盡くる生命の色に染め
扇の總のとて新らしき
その紅は罪と戀。

小鳥は塒破られて
あゝ春の夜を落ちにけり、
蘭麝薫れる死の床に、
あゝ歡樂の死の床に。

王妃はうれしげに扇を抱いて去つた。

翌くる朝、後宮の花苑には黄や紫や白やさまざまの草花の咲き亂れたなかに、ダイヤモンドの首飾を懸けた一人の色白の禁衛兵が斃れて居た。そして彼の心臓には蕾の摘み取られた一と本の薔薇の枝が挿してあッた。

饒舌

花向日葵

いおろつぱから歸航するまんもにあ號にあめりかの娘が三人乘つてゐる。



一人はしかご、一人はにうようく、一人はひや
でるひや、三人共相續權を持つてゐる。
にうようくはるびいをたんと身につけてゐる。
しかごはえめらるどをどつさり。
ひやでるひやは眞珠をちつとばかり。
そりあ私面白かつたのよ。にうようくが云ふ。
そうよ、私もよ。しかごが云ふ。
ひやでるひやは、だまつてゐる。
私どいつに居ましたの。にうようくが云ふ。
そう、私はふらんすよ。しかごが云ふ。
ひやでるひやは髪をいぢつてゐる。
私べるりんが大好きなの。にうようくが云ふ。
あらそう、私ぱりいがいいわ。しかごが云ふ。
ひやでるひやは手をもんでゐる。
どいつの貴族にたんとお目にかかつてよ。にう
ようくが云ふ。
私ふらんすの貴族にずゐぶんあつたわ。しかご
が云ふ。

ひやでるひやは口をつぼめてゐる。
私ふらすてんすたえん男爵にお目にかかつてよ
にうようくが云ふ。
私ふらうど伯爵にあつたわ。しかごが云ふ。
ひやでるひやは下を見てゐる。
つゐんでるひいるど男爵にもあつてよ。にうよ
うくが云ふ。
私ぶるうふ伯爵にもあつたの。しかごが云ふ。
ひやでるひやは考へ込む。
あなたはどちらへ行らしつたの。にうようくが
云ふ。
そして何かなすつて。しかごが云ふ。
ちつしえる侯爵と許婚になりました、にうよう
くへついたら御披露いたします。ひやでるひや
が云ふ。
まあ。にうようくとしかごがいつしよに云ふ
ひやでるひやは欠伸をのむ。
沈默。

（サスマン）



徒勞

長曾我部菊子

「晦日蕎麥」と云つて今日は蕎麥を食べると云ふ話を店の方で誰かゞ話してゐるのを聞いて、弟が『姉樣東京のそばは旨いねえ』と云つたので買ふ氣になつた。店の前には丁度うどん屋さんが來て居たので、そばもうどんも一かたまりが二錢づゝで八錢だけ買ひ整のへた。

今年も今日で打止である。三疊の日光の好い南の方の障子を二枚とも取りはづして、私は部屋の中央に据ゑてある机に向いた。情深い生母が微笑を含んでのぞき込む樣な日の光は軟柔く机の上に落ちて來て、私がノートの上に走らせるGペンの尖がちらりと光る。此の閃光も今年の名殘を思はせて、何かに絶えず蘆の葉の樣に吹き戰慄かされる心よ！

歲月は逝く。而して私は此處に殘る。さて今年中の私が「ノート」に記錄れたのを眺めると徒に外面の動搖ばかりが甚しかつたが爲內面的の生は私に極めて淺いものであつた。內面的の生に對する努力は力をあげてしたのであるが、努めただけに收穫が無かつた事を思はなければならない。

眞面目に努めつゝあつた事は一月の三十號から十二月の六十三號まで都合三十三卷を書いて居る。月平均二冊は記錄して居るのであつた。此の記錄に今少しの價値があり、更に深い心持が捉へられて居たならば、私は少しの悔も無かつたらう。

然し種々と苦情はあつても、大體に於て私は怠惰に此の年を暮したとは思ふ事が出來ぬ。一浮一沈一笑一泣の間に上りぐるしき生路の坂を上つた。而して四十三年の中は張り詰めた心を抱いて、ぷりぷりとして血眼をして暮し、書物も讀まず、記錄事もなく要するに昏亂を重ねて一年を送り、悲しい淋しい涙の色を以て若い歲月を染めたのであつたのを、今年四十四年の中は少くともさうでは無かつた。書物に親む事こそは出來なかつた――つまり其の餘裕が無かつたからであるが――記錄く方に於ては努められる程の努める事はし

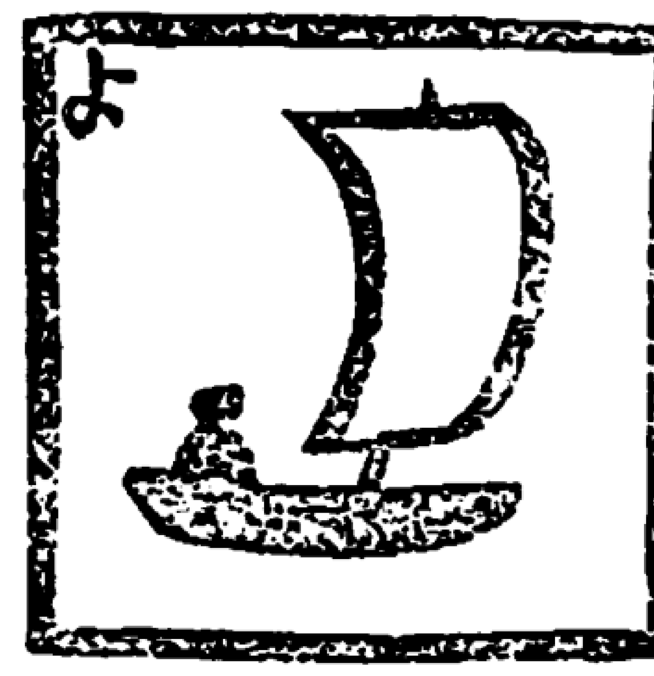
たと思ふのである。緊張をした上に血眼になる事もなく、隙間もなくつきつめる事もなく甘んじて靜に苦痛を味ふたのである。然し奈何かすると荒まうとした。乾燥うとした。心の中を吹き騷がす冬の風はいつも胸にうら淋しい音を立てゝ居るのであつた。去年騰上つた血汐の攪亂の後を受けて、心ならずも疲勞にまけて居た。鈍くいぢけたはら〱する心持が灰色の雲と年の瀨を掩ふて居たのである。斯樣した疲勞は上京の第二年目として免れなかつた事かも知れぬ。

そこで怠惰ならざりし事に、『ほこり』をとゞめて私は心穩かに、水と流れて行く歲花を送つて二十五年の生命の樹の下に私は立つのである。思ひ終つて柱にもたれて居ると、暖い日射がほか〱と身體に煙りかゝつて、いつともなく眠い樣な甘いほの淡い心持になりながら、建仁寺垣ごしに空地の方を見た。高い爲に平面は見えないが、腰から上だけ見える飛白を着た男の兒が、其處に大きな四角凧を手にもつて綱をいぢつて居る。上らさうとする事と見て居ると、綱を六尺ばかりも緩めて凧の方を浮かして、更に綱をはしへはしへとのべながらとつかはと走つた。少し煽られて首を振つた凧は風も無い空に、捉りどころもなくてくた〱と落ちて了つた。口には賢い事をならべる大人が樣々に嘗める徒勞も此の凧である。男の兒は引きかへして來て凧を抱え上げた。

凧は四角の顏一面に紅と黃と靑とこの强い原色でべたべた塗りたてゝある盃と櫻の花三輪の頰から綱が垂れ下つて居る。をどけた繪凧は男の子と一緒に冬の光にむされて居る。落ちても落ちてもなほ懲りもせずに、小歌をつぶやきながら、又綱を引つぱつてゐる。然し綱の引くものは凧ではなくて徒勞である。白けた枯草の葉が日の光に透いて、すつきりと黃ばんで淡く輪廓が光る。遠くの方で鷄が鳴き出すと、どつか思ひも掛けぬ處から答へる樣に他の鷄が鳴いた。其の時男の兒は思ひ入つた焦れ聲で、

『何故上らないのだ、凧。凧。』

と叱つて居た。



光源氏の一生（下）

外島涙之介



源氏が明石から歸京した翌年（源氏廿九）桐壺の帝の皇子（實は源氏の子）十二歳で位に卽く。源氏は內大臣に任命される筈だが彼自ら適はしくないと思ひ、葵（先妻）の父に太政大臣を讓つた。源氏の子、夕霧（母は葵上）初めて昇殿した。三月に明石上が明石の姬君を生むだ。源氏は左遷以來の御禮の爲、九月に住吉に參詣した時、偶然にも、參詣してゐた明石に會ひ、上洛を勸めたが、また捨てられた時には困るからと、其時は上洛しなかつた。

六條の御息所（一月號に秋好中宮とせしは誤なり。秋好中宮とは六條の子を云ふ）は娘が齋宮（伊勢）の任を終たので共に上洛した。病氣が重くなつたので源氏も不憫に思ひ見舞に行つた。几帳を隔てゝ遺言を聞いてやつた。六條は源氏に娘の養育を依賴して一週間許して死んだ。萬事源氏の世話をして娘を二條の家に引取り、冷泉の女御にしたのが翌々年（源氏卅一）の春である。此より先き、鼻赤の末摘花は依賴るべき伯父が筑紫へ下るのにも從て行かず、只源氏を想ふて獨り荒廢した家に住んで居た。不圖した事より源氏は其を哀に感じ、再び舊情を溫めて近所へ引取つた。

六條御息所の娘は入內したが（梅壺女御又は秋好中宮といふ）帝十二歳梅壺二十三歳で帝が恥しがつたが繪がお好きなので段段親しくなつた。弘徽殿女御（頭中將の娘）と梅壺女御との繪合などあつた。

空蟬とは其後音信も絕えて居たが、石山寺參詣の折會つて見ると世を悲觀して尼になつてゐた。源氏もそろ〱無常を觀じたらしく、嵯峨に寺を建てた。然し家には、西座敷に自分と紫、東座敷に花散里や其他多

くの女を置いてある。明石も置くつもりで上洛させたが、紫に遠慮して他の場所に置き繁くは通はなかつた。然し明石の姫君が三つになつて誠に可愛らしい、將來は女御にもしようかと思つて、その冬、姫だけ二條へつれて來て紫に育てさせたよくなつくので、紫も大變可愛がつたが、心の中では實子の無いのを殘念に思つて居たらしい。

翌年の春（源氏卅二）葵の父が死し、藤壺女御（今は薄雲女院）も三十七歳で亡くなつた。源氏は心の底で終日終夜煩悶して泣き暮し益道心を強くした。

齋院（賀茂）になる以前に、逢ふ事の出來なかつた朝顔の齋院が、今五の宮（源氏の叔母）に居るので事に託して能く往



來した、或日も尋ねて行つた處、老衰した五の宮の假寢してしまつたので、朝顔姫に物言はうと思ふと、昔知つて居る老婦源の內侍が尼になつて其處に居たのに會つて昔話をした。源氏は昔から朝顔を想つては居たものの、今更何うでも可いのだが其儘では男が立たぬ樣にも思はれて、言ひ寄つたけれど、遂に想は遂げなかつた。源氏に想はれて終まで從はなかつたのは朝顔一人だけのやうだ

源氏の子夕霧（母は葵上）十二歳で六位になる、世評では四位が適當だと云ふ、然し源氏は子供に學問をさせようと思つた爲である。源氏も三十三歳になつて漸く子供の敎育の事を考へる樣になつた。夕霧を元服させると同時に紫の側を離して花散里に預けた。之は自分と藤壺女

御との樣な事があつてはいかぬと云ふ心配からである夕霧は從兄同士の雲居の雁と、飯事の樣な事から夫婦になつた。源氏が太政大臣になり五節の舞姬を出す爲、家人惟光の娘藤内侍を出した。之が雲居雁に似て居るので夕霧は後に妾にした。

源氏三十四歲の秋、大邸宅を六條に建て、紫を始め秋好中宮、花散里、明石等其他の女を置き、皆廊下續にして各々の好む草花を植ゑさせた。之れから數年が源氏の最も得意時代、權威並び行はれた全盛期であつた。

十五年以前の夕顏を回想した。夕顏が未だ源氏を知らぬ前に頭中將(葵の兄)との間に出來た娘(玉鬘)は人知れず乳母の夫(太宰小貳)につれられて筑紫で成長し、小貳の死後父頭中將(今は內大臣)に會ふ爲上京したのを、源氏の召使(右近)が源氏に知らしたので、自分の子ではないが、戀しく思ふた夕顏の娘の事だから、己が子として紫にも語り家(六條)に引取りて花散里に預けた。

兵部卿(源氏の弟)も、柏木(玉鬘は己が妹なるを知らずして)も玉鬘を戀して居た、源氏も想はぬでもなかつた、併し螢の光で玉鬘を兵部卿に見せた事などもある。玉鬘を引取つて三年目宮仕させる爲、實父內大臣に知らしたら大變喜んだ。が、玉鬘は前から髭黑大將に通じて居たので、內裏を出て髭黑の處へ後妻に行つて間も無く子を生んだ。

源氏三十九歲の時、明石姬君十二で入內し、十四の春男子を生む(後に東宮に立つ)子の夕霧は表向雲居雁を妻にすることゝなり、何かと嬉しさが重なつて源氏も來年の四十の賀は盛にしようと思つた。

源氏は薰物を焚いたり、賭弓をしたりして遊樂して居た。昔の戀人朧月夜の內侍に會つたのも四十の年である。帝の姬君女三の宮は、源氏も愛してゐたが、柏木は蹴鞠の時に猫が簾を上たので女三の宮を見初めたそれから四五年過ぎた。明石姬の子(源氏の孫)は東宮、夕霧は左大臣、娘分の玉鬘の夫(髭黑)は右大臣と云ふ樣に萬事が榮えたのでお禮參りの積で明石上と明石姬君、その祖母などをつれて住吉へ參詣した。

源氏四十七の春、自宅で女許で音樂の遊びをした、

その後で源氏は女の批評をした。三宮は青柳の絲が鶯の羽風に亂れる樣で、桐壺女御は咲きこぼれた藤の花紫は花木の王たる櫻にも譬ふべく、明石は皐月待つ花橘の樣だ。然し各々風情はあるが美人としては六條の御息所に越ゆる者はない但だ勝氣なのが缺點だと云ふのだつた。

源氏が女の批評をした翌日急に紫は胸が痛んで苦み出した。一二箇月は源氏一門の大取込、その隙に柏木は三宮に逢つた。柏木の手紙を源氏は見付たが、公表てば血で血を洗ふ樣なり、又自分にも例のあることだと思つて放任して置いた。然し源氏に知られた事を聞いた柏木は、心配して病氣になつた。三宮は薫(實は柏木の子)を生んだが、柏木に似て居るので、三宮は心配が重り、産後の肥立あしく、遂に尼になつた柏木



はそんな事を聞いて、猶々病氣が重なり從兄弟同士の仲よしの夕霧に妻落葉(三宮の姉)のことを頼んで死んでしまつた。夕霧はまた落葉に通じた。源氏は是等のことを見聞して困つたとは思へど、自分の昔を回想して、意見も出來ず心の中で歎息して居た。

紫の胸の痛みは、六條御息所の死靈の祟であつた、併し紫に罪は無く、源氏が御息所の事を紫に惡し樣に云つた爲だと云ふ事が分つたので、少しは心地好くなつたものゝ、終に其秋八月十四日に敢なく死んでしまつた、時に源氏五十一歳その落膽は想像以上であつた。今はもう深く佛門に入りたいと願つた。然し太政大臣ともあるべきものが、妻の死を悲んで僧侶になつたとあつては、世間の聞えがわるいたゞ一室に閉ぢ籠つて孫などを相手に暮して居た。翌

年の春「我宿は花もてはやす人も無し何にか春の尋ね來つらん」と歌つて、雨につけ花につけ紫を思出した幾多の女に戀したが殊に三宮の時は顔にてそ出さね、紫も心苦しかつたらうなど丶思ひ出すと、夕霧にさへ簾を隔て丶會ふやうになつた。念佛に日を暮す時もあり、時に氣を紛すため三宮の處へ行つても、紫より劣つて見え、明石の處へ行つても、紫の方が慕はしかつたと思はれ、遂に堪へかねて家に歸るのであつた。

兎角する内、紫の一週忌も過ぎ、遁世するつもりで燒かうと思ふ文殼を出して見たが紫の手紙が澤山出た思ひ餘つて「死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つ丶も猶迷ふ哉」とよんだ事もある。

源氏が五十三歳から後の事は、『源氏物語』に出て居ないが、前に紫の死ぬ處で「死」の印象を讀者に深からしめたから省略したのであらう、源氏は五十三歳から後七八年の間に死んだ事になる。

以上で光源氏の情的一生は終つたのである、從つて『源氏物語』の主要部分は終つたのである。是れより以下は餘りの物語であるけれど、之無くしては『源氏物語』を知つたとは云へない。

以下は所謂宇治十帖と稱するもので、源氏の子薫大將が、源氏と同じ樣な道を踏んだ事を書いてある、主要なる人物は、薫と、匂宮と、浮舟である。簡單に筋だけ書いて見やう。

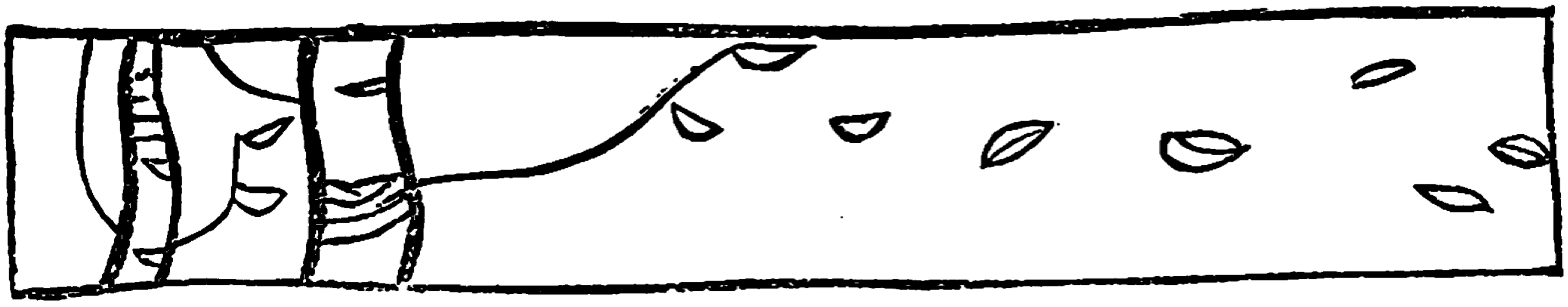
薫（源氏の子、實は柏木の子、母三宮）は十四で元服し、二十六で帝の姫君二の宮を北の方にした。源氏の弟で宇治の八宮に、大君、中君、浮舟の三人の娘があつた。その八宮に薫はお經を習ひに行つて近親になり、八宮の死後、娘たちの面倒を見て居た。匂宮は源氏の孫（明石上の子明石姫君の子）で薫は表面は源氏の子であつたから、兩人は父方では伯父姪、母方では從兄弟なので仲がよい。で大君は自分（薫）の者として中君を匂宮に取持つた。然るに其以前に大君は死んだ。匂はその内に六君（夕霧の子）にも通ひ出した。中君は薫を恨む。では大君の代に中君をとも思つたが、異腹の妹（浮舟）がある事を聞いて、辨の尼に賴んで石山に行つて見た。此時薫二十六、浮舟二十。

其後浮舟が、定庭の都合で暫く中君の處へ來た時に匂に見初められた。浮舟は薫と匂とに板挾になつたのであつた。後、薫は浮舟を宇治に住ませて通つて居たが匂も之を探し當て、或夜薫の聲色を眞似て忍び込み思ひを遂げた、それから匂は浮舟を舟に載せて宇治川を上り、乳母の子の處でゆつくり遊んだ事などもある。暫して薫は別に家を建て浮舟を置かうとしたのを、匂が聞いて前に奪ひ取らうとした。斯くして薫も匂の通ふ事を知り、匂も薫に知られた事を覺つた。浮舟は絶體絶命、大に煩悶して、或夜行方不明になつたが、浮舟は宇治川へ身を投げたと云ふので葬禮も濟んだ、實は投身の覺悟で人の寢靜るのを待つて家を出たのだが、夢の如く匂宮の樣な人



が「こつちへこい」と云つたのに思ひ亂れて氣絶して了つた、宇治河畔の大木の陰に白衣亂髪の美女が只獨り、而も夜半に倒れて居るので、之を助けて連れて行つたのが小野の尼であつた。一年許は小野の尼の許で勤經をして居た。その内に浮舟が生存して居ると云ふ事が薫に知れ、浮舟の弟の子供に手紙を持たせて來たが、浮舟は心強くも知らぬ、知らぬで徹頭徹尾應じなかつた。

以上で光源氏の一生、換言れば源氏物語一部の大要は語り終つたことになります、色も澤もなく、只筋書だけで極めてつまらぬものになりましたが、要するに源氏物語は、近代的文藝の見地から見ても一部の立派な小説で永く價値ある創作です、皆樣も是非御覽なさい。

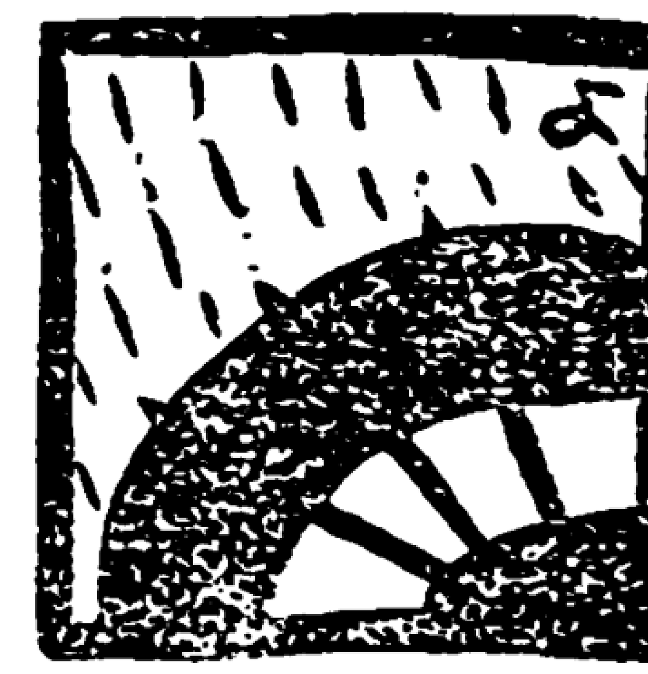


白眼

虞美人草なりき、寺ながら
苑に植ゑしはけしなりき、
匂けうとき蕋の粉の
胸に着きしをはらふとて、
七つ下なる妹の
衿を袪けしたまゆらに、
あれ見た見たとはやされて
隱せし乳よ。つらけれど
姉は人妻、元服の
髮なり　歯なり　眉毛なり
人恥もせぬ年なれば
うべ花やかに笑ひけん。
るしや、わが乳は、背より
樂師の君の持添へて
ビヤノの上を走らする
十の小指の尖ならず、
梵唄めくる須彌壇の
蔭にゐ凭りて新發意の
お孃捧ぐと、往きかひに
そと肩れもせし袖ならず。
浴室に見る丸鏡
恥しけれど美しく、
白き腕に纏ひつく
髮の長きも誰故に……

髮の長きも誰故にと、
さゝやきたりし十七の
少女の戀は疑ふらく
男ほしさの戯か。
破壞の末を悲しまば、
何しに死をば契りたる。
君が足蹠は血に染むとも、
ひたちは踏まぬ土なりや。
夢は遙けし、朝寢髮、
今さら落る涙あらば、
ひとつよりなき魂を、
二人に賣りし悔を知れ。
げに君が目をわれは見ず、
君はわが腕を知らねども、
二人ならでは解かれざる
謎めく「あや」の殘れるを。
君が乳房に縋る子の
一人にあやと名づくとも
口惜き哉、人妻の
君は吾が子の母ならず。
悲む勿れ、君は唯
蝗の如く生めば足る
夢の吾兒は白眼して
寂しき父に伴はむ。
愁ふる勿れ

よみびとしらず



女と其周圍

服部嘉香

挨拶

母の甥の嫁が年賀に來た。小さな菓子箱を臺所の板間に置いて、六疊の間の障子を開けた。

「オヤ、誰かと思つたら、おさきさんかい」

「まア、こんな所から上り込んで、御免なさいよ。ホヽヽヽ」

「今日は御年始かい。御年始なら玄關から上つて來れば可いに」

「だつて伯母さん……」

「忙しいのに、わざ〳〵來なくたつて可いんだよ」

「でもねエ、店の方はおつるに任しておいて、一寸の間を見て來たんですよ。忙しいでせう、御客樣で」

「なアに、こんな田舎は道が大變だもの」

「おゝ寒い、臺所の戸を開けて來た……」

「ほんとに、こちらへ這入れば可いぢや無いか。後を閉めて……」

「嘉香さんは？」

「まだ寝てるんだよ」

「まア呆れたもんだねエ、三ケ日だといふのに」

「でも、やつぱり夜が遲いからね」

「夜が遲いたつて、あんまりだわ。お客樣が來たら何うするの」

「起してお出でよ」

「憎らしいから、放つときませうよ」

「お前さんとこ、節期は何うしたへ。賣行は好かつた

かい」

「まアお蔭樣でね、去年から見ると大晦日だけで二十圓も賣り上げが多いんですよ」

「それア何よりだ。何は何うして、あの葉書は」

「それも大變でしたよ。四千枚仕入れておいたのが二十九日までに賣り切れて、又二千枚仕入れたのですの。それも大晦日までには、一枚二枚の御客樣ですッかり賣れてしまひましたわ」

「さうかい。大きいもんだね」

「え丶、まアお蔭樣でね……。オヤ厭だ、わたし未だ御挨拶もしないで……、まづ明けましてお目出度うでざいます」

「まア挨拶なんか何うでも可いやね」

「でも御挨拶ですもの……。舊冬は色々御世話樣になりまして、どうぞ相變りませず」

「こちらこそ相變らず」

「まア是で可いわ。それから、あのね伯母さん………

……………」

改姓

「藤山先生は今度村井んさへお嫁入りよ」

「オヤ然う」

「ぢやア是からは村井先生なの」

「さうよ」

「でもやつぱり藤山先生と言ふ方が可いわね」

「だつて仕方が無いわ、もう藤山ぢや無いんだもの、村井新夫人よ、ホ丶丶丶」

「ホ丶丶丶」

従姉のせん子は、結婚當座こんな噂をされるのが辛いと言つてゐた。女は自分の改姓に對しても不安と屈辱とを感じる場合がある。年下の夫を持つた親戚の女は、いつも手紙の裏書に「丸山内、たみ子」と書いて寄越す。「丸山たみ子」と書いたのは、此の五年來一度も見た事が無い。今年の賀状の中にも、「今井内、くに子」といふのが一枚あつた。「今井くに子」とは何日なる事だか。

娘

四谷の通りの或る裏町を、五十を越した有福らしい老人と、中年増の肥えた女とが歩いてゐる。私は反對の方から、その二人が笑ひ話をしながら無遠慮に大口を開けてゐるのを見ながら近づいて來た。



「でもやはり男が欲しいんでせうよ」と、女の云ふ聲が右へ流れて二人は角を曲つて行く、私も其の角を曲つて暫く二人の後に蹤いて行つた。

「え丶まア、年頃ですからなー」と、男の方が受けた。

「私も煩さいほど家の人から頼まれてゐますけれど、何うも二十七で字が書けないと云ふのですから、一寸どうも……」

「でせうな、私も精々心がけませう」
「何分よろしくお願いたします、家主さんにお願しておいたから安心をしろと本人に云つて置きましたが、先達も行つてみましたが一生懸命にお手習をして居ましたよ、お寺へ嫁きたいと本人は云つてゐますのですけれど……」
「へえ、お寺へ……」
「お寺なら字なんか書けなくても濟むと云のでせう」
「なるほど、な」
「でも私、何ぢや無いかと思ひますよ。二十七にもなつて縁の遠い所を見ると、男でもあるんぢや無いでせうか」
「全く！　そりや判りませんな。此の事ばかりは何とも申されませんからな、ハヽヽヽ」
「いくら是ならと思ふ人を話し込んでやつても、何とか彼とか言ふんですもの、男があるんだか、それとも他人に言へない事でもあるんでせうよ」
「なる……。どうも始終蹤いてゐるんぢや無いんですから、もしか好いのがあるかも知れません、へヽ」
「あなたが朝から晩まで蹤いてお歩きなさると可いんですよ、ホヽヽ」
「ハヽヽヽ、から年をとりましてはな」
「まんざらでもありますまいよ、ホヽヽ」
「一つ口説いてみますかな、ハヽヽヽ」
——次の曲り角で私は此の二人と別れた。どこまで行く二人だか、いつまで無垢の娘を弄りものにする事だか。

新刊紹介

○家なき兒　フランスで有名な小說家、マロー氏の作を、菊池幽芳氏の流暢な筆で譯したもの、此小說は英國獨逸は勿論世界各國の語にも譯され、百萬部以上出版されたほどの世界通有の優れた引力を持つてゐる小說である。優れたといふことは奇抜と云ふことでなく、人間一般の感情を動かすところに何人も拒み得ぬ或る眞實があるからだらう、而かも此小說は讀書の修養なき者に惡い刺戟を與へるやうなことなく、大人でも、少年少女でも、誰が讀んでも面白く思はせるのが大多數の讀者を吸引する所以であらう、函入美製本（定價金一圓、東京、春陽堂發兌）

○スヰートホーム　若き婦人間に其名を知られてゐる々藤千代子女史の作を蒐めて一冊としたもの、藝術上から兎や角云ふべきものでないかも知れぬが、またうら若き一女性が此れだけ自由に思ふことを書き表はせるやうになつたのは、時代の進歩として注目すべきものであらう（定價金六十五錢、東京、博文館發兌）



歩きぶりの內輪と外輪

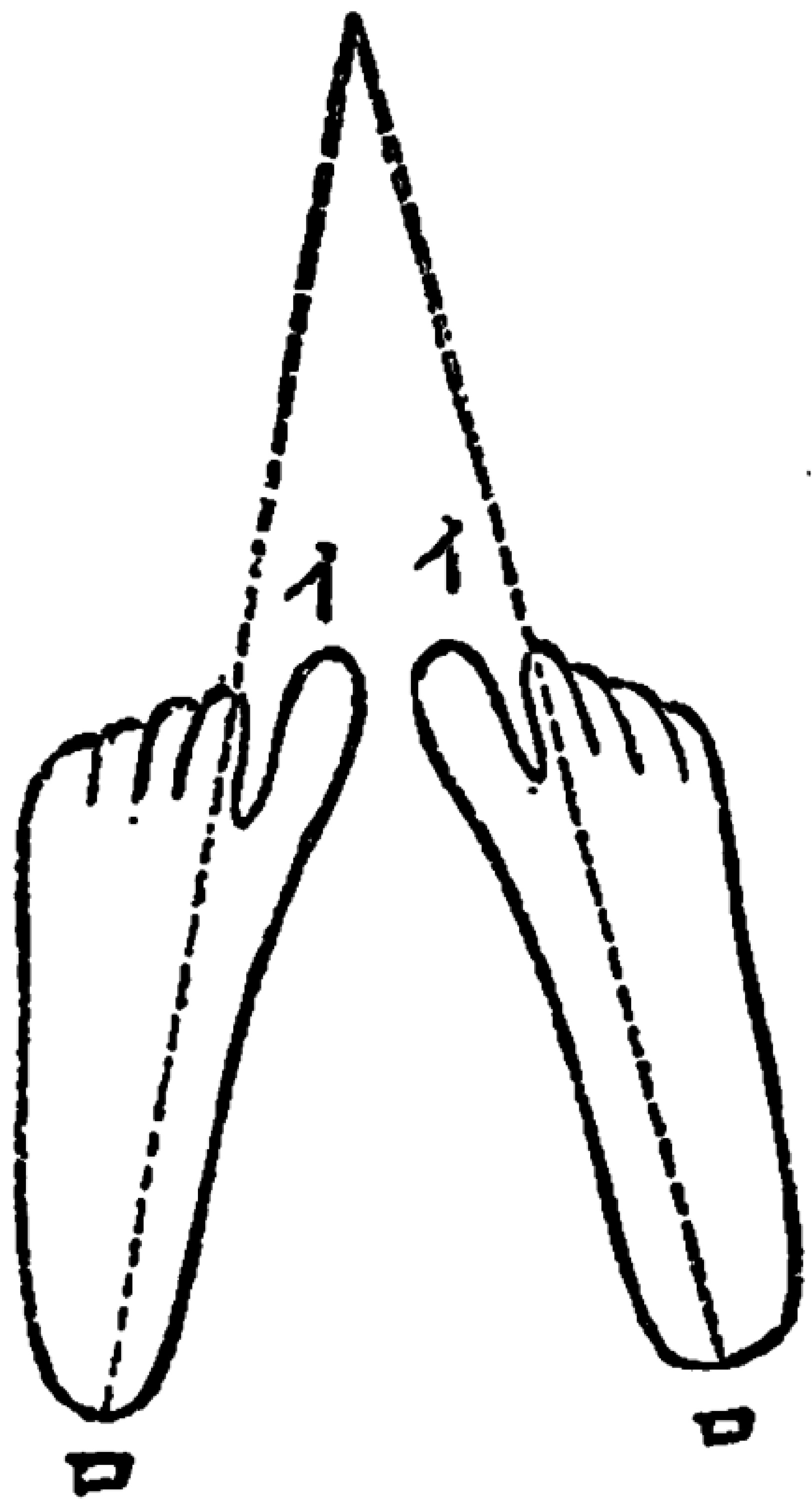
澤田順次郎

〔一〕內輪足とは何んなもの

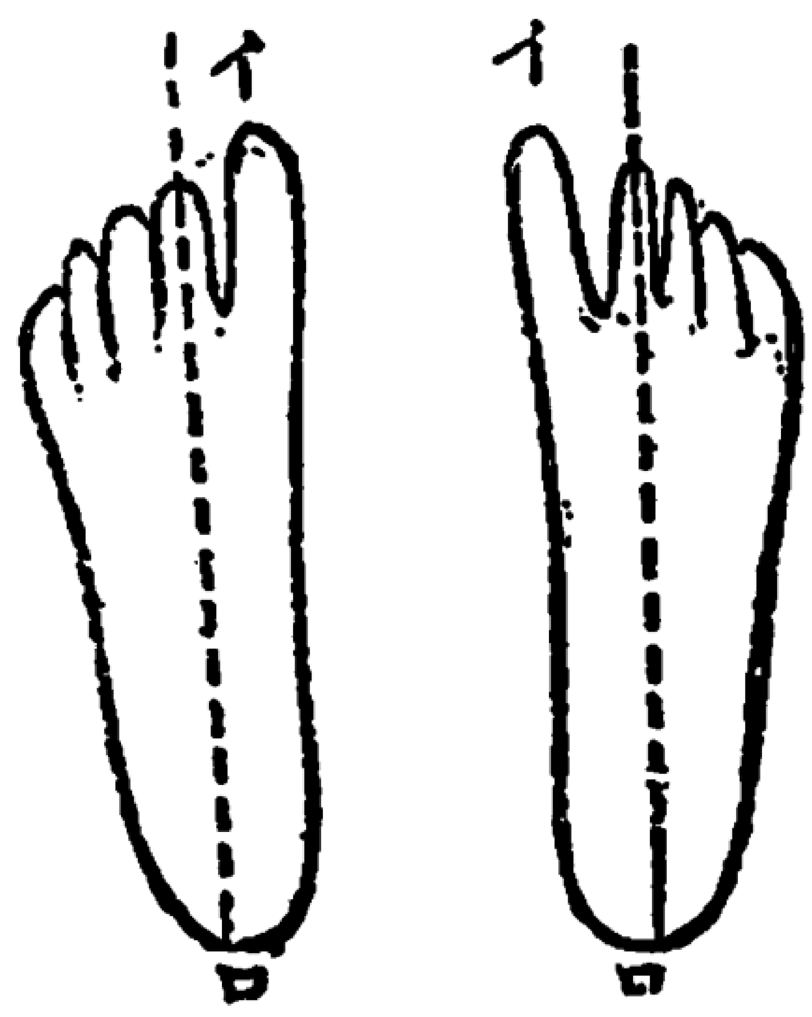
內輪足は獨り婦人ばかりでなく、男子にもありますが、特に婦人に著しいので茲にお話申します。一體內輪足とは何んなものであるかと申すに、足の先端が內側に向つて居るので、兩足を並べて立つと、兩方の拇趾が相接して、後の踵の方が、開く樣になるものゝ謂です。之れを圖で示すと第一圖の樣になります。(イ)は拇趾の端で、(ロ)は踵です。箇樣に足端の內向するのは、大腿骨から起るので、此の骨が內側に轉ずると從つて足端が內に向つて參ります。

內輪足は第一圖の兩點の位置に依つて種々に變じますが、(イ)と(ロ)が上下眞直になつて、兩足の間に併行するときは、第二圖の如くなります。內輪足を內斜足と云ふならば、これは正足です。更に(イ)と(イ)との間が開離して(ロ)と(ロ)との間が相接するときは、外斜足で第一圖と第三圖とは、其の兩拇趾と兩踵との間の開き方に依つて幾階級もあります。

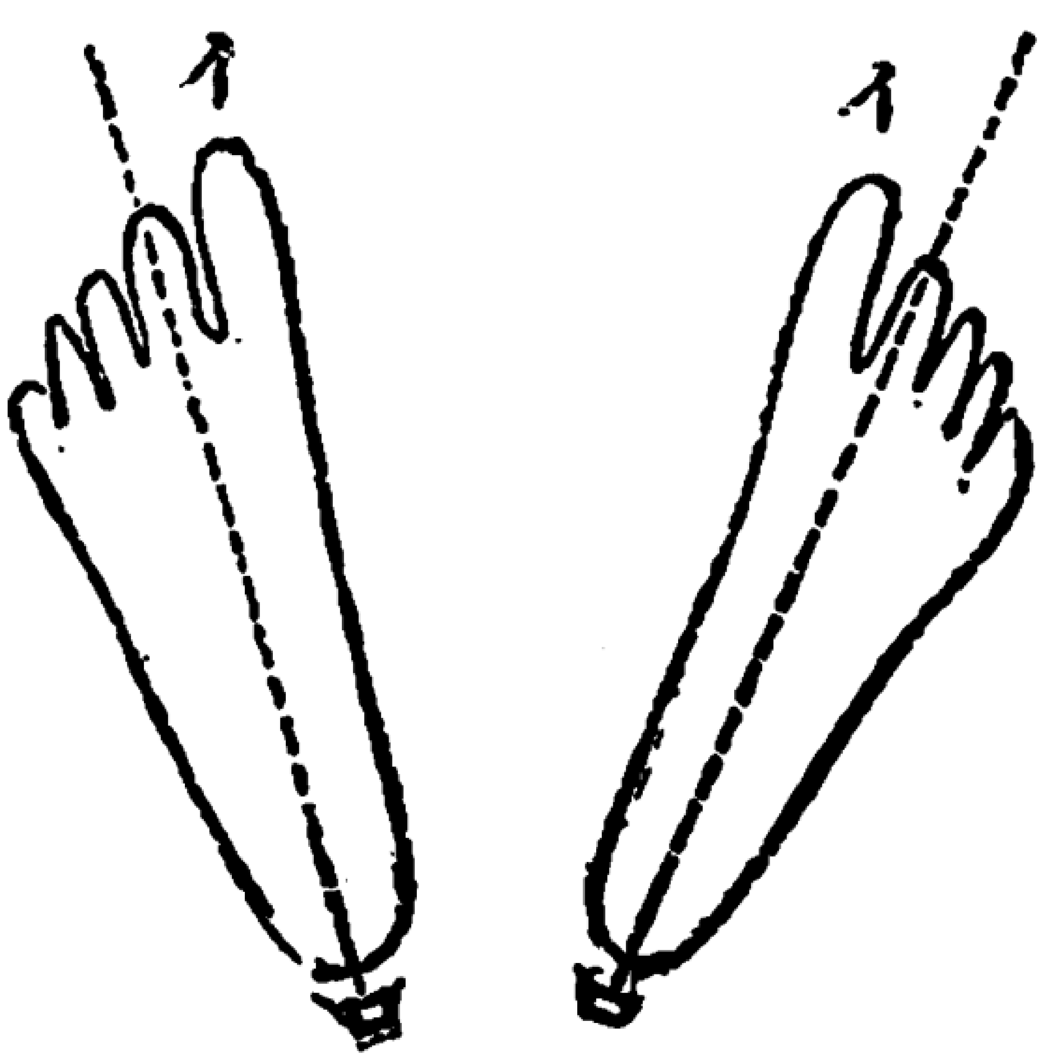
内斜足の度の弱いものは左程でありませんが、强度のものになると、兩拇趾は殆んど相接して、兩足を交叉するにあらざれば、直立することの出來ないものがあります（第四、五圖）。外斜足も度の強いものは兩足は左右に向つて、歩くときは、調度ボートで櫂を動かす樣になります。（第六圖）。正足は兩者の中間に位して足の位置からいふと、極めて正しいのですが、實際は内斜足に近いもので、歩くときは、足の先端が自然と内に向つて參ります。一つ試して御らんなさい。



第一圖



第二圖



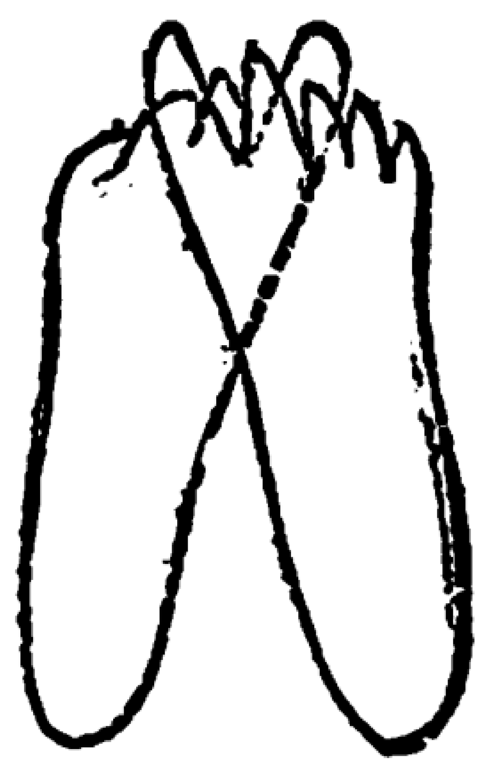
第三圖

（二）内輪足の原因

内輪足は何うして出來るか、外國の婦人も矢張内輪足であるかと云ふに、さうではありません。西洋の婦人を見れば直ぐ分りますが、彼等は男子と同じ樣に足端が少し外に向つて、極めて敏捷に歩きます。支那の婦人は纏足の爲に西洋婦人程に敏捷には歩けませんがそれでも内輪ではありません。して見ると内輪足は日本人に固有なるものゝ樣に思はれますが茲に一つ日本人の味方があります。それは北極に近い氷野に住で居る、エスキモー人です。此の外エスキモー人には、日本人に似た點があるさうですが、何ういふ譯で此の種族が日本人に似て居るか、何か其間に關係のあることゝ思はれますが、それは茲で言ふ必要はありませんから申しません。

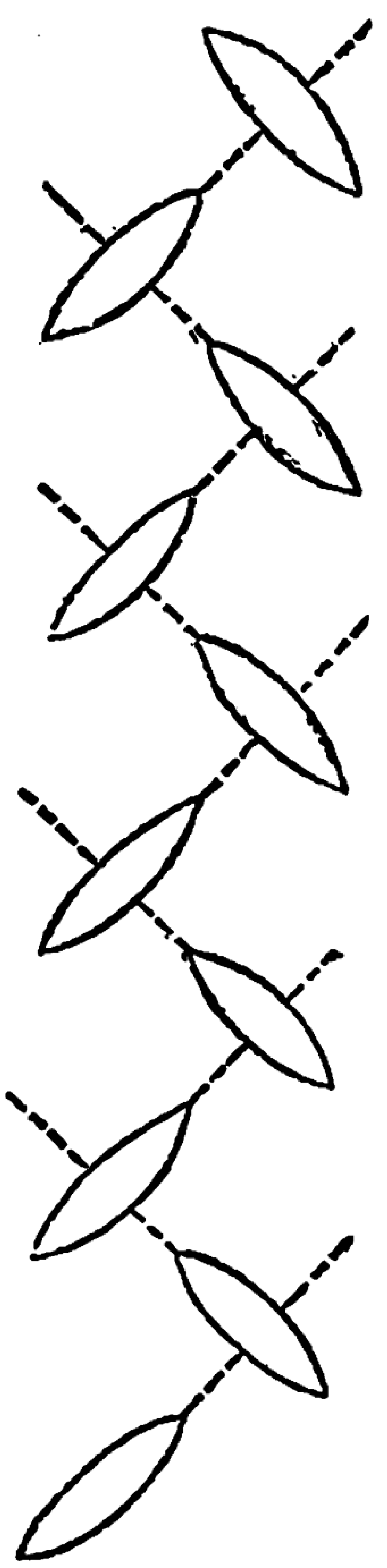
我が國人に就いて、内輪足の原因を探つて見るにて

[illegible]然でなくして、全く習慣から起つた變化です。

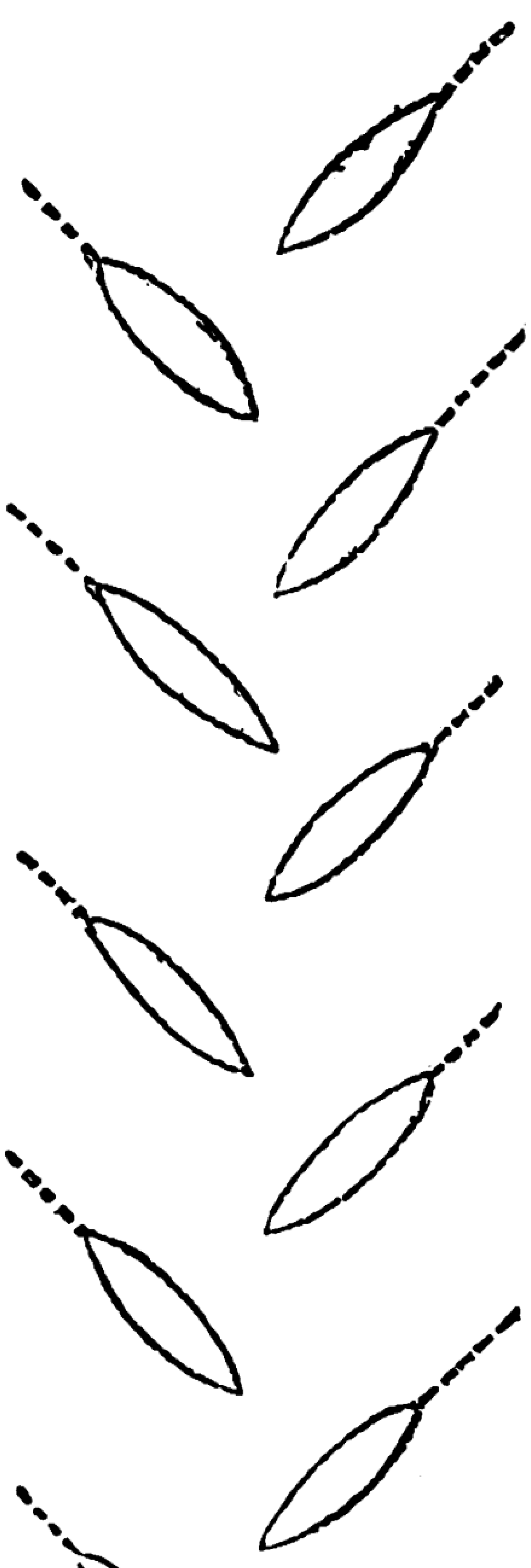


第四圖

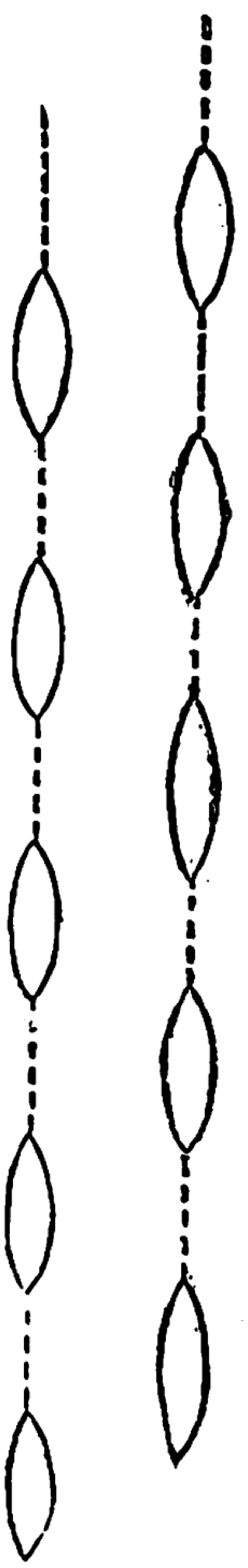
何故と申すに何んな内輪足の婦人でも、其の骨髓には異狀のないことゝ、嬰兒の足はすべて外向きになつて居ることゝ、今一つは女學生には少ないことゝの三事實で分ります。之れを換言すれば生れたときの足は外輪であるが、習慣から誘はれて内輪に變じたのです。其の習慣を列記して見ると(一)膝を折つて坐ること、(二)前開きの衣服を着て足の運びを不活潑ならしむること、(三)底の一様に平き履物を穿くこと、(四)日本婦人の下肢の比較的短きと、(五)内輪足を優美として之れを賞せしことの五箇條であります。左に之れを説明して見ませう。



第五圖



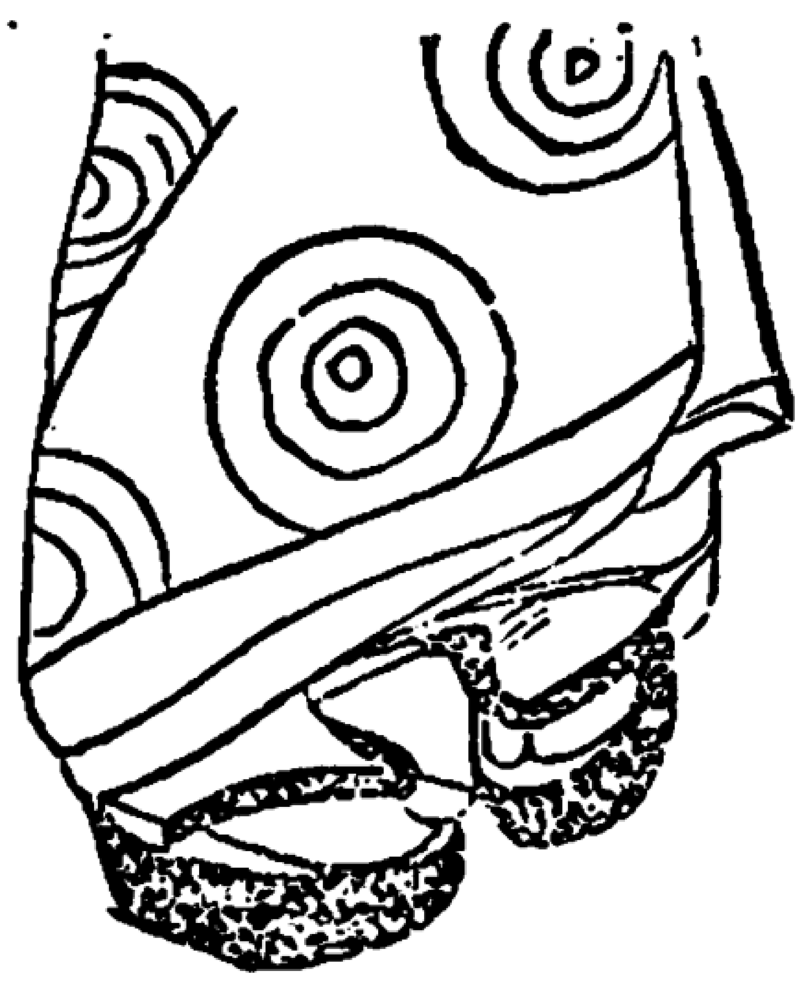
第六圖



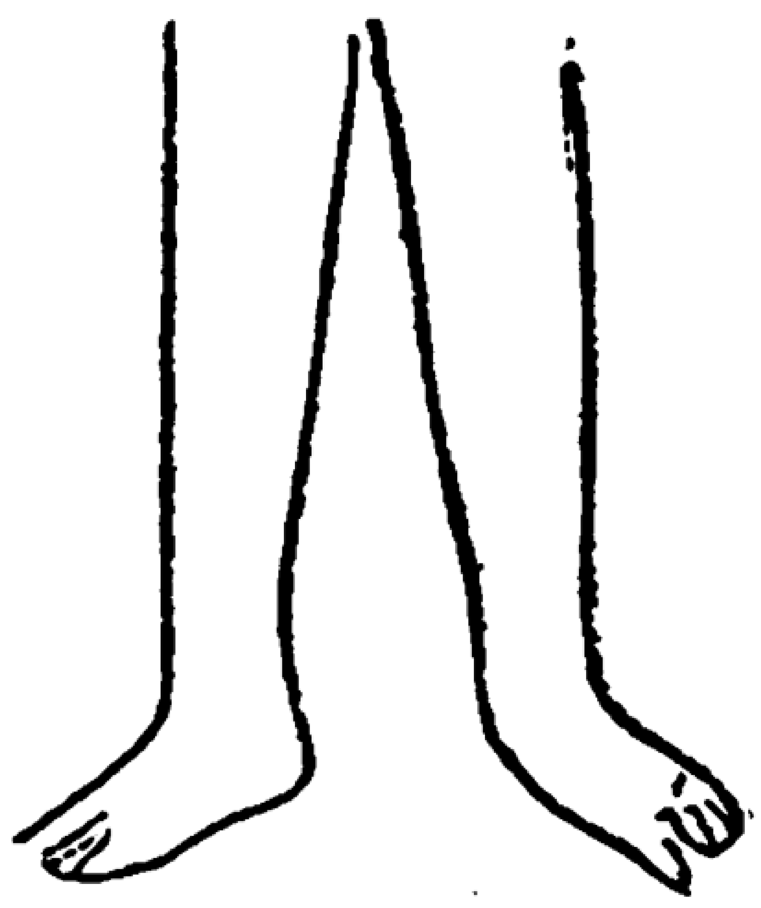
第七圖

（一）　膝を折つて坐ることは、啻に内輪足を誘成するばかりでなく、身長を妨ぐる原因ともなります。それは別問題ですが坐ると足の蹠が臀の下に敷かれて足は両方から

壓迫を受け爲に自然内向するのです（第十一圖）、同じ坐るにも男は片足を出したり、胡座を掻いたりすることが多くありますけれども、婦人は坐れば小搖も仕ないやうに、チヤンと兩膝を組み合せて、決して崩しません、これが女の行儀として尚ばれてありますが、そのお蔭で足は内輪になるのです。品位を保つ上から＊



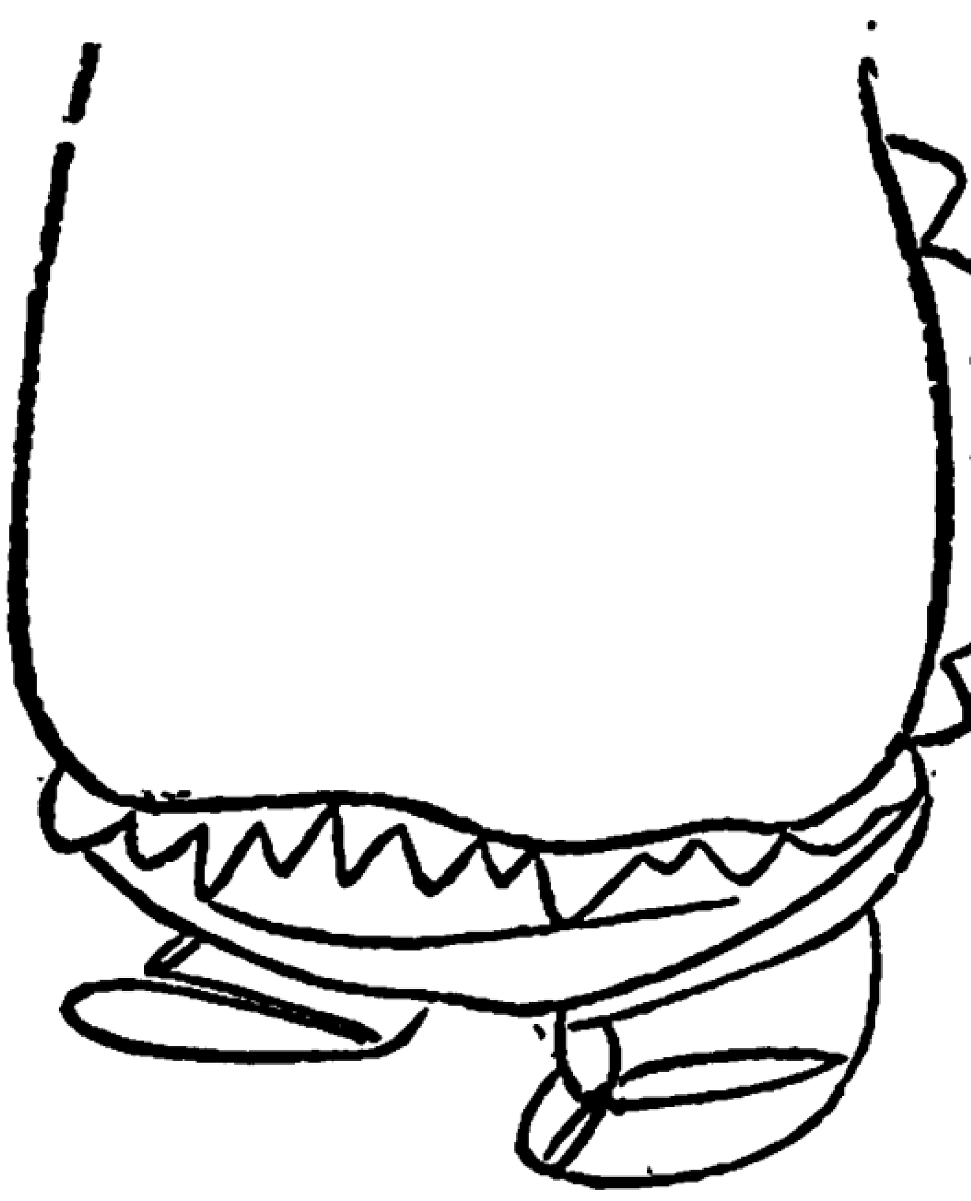
第八圖
藝者の歩行



第九圖
西洋婦人の佇立

＊いへば端坐は禮式に缺くべからざるものかも知れませんが、これが爲に下肢の發育を妨げて種々の弊害を生ずるに至つては、禮式も程度に止めなくてはなりません。それで内輪足を矯正する方法としてばかりでなく、一般に我が國人の身長を伸ばす方法としても、なるべく坐禮を廢して、腰掛を用ひることを奬勵したいものです。

（二）日本服は衣服の兩端を前方にて掻き合はせる樣に出來て居るので、歩行の際裾が翻つて脛が露はれ時としては風に吹き煽られて、内腿までも露出することとがあります。男も左樣ですが特に婦人の脛の露はるるものは恥づべきことで、脛の出るのを氣にして歩いてる婦人が多い樣＊



第十圖
幼女の歩み

＊です。それで婦人は一般に長い腰卷を用ひてこれを防いでありますけれども、絶對に脛の露出を防ぐことは出來ません、これが歩行に際して、自然に足を内向する原因となります。女學生に比較的内向足の少ないのは、腰掛に着くのと、袴を用ひて敏捷に歩行が出來るからです、脛の出るのを氣にする程歩行を妨げるものはありません。

（三）本邦の履物はすべて爪先と踵と同じ高さである上に、之れを足に支ふるものは、唯だ一の鼻緒ですから、下駄を穿くと拇趾と第二の趾とに専ら力が這入ります。それでも我々は慣れて居るから、日常高い足駄を平氣で穿いて居りますけれども、慣れない西洋人に穿かせると最初は随分困難します。それ丈下駄類は運動を妨げるもので、下駄を穿くと、活潑な運動が出來なくなります。加之而已ならず日本の履物は爪先と踵との高さが同じてあるから、歩くときは坂路を上る姿勢を取らなくてはなりません。之れに反して靴は踵が高く、前が低くなつて居るので、普通の歩行でも、西洋人は坂路を下る姿勢になり、自然反り身になつて身體が眞直になりますけれども、日本人は前に屈り膝です。試みに下駄を穿たときと、靴を穿いた時と姿勢を比較して御覧なさい。靴を穿くと體が自と後に反る様な氣がするでせう。下駄や雪踏は内輪足を誘ふ原因なることと疑ひありません。

（四）日本婦人の身體は之れを男子に對すると、比較的胴部が長くて、下肢が短くあります。今、男の身長を一〇〇として、其の上體部を五〇とすれば、下體部も五〇となりますけれど、婦人は五〇と四七位の比例になります。歐洲でも婦人の下體部は上體部よりは短くあります。けれども其の割合は日本婦人よりは高く、五〇と四九、五乃至四九、九位ですから、其の差は極めて僅少です。然るに我が婦人の方は大なる差がありますから、裸體になりますと、誠に不恰好な姿になります。箇樣に下肢が短いので、歩くときは、お臀が左右に搖ぐばかりでなく、肩までが一歩一歩互に上下します。これは生來で仕方がないが、畢竟脚の短いのも、内輪となつた一原因です。

（五）内向足は如何なる階級の婦人に多いかといふと、地方よりも都市の婦人に多く、又婢婦よりは藝娼妓の類、女學生よりは町家の娘等に多くあります。早く言へば古風で艶麗を装ふ婦人の特有です。昔の京美人といふものは、容貌のみならず、歩き振りも、確に美人の一要素であつて、如何ほど容姿は美しくても、

男の樣な外輪の歩き方では落第です。それで娘を持つ親達は小兒の時から注意して外輪にならぬ樣に人工を加へたと云ふことです。今日でも都會の人は嬰兒を脊負ふに、其の兩足を一處に揃へて、左右に開きませんこれは足の外輪になるのを防ぐ爲です。

同じ婦人でも山出しの女に内輪足の少ないのは、田舎では風姿に構まはず働くから、足は束縛さるゝことなくずんく發達するからです。元來は其の方が本統ですけれども、風習といふものは仕方がないもので、女の内輪足が奬勵せられた結果惡い方に流行を來したのです。

〔三〕 内輪足の矯正法

右に申しました如く、内輪足は古來日本婦人の裝飾の一つで、美人に缺くべからざる一要素となつて來たものです。然し裝飾といへば裝飾、これは一種の畸形で、これが爲に運動を妨げらるゝ點は風姿の野卑なる比でありますまい。私は我が國婦人の内輪足は、支那婦人の纏足、西洋婦人の細腰と好三幅對と思ひます。支那婦人の纏足は人工にて幼少の時から足部の發育を沮碍したもので、足骨は全く變形して居ります。西洋婦人の細腰も肋骨は下垂して内臓を壓迫し、それが爲に種々の疾病を釀すことは、人の熟知するところです。これに比すれば内輪足の害は一番輕いやうですけれども、然し少しにても害のある點は矯正して、善い方に向ふことを心掛けなくてはなりません。

何故内輪足は矯正しなくてはなりませんでせうか。昔の樣に婦人は家庭にぢつとして居ても、生活の出來る時では、格別今日の樣に生存競爭の烈しい世の中となつては、婦人もそれ相應に活動しなくてはなりません。それには一等脚が健全で、敏捷に歩行する習慣をつけなければな

第十一圖



坐りたる状態

りません。西洋婦人は男と伴れ立ちて同じ歩調に歩いてるのに、我が婦人は男と一處に歩かうとするのには、男がだら〳〵歩きをするか、女が息を切つて喘ぎ〳〵歩くか、孰らかでなければ歩調が揃ひません。唯だ見掛けの惡い許りでなく、時間の上から言つても大なる損です。

纏足や細腰の弊害は、支那でも西洋でも認めて居るのですが、之れを急に矯正することの出來ないのは、習慣性となつたからです。我が内輪足もこれと等しく、今直ちに矯むることは出來ますまいが、多くの人が一致協力して、此の點に注意を拂ふならば、決して出來ぬことはありません。論より證據女學生は矯正されて居るではありませんか。然らば其の矯正法は何うであるかと申すに、前に述べた原因を去るにあるのです。之れを箇條書きとして示せば次ぎの如くでありますが、これは學齡時代より妙齡の頃まで行ふのです。

第十二圖



女學生の歩行

(一) 成るべく腰掛を用ふべし、坐つても長く坐らせて置いては不可ません。幼兒を無理に坐らせることは極めて惡くあります。

(二) 學校時代は袴を着けさせ、出來得べくば靴を穿たしむべし。

(三) 眠るときは十分に脚を伸ばすべし。

(四) 運動を能くせしむべし。

(五) 歩行の時なるべく足を外に向ふ樣に心掛けさすべし。

内輪足になるのは、七八歳から十六七歳の頃までゞすから、此の間に善い習慣を着けることが肝要です。中年の方でも平素心掛けて居れば幾分か矯正することが出來ます。





女性の姙孕力（二）

大阪高等醫學校教授　田中祐吉



▲結婚後の一年間

動物は單に一回の交接に由て、直ちに姙娠するものでありますが、人間では此の如きことは極めて稀有のことで、新婚の夜に於て直ちに姙娠するが如きことは殆ど破格と謂つて差支はありません。

キッシュが五百五十六人の婦女に就き、結婚後第一回の分娩をなしたる迄の時日を調査したる成績に依れば

十ケ月迄	百五十六人
十一ケ月乃至十五ケ月	百九十九人
十六ケ月乃至二年	百十五人
二年乃至三年	六十人
三年以上	二十六人

又ダンカンが英國にて調査した所では、結婚後より初產までの時日は、平均十七ケ月なりと云ひ、アンセルは十六ケ月、オヱレンは十四ケ月、ホハイトヘッドは十一ケ月半なりと云つて居ります。此等の統計的調査を見れば、如何に結婚後若干の時日を經て初めて姙娠する者の多きかを知ることが出來ます。又サッドラの說に依れば平均女子の四分の三は、結婚後一年を經て始めて姙娠すと云てゐます。之に關するアンセルの統計は、大に吾人の參考の資料になりますから左に之を掲載してみませう。

結婚後經過したる時日	初產の見數總計
一年	三千百九十五人
二年	二千一百六十三人
三年	四百二十一人
四年	百三十七人
五年	六十九人

六年	二十六人
七年	二十一人
八年	十一人
九年	七人
十年	七人
十一年	五人
十二年	四人
十三年	三人
十四年	二人

是に由て之を觀れば、結婚せる婦人の多數は婚後一ヶ年中に分娩するものなることが明白であります。

▲第二次よりの分娩

分娩後次回の分娩をなす迄には平均幾許の間歇時日を要するかと云ふにダンカンは十八ヶ月乃至二十四ヶ月、ゲーレルトは二十四ヶ月乃至二十六ヶ月と云つて居ります。然し生兒の直ちに死亡した場合には、十六ヶ月乃至十八ヶ月にして再び分娩するとのことであります。是れは必竟授乳せざる爲めでありまして、即ち授乳期間は月經の尙ほ停止し姙娠機能の缺如してゐるからであります。されば、生兒を擧げても自ら之に授乳せずして、乳母に託するが如き女子に在りては、再び速かに姙娠分娩する道理で、貴婦人社會に於て、一年中に二回姙娠するが如き人のありますのは、實に這般の關係に由るのであります。之に反して授乳期を故意に延長する者に在ては、次回の姙娠は自然に遲くなります。

▲女子の年齡と姙孕力

女子の結婚年齡は其姙孕力に影響を及ぼすもので、二十歲以前に結婚したものは、二十歲より二十四歲次までに結婚した者よりも姙娠すると遲く、而して二十歲より二十四歲までの內に結婚したものは、甚だ速に姙孕するものであります。併し二十四歲以後よりは漸次その姙孕力が減少して參ります。今キッシュが五百五十六人の婦人に就て結婚後初產までの時日を調査した統計表を左に揭げてみませう。

	十ヶ月内	十五ヶ月内	二年内	三年
十五歲乃至十九歲にして結婚したる女子	三十六人	五十三人	四十六人	十八人

二十歳乃至二十五歳にして結婚したる女子	九十八人	百十三人	五十六人	三十二人
二十六歳乃至三十二歳にして結婚したる女子	十八人	三十人	十二人	九人
三十三歳以上にて結婚したる女子	四人	三人	一人	一人

ホワイトヘッド及びプフハンキユッヒ二氏の統計も前者と略類似の成績をあらはして居ります。即ち十五歳乃至二十歳にて結婚したる七百人の女子中二年以内に子を生みたるものは唯三百〇六人に過ぎざるも、二十歳乃至二十五歳の間に結婚したる千八百三十五人の女子に於ては、二年間に分娩したるもの實に千六百六十一人の多數に達して居ります。ダンカンの百名の既婚婦に就て調査したる成績も殆ど之と同一の結果に達して居ります。

	結婚一年内に分娩したる者	二年以内に分娩したる者
十五歳乃至二十歳	一三、七一	四三、七〇
二十歳乃至二十五歳	一八、四八	九〇、五一
二十五歳乃至三十歳	一三、四一	七五、八〇
三十歳乃至三十五歳	一一、四四	六二、九三
三十五歳乃至四十歳	九、二七	四〇、九七

以上掲載した二三の統計に徴すれば、女子の姙孕するてと最も早き年齢は實に二十歳より二十五歳の間であります。

▲男子の年齢との關係

これまでは單に女子のみに就て觀察しましたが、是より以下は男子との關係上、女性姙孕力の强弱に關する統計を掲げてみようと思ひます。キヨレシーは夫妻年齢の姙娠に及ぼす影響を調査して左の如き統計を得ました。

夫の年齢	妻の年齢 二十五歳	三十歳	三十五歳
二十五乃至二十九歳	三五、六%	二五、　%	二一、二%
三十乃至三十四歳	三一、二%	二三、六%	一九、九%
三十五乃至三十九歳	二七、五%	二一、八%	一九、四%
四十乃至四十四歳	—	一六、七%	一四%
四十五乃至四十九歳	—	一四、四%	一〇、九%
五十乃至五十四歳	—	—	一〇、九%

妻の年齢	夫の年齢 二十五歳	三十五歳	四十五歳	五十五歳
二十歳以下	四九、一%	—	—	—
二十乃至二十四歳	四三%	三一、三%	一六%	—
二十五乃至二十九歳	三〇、八%	二七、三%	一八、五%	—
三十乃至三十四歳	三三、五%	二三、七%	一四、四%	八、一%
三十五乃至三十九歳	—	一八、九%	一一、八%	六、七%
四十乃至四十四歳	—	六、六%	六、一%	三%

如上の統計表に就て之を觀れば、十八歳の女子と二十五歳の男子との間には妊娠すること最も多きことが明であります。而してキヨレシーは此統計表の示す所に由て左の如く論定致しました。

妊孕力の最大限を得んが爲めには、十八歳乃至二十歳の女子は、七歳年長の男子を選擇し、二十五歳の女子は三歳年長の男子を選擇すべし。又二十九歳の女子は同年の男子と結婚するに由て最大の妊孕性を得べく、三十歳以後の女子は自己よりも年若き男子と結婚すべし。之に反して男子は自己より年少の女子と結婚するに由て其の妊孕力を大ならしむるを得べし。

十八歳乃至二十歳の女子、二十四歳乃至二十六歳、(時としては二十九歳まで)の男子との結婚は妊孕するに最も恰好なり。

▲豐年には出產多き理由

是れより一歩を進めて、女性の妊孕力に對して影響を及ぼす所の種々の要件を說いてみましよう。先づ第一に擧ぐべきものは、身體の營養的關係であります。妊孕力が全身の營養に關係のあることは既に動物界に於ても認めらるゝ所で、ダーウインの實驗をしました如く、多量の營養物を供給せらるゝ家畜動物は、野生動物よりも屢々妊娠するものであります。例へば野生の兎は每年四回妊娠して四頭乃至八頭の兒を生むに過ぎませぬが、家畜の兎は一ヶ年に六七回も妊娠し四頭乃至十一頭の兒を生み、又野生の鴨は每年五乃至十個の卵を生めども、家畜の鴨は八十乃至百個の卵を生みます。人間に於ても其の妊孕力が營養に關係のあることは豐年の時には、小兒の生るゝこと多き統計上の事實に徵しても明かであります。マルサスが夙に人口論に於て說きました如く、食物の收穫增加して營養の良好となれば、人口增加し、之に反する時は、人口減少することは殆ど動かすべからざる的確の事實であります。南亞弗利加の東方に棲める[illegible]族の婦人が、妊娠することの多いのは、夥多の家畜を有して榮養よろしきに因るべく、之に反して「ホッテントット」婦人の三人より以上の子を生む者稀なるは、一般に貧窮にて營養の惡きに因るのであります。(つゞく)



つばき



酢漿草の花

佐々木好母

眼の前は只紅の花が夢の中の樣に咲き亂れて居た。疲れ切つた蝶の樣に其花の蔭に身を投じては苦しげな夢に魘されて計り居た。

酢漿草のオレンヂ色の小さな蕾を持つたのを求めて歸つたのは、十一月の中頃郊外の家に移つてから一週間計りの後であつた。

水氣を持た三葉の酢漿草は溫室に育てられたので、春の野邊にふと私達が見出すやうなものよりも大きく其叢生の葉も、蕾もいかにふくよかであつたらう。

幾日經つても、蕾は只蕾の儘で開かうともしなかつた。唯酢漿草は夕となれば規則正しく頸垂れて其の三葉をひーと葉柄にくつつけて閉ぢて睡り、翌朝戸の隙間から心から懷しい樣な太陽の光りが這ひ入る頃には旣に、物思に倦んじたかよわい少女が、何か新しい望みをでも得たかの樣に、頭を上げて豐かに呼吸して居た。

暖い溫室から急に日當りの惡るい室の卓上に移された酢漿草の蕾は、十二月朝星が凍えて、筑波の山が寒い雲に包まれて見えなくなつた頃には、幾度も萎れに萎れて、又更に新たな花柄の上にはオレンヂ色のふくらみが見えて居た。

深い睡りに入つて居る酢漿草を、夜密に取上げては幾度熱い接吻を與へたらう。草花に對する心は時とし

ては、殆ど狂せむ計りにも考へられた。酢漿草はそれからと云ふもの、晝夜私の心を占めて居た。花を抱いては幾度も思つた。火の樣に燃やされて居たら若い私の氣分も、幾度この萎むで行く花の樣に、蕾のまゝに萎んでしまつたらう。火の樣に燃えては居たものゝ、何時でも其れを消さうとする氷の樣に冷かなものが、其上に注がれて居たのである。

　あの女の心にも萎れ行く花が、咲きおふせずに其まゝになつて、しまつたのではあるまいか。

　何日か彼の家を訪問した日の夜、女が禮拜堂で兩親の傍に掛けようとして、二つの瞳が落ち合つた時、其顏は宛然火の樣に赤く、やがてまた土の樣になつたではないか、其時にはもう女は異國に賣られ行く奴隷の樣に目匿しされて……恐ろしい運命の船に積まれて……遠くへ送らるゝ樣になつて居たのだ。

　一年の後會つた時には、萎るゝ花の樣に衰へて居た。亡び行く若い日を吊ふために、すべてを忘れて、私は十二月の末の冷い霜を踏むで、灰色の山の幾つも幾つも重つた高原を彷徨した。石を包むだ霜を嘗めながら、何の樣に叛き行く事々、及人々、又若やかさを呪ひ悲しんだろう。其時も私の心を離れないものは彼の一つの雜草であつた。

只遣瀨なさに壓せられて再都外れの家へ歸つた日には、酢漿草は氷の樣に凍てた鉢の上に崩れて、萎れて、死んでしまつて居た。

　はら〱と私の眼からは熱した涙がこぼれた。ふと路伴れになつた旅人を家に招じた。其旅人は主人の留守に頓死してしまつた。

　ふと何の氣なしに求めて來た酢漿草は哀れにも、此旅人の樣に、すべての草の萠え出づる……彼の柔かな春の膚ざはりにも觸れずに萎れかへつて、オレンヂ色の蕾も見えなくなつた。……

　一株の酢漿草にも、亡び行く若さに思ひ惱むで居る此の私の運命が遇せられて居るのではあるまいか……



京都の町

廣江曉子

落葉一しきり、禁制の札立てる御所の御門に、雨と降りかゝる、塵一すぢ犯すをゆるさぬ甃を眞黄に埋めて震ひ立つた公孫樹の姿は今更に大きく高く仰がれた松の間の落葉樹を次ぎ／＼に搖がして風吹き過ぎし後なほひら／＼と開かれた扉に柱に、黄金の小扇は舞ひ落ちる、地の色も見えぬ程に降りしいた落葉を踏んで、靜に二人連の老女が行く。

古いやゝ大柄なねずみ綸子の被布姿優に、小さな五つ紋が忍ばしい昔を語る、眞白な切髪の一絲みだれぬ淸らかさ、御所侍か公家の家族の果てなのだらう、かなり年老ふ迄も紅指す事を忘れざりし口元の女らしき細い體にゆつたりとまとふた被布の肩の邊りが昔めかしい匂ひをこめて、やわらかな老の眼の何處やらに、權威におごつた昔の影をとゞめて居る。

やゝ厚めなふきを重らかに重ねて、老いてなほ取なしのはで／＼しい、しかも靜かな裾さばき。

私はふと、一條あたりのがらんとした廣い屋敷の中に、昔數寄をこらした庭を落葉の埋むに任せて、貧しいたつきの代の助けに綴れ錦を織るときいた彼の人々の哀な現在を思ひ浮べた、榮えし物のうらぶれし傷ましさ、しかしそこに見いづる靜けさと、衰頽の香はなつかしい物である。

鎗をつかせて駕のまはりを多くの從者に護らせてとよく彼の人々の語り草にする烏丸や四條通や、その他の町筋も年々に擴張されて電柱の林立する巷となり、暗い奥床しい軒端は容赦なく崩され行く、紅屋の門の明るくなる恨めしさ、高瀨川は半ば埋められて岸の柳は多く切られてしまつた、柳櫻の京の夢は瞬一瞬に崩されて行く、朽ち行く香ひ、崩るゝひゞき、若き胸も傷むに、有明や籠行燈の暗い追憶に生きたる哀な人々よ、薄日に照らされたその後姿を、私はしみ／＼と見送つた。

寺多き京の町は鐘の音に明ける、山より野より森よりはた寂しい横町より、重いひゞきを傳へて、曉の空氣は尊く搖れる。

顏も映りさうに拭きならされた栗色の塗格子の軒深ふ立ちならぶ室町あたり、大人しげな丁稚のはうき持つ手も赤らむ霜月の朝、さめた計りの靜な町筋に、花や番茶いりまへんか……

あざやかな聲が流れる、やがて朝霧の中から露たわわな黄菊白菊を花笈重げにいたゞいて、白河の花賣女が現はれた、手ぬぐひの下から二筋三筋黒髪のこぼれかゝつた匂はしさ、丸ぐけの薄紅のたすきが、黒い着物の背にはへて歩く度に絹絲の房がゆれる、三幅前垂のきりつとしまつた腰のあたり、流しゆく美くしい聲に栗色の格子の中の障子があつて、面だけをあらはした細面のきやしやな高髷の人が格子の中から花を買ふ大きに、やう買ふておくれやした――下した花笈を器用に頂いて、又流して朝霧の中にかくれた、御店風な人の往來の、やう〳〵急がしくなりゆく頃、南禪寺や相國寺の托鉢僧が五六人づゝ群をなして、軒端〳〵に經文の聲を發してゆく。

晝下りの中京は物の底に沈んだ樣に靜だ。

かーん、かーん、と單調な鉦の音と共にしんとした町角を曲つて空也上人が現はれる、大きな笠に顏はかくれて墨染の衣に紅い袈裟、小さな瓢を幾つとなく背中の紅い紐に結びつけたこの不思議な裝の僧はゆるやかな低調な歌念佛の聲に、深い軒端々々をうかゞひつつ、女中のさしだす報捨のおひねりをうけて行く低い聲、ゆるやかな歩み、單調な物うげな鉦の音。中京の日はやゝ長い。

暮れ初むる出町の橋のあわたゞしさ、馬が行く、車をつけた牛が行く、空になつた籠を荷ふて青物賣の女が行く、買物の大きな風呂敷包みを頂いて大原女が懷手あたゝか氣に、これは又ゆつたりと欄干にそふて歩いて行く。その後から四五人の勞働者が、聲高に話しつゝついて行くと見る間に追ひぬいた、何處かの村長らしい紬の羽織の人と、白衣に黒の袴、その上にやゝ丈の短い古びた黒紋付を羽織つた神官と並んで小きざみに運び行く足元の白足袋が薄暮の地上に寒さうな行くのも〳〵追はるゝ樣に東をさして渡りつくすと、岸の柳の蔭暗う、まばらな朽ちかゝつた人家の窓に淡く燈火の影がさす。

大原の人、八瀬の人、鞍馬の人、松が崎の人、明るい日の中に京の方へと送つた人々を、又くらい村々里に送りかへして、橋は長々とかゝつてゐる、近く高野に、上賀茂に別るゝ川をしきつて浮島の樣なたゞすの森が、白く光る水の間に落葉の色も見えず黑みゆく、明暮あわたゞしい送迎に馴れて町はづれの定めないはかない心持。

晩秋の暮早き何時迄も遊びの群を解きかぬる子供らの、橋詰の種屋の門あたりに歌ふのを聞けば

お春さん何をする行燈のかげでなあ……
可愛い男の帶くける……
帶をくけるなら眞綿を入れてなあ、紅い絹の糸で帶くける、
てりやどんく／＼



京の京の大佛さんは天火で燒けてなあ——
三十三間堂がやけのこつた
あゝやどんく／＼
てりやどんく／＼

母に呼ばれた子の一人が、幽靈やあ——と、けたゝましい聲を上げてかけ出すと、丸い輪は一時にとけて等しくかけだすかと思へば四五間もゆかぬ中に

いんでこう大文字
大文字がともつた

長く曳く歌の聲は次第に暗い軒端へと別れて行く。

斯くて山に近い舊い都會は、暗く寂しい夜の下に眠つて行く。

聞覧一口浄瑠璃見立角力

大關　そりや聞へませぬ傳兵衛さん
關脇　回向しよとておすがたを
小結　江戸長崎やくにぐへ
前頭　この垣一重がくろがねの
前頭　すしや娘がほれらりよか
前頭　みちはかわらぬ五條坂
前頭　太市はかわゆふないかいのう
前頭　首みるやくは松王丸

行　かんじんのねる時ははなれぐ
　　夕がほ棚のこなたより
司　千年萬年もかわらぬ契と

大關　軍のかど出にくれぐも
關脇　勘平さんは三十に
小結　六角堂へお百度も
前頭　夕べの風呂の上り場で
前頭　あいに北やら南やら
前頭　岸野の里へはもう一里
前頭　道理できつねの子ぢやものと
前頭　仕おきの場所は七條河原

前 あと見送つて政岡が
同 背山の方には大判事清澄
同 京の六條のすゞやまち
同 それがし佐々木になりかはり
同 わが身の瀬川に身をなげて
同 あまたの女中が打ちよつて
同 ひと年宇治の螢狩
同 玉造に身をかくす阿波の十郎兵衛
同 去年の秋のわづらひに
同 そりやこそ泣いたわとつてんて
同 らん丸殿もう何時でござりませう
同 われが兄の友市じやわやい
同 鐵ぼう雨のしだゞてん

同 花の盛りのあつもりは
同 あほひ下坂ずんときれます
同 赤へき山のふもとにて
同 はゞかりありやめうがなや
同 いまうちしかゝ鐵ぽう
同 美くしう生れついたるあの顔を
同 あとはこい茶や梅やしる
同 ゑんりよゑしやくもあらくれ男
同 義理ある弟大事の夫ト
同 なさけを知る舟子ども
同 きつね川をひだりへとり

世話人
一字千金二千金
魚心ありて水ごころ
こりや聞き所じやおゝ
石さん
出家さむらひ諸商人

頭取
一合とつてもさむらひの
紅葉のあるに雪がふる
星の光をともし火と
釣燈籠のあかしをてらし

勧進元
金閣寺はいけんあらば

差添人
倅はお役にたつたわやい

前 かわいや金吾は深手の別れ
同 ゑんやはん官閉居によつて
同 子はやすかたのやすからぬ
同 折りから比叡の山おろし
同 わたしがいもふとこの津の國へ
同 つき添ふわたしはをなごの身
同 けさ煮賣屋で小萩がさた
同 早野勘平在宿しめさるか
同 長者のささげし萬燈より
同 駒を早めて追つかけ來り
同 また立ちかへる初右衛門
同 入鹿を亡すてだての一ッ
同 つゞみのしらべ太鼓の音

同 めぐりあはぬちからぐさ
同 あいたわいな八郎兵衛さん
同 あきしの外山生駒山
同 顔見てなんところされよ
同 あばらやなれど平次が住宅
同 かげさへ見えぬ目なし鳥
同 鹿やうさぎの命をとり
同 みかたはうすぎのあやにしき
同 日にはなみだの玉手ばこ
同 じん五常六ッからむ
同 これでも色気があるかへ

世話人
柳馬場押小路
おつしやりますなお梶さん
か、さんの名はお弓と申します
鴫のはぎみじかしといへど

和田信次郎氏所藏



終の夢（つゞき）

はやぶさ

毎日のやうに、彼女が玄關の壁の蔭にすはつて、沈んだ瞳を投げるところ、雨にさらされてペンキの色もわからないやうな、さゝやかな門の戸の下には、美しい苔が生えて居りました。紙にうつしておかうと思つてまだうつし得ぬ彼の日の記憶は、其のみどりの色から一幅の畫のやうに繰りひろげられるのであります。

今年の二月の末、畫の人と近ごろその親しい人になつたりよ子さんと五番町のお濠端を歩いた時、永かりし暗きやすらひよりさめた彼女の胸はたゞ顫へてやみませんでした。彼女とりよ子さんとの間は、はじめて女學校の空氣に觸れた一年の一學期にいつしよに組長になつたといふ忘られぬおもひではあるけれど、今まで二人の歩む平行線は相背く弧を描いてきたのでした

靖國神社の櫻の蔭を歩みながら畫の人は云ふ。

『ねえりよ子さん、さつき理科室でどうなすつたの』

『え、あの時？　何でもないことなの、純江さんがねきれいな押花本にはさんでゐらしつたのを頂戴つて云つたら、いやつておつしやるんでせう、けんかしてとう〳〵私口の中へ入れてしまつたの』

『まあ』

畫の人はほゝゑみながら、りよ子さんてこんな人よと彼女にさゝやきました。いつも此の二人の愛人等を見ると、黒い顔に眞白な齒を出して妙な笑ひやうをするといふ、旗ふりの居る半藏門の角に立つて三人は九段の方からくる電車を幾臺か迎へては見送りました。

『ちよつとよく聞えてよ、この木のすきまから、いまベルがなつてる』

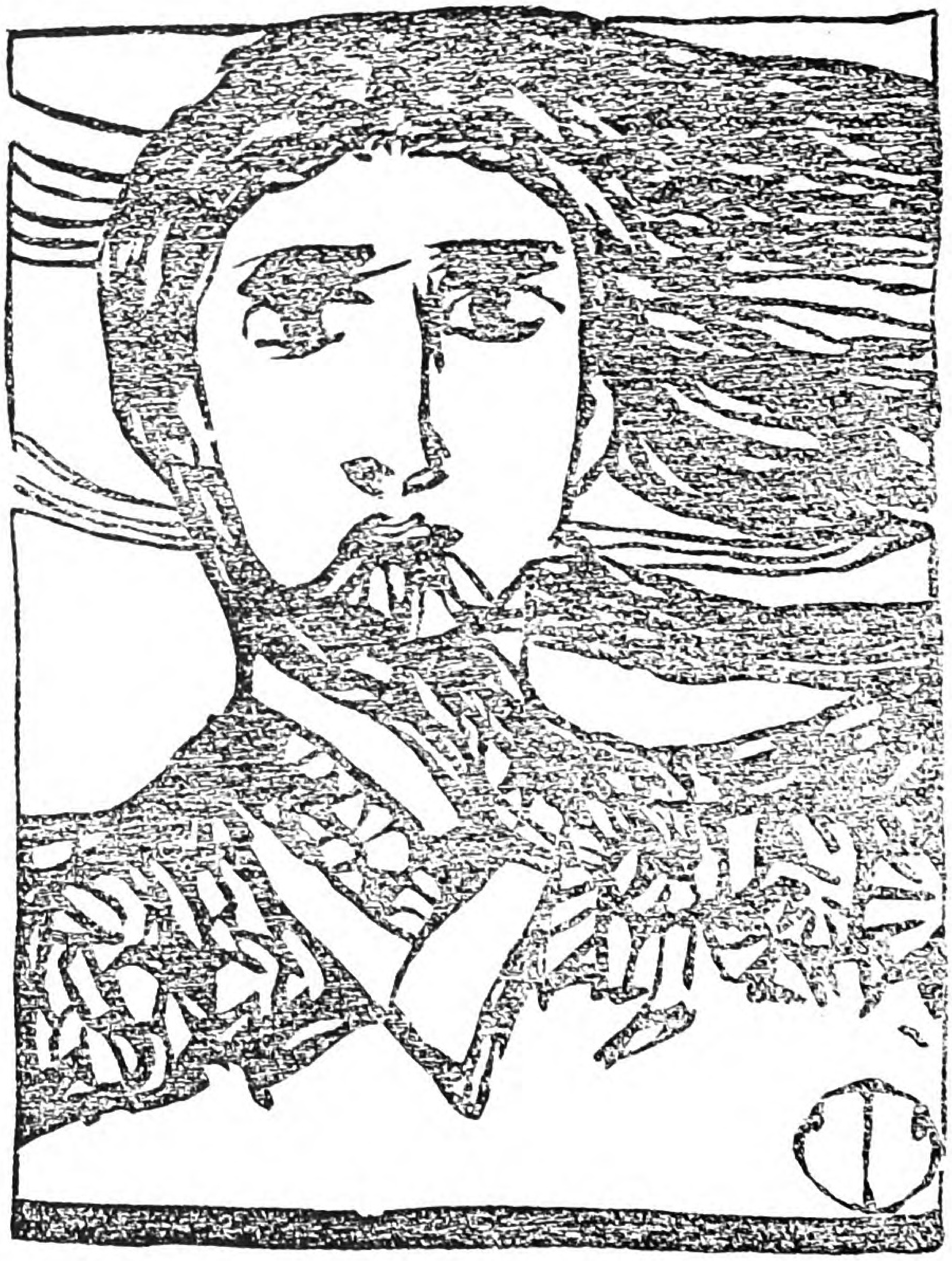
突然にりよ子さんが云ふ。

『もしもし、あのう……牛肉一斤』

電柱の蔭から半分のぞく、ひとみ。くちびる。

此の刹那に溢れる愛を、そのまゝ。あゝどうしやうけれど、彼女はそれを無遠慮に見まもることはできませんでした。見付の中からは長い影法師をひいて同じ

洋服姿の人が絶えず二三人づゝ出てきました。やがて別れ〴〵に巷の中にまぎれてゆく――それを『どの人もみんな雙生兒のやうね』と見送つてゐる晝の人の袖をひいて『まあ、あれてそきつと、ほんとの兄弟よ』いつもりよ子さんの唇は輕い無邪氣な調子にうごくのでした。指すお濠端の柳のかげを走つてくる黑塗りの馬車、栗毛の光澤の濡れて居るかと見える二つの馬はめいめいおそろひに脚の先と鼻のあたまに雪のやうな斑をもつてゐました、英國公使館の前の櫻並木はまだ冬枯れの枝を空にひろげて、赤みがゝつた灰色の雲の一團が低くたなびいてゐるやうに見える。馬車はその下の小徑をゆく。塀の角の一番はづれの木の根もとには、横通りから斜めに日のあたるせいか、もう小い若草が芽を出してゐました。



今しも傾く日を受けて、天鵞絨のやうに青く燃えてゐる。そこに微かにのこつてゐる轍のあと、彼女は波立つ水中の萍のやうな心の、とゝのへやうもなく、たゞぢつとその上に、あてなき瞳を投げかけてゐたのでした……。快い彈力のある肩から腕の肉づき、額の上にゆれる毛の艶も、薄地のリボンの肉色も、りよ子さんはどことなく明るい南歐の匂ひをもつてゐる人でありました。

內濠の木陰をゆく電車の中に、青山の街路に、淋しい原宿の生垣のまちを……否たとへ彩ある衣を脱ぎすてて曠野の眞中にひとりあつても、あの櫻いろのスキー

トな空氣は、不斷に美しい少女の身をめぐつて漂ふのであらう。寶石の光のきえず汚されぬやうに、……『りよ子さんは或る社會の女たちが、苦んで得やうとするものを生れつきもつてゐらつしやる』畫の人の觀る眼は常識的であります。彼女は乳色の眼鏡をかけてゐるのでした。電車で別れて家路近く監獄の原にまできた時、仄かな夕日に照らされた彼女の姿はどんなに哀れでありましたらう。しめつた艶の黒髮はふくらみもなく頸に垂れて、哲學者ぶつた、沈靜な、と多くの人に思はれてゐる彼女。これも彼女の刹那の眞でありました。

──家の門は西向きですから、それは大がい朝でした。向ふ側の小さい洋館から爽かな目覺めを奏で來るピアノのひゞき。それは目から吸はれる苔のみどりにまつはつて、彼女の胸──淸水を湛へた甕のやうなうつろの胸に充ちた淚をやるせなく、波立たせるのであります。毎日心足るらしくかうした幸福な職業に忠實な人を思へば、恥しさに、又、羨しさに、妹の貞子はまた、キイに觸れたくてたまらない指を机の上に、彼女の背中にマーチ彈く眞似をして、その手つきの上手なのを、自ら眺めてよろこびました。

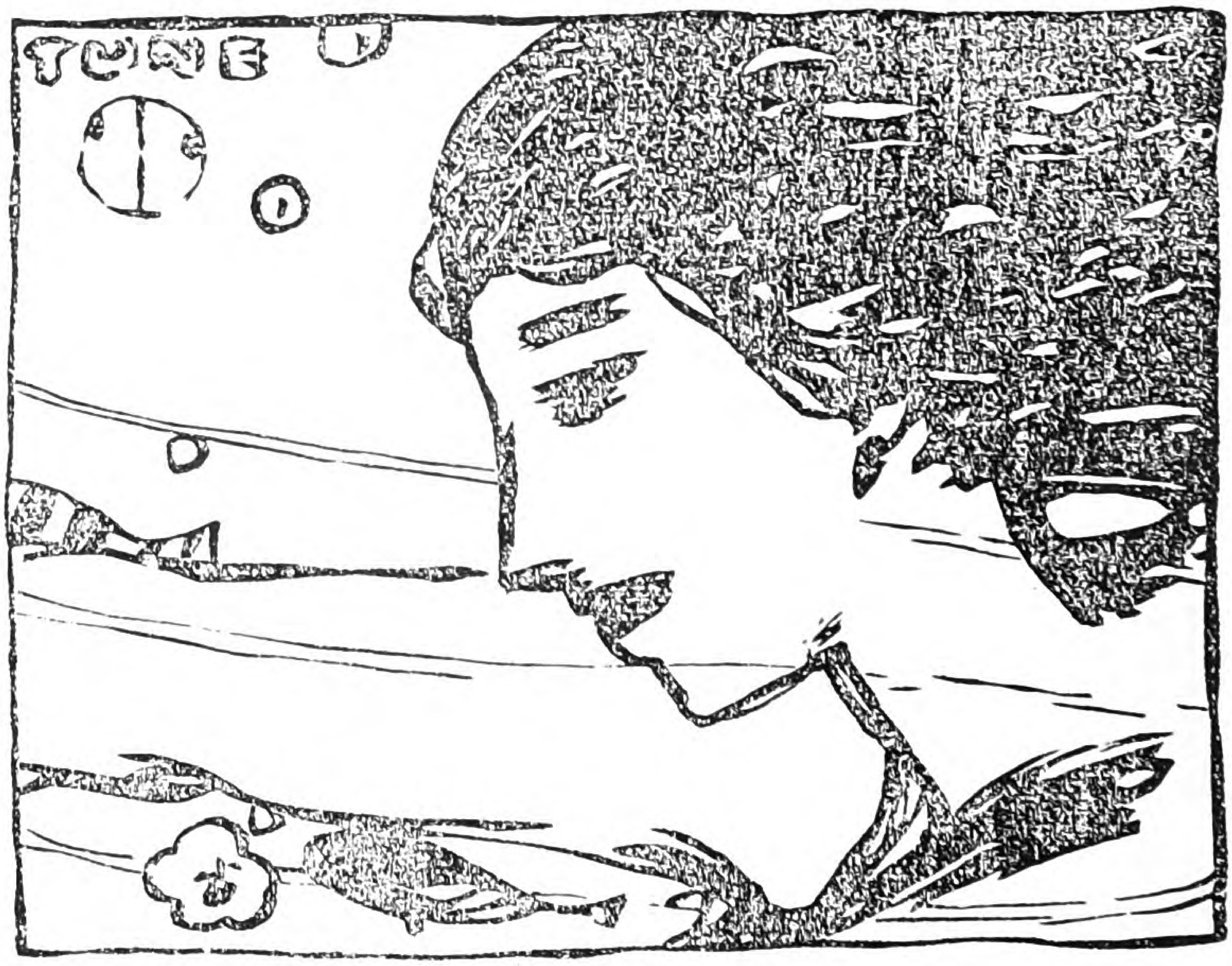
此の地球を包んでゐる大氣は永遠の過去よりいかに數限りもない生物の體内に吸はれては吐き出されたことでありませう、一日一日倦み照らす太陽が光と熱とを西の空にをさめる頃には、あらゆるひゞきにあらゆるうごめけるものに、濁され擾亂されつくしてゐるのであります、それが一度闇のきて去れば、朝となれば太古のまゝの靜けさと淸さとフレッシュな匂ひにみちて永劫の若さによみがへる。

朝ごとに緣側の戸をあけてから、暗い玄關にきて座ると彼女は老人じみた氣もちがしました。机の上は埃にざら〳〵してゐるし、物足りなさに疲れて寐た昨夜の心は、よい夢さへも得なかつたもの。

朝餉のお茶を焙じる時、焦げた一葉を嚙めば苦い香りは沁み入るやうに身をふるはせる。『寐覺めの舌』のやうな鋭い官能を常に持たばと思つてもみますけれど雜多な家の用をして居ると、心は腑甲斐なくそれに亂されていつか無意味な安逸にのがれようとしました。また彼女には他にも惡い癖がありました。食事の跡片づけに臺所にすはつて洗ひ桶の水を透いて柔かな光を反す陶器の淸げな色を見てゐると、あゝ美しいと思ひながらつひ知らず、熱い淚が落ちてくるのです。家の

破壊といふ感傷の時代だつたのにもよるけれど、自覺した服従の尊さを知らないでもないのに。あゝ尊き若き日の命をすべて人のために捧げて下婢となれる少女らよ。おまへは何といふ自我の強いことであらうかうきびしく自分を叱つた下から彼女はなほも、何をか求める目をしづかに伏せて居ることはできませんでした。

彼女の指の爪は細棹の三の絃おさへるにも傷くくらゐなのでお米がよく磨げません。一度糠を洗ひ落すと眞珠の顆のやうにすきとほつて見える。それがだん〳〵水を含んで白い色になつてくる時分、『まあお米がくすぐつたいつて云ひさうな音だ』と砕けるといけないから』と云つて母さんが代つて下さるのでした或る暑いお晝に、冷や奴するとて、彼女は絹漉しの笹



の雪をこわれぬやうに、しづかに、桶の水にうつしながらふとほゝゑみました。

重り合つたお豆腐は、高いところからしづかにくづれては沈むと、下に居るのはそつと避けるやうに動く、引力の強い空氣の中ではとても見られないふしぎなものゝふるまひ。目に見えぬデリケートな感覺の纖維が絶えず微動してゐるやうな水の世界。見てゐるうちに彼女の空想の領内では四角な白いものが、いつか踊り子の姿になつてしまひました。翻る裳や袂のやはらかさは舞ひ昇る天女の羽衣とも見えやう。

と、こんな幼い夢でさへもなほ彼女は人に語つて『何をくだらない』と云はれるのを惜しみました。貧しい〳〵生活から稀に拾ひ得た玉で

すもの。

日が落ちて、まだ星の眸の洩れない、しばらくのまの晴れか、曇りかわからなく濁つてみえる空には、彼女ハ胸につれ彈く仄かな音樂がありました。

なつかしき朦朧の姿、今ぞ見ゆる。
ともしびなき浴槽の、ひた〳〵と胸によする
暗き水のあたゝかみ。それにも似て、
悩しき額にほと觸るゝ
灰色の薄暮の空のくちびる。

その灰色がやがて暗い碧に澄んでくる時分、ゆあみすませて彼女は『お使ひがあるなら御一緒にゆきませう』貞子に帶しめてもらひながら云ひます。『押繪の姐様みたいね』『なぜそんなお婆さんくさい着物ばかりきるの』さうおつしやりながら、それでも外へ出かけたい氣になつたのかしらと、母さんは思つてゐらつしやるのです。

傳馬町に住んでた時分には、夜更けて目をさますと**裏通りの奥ざしきに寐てゐる彼女にまで、電車の地ひびき**がつたはりました。あゝ夜半の公園にひとりすゝり泣く噴水のしらべに魂吸はれたい。ねしづまつた街路に皎々と照るアーク燈の紫の光を胸に浴びたい。とあこがれる切な思ひに、男の装ひをしたら、尼となつたらば、など天井を仰ぎながら夢みたこともありましたつけ。（つゞく）

新刊紹介

○草あやめ　後藤宙外著

此頃評判ある春陽堂の現代文藝叢書の第五編で、宙外氏の短篇小説數篇を收めてある、體裁も小形で一寸外出などに携帶して行つて讀むには恰好の書だ（定價金二十五錢、東京春陽堂發兌）

○小羊　中村春雨著

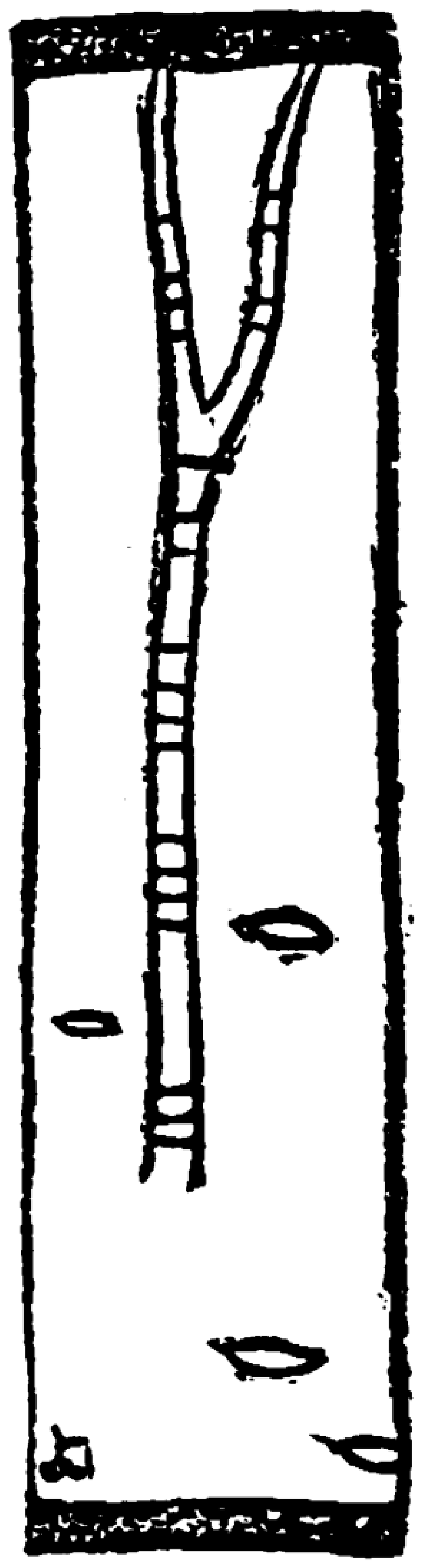
中村春雨氏が青年の時に作つた評判の作で、今回體裁を一新し、輕便な書物となつて發賣されることゝなつた、永く讀者を持つてゐる作であらう（定價金四十錢、大阪心齋橋筋興町、矢島誠進堂發兌）

○女子日用文　小野美智子著

手紙文の文範をあつめたもので、著者の作例と、古人の作例とを載せてある、此一冊で大抵な用事の手紙は書けるであらう、題は澤山にあるから便利だ、菊版一七四頁（定價金四十五錢、京橋南鍋町隆文館發兌）

○國民禮法講義　松崎[illegible]著

禮法は社會に一日も缺くべからず、本書は平生の坐作進退は勿論、待遇の際の禮法、冠婚葬祭の場合に心得て置くべき諸禮一切を集めて、趣味あるやうに説明をしてある。此種の書物古來より數多くあれど、昔のものはくた〳〵しく、今日のものは不親切の書多し、本書は眞面目に親切に能く分るやうに述べたれば、禮法の書物としては完全したものであらう識人の座右に備ふべき書物たることは疑はない（定價金六十五錢、京橋區南鍋町隆文館發兌）



路傍の人

白木いと子

ハッと思つて立どまつた私の眼に、後姿は街頭の柳がくれ遠ざかつて了つたけれど、仍且違つてた。さうではなかつた。

斷つた縁ならば何故忘れ得ない。追懐の苦しみは、悶えは、常に一條の黒い影を私の胸に投げて居る。

『是より十日の後漂泊の旅に上るべく候。こは志の端緒につきたるに候。上京もすべく候。御目にかゝりうるや否やは測られず候へども……』

捨てたる人にとの面をさげて　見えようぞ。われは人妻なり、しづかに目を閉ぢて其手紙は火に燻べたけれど、さすがに胸は騒がずにゐられなかつた。

朝に夕に若き人を街の中に見ることは多けれど、晝筆擱いて漂泊の旅に上つた一人を見出すことは難い。然し會つた處で今更何が云へよう。燃えた瞳を持つた昨日は早昔である。分身の誓ひも今の私にそれが何であらう。かくて人は遂に又路傍の人か。

お祖母さん子は三文安價いと云ふ。私は親の手によらないで育てられた、偏狹な心を持つ處女であつた。母の離縁、兄の放埒、幼い心にしみついた印象は男に對する憎惡となつた。華やぎの處女時代を暗さとつめたさの連續せる生活にあつた身には、父の內氣と、母の放縱な血とが流れてゐた。そして境遇の壓迫から享くる反動はやがて私を文學にひきつけて行つた。

『いまだ見ぬ姉の名呼びて夢に入る上野の山の花うつくしき』まだ覺えて居る。今は思出すさへもくるしいのに。

生れて十九年、心華ひらいて初めて私はふれなば煌くる人のまことを見た。

上野の櫻花はもう眞盛りだつた。丁度博覽會のあへたとき。始めて逢つたのは上野じやなかつたけれど。

靜かな清水谷公園の一と時、その時はじめて相見た二人に言葉はなかつた。土柔かな池のほとり、水の面に樹影搖いで、櫻の花片は曇つた日を白く散つた。

睫毛の長い涼しい眼には涙が見えた。けれども私は泣かなかつた。思ひしよりもおとなびた其姿に比べては餘りに姉らしからぬ自分の稚さをおもひながら。

人は私を姉とよび、私は彼を弟とよんだ。戀ではない。戀ではなかつた。戀と云はんはあまりに口惜しと思ふ。二人ともに夢を夢みる藝術の子の、心かつては影と伴ひて離れず、熱狂せる愛はわが短き生涯のうちの挿話として捨てはつべきものではなかつたけれど、けれど覺めては儚なし、それも既往の一夢である。

『よく逢へましたね、もう逢へないかもしれないと思つてゐました。此次はいつ逢へるでせう姉さん』

二度目にあつた上野の夜は不忍池畔のイルミネーションが龍宮城を見るかのやうに美しく闇に輝いてゐた暗い丘の柵に倚つた若い人はありあまる思ひを云ひつくせないとやうに眼をうるませて恁う云つた。

『さうね何時逢へるでせう……もつと近いと可いんだけれど——』

寂しくなつて消えるやうな思ひにかう答へた。思多き瞳と瞳を見交せしのみ手もとらずして別れた其夜が最後の會見であつた。

百二十里を遠く人は去つて再び相見ず、純なる姉弟をむつみ其れも僅かに三年の戲れにすぎなかつた。

越路へ、越路へ、縛められたる境遇から脱れようとしては安息の地を求めた私の心は、いつも恁う呼んでは彼の處へとはしつた。

『いらつしやい何時でも』。力ある言葉。わが憎める異性なることも彼の前には忘れはてゝゐたのである。

しめ〳〵と寒い小雨がふる。梅の花の香も冷い春淺い日、遂に儚い終局は來た。鉛筆の跡の淡い端書は若い人の胸をいかに亂したか。

『姉さん貴女はつよい。私はすべてを欺かれたとしか思へない。』

つよいのか。私は強いのか、今は何と思はれても可い。疑惑の眼の前に心をのゝき、うつゝなき白日の夢より覺めて、貞なるべき道をゆく妻の名を負へるをさとりし時、私はよわい女だつたのである。

もろくも敗れし愛よ、情よ。われから捨てし人に私はもう再び逢ふまい。

誓ひよ、まてとよ。かくて人は遂に路傍の人か。

柳が散る、柳が散る。初冬の夕日が街の片側を淡く照らして、わが胸をふく風のひやゝかさ。



一人の價値（三）

太田きし子

ともすると心にすこしの落付もなく、一日中針の持てぬ日が來る、南がはの往來に面した窓は玻璃戸なので、窓かけを上げると往來がすぐ目の下、そこに立つとまた坐る事を忘れる、指でポツ〳〵と玻璃の面をたたくと白秋氏の詩。

泣かまほしさにわれひとり
冷やき玻璃戸に手もあてつ、
まどの彼方にあか〳〵と沈む入日の野ぞ見ゆる。

をうたはずにはゐられない。

私は故國にゐるときから入日を見る事がすきであつた。いつもいつも白い高嶺のかなた、氷るやうに沈んでゆく夕日を見ては、あのいたゞきに立つたら海に落つる日を見る事ができるであらうか、地平線下に沒してゆくすがたを見たい、それはかり思つてゐた。東京といふては小石川にゐたころは、入日も日の出も見る事はできなかつた。何かの底に落ちこんでゐるやうで苦しかつた。

こゝへ來てはじめて『入日の眞紅』を見る事ができた。それは恰もピユーリタンのやうな、はやぶさと逢つてすぐ袂を別つた殘り惜しいわびしさを抱きながら一人大久保田圃を宿へ歸る途中、『牛屋の原』と俗に呼んでゐる芝原にさしかゝつた時、楓櫻の並木のあひに眞紅の波たゞよはして、くる〳〵と車輪の廻るやうに光りながら沈んでゆくところであつた。

私は久しぶりで詩を作りたいといふ事を考へた、が悲しいかな咽んでしまふぎり哀れな啞者であつた。あわたゞしく木に倚りかゝつたきり、流れ出る泪にまかせてゐた、何かわが胸を壓しつぶさうとしてゐるもの

がある事を知つた。神樣よ!!、と唯それだけ叫んだ事を忘れない。

この大きいちからの前に跪いて『眞實』といふ我が血と云はふ肉と云はふ、尊とい自己を投げ出しつくしてゐるこの姿、ねがはくばわが生涯の祈禱のまことであつてくれ。

宇宙のこゝろは神、私もそれを享けて來てゐるけれど、私にはまだほかに不透明なものを享けてゐる。

『父の血母の血』これである。

私はこの二ツを識つてゐるために叫喚を覺えた、祈禱を教へられた。

わが合掌してすゝり泣く時、全身の血が凝結するばかりになるとき、一葉の草のそよぎにも、つかれてとぶ事叶はぬ羽蟲の匍匐ふ姿にも、至善の神の支配を見出す事が出來る。

私はなぜ忘却をねがつたか、幼なき日の心を思ひ見よ、神はわれらに烙印を授けてある。

あの赤い日の入りを見て、地上のすべては沈默する

私は人間に斯の如きちからをもつてゐる人をもとめてやまぬのだけれど………。

私に絶對の權威を與ふるものは、宇宙のこゝろにかへる死ではあるまいか。

神樣よ、我がもとむる幸とは、宇宙の心にかへる事をおもふこゝろのひらめきのとき、

神さまよ!!　私は、く、る、し、い。

近みちするためにだらう、芝原には砥のやうな色の逕が一すぢ出來てゐる、泪の目の故か、何だらう?　人のうしろかげはぼんやりとして夢のやうに、だまつては消え去る、さびしいかげである。

悲しくもまたあはれなり冬の夜のいろりの下に燃えあがり燃え盡きにたる柴の火に耳傾けて夜霧たつ闇夜の空の寺の鐘、きゝつゝあれば過ぎし日のそこはかとなきものおもひやをらうかびぬ

喉ぶとの古鐘きけばその身こそうらやましけれ老らくの齢にもめげず、すこやかに、まめなる聲のいつもいつも佳音たへに深くして、おほどかなるは陣營の歩哨に立てる老兵の姿に似たり

ボドレール破鐘



初めて見たる

東京の印象

港の女

都會の裏の淋しさ

手を懐にして、宿の門まで出てきますと、地にはまろ肩の我が姿が黒く重さうに落ちて居ます。丁度黒縮緬のやう。

冷たさうな晩秋の空には蒼い星が囁いて居ます。都とはいへ、この邊は實に靜かでございます。私はじつと、星をみつめて居ました。

それでも矢張都です、遠くから私の心を誘ふ様な、物の音がきこえます。それは微かに――微かに

その空氣の波動を傳つて爪先下りの道を行きますと暗い道は、明るい本通りに出ました。

あゝあの物の響はこゝから起るのでした。

私は夢と現實との間を歩いて居るやうな心地なのであるいて居るといふ事は分つて居ましても折々注意を與へないと、都をあるいて居ることをわすれます。「神田の本通りをあるいて居るのだ」。幾度かから思ひつゝあたりを見まはしました。

蒼白いアーク燈の光の中を泳ぐ様にスースーと行く男女、都の人は何故かしら話もしないで、一人一人行く様です。そして若い人計り。

電車のレールは、氣味のわるい様に光つて居ました。そのレールの上を、大きな響をたてゝ、電車は東西南北自由に、而も規律正しく走つて行き、走つて來ます。

走つて來たかとおもふと、箱の中から吐き出す様に黒い一群の人を殘して、手早く待つて居る人をのせまして、去つてしまひます。

おろされた人は思ひ思ひ足早にその人群に交つてしまひまして、存在がわからない様になります。

私は光の中を行く人を、一々たしかめたいと思ひました。けれどこの邊では駄目。

派手やかな紫の羽織を少女と思つてゐれば、人妻であつたり、子の母と呼ばるゝ人であつたり、都の女を判別しかねます。

美しく輝く灯の影を皆、處女のやうに裝つて行くの

ですもの、田舎の様に正直じやありませぬ。

男にも僞はあらう、けれども學生らしき人、生徒らしき人、官吏らしき人、會社員らしき人、晝の營の勞をいやすべく暗い寮舎や家から出て來て居るらしい。私もこんな人の群に入つて押されつゝ目的もなく歩きました。

自分の店に人を引きつけようと力の限り飾りたてた店の前を無意味に歩いて、露店の前へぼんやりと止りました、私のやうな呑氣者が、一團をなして居るやうに思ひましたから。

あゝ響よ——響。強烈な響。私の肉と魂とに刻み入れられるやうな響！

光がほしい。　強度なその光が！瞳も心も幻惑されるやうな強い光！

夢の樣な光の中を電車が辷つて行く。

Ｋさんらしい人をも見ませんでした。

Ｋさんの顏も聲も姿も知らないのだけれど………

強い光は何處？　強い響は何處？　Ｋさんは？

明日も三つをたづねて知らぬ都のもつともつと賑かな街を行かう。きつと一人で——。

顏色のよくない人の群をかきわけ、かきわけして、ハッと吐息したとき、前の樣な影が落ちて居ました。それは濃いもので何かを意味するやうに思はれてなりませんでした。

都つてこんな所なんでせうか。

華かな光の後に暗黒が横つて居ます。雜沓の陰には深い深い沈默が宿つて居ます。

都はにぎやかで淋しいです、こんな事を考へて宿に恐しいものに追はれるやうにかへりました。

この夜は淋しい印象の一つでした。

星よ！燈火

「先生こゝは何といふ町でございますの？」。Ｍ先生に伺ふと、「こゝは春日町ですよ」。と仰る。春日町！春日町!!!忘れないやうにと口の中で幾度かくりかへしました。

今日は宿へかへるのが大そうおそくなりました。

夕暗と私とを殘して都の秋の日はとつぷりくれました。巨大な怪物のごとくにも蹲る砲兵工廠の建物を見て、何をする所なのかしら。砲兵工廠！私はこの建物に對して何等知る所はありませんでした。

せつせつ歩いて行く。先生にも友にも訪ねようとも

思ひません。たゞ一人で想像して見ました。
灰色の塵にまみれた煉瓦塀に沿ふて、下りて行く。
我息をかすかにきゝつゝ。霧にへだてられたわが足から起る心もとなき足音をきゝつゝ。
柔かい夕暗の壓迫を感じながら、私の情緒は強いあるものを求めて居ました。
生れてはじめて通る路、都だ!!!かう思ひますと一人微笑を禁じえませぬ。私はじつと、霧の海の廣きたゞ中を虚空な心を滿足せしむるに價あるものゝ存在する事を信じてあるきました。
突如、怪物と思つた大建築物より吐き出された黒き一群の人息あら〳〵しく空氣をふるはせ、疲勞にないた姿は瞬間に暗に消えて、しまひます。空氣はやゝあつて和みました。夢の樣な人は絶えずゆきゝして居ます。
こんな霧の夜はともすると、一人で行くやうな感がするもので、先生や友達とはなれて、自分のみあるいて居ると考へて居ました。
雲をふむやうな心地でいひえぬ不安と誇とを覺えました。
青い火花を折々放ちつゝ、暗憺たる霧の中を進行する電車、その心地のよい光と響とが私に近づいて來るときに私の情緒はふるひました。
都だもの!
いつか空には星がかゞやいて居ました。
憧憬兒!旅の子が都の地に立つて仰いだその光の、如何にうつくしく、なつかしいものだつたでせう。
全く故郷ある事を忘却して居ました。あゝ星が!星が!ふるやうにかゞやいて居ます。
あゝ脚下には幾千萬の燈火のかゞやき。私はその光を見て思はず涙をおとしました。それは熱いなみだを。
暗の濤に沈んだ、大都府の燈火を無言でながめましたとき、「あゝ大都府の復活の光なのだ。あの強い光に夜の活動がはじまるのだ」と思つてたまらなくなりましたの。
坂の上にたつてぢつと眺めました。
今宵の私の心を、たれか、知つてくれる人はありませうか。故郷の夜、後の丘に立つて死んだやうな町をみおろしたとき、かゝる夜をどんなに欲したでせう。
あゝ都の空にかゞやく星よ!
あゝ都の夜にかゞやく千萬の燈火よ!

さらば都よ

午後十時、小雨がふる。——霧の樣な小雨が。

かへりたくない。いつまでも都に居たい。私の心が飽きるまで都に置いて下さい。

たゞ故もなく、親牛に從ふて野に行く小牛の如く、待合の宿をでました。

紫のショールに顏をうづめて居ましたけれど、頬にはホロ／＼と涙がおちました。

何故だらう。暗の中に小雨の聲はきこえつゝ、空には若い星が光つて居ます。

星の瞳も稍ぬれて居ました。私の瞳もうるほふて居ました。心もしつとりと濕つて居ました。

かへりたくない。といふ情緒にそむいて、かへらうとする私はたえられません。

あゝ星もないて居るぢやありませんか。

私は漸々ぬすむ樣に、星を見ました。

泣きぬれた樣な若軸の街燈のかなしさ。暗い家からもれる灯の影がぬれた石疊の道にながれて。

私はかへるべく停車場へと急いで居ました。

何故もつと置いて下さらないのだらう。又來る日は

ありませぬ。よしやきましても、十代の私が何時の世にあくがれ多き胸を抱いて都をおとづれませう。

かへる私はどんなに、心細いか知れませぬ。

うす暗い待合室に黒い人の影をながめつゝ、三つ子のやうに無理をいふ情緒をすかしました。

けれど、先生は無理だと仰いませうけれど……

群衆に押し出されて、プラットホームにたちました。

汽車の室に、押し込まれるやうに乘りました。

私のやうな心持で居る人はありませうか。

この美しい華かな都を出てどこへ行く人なのかしら

灯の暗い黒い煤けた車室に急ぎ込む人を見ました。

私一人だつたらあきるまでこゝに居るものを。

私は狂氣のやうに。かへりたくない。かへりたくない。とジダンダを踏みました。

ほてつた頬にはホロ／＼と涙がおちます。

最後の喇叭の聲のやうに悲しい汽笛のひゞきが、胸に傳はると汽車は鐵路を辷りはじめました。

上半身を窓から出しました。

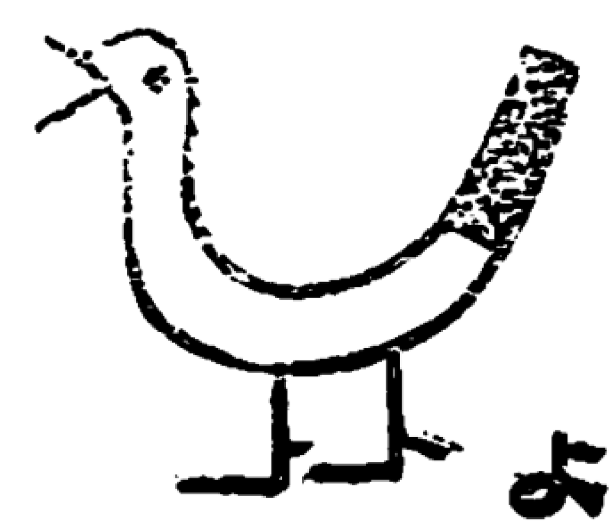
最後に見ゆる都の横顔のなつかしさ。若々しい。華かな汝の顔がどんなになつかしいか知れない。

汝は多血質の少女の樣だ。柔かい肌と鋭敏な感覺を

もつて居る。
この時眞にたへられませんでした。
燈火よ！響よ！なつかしいものは凡て遠つて行きます。一刻毎に。
遠ざかり行くなつかしいものを見送る心はどんなにくるしいかしれませぬ。
人皆は平氣で都を出て行きます。何故でせう。
あんな心にどうしてなれませう。
先生!!! 先生!!! かへりたくありません、ね先生!!!
泣き聲になつて先生にいひました。
「そうら品川だ。又卒業してくるさ」。先生はこんなつれなきお返事を下さいます。
私には十代といふ日も僅ですものを。
九段の夜に見た燈火や。ツーラインや。美しい瞳のKさんや、日毎にきいた電車のひゞきや。
先生なんかゝら御覧遊ばせば、無意味でせう。
一度若き子の心になり下さい。
別れるのがどんなにかなしいかわかりませぬ。もう今度都の旅に出る日は、きつと私の心から若さは奪はれてゐるでせう。
そうでございますものを、何故もつと置いて下さいませぬか。
暗は都の燈火を吸ひつくしました。
物のひゞきは空氣に波動をつたへてこなくなりました。都！都！
暗い暗い國へ消えて行つてしまつた。あゝ大分遠くはなれた。たゞ暗黒の方を見やつて絶望の吐息をしました。
窓の外面には月にかゞやく品川の海。
氷の如き月は冷やかに、沈默の海を見おろして、海は白く光つて居ます。
車室には、苦しさうな友の鼾さへきこえて、あたりの人は暗い電燈の光の中に蹲つて居ました。
あゝ遠くもはなれた事であるよ。
都よ！東都よ！お汝と相見るは、いつであらう。その日互に變りはてたのに驚きませう。
私は目をとぢて、十日に見た都を小さな胸に作ることゝしました。

* * * *

再び――暫く經つてから――窓から見た時には、もう大都會は深い〳〵闇の奥に消えて了つて、只ぼんやりとした薄明りが大空に映つてゐるばかりです。



さいきよさん

加藤白光

それは何でも私の十二三の頃だと思ふ。
秋の末　或る晩、私の家の二階へ近所の娘達が五六人集つて、「さいきよさん」をした。
二階といつても今はもう物置に使用つてある六疊で北と東に窓があるばかりの、床も何もない空つぽな室だつた。平常使用つてゐないのと、その頃は疊が敷いてあつたのと、二階で家とは沒交渉だといふ譯で「さいきよさん」をするには、極都合の好い場所である。それでとう〳〵此所で始めることになつた。
私は一體此樣なことが大好きな方で、迷想的な――ローマンティックなことが堪らなく好きだつた。それに加へて、唯一人きりの女の子なので、大抵のことは母が許してくれたし、その頃の友達といへば、小さくても十六七、――自分を守してくれる樣な人達ばかりなので、いろ〳〵と知らないことを敎へて貰ふことが非常に愉快であつた。
此樣な譯で「さいきよさん」をするに付いても、宿の心配もなく直に家と決定つて了つた。
從姉の友が三人これはよく知つてゐる、その他に近所の方が二人、それに私の知らない人が二人、その中の一人が「さいきよさん」になるのだと、從姉のよしゑさんが敎へてくれた。
私の好奇心は恐ろしく動いた。
そして話のあつた當日、あまり進まないらしい母にすがつて、燈火のつく頃を待ちわびた。夕飯を食べてゐる時からぽつ〳〵と來始めた、そして挨拶をして店座敷の隅でこそ〳〵話をしてゐたが、止んだと思つたらかう二階で始めるのだといふ。
やつとお茶を飲んで了ふと、よしゑさんが傍へ來て
「もうぢきなのよ、爲さん」と小聲でさゝやく。
「えゝ」と肯いて、
「いゝのねお母樣？」と小さな聲でいひ捨てたまゝこつそり茶の間から出ると、
よしゑさんは私の肩に手をかけて、
「口を噤いでいらつしやい」
「え、何故？」

「牛肉を召し食つたでせう、だからいけないの、匂ふからね」

「まあ！」私は何かしら面白くなつた。

「そしてね、二階へ被入つたら、決してお話ししちやあいけないことよ、屹度ですよ、宜いの？」

「えゝ、えゝ」と承知した樣にいつて、口を漱いで階段を上るのも、そつと息を殺した。

「さいきよさん」は最早始つてゐた。雨戸を皆閉めきつて、蠟燭の光りが茫と靑くまたゝいてゐる。地下室のやう。森としてゐる。皆何か唱へて――

私はよしゑさんの傍へすり寄つて、小さくなつて坐つた、北の眞中の雨



戸が二寸ばかり開いてゐて、そこを脊にして、目隠しをした人が一人坐つてゐるぢつとして……身じろぎもしないで……。人々はこの人の前に坐つてゐる默つて聞いてゐると、口々に「さいきよさん、さいきよねずみ」と唱へてゐる、それがでく沈んだ重々しい聲なのだ。身にしみわたるやうな……

私はぼんやりして了つた、――果しない野をさ迷ふやうな……全く無我なのだ。

何かいふ樣なので、はつと氣がつくと、よしゑさんが「あなたも仰しやいよ」といふ。

それから私も一心に「さいきよさん、さいき

よねずみ」とわからないけれども人の眞似をして、呪文のやうなものを唱へた。

眞中の人は以前のまゝである。

どうなるのだらうこの人は、正體もなくなるのだとは云ふけれども、……何故だらう、誰が其樣なことをさせるのだらう。あ、あ、何かあの開いた窓から入つてくるのぢやあなからうか？

そして、あの人にとりつくのだ。さうだらう。あの人はあのまゝ死ぬのではなからうか。死ぬ！――

私は此樣なことを考へ乍ら、開いてる窓を見たり、人々の顏を覗いたりしてゐた。

かれこれ一時間半も經つたらう。話し聲は私の前の人から聞える。

「如何したものでせう、最早たいてい宜い時刻ですけれども……」

「覗いてゐる物はないでせうね？」念をおす樣な不安のやうな聲をしてその隣りの人がかう續けた。

「別に……」階段の傍の人はいつてそれでもといふ樣子をして振りかへつた。私は急におそろしくなつて、

「これから如何なるの？」とよしゑさんの耳に袖をあてゝきいた。

「あの方が倒れて了ふのですよ」

あの方とは目隠しの人を指すのだ。

それから半時間もたつたらうか。中の目隠しの人は坐つたまゝうつ伏しにたふれた。

すると、皆はその傍へにじり寄つて、

「さいきよさん、さいきよさん、お出でゝ下さいましたか？」

「さいきよさん、さいきよさん」といふ。

すると！如何でせう、その人は首で來たといふ樣子をした。私は前の方へずり出て、どうすることかと見守つてゐた。

「さあ何誰かお聞きなさい」知らない人がいふ。

「あの、私は東の方へ行きたいのですけれど、行つてもよろしいでせうか？」

私の隣りの人が聞いた。何といふか、どんな樣子をするかと私は耳をかたむけ、目を見張つた。

「お出でなさい、よろしいのです」

俯伏したまゝ、普通の人の聲だつた。

「有難う厶います」と前の人はお禮をいつて、次の人に席をゆづつた。

かうして、交るぐ〳〵に色々の事を聞いて、私にもと

いつたけれども、私は止めて默つてゐた。
よく當ると皆口々にいつた。
「ではもう宜しいでせう皆樣」
初めの人――知らない人が世話人らしい口で、一同の答を求めるといふ樣子。
「よろしいでせう」と皆輕く辭儀をした。
「さあ、まあ御苦勞樣！お道さん〱……」
脊を叩く。
さいきよさんになつたのはお道さんといふ人なのだ
「お道さん、お道さん！」
あちからも、此方からも搖り起す。
「其處の窓をあけて……蠟燭を消して……」
「さ、お道さん！」
お道さんはこの時はもう、目隱しはしてゐなかつた。起きようともしない、ぐつたりとした儘である。
「何誰かお水を一杯」
霧を襟から横顏へかけて、叉脊をどし〱叩く、と「うーん」と氣絶した其のまゝの聲をして、お道さんは蘇生つたのだつた。
「御苦勞さまでした」と皆いつた。
私はその後を知らない。

下へきて机の前に坐つて、ぼんやりしてゐた時、とやく〱二階から下りてきた。
そして挨拶して出ていつた。その時、お道さんは、すぐれない顏色だつたので、母が心配して、すこし休んでいらつしやいと勸めたけれども、
「直によくなりますから」といつて歸つて了つた。
――翌日。從姉が代理だといつて禮に來たとき聞いたら、最早少しも平常と違ひはない、といつた。そしてあの人はいつも、さいきよさんになるのだとも話した
「どんなお娘です」と母がきくと、
「極内氣な方でしてね、どちらかといへば感情の強い人なのです。かういふ人でなくちやあいけないものですよ、あゝいふものは」
物好きな從姉は、度々の經驗から斷定を下してからいつた。
話しはこれだけ。併し私はその時その光景を想つてはいひ樣のない氣分になる。
私はそれが――さいきよさんが何だとも解釋をしたくはない。このおぼつかない……無智の人々が集つて一心に念ずる――これだけが、なつかしい、忘れられない、幼い折りのローマンス。

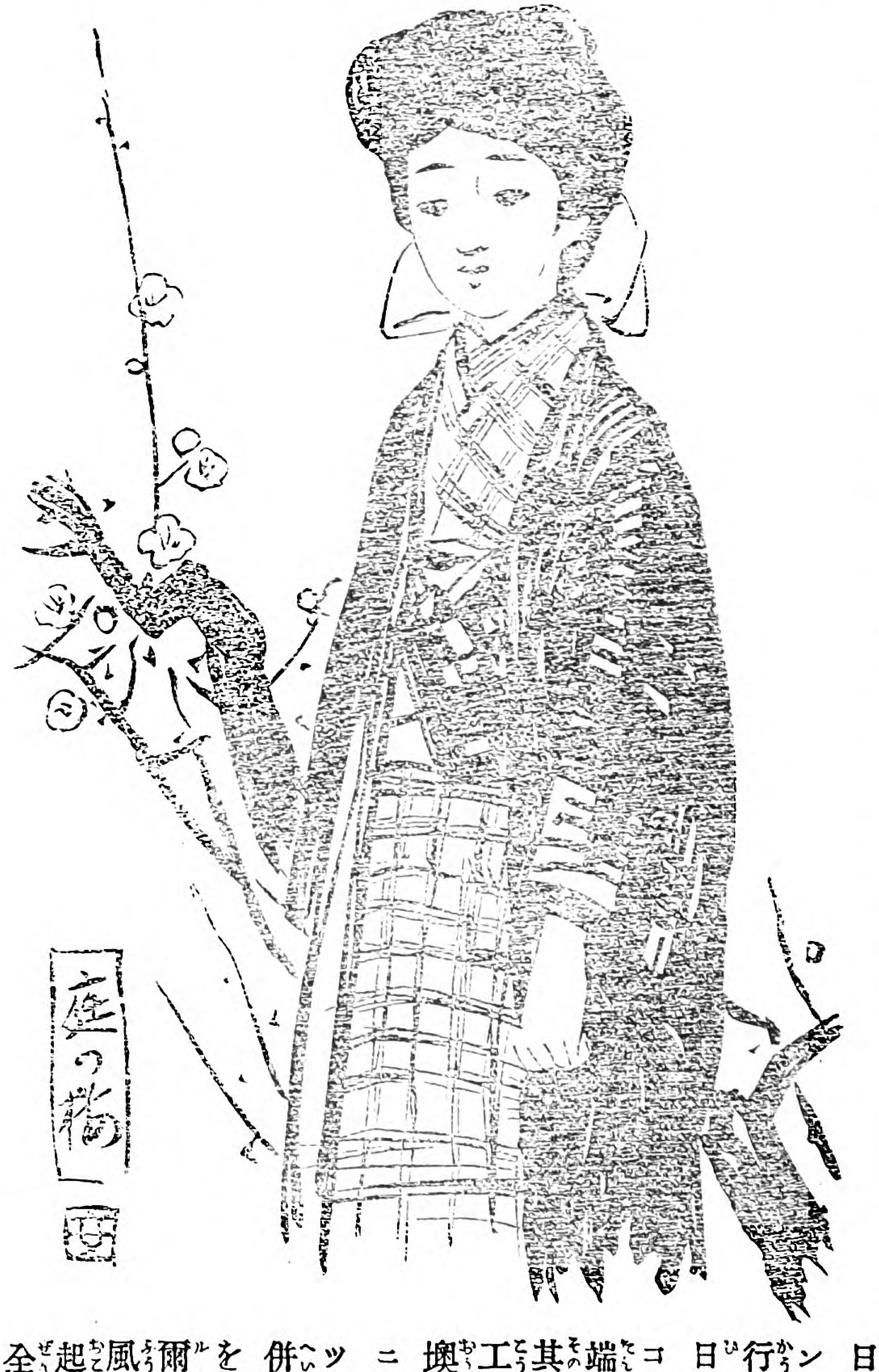
耳袋(二)

猿丸太夫

▲夜、客が來ると上りもせぬうちに、其提灯を引奪るやうにして、取て滅してやる聟があつた。餘り氣が廻り過るといふので梵天國になつた。もう澤山といふ人に酒をつぐのは咎めぬ世に、さりとは聟さまたることも辛い哉宮城縣の事也▲驅逐艦春雨が大王崎で沈沒した時、鳥羽の海人が、溺死體を抱いて人肌で温めた。それを「報知」がくり返して手弱女と書いたには恐入つた。鮑を捕る傍はんだいを頭へ載せて魚を賣に來るのによく逢つたがたをやめにて候とは保證しない。京のおはらめにもさう別嬪はゐない。面白いのは大原女は頭なら二十貫位の物は平氣で載せて、背では百目の重さにも堪へぬが、志摩伊勢の海女は頭へは魚、背中には子供をひつちよつても來る、「ぬしは荒濱海そだち、汐風に、吹かれてお色はまつくろけ」美人たらんと欲すと雖豈得べけんや▲ドイツハッシマン市では年年賞を懸けて、最も醜い最も畸形な婦人に結婚する男子と、齡四十を過ぎて少くとも二度男子に捨てられた婦人とに與ふることになつてゐる、其賞金と云ふは、或富豪の遺言で、美しき者は種々の幸福に接することが出來るけれども、醜い者はさうは行かぬからとて、其遺產の中から、いつでも最醜い娘と結婚した者があつたら誰にでも百六十圓、畸形娘と結婚した者には百二十圓、それから四十過ぎて捨てられた憐れな婦人には百圓と云ふ割合で與へるのださうな。併し此遺產保管團は此割合を變へて、特に非常に醜い娘と結婚した者、又は特に例もなく不運に出逢つた女には、もつと高い率で懸賞を與へたいと云つてゐる。貰つて好いかわるいか分らぬものだ。

▲王子精神病院に收容されたる小橋ブンは、十九歲で嫁入し一子を擧げたが、數年來精神病を發して、悲慘の限りを盡し、五人迄ある兄妹に見放され、遂に京橋區役所の厄介者となつて、同院に委託收容された、病名は緊張病と云ふ一種の精神病にて、殊に珍妙なるは、牛馬犬猫鳥鷄等有ゆる禽獸の鳴く眞似が極めて巧みで、夜更けて急にコケコッコーと鷄其儘の鳴聲をして、同室者を初め、宿直の

醫者看護婦を驚かすかと思へば、次いで屋上の妻呼ぶ雄猫の鳴き聲となり、又は飛んでもない眞夜中にカーカーと囀るなど、晝となく夜となく、御機嫌に任せて或は馬に、或は牛と、好き勝手の聲色を使ふては獨り悦に入つて居る▲海牙に建築中の世界的平和宮が殆ど九分通り工事を畢つて殘す所は、只僅に屋根と內部の裝飾とのみになつた。が不思議なことには此平和宮がカーネギー基金を以て、愈愈新築と決定した月が、英土開戰の月で、設計圖が出來上つた日が、日露の宣戰布告日、それから起工の式日が獨帝タンジール旅行に上つた日（モロッコ問題の發端）しかも其第一階竣工の際には墺國がボスニア、ヘルツエゴビナ併合の宣言を發して巴爾幹半島の風雲を捲き起し、二階全部の竣工した今年の九月三十日には伊土の開戰が布告されたといふ始末。



そこで世界的平和の爲に巨萬の寄附をした鋼鐵王もコリヤ餘り緣喜でもないと今更後悔して居るさうな、して見ると屋根が出來上り且つ内部の裝飾が了り會議室の天井に「平和の勝利」と題する繪が出來上つた曉には、ドンナ大戰爭が起るか分らぬと、御幣を擔いで居た矢先支那革命亂が勃發した、さて此次はいよく日米戰爭か、桑原桑原…………

▲米國の某ドクトルは生理上から婦人の貞操を判定する方法を發見した、それは仕掛のある廣い板の上に試驗に供さるゝ女を載せると軈て板が廻り始める、幾廻りも廻つてから靜かに一定の位置に停止する、頭は北に足は南に恰も磁石の樣になる、然るに不義を働く女は此場合に非常に左方へ偏倚する、大抵八九度に達するといふことぢや、名案は名案だが、おいそれと臺の上に横になる女が有りさうもない、アメリカのお轉婆連ならずとも誰か其「無禮」を憤らざらんや。▲宮城縣米谷町に細君を二人持てる男がある。よく働くさうだ。當りめいさあの野郎は嬶が二人有るんだもの二人分えは働くだらう、俺あ一人しか無えから一人前しか働かねえと友達が言ふ、すると一人の友達が、うぢや俺達のやらなおかたもゆかたも無い者は唯ねていゝわけだね。」「ばかてけ手前も一人は貰ふのだから一人前は働くもんだ」▲西洋では接吻と云ふ事も一つの禮式になつて居るが、日本では親が子供の頬にでも接吻する外、餘り接吻と云ふ事は行はれない。市俄古のアルフレッド、フワウラー氏は、專念接吻に關して研究する所あり、一方ならぬ苦心を費して、之に關する新著を大成した、氏は之を情熱の接吻、慈愛の接吻、愛情の接吻、敬虔の接吻、同胞の接吻、好奇の接吻、詐騙の接吻、害意ある接吻の八種とし、細密に説明して居るが、更に氏は接吻の定義に付いて興味あるものを拔萃した。

一、接吻は愛の天使なり(オビッワ)
二、接吻は愛の花なり(ニノン)
三、接吻は愛の細路なり(グラショー)
四、接吻は歡樂にあらず、歡樂への誘引なり(ラレドルフ)
五、接吻は心の本域を開く戶なり(レビス)
六、接吻は大膽、信念、愛情の表示なり(ネヒュス)

又接吻に付いて左の如き觀察を下した。

一、前額の接吻は智力の尊敬を表はす
二、頰の接吻は美の崇拜を表はす
三、鼻の接吻は不作法なる心意を表はす
四、頤の接吻は多少の親狎を表はす
五、手の接吻は謙遜なる臆したる樣を表はす
六、脣の接吻は愛情を來す

鼻の頭へするのはいかに西洋でも無作法と思ふ筈だ。

其の尖に提灯でも下つて見たまへ、きつとからいよ。日本では餘り行はれない。原文のまゝ也、無論女子文壇の孃さん達は抗議する權利が有る。▲西洋の爪占　爪を御覽に入れやう、指の爪の廣い人には總じて柔和な人が多く、隨つて臆病で、恥かしがりに陷り易い。爪の色が赤ばしつて、斑點がある人は人の上に立ちたがり、戰が好きでドーカすると殘酷になりやすい。爪に白い斑點が出來た場合は何か災禍が降ッて來る、まだ爪が蒼白く見える時は肉體のどこかに缺點あるを示し、同時に高等の專門學に志す人及び憂鬱性の人も爪の色は蒼白く且鉛色を呈するのが多い。白色なのは男女共に異性に惚れ合ふ性で、得て戀の爲に破産し、戀に熱して死ぬる人はこの白色の爪の人から出る。心家の爪は多く伸び方が狹い、そして爭ひが好きで、同時に專門の知識を無暗に渇仰する人も爪が白いものに多い。また圓々と延び行く爪の人は寬仁にして胸が廣く、自分の仕遂げた仕事を自慢する性である。細長い爪の人はどうも信用の置けぬ人が多い。次に小さな爪を持つ人は其人の小心なるを現すと同時に執拗にして物事を隱したがる。一般に肥えた爪を持つ人は飼物が好きで、また寢ることの好きな人である、又爪が兩側の肉に深く喰ひ込む人は大抵贅澤ぢやげな、調べておみやす▲北上川の中流米谷といへる所に、ある日桑畠へ出ていゝ聲で唄を歌へる爺さんがあつた。寺のお孃さんの髮の結樣見やれ、チトは三じやく前髮や五尺、猫奴も潜ればいたち奴も潜る位のところをやつてると折から土手を通りかゝつた盲の男が、まん更按摩でもなかつたと見える、そろ〳〵と聲を便に下りて來て、そろりと二十錢銀貨をつかませた。爺さんのびつくり

▲冬から春にかけて田舍にはよく地歌舞伎が有る。庄屋の小旦那から夜番の久等まで跳もする踊もする。ある時ある村に大江山の討入があつた。青鬼になつて岩屋の門番をする男が、素裸の上を草色に塗つて、頭には唐麥の角も生やらかし、黄色い褌で出て來た。暗々裡に賴光以下の山伏が近づくを知る。と身ぶり宜しくあつて、此處らあたりは人臭いプン〳〵といふ白をいふ段になり、掌に書いて貰つた文句を見ると、何時の間にか汗に流れてか、人の頭が一くなつてへになつてゐた、鬼もをかしいとは思つたさうだが正直にてゝらあたりはへ臭いと大目玉を剝いたので、わつとはやし立てられ、舞臺のまん中に立往生した。虎の皮が裂けなかつたか知らん。

化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉

▲賀詞賜はりし御方々へ　醉若君の年賀狀の云草ではないが、昨年は新たに本誌の愛讀者諸子に御知合が出來ましたので、例年より百枚だけ多く繪葉書を調らへたのでしたが、思ひも掛けぬ各種の方面から賀狀が舞込んで參つた結果、繪葉書に不足を生じ、それに二日の日から房總地方に出掛けまして十二日の晩に歸りましたので、今頃になつてそが答詞を申上ぐるも、何となく間の拔けた遣方であると存じ、頂きつぱなしにした數が本誌關係者だけで三十六枚でございます、この御方々には誠に以て申譯次第もございません、殊にいまだ一面識もなく只一回か二回の御手紙に返事申上げた位の、云はゞ見ず知らずの間柄であるにも係らず、斯く御心に掛けられて御叮嚀ぶき下すつた御志に對し答詞の一言だも御酬せぬとは、實に心のない、高慢な悟らしい奴と、御身見なされた方もおありでしたらうが、右樣の次第で心なく頂きつぱなしに致した譯ではないですから、何卒御ゆるしを願ひます、その代り來年は私の方よりキツト魁けて寫儀を申上げる御約束を致して置きます

▲直接私に調劑を依賴され、並に金員を送り越された御方々へ　本年中讀者諸子から種々なる調劑をして呉れとの御依賴により、それを御引受けしてありながら今以て其運びに至らずにあるのや、中には前金に爲替を送つて下すつた御方の中にも、或は猶その儘に打過ぎて居るのもないとも限りません、と申すのは私の留守中に家内のものが、何もかも一所に皆樣方よりの御手紙や藥書をゴツタ交ぜにしてクヽツテ仕舞つたもんですから、どれがどれやら、今改めてこれを調べる日になりますと、中々一日や二日で出來る仕事でございませんので、それを調べるよりはむしろ其御方々から其旨仰せ越しを願つた方が、身勝手の申分ですが、いくらか手數が省けて都合がよいと存じますので、其御方々には誠に御手數恐入りますけれど、改めて何々を調製して呉れ、金員は何程送つてあつたと仰せ越して頂きたいと存じます、尤も今年からは、化粧問答の中に其都度一々書き認めることに致しましたから、モウ二度とこの樣な不始末は決して致さん考で居ります。

▲吉川方つね子さんへ　詰友クラブ原稿として御つかはしになつたクセ毛云々の御投書正に拜見致しましたが斯く申しては或は失禮に當るか知れませんけれど世間には丁度御許樣の仰しやるやうな手段を取りて正直な世人を欺むく惡者がソンチヨソコラに澤山ありますので、一應其內容を承つた上でなければしかと誌上に御紹介する譯には參らんのです、現に荒川如水なる人の發つて居らるゝクセ毛直し、並にキセロール化粧品類は私がこれを實驗した結果、其好と認めたから本誌は勿論、他の雜誌の上でも、機會さへあれば其有効なる旨を紹介致して居る程ですから、御許樣のも事實有効のものでしたなら藤波誓つて、わが愛讀者諸子のために、喜んでそれが紹介の勞を採りますから、郵券封入お知らせになれば詳細御報知致しますと仰しやる其詳細を先づ以て私に御報知願ひます

▲麴町京子さんへ　御尋ねの事については、直接私の方へ宛てゝ御手紙下さるか若くは御出下さいまし。住所は牛込赤城下町六十二番地（この前三二とあつたのは誤植です）冬瓜子だけでは無論駄目と思ひます

問　あの外用白色劑として御敎下さいました塗身香の材料のうち雷丸油は當地には販賣して居りませぬが、この品にかはるべき何か他の藥品はございませんでせうか、尙塗身香使用後直ちに白粉を使ひましても差支ありますまいか（烏取、さつき）

答　雷丸油でなくてはいけません、白を御使ひなさつて少しも差支ありません。

問　密陀僧をつけた上へ白粉を塗つてゐるいでせうか、又密陀僧は洗面後、いつ使つてもよろしいですか一日何回程つければよいでせうか（京都なでし子）

答　密陀僧の上に白粉をつけると黄色になりますから、お化粧の場合には洗ひ落した方がよいでせう、いつ御つけになつても差支ありませんけれど、夜分御やすみになる時御つけになつて翌朝洗ひ落しなさつた方が一番便利でせう一日一回で澤山です。

問　(一)ホクロを取る法。(二)白粉をつけますと田蟲が出來て困りますが、これを出來さない法、(三)黄色の白粉の製法と賣所を御教へ下さいまし(龜戸、みどり)

答　(一)コロヂーム若くは發烟硝酸を、ホクロの上に先の尖つたものにつけて御つけなさい、(二)コールドクリームを白粉をつける前によく、摺込みなさい、(三)サフラン丁幾を適度に其白粉に御まぜなさい、福原資生堂で賣つて居りまず。

問　(一)幼少の折り顔面に受けました爪の痕は直らぬものでせうか。(二)右の頬に針の穴程のクボミがありまして湯上り上氣せし折りなどには殊に目立ちますがこれを直す方法はございますまいか。(三)剝離劑の應用でキメを細かにする方法を御教へ願ます、而して其剝離劑をつけますと落すまで顔色でも變るものでせうか、(横濱二十歳の女)

答　(一)只今の私の智識では殘念ながら直るとは申上げられません。(二)一應拜見した上でなくては何とも申上げかねます。(三)キメを細かにする方法は他に澤山あります、何も剝離劑を應用なさらんでもよいと思ひますそれに剝離劑をつけますと、約一週間位は顔面或は帶紫赤色と變じ、その間洗顔は勿論、お化粧等をすることが出來ません。

問　ニキビの直る藥を御教へ下さいまし、尙カボシー氏軟膏は効目がありますか(心痛女)

答　そのカボジー氏軟膏を御つけになつて御覽さない。

問　隆鼻マツサージは實際有効なものでせうか、猶ヒタヒの狹いのを廣くする方法はないでせうか、(丸山篤)

答　或隆鼻術師の唱ふるやうな効能は、私の實驗上認めかねます、額の狹きを廣く見するには、化粧美術を應用なさい、この術は精しく拙著新式化粧法の中に述べて置きましたから御參考願ひます

問　鼻側に小ざなホクロがあります、どうしたら除れませうか(胡蝶子)

答　本欄の(龜戸みどり)さんへの(一)の答を御覽下さい。

問　私の頰の骨のあたりにアザの樣な丸い赤い色をして、その中部が五厘銅貨程の丸みある普通の色をして居りますが、寒い時などには殊にありくと目立ちます、よい療法はございませんでせうか(十七歳の少女、いと子)

答　まのあたり拜見した上でなくては見當がつきません。

問　人中などで、何かハツと思ひますと、顔が眞紅になる癖があります、何としたら宜しいでせうか(春子)

答　これは化粧の問題ではありません、催眠術を受けて御覽なさい。

問　苛性加里〇・三、リスリンと酒精各二五、〇を蒸餾水五〇・〇に溶し、それに硼酸末二・〇を加へて使つて居りますが、いくらか皮膚の荒れを防ぐでせうか、またこれによつて起る害はないでせうか。(神戸、一看護婦)

答　所謂ベルツ水に似通つた方劑で、アレを防ぐには多少の効能があるでせう、又苛性加里は御承知の通り劇藥ですけれど御使ひになつて居る分量でしたら、別に害はないと思ひます

問　(一)キメを細かにするには、(二)腫の痕を直し、並にこれが豫防法は、(三)化粧する順序、(四痩せる法、數々恐入りますが、御教へ下さいまし(淺みどり)

答　(一)と(二)は、今度女子文壇社から皆樣に御わけして上げることになつたコールドクリームと艷肌劑とを御つけなさい。(三)拙著新式化粧法に精しく述べて置きましたからそれを御一讀願ひます、(四)田村化三郎氏の著された肥える法痩せる法　いふ法を御覽なさい

問　今度女子文壇社代理部から私共に御わけして下さるコールドクリームは理容館で賣つて居るコールドクリームより少々お直段がお高いやうですが、品が違ふのでせうか(福井、あさ子)

答　世間には名が同じでも内容の違ふのが澤山あります、理容館のコールドクリームの品

の眞價はこゝに批評する限りではありません、が文壇社で皆様に御わけするコールドクリームは世間の化粧品商のやうに利益本位のイカモノでないといふことだけ申して置きます、何んなら一ペン欺されたと思召して、双方のを御使ひになつて御覽なさつたら如何です、それとも御自身に調製して見なさるも策でせう、處方は純粹オルモンド油百匁、黄蠟及び鯨蠟各七匁、純粹グリセリン四十匁、雲南麝香二匁、薔薇油二匁ローズゼラニーム油四匁、ベルガモント油、レモン油各二匁、橙花油一匁、桂皮油一匁、橙花水五十匁の合劑から成つて居るのですから、試みに之れを御自製なさつたら文壇社で御わけするに果して利益をドノ位食つて居るかドウかが直ぐに解ります、而もこれより安價に賣れるコールドクーリムありとすれば一つの不思議であると存じます。

問　(一)今度先生の御發明なされた美髮劑をつけますと外の油をつけることが、出來ませんでせうか、(二)私は今年二十歳ですが、顏から身體中一面にシワだらけで困つて居ります、如何致せば綺麗な肌になりませうか、(三)石鹼の中で何が一番よろしいでせうか。(四)純粹の椿油の製造元を御敎下さい、(五)ソバカスを取**去る原料は何處の藥店にでございませうか(春江)**

答　(一)差支ありません。(二)皮膚の狀態を拜見せぬことには御返事申しかねます、(三)舶來ではキセロール〇〇〇印、日本製では花王がよいと思ひます。(四)伊豆七島の產出にかゝるものに純粹のが多くあります、けれども近年島人も中々ズルクなりまして、大部雜ぜ物をするやうになりました。例へ純粹のものでも、カラシボリナマシボリ、ヤキシボリ、等の區別がありまして、一番よいのはナマシボリですが、このナマシボリにも、時によると落花豆や茶の實白胡麻などを雜ぜて居るものもありまして、素人には中々見分けをつけるとは困難であります、尤も純粹の椿油はよいにはよいものですけれど毛髮用として御使ひになる場合には、純粹の胡麻油と等分に合した方がよいので、椿油のみでは强過ぎますから、この點から申せば九州地方から產出する椿油の方が適當かも知れません、純粹の椿油としては七島中でも神津島を優品となすべく、大島や三宅島のは多くカラシボリばかりのやうです、兎に角椿油に關する精しい研究の結果は玆に述べ盡せませんから何れ題を改め「婦女界」誌上にて申上げることに致しませう、(五)世間にはソバカス取りと號して賣つて居る藥が澤山廣告にも見えますが果して云ふが如く有効か否かは存じません。

問　(一)日に焦けぬ方法(二)顏にシワの見えぬ化粧の仕方。(三)生際を濃くする方法、(四)目下東都で流行する若い女の髮の名と其結方を御教示願ひます(田舍娘)

答　(一)乃至(三)拙著「新式化粧法」(博文館發行)及び「合せ鏡」(實業之日本社發行)の中に精しく述べて置きましたからそれを御一覽願ひます、こゝでは申上げきれません。(四)これは關口おぶんさんなり伊賀おとらさんなりに御聞き下さつた方が適當でせう。

問　(一)脂肪性にポンピアンマツサージクリームを使ひましても差支ございませんでせうか、(二)レートといふ化粧水は脂肪性にはよくないでせうか(土佐、一女)

答　(一)(二)共に差支はありませんが、防脂劑としては適當の性質を缺いて居ると思ひます。

問　ソバカスの良藥とキメを細かにする化粧水とを御敎へ下さい(横濱り、一子)

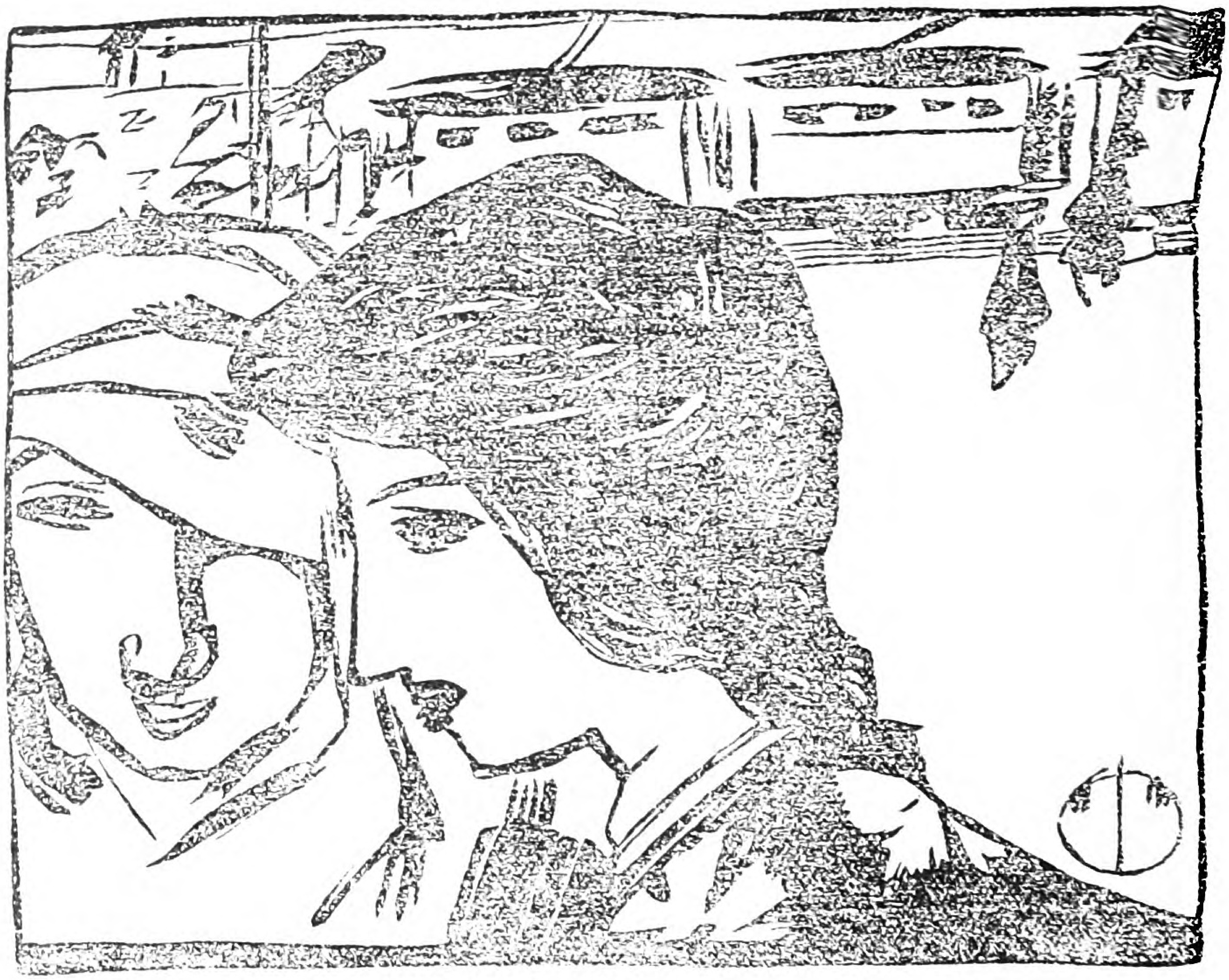
答　女子文壇社から艶肌劑をわけて貰つて御使ひなさい、キメを細かにするは勿論輕るいソバカスなら段々と薄らぎます。

問　(一)色々な廣告の中で、一番白色劑として有効なのは何でございませうか、(二)病床にあつて頭髮のむすばりたるを直す法はございますまいか(愛知愛讀女)

答　(一)さア、どれが有効でせうか、少々御答に困ります。(二)その「むすばり」たるとは如何なられたことでせうか。

問　私は面皰で困つて居りますが、種々なる化粧水を使つて見ても其効更にございません。いつぞや先生の御答に人の乳と密陀僧とを煉合したものがよいとございましたが私にも有**効でせうか、而して其等は何處で賣つて居**りませうか(眞砂町、眼女)

答　發生原因の如何によつて方劑も違はねばならんのですが、兎も角密陀僧劑は多くの場合に有効なものゝ一つですから、試みに御つかひなさつて御覽なさい、藥店に賣つて居ります



誌友欄



小說
○その朝

水野葉舟選

近江わかば

その朝深雪から逃がれるやうに歸つた小鶴は慌しさうに豐艶な舞妓姿を居間に脱ぎ捨てると、其儘茶の間へ來て一人後れて淋しさうに膳に向つた。味噌汁はもう冷たくなつて居たので、小皿に盛つた白いんげんに箸をつけたが、餘り甘くつて胸につかへるやうなのでそれも止して、只香の物だけでさら／＼と御茶漬を流した。下女のお竹は人參のやうな赤い手をして、カタコトと流し許で朝飯の汚れ物を片づけて居たが、小鶴はこの膳に向つてゐるのを見ると思ひ出したやうに、「味噌汁はもう冷たうなつてますやろ、暖めまひやうか」といつて、いつも女將の牛乳を沸かす時に使ふ小さなアルミの鍋を、流し許の釘からはづして來た。「もうえゝのやお終ひやさかい」と小鶴は首を振りながら小早く食事をすまして、ハタキと箒とを手にして居間へ引返した。富香姉さんは朝湯にいつて居なかつた。

簞笥や小道具の塵を奇麗に拂つて、富香姉さんの鏡臺に艶布巾を掛けて置いた。襷がはりに長い袂を羽織の脇入の中へ突込んで、箒を取つて小鶴は隅々から丁寧に掃き始めた。切れた三の糸が、煎豆や水菓子の皮と一所に、緣側から庭石の上へ掃き出される。埃はパッと明るい日光の中に舞ひ上つて、ちら／＼と銀の粉のやうに光つた。

珍らしくのんびりとした暖かい日で、昨晩から曉方へ掛けて唸つて居た風も何處へいつたか、忘れたやうないゝ天氣である。小鶴は美しく澄んだ初冬の空に魂を溶かし込まれたやうになつて、暫くは其處を動かなかつた。

折柄隣の二階で ポツン／＼と三味線の調子を合はせる音がして、暫くすると嗄ばしつた張のないいやけた聲で、禿の唄ふのが聞える。下地妓のお玉が聲だ、小鶴は始終師匠や姐さん達に叱られたり抓られたりし

ながら、丹念に稽古を勵んでゐる下地妓の身を、自分も一度は其麼時もあつたにと憐れに思はれた。

——禿の袖の振りはじめ——と小鶴は小聲に唄つて、知らず〳〵隣の三味線に釣り込まれて、輕ろく足拍子を取つてゐたが、氣がついて止めた。障子を閉めて座敷の中に入つたが暖かいので火鉢の側へは寄りたくもない今朝は氣が射すやうで成丈女將や姉さん達の眼を避けたいので茶の室へも行かなかつた。それで何がなし其處に坐つて立てかけた儘で三味線の糸をポツン〳〵彈きながら此度の顔見世興行の總見の時に、仲好の八重子とお揃ひで掛けて行く、好きな俳優の紋ちらしにした半襟の事などを考へて見たが、其麼處じやない、自分は今悲しまなければならないのにといふやうな氣がふとした。小鶴は自分の身體がどうかなつてやしないかと思はれた。何だか濁つた血が自分の身體を流れてゐるやうな氣もした、深雪の御客で、赤ら顔のでぶ〳〵太つた株式屋の旦那の事を思ふと、ふと沸きかゝつた樂しい思ひに、霧がかゝつて了つた。これからは八重子と一所に棧敷に坐つても今迄のやうな心持で彼俳優の顔を見ることは出來ない其ればかりぢやない去年御披露目をしてから此方へ是れはと思ふやうな浮氣な若旦那もあつたのにいくら御金持だつて彼麼爺さんなんぞにと思ふといくら泣いても泣き足りないやうな氣がした。



（天賞）勝手にて　麹町　安田よし子

次々と悲しいことが思ひ廻されて來るのを小鶴は我

と我氣を引立てるやうにして湯に出掛けた。行きがけに茶の間を通ると、富香姉さんはもう湯から歸つてゐて、濡れた手拭を長火鉢の猫板にのせた儘、何かしきりと女將と話し込んでゐた。二人はちよいと小鶴の方を見たが、話に懸命になつてゐるので聲を掛けなかつた。小鶴は聞くともなしに耳を傾けると姉さんは今湯で誰からか聞いたといふ、女將さんの血の道には何處とかの婆さんに祈禱をして貰ふのがいゝ、何處其處のおかみさんはもう血の道で十年以來もぶら〳〵してゐて醫者や湯治で効能のなかつたのを其婆さんの御祈禱でめき〳〵とよくなつたさうな――とまるで自分が見て來たやうにさも眞實らしく話したてゝゐた。女將も「ふん〳〵」と其れを一々尤もさうに頷いてゐた。

錢湯から歸つてお晝飯を終ふと小鶴は皆と一所に顏を見合してゐるのが可厭さに女將の秘藏子の五つになる男の兒を連れてぶら〳〵と外へ出た。八重子の家へ寄つて行かうかと思つたが其れも止して行くともなしに足は八坂神社の境內に向いた。期が期なので境內には人の影も少ない、散りおくれの櫻の葉が折々ハラハラと石疊や砂利の上に散つた。花時の賑ひに較べて、此物淋しい冬景色が妙に小鶴の胸に染んだ。ふと今日は稽古日だと思ひ出したが引返す氣にはなれなかつた。小鶴は子供に小石を拾つてやつたり女の兒の石蹴りして遊ぶのを眺めたりして小半日を遊んで暮した折々通る參詣の人達が赤い切のかゝつた京風の島田に結た初しい小鶴の姿を物珍らしさうに眺めながら過ぎた。

短い冬の日が早薄々と暮れかゝつて來たのに氣がついて引返へさうとすると向ふから石疊の上をコートを着た束髮の女が歩いて來た。ふと見ると二年前小學校で敎はつた女敎師だ小鶴は逃げ出したく思つたがさうもなりかねたので近づくのを待つて辭儀をした。其女は驚ろいたやうにふと立止まつたが「あゝ吉田さんですかまあ大きくなつて」と小鶴の舞妓姿をつく〴〵と詠めた。小鶴はカッとなつて顏も上げられなかつた。小鶴はこの女敎師には非常に可愛がられたもので、何時だつたか校庭で遊んでゐた時に、「吉田さんは大きくなつたら何になるの」と訊かれて默つてゐると女敎師も強ひても聞かずに連の女敎師に「可愛さうだわねえ、善良兒だのに川育ちは矢張川で果てるんでせうか」と染みりといつた。小鶴は何の事とも分らずに耳に止めたそして未だに忘れなかつた。

家に歸ると

「今時分まで何處へいつてたんや」と女將が詰じるやうにいつた。

「祇園さんへいつたら光ちやんが何程歸らう〳〵ちうてもいや〳〵といははるもんやで」

「光ちやんよりも自分の方が遊びたいのやろ」と女將は氣作に笑つた。小鶴は女將の機嫌の惡さうでもないのにホッとしてかじかむだ手を火鉢に暖めてゐると電話口へ走り寄つた小女が暫くすると切つてすぐ此方を向いて「小鶴さん、あの深雪から」と眼で笑つた。小鶴はいやあな氣がして返事もせずにプイと立つた訊かずとも知れてゐる小鶴は小女の眼色で何もかも呑込んで了つた小女の癖にと其人を呑んだやうな擧動が小憎らしくもある。

「仲居はんが手が引けまへんよつて」とすぐ其のあとから小女が氣替への手傳に居間へ入つて來た。小鶴はニコツリともしないでゐた。（天賞）

○結婚後

しづ子

私は、今日も良人に誘はれて、見なれぬ街を買物に歩かねばなりませんでした。私は今の良人とはつひ一月程まへ迄はほんの路傍の人、赤の他人であつたのでした。それがかうして、廣い世の中の數知れぬ男の中で、一生に一人持つ良人と呼ぶ人となつて、此男一人のために結はねばならぬ丸髷と云ふ髮に結つて、かうして歩いてゐるのだと思ふと、もうつく〴〵つまらぬ事をして了つた樣な氣がしてなりません。

私はかうして歩いてゐると、自分が娘の頃、知つてゐた、好きな人や嫌ひな人、さま〴〵な男の事が胸に浮びます。そして私は、ふと、脊の高い體格の立派な、良人と歩いてゐます時に、今迄、しばらく考へ出した事のない、或人の事が鮮やかに胸にうかびました。

それは私の小學校時代に受持たれた、恰度私の良人によく似た立派な體格を持つた、眼つきの優しい、中西先生と云ふ若々しい男の先生の事でした。

其先生は私の事を「うたちやん〳〵……」と呼んでくれました。午の休み時間になつて「別れ」と云てお辭儀をすると、私は直ぐ其先生の傍へ、駈けよつて、學校嗅い先生嗅い樣な一種の匂ひのする、洋服の腕へまきつく樣にすると、先生は如何にも肉附のよい身體で、細纖な小柄な私の身體によりそう樣にして、唱歌

か何か口ずさみ乍ら、運動場のあちらこちらを引張て歩くのが癖で、さうされた時の幼い乍ら、軟かく感じた、もの懷かしい氣持を、私は良人と歩き乍ら、幾年ぶりかで、ふいと胸に浮びましたのです。すると私は思はず良人によりそつて歩く樣にしてゐました。青いガスの明るい書店の前で良人はふと立ち留つて私の肩をついて、物を云ひかけたので、私は何となく愕ろいて良人の顔を見上げた時に、私はもう其瞬間に堪らなく、厭や氣がさしました。急に默て離れて一人になつて了ひたくなつたのです。もうそう云ふ時のいら〳〵しい心のやるせなさつたらないのです。

そう云ふ時には良人が何を咄してくれたつて、只うるさいなあと思ふばかりです。成丈け離れて成丈け默づて歩いてゐたいのです。

「何うかしたのかい？氣分がわるい？」と良人は心配します。「否何ともありませんけれど……」と私はやつぱり眉をひそめてゐます。

「私は何にも出來ないくせに、怖ろしく我儘で、直き癇癪が起て仕方がありません。」かう云ふ素振りが良人の前へ見せてやりたくなります。それでも私の良人は私を少なくも、さう云ふ女に見てゐます、そしてそれをさう困つたものだとも思つてないらしいのです。

「彼人はね、一寸も叱からないわ……笑つてばかりゐるの……そして親切だわ。人が好いのねつまり……」私は私の母にかう云て良人の事を咄しました。

「お前さんは、それだから馬鹿だと云ふのだよ、どうして彼人はあれで、なか〳〵行き屆いた人らしいもの何もかも、見えてゐるのだよ、おまへのふしだらの事もさ――まあ今は初めだから默つてゐるけれど、今にだん〳〵眼に餘つて來と云はずにゐられないやね。だから決して好い氣になるものぢやない。」と云はれました

「大丈夫……愛想をつかされやしないわ。」と私は笑ひました。私は全くさう思ひます。それより自分が今迄戀人に倦きる樣に、良人にも倦きがきはしまひかと、それを怖れて居る位なのでした。私は結婚してから、時々もう堪らなく寂しい儚い樣な、居ても立てもゐられない程、變に心の苛々しい時があります。結婚前に見えぬ第二の運命が、怖々ながら、早く知りたい樣な、知りたくない樣な、そんな氣がして、何となく、心がおづ〳〵しく娘らしく、はりつめてゐましたけれどかうして、幸福だつたにしろ何にしろ、分つて見ればう望みのない樣な、死で了つてよいと思ふ位な時

さへあるのでした、結婚前より氣樂な夫婦きり位な生活がしたいと願つてましたつけ、それもかうして現はれて來ました。其良人も優しい情を持てくれました……それでゐて私は、何となく慊らなく、つまらなく、何處を何うしてくれと云ふ程の事もなくて只、心が淋しく苛々しいのです。時々良人に默て、一人で街をなぞ、ぶらついて娘の時の様な、若い異性に胸を跳らしたりするのでした。それでも時には、良人と二人きり、新らしい長火鉢に對して座つて、しみ〴〵良人の語り事等きいてゐて、もう自



（地賞）冬の朝　芝　後藤明あさ子

分の此の良人一人に何もかも投げ出して了ひたい——そんな風な心が出まして、今そこへどんな男が出て來ても、自分は自分の良人の方を思ふだらう——とそれ程な心になる事さへあるのです。さう云ふ時には、しみじみ自分が幸福に感じます。けれどそれが決して長くは、續いてくれないのです。良人がふと子供の事抔咄し出すと、私は堪らなく不快になつて、「今から、こんな若くて子供でも、出來たら私始末が出來ませんから、死なして了ふかもしれませんよ……赤坊はきたなくて大嫌ひです。」と、私は云た事があり升。默て良人は私の顔を見てましたが、「おまへは女の道が嫌ひで、又赤坊育てるのもそんなに嫌ひでは、一體何が好きなのさ——」と良人の眼は云てゐました。其良人の淋しさうな、しみじみした眼を見て、私はもう何とも云へぬ程、其良人が氣の毒になりまして、何とか良人が、喜ぶ樣な、優しい事でも云て、安心さしてやりたくなりました。ああ私は何處迄いつたら普通の、妻らしい妻となつて、良人に對せるのでせう——私は娘の頃から何となく、自分が、人妻なんかになつて、普通に世間と面を合せて、妻らしい生活をして行けるはずはない、何となく結婚しないうちに、何うにかなつて了ひ相だと、そんな氣がしてなりませんでした——。

○道代

信濃　優梨子

「お母樣富士屋のお千代さんが山下さんへ嫁くんですつて」と道代は投げる樣に云つた。

「ええお千代さんが山下へ嫁くつて？まア誰がさう云つたえ？」と母のお勝は喫驚した樣にくいと此方を向いて聞いた。

「お奈美さんが云つたんだからまさか嘘じやないでせうよ、十五日とか見立て祝ひだつて」と道代は矢張り冷たいすてる樣な云ひ方をした。そして、人を馬鹿にして居る、といふ樣な心持をありありと顔に見せてわざと橫を向いて居た。

「まアさうかネ、矢張りだんだん年はしなさるし自分でも考へなすたんだろうよ、二度目だからつていくらええ [illegible] も運の好いものは……」とお勝は見て居た新聞を疊みながら、何となく羨しさうな云ひ方をした。

道代はむらむらとしておもふさま反抗して見たい樣な氣がした。けれとそれを顔には見せないで、默と默

つてわざと何でもない樣な顏をして、前にあつた新聞をくいと引き寄せて見て居た。

「十五日では屹度明日あたり御招待狀が來るだろうよお前それあの襦袢の袖が合はないつて云つて居たじやないかえ？」とお勝は氣を變へた樣に輕く云つて道代の顏を見た。

「私行かないお招ばれしたつて」と道代は眼を上げ樣ともしないで、讀むでもなく眤と新聞の三面を見ながら云つた。「なぜさ、さぞ御仕度が出來たろうに行つて御らん、山下さんでも幸せだこと、二度目でもあんな嫁さんが貰へて、家なんかなら紋付一重ねどうやらだつたのに」とお勝は終ひを獨言の樣に低い聲で云つた。

道代は何か云はうとしたけれど默つて終つた。そして普通な顏をして居たけれど、もう胸の中は堪らない程いら〳〵して居た。

夏頃其話が道代に出た時、道代は嫁かうとも思ひさうにもしないのにお千代は「道代さんが山下樣へ嫁くんですつて、まアどんな氣がしたでせうネ、いくら財産があるの何のつたつて二度目なんか、しかも目の前の林屋の雪さんが嫁つた後じやありませんか」とさもさも輕蔑んだ樣に逢ふ人每に云つて居たといふのを道代はちら〳〵耳にして。其時道代はもうむら〳〵として思ふさま氣の晴れるまで、つけ〳〵お千代に云はうと餘程思つたけれど、「いゝわ、今に見て居れば解るんだから」と思ひ直して凝と默つて知らない顏をして居た「人が知らないと思つてよくも……」と思ふと、どんな顏をして居るか見立て祝ひに行つて見てやりたい樣な氣がした。そして思ひ切つて云つてやろうかといふ樣な氣にもなつた。さうした時は斯う何ともいはれない勝ち得た樣な冷やかに見返してやつた樣な强さを覺えるけれど、すぐまた、何だか踏みつけにされた樣な馬鹿にされた樣な氣がしてじり〳〵した。

「もうお前の友達は大抵嫁つたネ」と娘の心持ちを知らないお勝は思ひ出した樣に云つて猶更道代の心をいら〳〵させた。

道代はまた默つて居た。もう當り散らしたくて堪らない樣な氣がしたけれど。

お勝はそれぎり忘れたらしく何も云はなかつた。道代はいくらかほつとしたけれど矢張りいら〳〵する心持は消えなかつた。（人鏡）

○寒い晩

東京　葛の葉

すつ！と一陣の風が通つた。夜目にも埃かでみか小さい紙切も交つてきり／＼と舞ひ作ら、私の前を通つて五六間さきの三つ辻で、納まらうとしたのに又風が來て、けれどそれは一時で直ぐに納まつた。

『お、寒い……何て寒いんだらう……。』

私は十二月だものとつく／＼思つた、そして用足しにと外出した夫を家外に待つべく、もうさいぜんから此道を何度も／＼往來をした。いたづらに。

電信の柱に頭をもたして、かけかへて間の無い南京繻子の衿に頤を半ばうづめて、帯のあはいへさし入れた左の手先きのぬくみはわづかであつた。

お屋敷並びの僅かの家も次第に燈を戸にかくしてはねてしまつた。淋しい！松の樹に背を比べるアーク燈一つ青い灯！、それのみはあかりを總の一ぷさの樣な形のそれから八方へ光りの絲をきれいに放げて、通る人倉の白壁、何かも相應に己が色につゝんだ、その色は引つ越して來てあひだのない私には一きは心かなしい淋しさを覺えさせた。

向うの方から人が來る夫ではないか？とさあらぬ樣して、捨調子に足を運ぶとその方は何氣なくわらぢの足を早めにすたこら行つてしまつた。

譯もなく其人を見送つて『だれつたゝ。』三つ辻とも一つの横町とを一人で見のがすまいと見張る心と眼のいそがしさを、又一つの樂しみとも思つたがちん／＼とたてつゞけに十を打つたのをきいてねむくなつてきた。アーク燈の光りをぢつとみると無數の絲が上下左右八方に玲瓏とかゞやく、まつと大きく眼をあいても自然にとぢられて／＼、わけもなく眠むたくなつて來た。家へはひるには入れず仕方のなきまゝに又さきの電信柱の根にしやがんで、雨袖を中から手に組んでひたひの大半をうづめてしまつた。性根は天外にとばしはせねどかるくはく息、すう息を時々靜めては家の戸が鳴りはせぬかと耳をすましすましゝて居た。

四五人の足音が止まつたと同時に、

『あつ、乞食がねてる、』

『氣ちがひだよこれは、』

『死んでやせんか、』『起こしてやらうか……。』

『よせ／＼馬鹿々しい、女のきちがひ位どてにでもゐらあ。』『わしのひか、あはゝゝゝ。』

最後の聲はかんだかで太かつた、其聲につゞいて人はいつてしまつた。

一時のねむけは夜があける樣に消えてしまつた、『何だどちらが馬鹿々々しいのか、乞食だきちがひだ……おしのび、くそつ!、性根方がちがうわ。』

曲がり行く後姿只法被に染め拔いた大の字一字が心にのてつた。

地から生え出る樣にぬつと立つた時耳ひゞきのする風がはたくとすそをまくつた今とろりとした其中にまさか、とは思ひ乍　若しや夫が歸つて居はせぬかと逢はせまいとする今夜の客が待ちあぐんで、出直すと歸りはしないか?『あの今日のつらつきはおそろしい眼をぎよろつかせて……』

左の足をうかせ心地に、そつと戸口によつて耳をすました。

火鉢のはたに置いてあつた演藝畫報を話題にでもしたのだらう、眞面目に團十郎とか菊五郎とか新派だの歌舞伎だのといふ聲がする。

『夫が居ないで待つてる樣な中をよくもあんなにすまして物が言へることよ。』



（人賞）祇園の女　京都　山田靜子

命は惜しくないとか、信治の奴を殺してしまふのつてまさかりなんかふり上げてさ、あのどん栗眼を兩頬ふくらました中にぎよろつかせて……。

『己は兄だ、己は弟にかれこれさしづせられないのだ自分は自分で考へがあるのだ。』なんて、

『何だいやにけんりふりたがつて、さびくけんり位を間にもなんにもかゝるものか、長男だつてしれたものを、』

『誰が何といつても知りませんといふんだよ、えゝ、まつとだよ、誰が何ときいてもお前は知りません知りませんといつて居りやいゝんだから……。』

『うん、うん、』つて男の子はみすぼらしい男の子は、十二三の、鼻をすゝり乍ら、守はんてんに小さい子を負つたくしまきの女について歩いて行つた。右の辻から自轉車がすつと左へ折れて、すーつとあかるみを道の小石にまでなげたがそれも一時で叉元の暗さにかへつた。

私は兩手のつめたさをひし／＼身ぶるひし乍ら、かさ／＼ともみ手をして、今自轉車の出來た道の方へ足をぶらつかせた。時しもお向うの亭主がインバネスに風をきつて何か小聲にうたひ乍ら、知らぬ人といつた樣に私をぎよろりとみてがら／＼とくゞり戸をあけて身をかくした。物の二三分もたつとそこの妻君がお使にでも行くのかと思つたらさうでもなくて、『貴婦どうかなすつたのですか、えゝ？、何なら……、』と親切にいつて下ずつた。

『ありがたう御座います、いゝえ別な事ぢやありませんが、今日の……と』暗にいつたら、『まあねえ、』呆れ顔してまゆ毛にしはまでよせて、『きつそうのわるい人ねえ、どうしてゞせうあの方一人……、』『今日もねやぶれたシャツの袖をみせて覺えておけよ信次でせう、今も逢はせまいと……、』私の聲はうるんで居た。

『美代ぢやないか、今頃、何してるんだ、』人は夫であつた。私は眼迄涙が出ようとするのを、曇る聲を寒さにまぎらはして今少しと外に居てと願つたけれど、夫は『何かまはないよ』つて先にたつて家へ這入つた。

○執着

櫻井月草女

別れる時が來た。例令口には出さないでも、自分は既再び男には逢ふまいと思つて居る。終りまで欺かれる所を此方から出抜いて遣るのだから、腹は立てぬ成

可く強い印象を相手の胸に與へて置きたかつた。

「送つて行きませうか」とわざと慣々しく顔を覗き込む樣にして微笑んで見せた。男は手を振つて、

「なに、もう澤山だ、風でも引くと不可いぜ、つうちやん」

此方は返事もせずにサッサと下駄を突掛けたが、

「よく那麼優しい言葉が出るのね」今迄堪へ堪へた憎しみの情が胸の中に込上げて來ると、遂此麼言が口をすべつて涙がほろ〳〵と翻れた。

「妙な事を云ふね」白い目をぢろりと見流して其儘二人は瓦斯燈のまばらな電車道を歩いて行く。十時も過ぎたので、人蔭もちらほらと、兩側の店も大方は閉められて居た。默り合つて行く二人の傍を電車は折々けたゝましく鈴を鳴らして通りすぎた。何時迄も男は電車に乘らない。互の胸には冷たい塊が宿つた。吾妻橋のまぢかになつた頃、男の方から、

「つうちやん、此處迄來たもんだから一層下谷の宿まで來ちやどうだ」と機嫌を取る樣にして云つた。おつまは赫として「よくもそんな事を」と口まで出掛るのを呑込で、

「でも今日は叱られるといけないから歸るわ」

「眞さん、ぢやなかつた、寺山樣、お國は嘸好かつたでせうね」唇がピリ〳〵と顫へる。何時も此人の面さへ見ると懐しさが一杯になつて、遂思つた事も云へなくなるのが例なのに、今日は如何したのか、氣がシヤンとして、自分乍ら驚かれる位、男は流石ギヨツとした

「ナ、ナニを云ふんだ、僕は那麼寺山なんて苗字ぢやない」

「否、白を切らなくてもようござんすよ、妾は皆知つて居ますよ、ま、そんな蟲のいゝ事が、何時まで續くかやつて御覽なさい、人を馬鹿にして、」思ひ切り斯う云て除けたおつまは昨夜泣き盡したせいか涙さへ枯れ果てゝ居た。

二人は何時の間にか橋の袂に來て居た。川風は熱した頰に冷たく當つた。九日の月は沈んだ白い光を投げ下して居る、巡査は佩劍をガチヤ〳〵と鳴らして此方を怪し相にすかしたりなぞした。

やがて男は急に傍に寄つておつまの柔かい手を引寄せた。

「好いぢや無いか、おまへは何か誤解してるね、」と耳許に囁いた。「巡査に怪しまれるから早く行かう」

おつまは二三歩引づられる樣に歩いたが危く踏み止

まつて橋の欄干に固く縋つた。

「貴方は未だ那麼事を仰るの、今夜は如何したつて行かれませんよ」男は苛立しく。

「いゝよ、跡は僕が言譯して遣るから……」けれどもおつまは更に動かう共しなかつた。

「いゝ月ね、此で見て居て上るから早く御歸り成さい」冷淡に云ひ放つた時、相手の心には激しい怒りが一時に湧いて出た。

「畜生ッ、勝手にするがいゝや、人が下手に出りや好い氣になりやがつて、馬鹿野郞」

口汚く罵つてペッと唾を吐いたなり、行き過ぎたマントの後姿を見た時には始めて冷たいく滴が滲み出た。

何と云ふ侮辱であらう、あの心憎い程優しい眞吾の口から曾て這麼激しい蔑しい言葉が漏れ樣とは思はなかつたので有る。おつまはつくぐ女の弱さを知つた。三年も續いた戀を塵の樣に捨てゝまで田舍の丸持の家に養子に入らうとする程に變つた心を持ち作らたほ勉強中は知らぬ振をして、自分を弄ばうとして居る、其を知つた日から此方の心は變つて居るのにと斯う思ひながらおつまは、

「どうも失禮しましたッ」くびすを返して歩き出した今は戀しくも何共ない、靜かな胸だつた、早く歸つて母親に今迄の罪を詫びよう、今別れた方が優しだ、と胸の中で殊更「母樣」と呼んで見た。

「あゝ早く歸つて母樣に安心させやう」女は獨言を云ひながら線路を突切る途端、不圖、自分に寄添ふてついて來る蔑しい男の黑い影を見た。

「許して下さい、つうちやん、ありや笑談だよ、今度は僕から送らう」あまりの素振に呆れ果てゝサッサと返事もせずに歸つて行くおつまの心は冷たかつた、男はなほついて來る……。

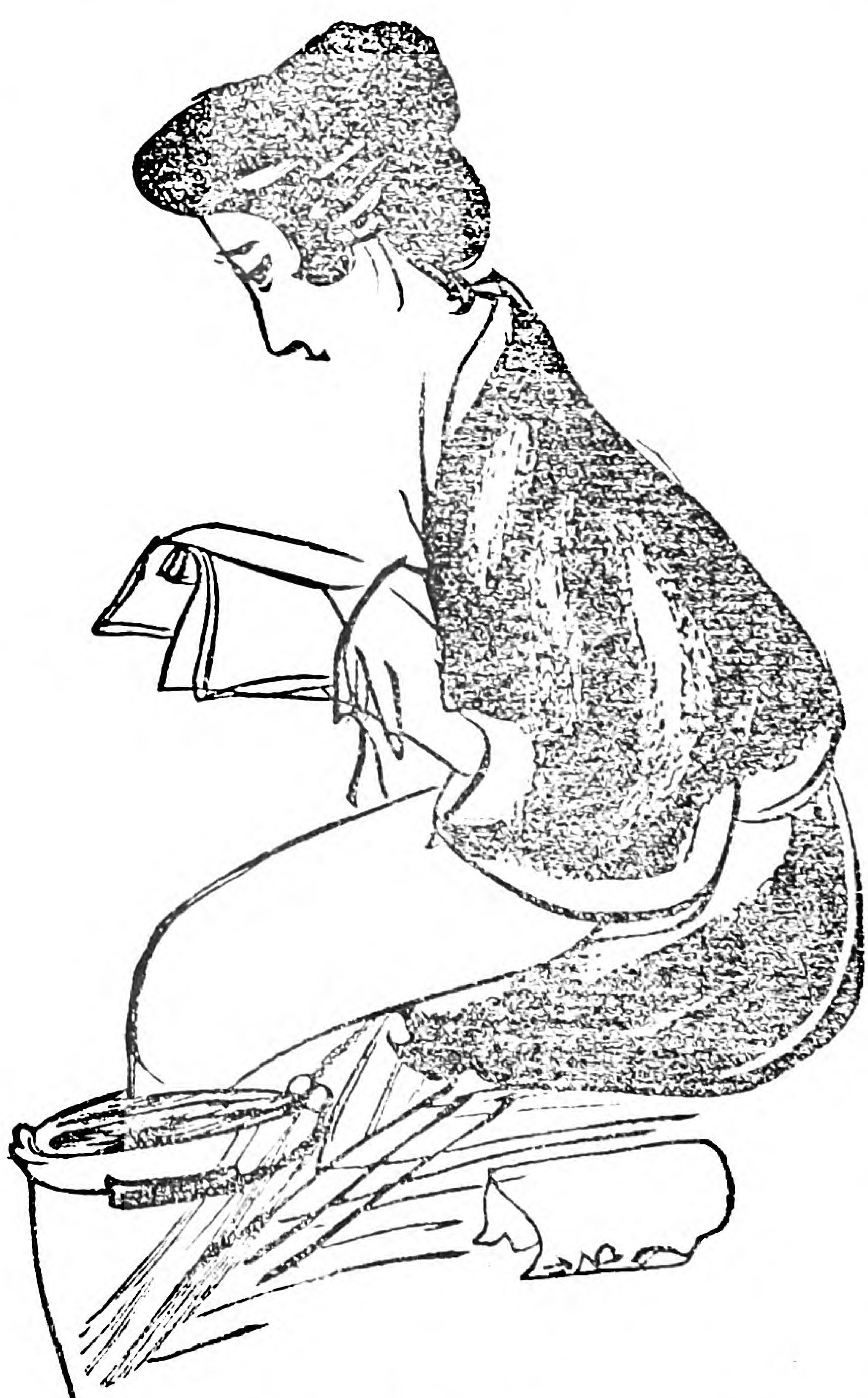
○雪の夜

信濃　世良田優子

ガラッと人力車の音が門の處で止つたと思ふとギーッとくゞりの戶が明いた、家の內では愛子が火鉢に手をかざして茫然り灯影を見つめて居たが急にあはてた樣に誰かしらこんなに遲くなつてと時計を見上た、もう十時を少し過ぎてゐる、母が留守だと思ふと何だか云ひ知れぬ恐怖が湧いて來た、やがて飛石をコトくと歩く下駄の音がして「御免下さい」と玄關に女の聲

愛子はハイと返事をしたものゝ誰かしら女の人なんてと呀りながらランプ片手に玄關に出た、障子が開くと共にパッと灯影が雪の上に射して松の枝の雪がサラサラと散つた、そこに女の白い顔が浮いて立つてゐる。

「あら京さん……」と愛子は驚きの聲を發したまゝ二の句が無くて目をパチパチさせたまゝ灯影に白い顔の京さんを見つめてゐる、それもその道理京さんといふのは愛子の家別けを借りてゐる、或會社員の妻、我儘な我の強い思つた事、云ひ出した事はすぐにその場で決行しなければ止まない一時でも猶豫の出來ない性質の人、此度だつて急に國へ歸りたくなつたからせひやつてくれと良人にいふたらもう十二月で忙がしいから來春ゆつくり行つて來るがよいと云はれても聞かずにずんく仕度して十二月の始め人は忙がしがつて目を廻してゐる時にのんきに國へ歸つたそれからどうしたかまだ五日目といふのに音沙汰もなくひよつくら歸つて來たのだもの愛子が驚くのも無理がない、京子はきつと自分の聲がしたら良人が飛んで出て來て迎へてくれるだろうと思つたのにその人の姿が見えぬので物足りない氣がしたがまさかその場で良人はといふて愛子に聞くわけにもならなかつた。



釋詰見る人　岩手　黄川田かよ

「あんまり急で驚いたでせう私歸る氣が無くてゐましたのが急に思ひ立ちましてね、」「まあそうでしたか……」と愛子は腑に落ちない返事、京子は車屋から大きな行李を受取つたり賃錢を拂つたりしてゐる「でもまあよく早くお歸りになりましたのねこの雪の降るのに」「え思ひ立つてはもう歸りたくつて家の事が心配になりましてね」と京子はコートの雪を拂つて上りながら云ふた、「さあおあたりなさいましよお寒かつたでせう」と愛子は炬燵の火を掘つた、「あなた御飯は」「えゝもう汽車の中ですませせまして」、「眞實にさもなくばお茶漬けでも」、「いえもうすませましたので」「前に一寸御端書でも下されればその積りで居りましたに」「もう端書など書く間が無かつたのですの今朝思ひ立つて急に歸る氣になつて！母もそれじやあんまりもう一泊と申しましたけれどさつさと荷作して歸りましたの」、あの良人は今夜どうしましたと聞きたくて口まで出たけれど心の中を見られる樣な氣がしたので云ひ得なかつた「眞實に留守中良人が何かと御世話樣になりまして有難う御ざいました」「いゝえ何も世話なとといふ事は有りませんでしたの御酒を召し上りませんから……今夜は會が有るとかで七時頃御出かけになりましたがもうお歸りなさるでせうよもう十時半ですものね」「あゝそうでしたか」と氣の無い返事「さぞ私が留守で困つて居たろうと思ひましてね、夜など家に居りましたでせうか」と京子は氣遣はしさう、「えゝもう八時頃いつもお寢みなさいましたの何だかお留守中淋し想なお顏計りなすつて碌に口もおきゝなさいませんでしたわ」、「あらそうと京子は懷かし想に目を見張つた今夜清水さん(良人京子の)お家に入被しつたらどんなにおよろこびになるか知れませんわ、でも御歸りになつたら驚りなさるでせうよ」と熱いお茶を愛子は入れて來た、私母にもさんざ叱られましたの、お前の樣な我儘者はないつて、清水さんがあゝいふ方だから治まるのだがつてね、それに姑さんも小姑もないしお酒はのまないしつて眞實にお前は仕合せ者だつていふのですよ、よくして上げないとバチがあたるつて申しましたの私も思つて見れば我儘かと思ひますの、其に清水は私の申す事は何でも聞いてくれますの一度でも嫌といふた事は有りませんのよ」、「眞實に清水さんは感心な方ですね、私つくづくそう思ひますの忍耐の強い方で入被いますのね」と愛子は一口お茶をのんだ外は風に雪がサラ〱と散る、「それで私も色々考へましたら

急に歸り度くなりましてね」と鬢のほつれ毛を掻き上げた京子は未だ若い結婚して五年になるといふけれど子供が無いせいか何時も花嫁の樣だ「もう歸りさうなものですわね」つてじれつた想に時計を見る。もうお歸りになるでせうよ母もあひにく留守で今夜親類へ參つたものですから二人は暫く無言、愛子は淸水さんと京子との性質を考へた、もし自分が嫁くとしたらもつとくハキくした男らしい自分の上に權利を持ちどこ迄も敬慕する事の出來る人物でなければいやだと思つた雪の夜は靜かに更けて門の外を通る人の音もしない――愛子は母を京子は良人の歸りをまつてゐる。

感想と選評

葉舟生

△今回は少しなまけて、この「選評と感想」を書くのが一月の二日になつた。今年は自分も大勉强を仕度いと思つて居る。人間の一生と言ふが、これを集中して過すか、散漫にすごすかと言ふ事で、どの位、その人が豐富に成るか、貧弱で暮すかと言ふ事はこゝで分れる。自分は諸君の生活がこの新しい年に於て、充實して行く事を希望する。

△で、自分は四十四年の十二月に讀んだ書の中、各雜誌に表はれた創作批評の中で、今記憶に殘つて居るものが一つも無い事を悲しむ。多くの人が匆忙として暮してしまふ十二月には、藝術も又、忙しさうな姿をして居るのであらうか。自分は、その中で「山岳」と言ふ雜誌の刊行された事を思ひ浮べる。次には田中阿歌麿子爵の「湖沼の硏究」(新潮社)と言ふのが公にされた事を忘れないで居る。この二つ共、是非一度見たいと思ひながら、まだそれを果さずに居る。何れ近い中に讀んでそれを諸君に紹介する事が出來るであらうと、それを樂んで居る。

△次には森田草平氏の「自叙傳」が一冊になつて春陽堂から公にされたがこれも年末に迫つて居たので、まだ手にする事が出來ないで居る、これについても、自分の考へを諸君の耳に傳へ度く思つて居る。凡て、斯う言ふ事を、普通の新聞雜誌記者のするやうに、たゞ速いと言ふ事を本位にして、粗雜に見、粗雜に語る必要は自分には無い、又諸君も、さう言ふ事を要求する必要は無からう。善きものは、その生命がさう無常迅速では無いであらうから。

△第三に、高木敏雄氏の監督の下に、朝日新聞の紙上て、「傳說童話」の募集があり、それが數回發表された事である。吾々は日本國民としてこれを重んずる心が決して薄く無いのである。自分は從來、これ等の事業が或る遊戯位に思はれて居た――現在の人々から――事を、不思議に思つて居る。吾々の生命は、現在より一步過去は、その細胞が死んで居ると同じく、死んだものであるのは勿論である。萬事は現在より出發した未來にある。しかし又、古き、その死んだものも、現在の生命を生み且つ運び來たものである事は否まれぬであらう。自分はこの意味から、吾々の祖先の生活を、重きものとして思はざるを得ぬ。而して、今回のこの如き計畫を、自分は重大視するものゝ一人である。

△自分は、もし問かれる事ならば、この欄の讀者に向つて、その生活の根柢から一變せん事を祈ると言ひ度いのである。諸君は少くとも、勝れた藝術に依つて、その生活の根柢から覺めて行かねばならぬ。人間が生きて居ると言ふ事は、それが既に戰爭である。人間の生活は、或る意味に於て、相剋し、相鬪つて居ると言へる。吾々はその中にあつて、自我の純粹を保たねばならぬ。覺めたる心の尙ぶ悲劇はこゝから起る。自分は理想家の言ふやうな空虛な平和を說かうとは思はぬ。自分は諸君が弱くして徒らに悲しみ、徒らに訴へる人である事を、優しい美しい女とは

思はぬ。自分は諸君が、苦い經驗を積んで得た「理解」の探からん事を祈る。

△自分は何故、斯う言ふ事を言ふか。自分は諸君が漫然と、茶の湯や挿花と一緒に、藝術を見ると言ふ事を好まぬ。即ち、諸君は各自の生活を以つて、藝術を視、藝術に依つて各自の生活を進められん事を祈るからである。これは作をする人にも、又せぬ人にも等しく有力な考へ方であると思ふからである。

△次に自分は、この一項を書く事の出來るのを喜ぶ。それは河井君の手で、本欄の人小笠原貞氏の作を本欄に入れられた事である。且つ、今後も二三の人の作をこれと同樣の取扱ひをされると言ふ計畫をされた事を自分に相談された事である。これは、無名の人をして、廣き世界に立つを得せしめる事が出來ると思ふ喜びにたへぬ。で、自分はこれ等の人々の作に向つて誠實な批評をする事を、自分の務めと思ふ。

△小笠原氏の「邂逅」は、その感情の描寫に於て勝れて居た。たゞその感情それ自身が持つて居る分量の貧しかつたのは、殘念であつた。しかしこれは作者自身の生涯を物語るものである。自分は特に公園の中を歩いて居る處をいゝと思つた。

△さて、次に今回の批評にうつる。

▲長谷川米女子（信濃）の「湯槽」さう亂雜な作だとは思はぬ。それにいゝ寫生らしい處もある。しかし、作者が「生の云々」「つとめの云々」も說明――感情そのものが說明に成つて居る――して居るのに對して、事實の背景は明かに見えない。これなどは本體に成つて居る作者の幼きを示すものである。――▲世良田儂子（信濃）の「雪の夜」も、堅實を缺いて居るが、前月の作より勝れて居る。憶を見る目もよいと思つた。――▲香紅女（東京）の「夜道」の作者に、極く孤獨な或る生活の階級に居る女の心を書いて居る。自分が斯う言ふ作に向つて持つて居る不平は、その世界に向つて少しの判斷も理解も無く、たゞ說明をして居ると言ふ事である。作者に再考を煩し度い。▲葛の葉（東京）の「寒い晩」も少し「離れて」書いてほしかつた。つまり、說明が不足であつた。――▲都島（橫濱）の「過夜」少し雜駁すぎる。――▲しづな（大阪）の「結婚後」は、例に依つて力が强いが、少しこの人の型に入りすぎて居る。しかし、やはり群をぬいて居る。――▲ひかげぐさ（埼玉）の「狸寢」は、野卑な處のある作。――▲村田撫子（大阪）の「くらい家」は面白くない。――▲梨花の無題この作はたゞ小說とだけ書いてあつて題が無い。自分は無題として置く）極く有りふれた心持を書いてある。筆は割合にしつかりして居るので、不快な作ではなかつた。――▲下妻百合子（東京）の「病室の思ひ出」非常に古い樣式と感情とを見た。――▲末摘花（廣島）の「金緣の名刺」は、第一に古い。第二には氣のきかぬ田舍の人が書いた都會小說と言ふ不快な處がある。第三に眞面目に人間の事を考へて居るとは思はれぬ。たゞ一寸とした感情の滿足を誇張したものであつた。――▲松井月草女（橫濱）の「執着」は筆が大變しつかりして來た。强さも出て來たし、集中した力も見える。たゞこの作には、背景を書く事が足りないので、闇の中で人の聲を聞いて居る感じがある。――▲保梨子（信濃）の「道代」この中には眞實の感情のひらめきがある。だが、如何にも鮮明な感がせなんだ――▲矢澤榮子（東京）の「窓から」手法が面白い。しかし、强いて說明しようとした拙劣な處が見える。――▲爲紅（德島）の「母子の皿」古い――▲譽田順子（土佐）の「娘心」は例のやうな作。この人に特に原稿をもう少し讀みよく丁寧に書いて送られるやうに注文して置く。――▲杉山花枝（大阪）の「子」流れるやうな文章だが、小說としては作りものだ。――▲わかば（近江）の「その朝」切々と迫るやうに書いてある。この人の爲めにこの作のある事を祝する。しかし、全體としては粗雜である。たゞ眞實を見せられる或る力のあつたのに感じたのである。この作が決して作者の上進を保證しては居ないと思つてほしい。――▲るい子（長崎）の「お菊」もどかしく焦つた心持が比較的よく味へた。――▲香鶴子（美作）の「留守の間」これに或る暗い、ミスチツクな感じがふと感じられた。――▲夕美（岡山）の「先妻の子」書き足りぬ、この人々の生活の根柢となるべき背景の說明が不足、――▲章の月（東京）の「姉と妹」[illegible]である。近頃はやる、女の露骨書きにすぎぬ。――▲千鶴子（橫濱）の「[illegible]」これも眞實性を缺いで居る。もつと力をこめてお書きなさい。――▲露草（大津）の「寫眞」甘い作しかし優しい心がある。――▲幸子（越後）の「妻の家」少し混雜してしまつて居る。



人事（散文）

編輯局選

○入浴

土佐あや子

障子に映つて居る櫻の樹が、軒の陰にぱつたりと掩はれて、しまつた時、お湯が明きましたと、下女が知らして來た、靜かな生活、閑寂な生活、血の動く事の少ない、私の平生には、湯に浴するのが、何よりの樂みである。私は手拭としやぼんを持つて、裏庭に出た。下女は掃いても〳〵こんなに木の葉が落ちましてと、柿の赤い葉や、櫻の紅で染めた樣な美しい葉を、踏みながら、云ひ譯らしく下を見る。

二丈餘りの、小高い山、其の山の根に自然の岩を臺に据ゑてある湯桶には、屋根もなく、圍ひもない、先き頃迄横手の、目隱になつて居た、柿の葉は散つて、僅か計りの、黄ろい葉、赤い葉は、七夕の短冊の樣にひら〳〵して居る。見通しの古木の梅が、枝計りなので向ふの山も晴れやかに見える。

私は湯の中に、ざんぶと這入つた、ぞつと身の毛が立つたが、凝つと口を噤んで落ち付くと次第に全身が溫かくしみて來る。暫くの間身動きもせず目の向いて居る方を視るともなく見る、段々と溫かくなつて來ると身も心も、ぐつたりと溶けてしまう心地がして、不快も不平も、この瞬間に打ち消されてしまふ。

目を上げて空を眺めると、紫色の雲に白茶の薄い横雲が棚引いて秋の弱い夕日に照されて居る。私はあかるい、廣い廣い一つの世界に投げ出された、感じがする山は濕つぽい谷ではない、中腹迄乾いた斷岩で私がスフィンクスと名付けた岩が恰度左手になつて、見る程、そうとしか思へぬ、彼方此方に、かやの穗が枯れほふけて輕うふら〳〵と動く、霜枯れた山は黒い岩の外黄ろい、中腹より上の椎の林は下から見ると材木を横に積み重ねた形ちで、暗くなりかけた林に薄いながら、はつきりと光線が流れて、二ヶ所計り血の迸つた樣に、紅葉が燃やされて居る。

此のあたりを中心に山は前に廻つて、この山脈を覗く樣子で後に山が有る。

最つと寒くなつたら、圍を拵へねばならぬ、山下しが強いから、寒くなつたら堪へられぬだらうと、家の人の話を聞く度びに、私はこの場所が惜しくつて、いつ迄も、圍ひも屋根もなくつて欲しいと心の内で願つて居る。二度目に湯に這入つたときは、どの山もどの山も薄く霞むで、頂の松の足並が、墨繪の樣に浮いて、夜の、くらがりは音もなく湯桶の周圍に迫つて居る、きらくと微かながら星も數へられる、前の華やかな空は、薄い鼠色に變つて居ると、眺めながら、ふつと手拭を上げるはづみに、何かぴかりと光つた、あつと氣を靜めて見ると、十日計りの月が見事に、私の胸のあたりに落ちて居る、然も梅の木の枝に懸つたまゝ湯面に、はつきりと眺められる、奇觀、私は何とも云へぬ一種の感に打たれた、誰かに祈りたい樣な、このまゝではもの足りない心持ちを、仕方なく打ち消して僅か**のさゞ波に動く、胸の前の月を觀て居た。**（天鼓）

絶好題材なり。月下物のおほふ無き山の氣に浴する男にしてよし、女にしてよし、透きとほる湯の水に、白き肌をもし君ならばさらによし。あゝ爾るゝはをしき人の世の衣（評）

題材は好いと云ふものゝ、幾百人となく作つて來た題だが、この位ゐよく書けてゐるのは少なかつた（評）

○耳の蔽

神戸港の女

もう十時を過ぎて居る。霧はいつか消えて居た。「取つて下さい。撤つて下さい」。と賴んで除いてもらつたもの、、三ヶ月も白い柔かいガーゼで包んで居た兩耳を、出すと、不安でたまらない。しかしまたうれしい。

水の樣に透明な初冬の空の下を、恐れるやうに、瞳を光らせつゝ醫師の許から歸つて行くのであつた。黃色な朝の光がサラくとすれ合ひながら、土の上に落ちる音がする。私はハツと小刻にふるふるふゞおづなる。

昨日まで平氣で通つた路が、馬鹿におそろしい。霞の底を迷つて遠くからくる鐘の音のやうに、聞いた電車が大きな響をたてゝ走つて行く。

私は思はずふるへた。

私の傍を行く人が、各々息の音や大きな足音をさせて行く。

白い凍つた道が、裂けるやうな音をさせて人力車や

荷車がゆく。

暗い家の中から聞き分けのつかぬ音がする。

煩雜な音響が入り亂れて私の鼓膜に種々な刺激をあたへると耳がむづがゆい樣な妙な感覺を起す。

うるさいわ、うるさいけれど、昨日迄三ヶ月間壬生狂言の役者のやうにも見えて居た人達が、男は男の聲女は女、老人は老人子供は子供、細い聲や太い聲や、高いのや低いのや、重さうなのや、それぐ自己の音聲を出して話したり笑つたりして居る。洪水の樣に漲る朝の光の中を、ただわけもなく四五町あるいた、新天地でも發見した樣



よむ人　京都　竹村まき

な心地で――

先刻から絶え間なしに來た刺激で、大そう疲勞してきた。私は思はず冷たい兩手を耳にあてた。

ゴロ〳〵と恐しい聲が、耳の奥の方でしてゐる。「耳をあけてあるいたから、何か飛び込んだのではないか」と急いで振るやうにしたけれども何も出てこない。

今迄面白いと思つたけれど恐しくなつた。もうきかぬ樣にと神經を他に向けようとするが、どうもきこえて、しかたがない。

半町ほどの間、手で塞いで、もう大分靜かだと、手をはなすと聞える、聞える。色々な音が耳の中をかきまはすやうに、たまらない。柔かい弱い薄い皷膜がつき破られさうだ。

うるさい音だ。

グラ〳〵としさうだ。昨日のやうに靜かなのがよい。

私は逃げるやうに倉庫の多い裏道に曲つた。

ほつと吐息した。私の息もなんと大きな音だらう。

一生懸命にはやく〳〵、小さな自分の部屋にとぢてもりたくなつて白い道を小走りに走つた。すると地のどん底から起るやうな音が私の駒下駄につきまとふ。

いやに堅い音だ。ほんとうに耳を包んでほしくなつた。

家の門まできた。家の中では聲やら音やらみだれてして居る。お母樣！と何もいはず耳をみせた前庭で盆栽を見て居た母はニッコリとしてもうすつかりよいかねといつてくれた。私は返事もせず離の二階へあがつて、机にもたれて兩手でかたく耳をおさへた。

腦の中に混亂が治るまで目をとぢて居たが、落ちついてきたので手をはなした。矢張刺激が次へ次へ次へと連續する。

私は堪へられなくなつて「母樣！母樣！」と大聲によんだ刺激の強い自分の聲に器械の樣に兩手が耳を蔽ふて居た。昨日の樣に柔かい眞白なガーゼで耳をふさいで物の音や響を遮つてほしい。

あゝきこえない方が餘程靜かで安らかでよい。（地震）

神經衰弱に候はずや（評）只さへ官能的の文章が、行はれる世の中に聲なき世界から聲ある世界に出たのだもの、この驚きと、この不安な心持で埋まつた文章の出來たのも尤もだ（評）

○灯と胸

本多春子

がらく〳〵と響を立てゝ十數臺の俥は料理店を出て、

月夜の花園のやうな色彩かゞやく街の灯の內に駈け入つた。めまぐるしく、我等の身は、その情熱に燃えた都會の夜の內に吸ひこまれて、どこまでも吸込まれていつて……ぶるぶると、からだが顫へた。

黄がゝつた電氣の灯に六雙の金屏風はあたゝかい不安に輝いてゐる百疊の廣間、驚く許りに私の胸は沈んでゐた。澄んでゐた、そうして、靜かに蒸されたる我官能の、さみしく樂しき音樂に耳を貸してゐたのであつた。

縞セル鼠の洋服を黑七子五つ紋に替へて、常よりも君の面には黑く尊からぬやうに見えた。だつて、私はすこしも沈默にし



歌かるた　　北海道　蒲原照子

てはゐなかつたもの、あんなに湧立つた血は、まつかな血は、はぐらかされし夢の憤りに一時に固く凍つてしまつて、再び解けぬ冷き安らひに萎てゆふ運命に、身も心も落付けてしまつたのである。

我、果して賣らるゝのか。

……母よ……父よ……

ふうわりした琥珀色の雲が、深い夜の蒼穹にあちこちに浮んで、幽かにく夢のゆらぎをとつてゐる。

動かぬ大きな鼠色雲よ、濃色の鼠色ぐもよ、私はおまへの大きなおでらひを切にうらやむ、われらは、いまだはづかしい、小さな、一個の未製品なれば。

チン！チリン！チリンと俥は走つてゆく、まだ見ぬ我家へ……

白い顔、黒い後影、教育された女の表情美の高き匂ひと色にかゞやく夜の本郷の街の灯よ。

われ、切に、我が愚なるをかなしむ。

捧げる灯よ。さびしき胸よ。

あゝ……どんなにかゝ……私は三十（人妻）

この君今や歌者の絶頂に在り、材を新婚前後より取る事すでに五六に垂んとす、愛すべく懐くべき新人の音容殆ど目にあり、新婚賦にしてかくの如くんば誰にか益ち誰にかおそれん、美しきものよ、そは人妻なり。

細川しづ子君の文に「夜雨様にたゞ冷笑を浴せらるゝ人妻」の一句あり。夜雨はあらゆる人妻に對して唯冷笑を事とする人物なりや。夜雨は自己以外に正義有る人無しとまで信ずる狂人なりや。彼は彼の有する日の靜けさを誇り夜の獨り居を誇る、然れども凡ての病者は皆これ有り、彼知らざらんや。すべての處女は淸く、欺かざる人の妻も亦淸し、彼亦これを知る。知りつゝ且人妻を「冷笑」し、にみづから高ぶるに似るは何ぞや。疑ふ者は曰ふ、嫉妬のみと。嫉妬か、呪咀かこゝろみに夜雨に問へば冷然として一笑を報うるに過ぎず。彼にして低級の人なりとせば靈肉ともに靈術たる廢人たらん、未發狂せず未自殺せず、しづかに迯れる命を思はゞ、たやすく嫉妬をいふべからず。然らば何が故にあざける乎。曰く賣らるゝ者をいたむのみ。鐵面皮なる者を憎むのみ。背德不義にして、なほ結婚を誇る女有るを惡むのみ。巧みに人に媚びて手より手に渡されし女あるを哀れむのみ。豈他有らんや。（評）

○ある日のまひる

筑紫饒子

まあ明い事、何と云ふ明さだろう秋――まひる――大聲で叫びたい程に胸がをどる。桃色の薬液満々とたゝへられたる小さき水計の半面に、花瓶の白菊がうつつて居る、小さいく花瓣がもやく。じつと横目で視つめて居る、――美しい――美しい、――、お母様の小言と此の薬効くか効かぬか知らんけれど、のむだけはのむわ、いくらでももつて、それみやりに眼をつむつてのむでたのだから、いやらしい色と見てたのに可笑しいわ、けれとのみ度くない、決してのひんじやない。

一しきり光がかげると亦パッと明くなつたと私はつと彈かれた樣に起きあがつてよろ〳〵窓際によろめいた生温い硝子の肌——眞空——清く〳〵眞青に澄める高空——瞳は暫し吸はれた。

左手は××の校舍、まあるい樣な三角な樣な形よい淡赭色の建物、滑かな瓦の輝き、カアテン引絞られた常綠木にこんもりとり圍まれて穩かな夢見て居る樣な空も一つ〳〵に青く白くはた金色に輝いて居る、や、黑ずんだ三稜形の木柵、チカ〳〵光る御影石の門柱、其上にニユーとさし出だ白茶けた大きな枝、まあ百日紅——なつかしい。——盛りの長い花だつたけ、ねしな起きしなよく斯うして眺めて、又なほ御友達にして居たが何時とはしらず散つてまつて——ぱらあつと咲き初めた日、眞赤な眞赤な盛りの日、何月何日ちやんと覺えて居る筈だつたがなあ。

每日每日血汐の樣な夕陽が、一面に滴るゝと花はやるせなささうに泣いてる樣に、又笑つて居る樣にも見えた。美しい氣狂さんの泣き笑ひ、どんな事を思つた其時往來を歩く人の顏は、皆眞赤に眞赤にてつて居た、男の顏、女の顏、よく覺えて居る——のに——私はもうたまらなくなつた、云ひしれぬ感が胸にせまつて。

又よろ〳〵と床にもぐり込だ、そしてふとんを頭から被つて、目をつむつた、何も見えぬ眞暗いけれども熱い面がほてる、——又、熱が出るのじやないかしら、ふとかう思ふと身がずーんとした、心しづかに氣長くおとなしく、こんな言葉が次いで胸にうかんで來る盜汗の後のやるせない辛さ、そんな心地に氣の落ち付のをまつた。

やがて敷布のよれを正し、枕を直し、仰向けに手を下げてすなほにねました何か重い物でも投げ出した後の樣な疲れと心安さとに何も思ふ事が出來なくなりました、枕元の白菊のほのかなる匂ひとかすかなる呼吸——今、今私のうす赤い血は靜に流れ流れて何處ともなく消え行きます。

ユタカといふ名の書方が二日中とよめる。るの字は馬になつてる、それでも盜汗といふ字を知つてるから感心だ。お隣の同係にはよめまい(評)

○宵の廓

深川　矢澤榮子

大門をずつと入つて右へまがつた所、此の所は中店ぐらゐ、赤いしかけを着たのや、紫の毒々しい色のを着たのや、友仙の華々しい、見て居ても眼の痛い程華

やかなのを着たあはれな女が、若い男の眼をくらます様におしろいを店先でべたべた付けて、少さい鏡を手に持つて、紅やまゆずみを付けて居る。

ひやかし客が格子の所へ一寸よると、眞白な顔の女が長いきせるに煙草をつめて、何かベチヤベチヤ言つて男の肩へ手をかけて居る、私は其の言つて居る事が、無意識に聞きたかつた。そして其のそばへ行かうと思つたけれども、何だか其の女にたいして、罪惡の様に考へたので、すぐ横を向いて歩き始めた。

向がはの家では、もう客が上つたのか、二階は大へん陽氣なさわぎ、トテトントンとどいつも聞えれば、サノサ節を歌つて居るのも、ナンテマガインデセウ……なんて、いやにわざとらしい聲や、三味線の音が少しさえないと思ひながら店を見ると、八人ばかりの遊女はさも二階のさわぎがねたましさうに、アーフとあくびする女も有つた、あゝ斯うした女は何が樂しみで毎日生て居るんだろう、夜毎にかはるあだ枕とはほんとに哀れだ、もし私が彼等如き運命に往つたらどんな心になるだろう？知らぬ男の氣嫌を取つて、少しばかりの金の爲に、人生の花の時代を彼の如く泪で暮すのはどんなに悲しいだろう？

フイに氣が付いたら、路のせまいやつと車が一つぐらゐ通れる様な横町、兩側の店から、雇人までも庇髪も、島田もいづれもあまり美しくないのがチヨイトヨツテイツテ頂戴な……あゝいやだ、斯んな聲を聞いて私は實際頭が痛くなつた、親の爲に身を沈める女？情夫にみつぐ小使錢をこしらへる様な女だろう？自問自答して見た、けれども私はどうしても親兄弟の爲の様な氣がした、戀の爲には命も惜まない女も有るけれども身を汚してまでも、戀の爲につくす女は有るか知ら、あゝやつぱり親の爲め夫の爲にあんな苦勞して居るのか知ら……二人の若い男が、ギフとかウマとか言ふ男にひつぱられて居る、次の店では、十七八の島田に手を握られてグニヤグニヤになつた様な顔をして居る、馬鹿な男も居る。チユーチユーと鼠鳴とか下品な聲だ、金一圓五十錢、と札が立つて居る、あわれ彼の女等は、彼が如き、少なき金の爲に、女の清きみさほを汚してしまふのか知らん、あゝ女から見た彼等の心は、どうしても、わかりません。

薄つぺらな觀察だ。さほど驚きもせ　河野槇子が此所を見るとはじめて行つて見たのではないと見える。名月れい子かに書かしたらどんなのが出來るだらう。（評）

○ある日の日記

紀伊　夕涙

此頃の空はよく晴れる、今朝は手さきに冷たさをおぼえる、雪積むといふ北國はもう雪が降つて居るのだろうか、一度でよいから銀世界の雪景色を見たいものだ。

其後本屋から女子文壇を持て來た毎月二日にきまつて居るのに、此月は何したのか早い事だ、早速讀んで見たが、そわ〳〵と心が落付かないで目ばかり走らす妾は此毘の樣な皆樣の御文章に接する度、動いてるにひとしい自分の存在が今更の樣になさけなくて散々なやまされるのだ、けれども、こうした苦しみは自分を少しづゝ明るい方へひつぱつて行くのかも知れぬ。

夕方頃で評判の高かつた大金持の△△へどこやらの豪家からお嫁が來るといふので、無關係の者まで大さわぎして居る、宅の兩親迄此度來るお嫁樣は持參金八千圓に乳母が三年問付添で、五十圓より下の帶は無いのだと、一體たれがこんな委しい事をふれ出したのか知らぬが、帶の値段までちやんと知つて羨やんでゐる。

何にしろ門外漢の自分には用はない。金を持つ人は黄金粉を全身にまぶつて人々をアツと言はすのが目的だらうし、美人は美で誇り血と肉との外何も持たぬ自分等は、其あるものをたのむのみ、よきもあしきも、個々の持てる運命ではないか、他を羨やんで何になる。

人生の航路如何を知らずにおひな樣然と乳母に手をひかれて嫁ぐ人の後の想こそ憫れなものだ。

さう悪く言ふもんぢやありません、サキサマぢや何を貧乏人がと言ふてらつしやいます（評）



坊や　金澤市　中田なべ

○もらひ風呂

大和　河崎八重

いまし狂女の狂へるが如き木枯はゲラ〳〵と嘲笑のうなりを立てゝ走り去つた乾燥したすべてのものに狂的なキスを與へて……

凄い靜寂の中に何者かが神祕なさゝやきを次から次へと運び去つてはスル〳〵と黒き川面をすべつて行く。楓や銀杏はては籾のついた藁などの燃した煙がスツキリと青く澄んだ空に水柱のそゝり建つた樣だ湯加減を聞きに來た靜樣は窓の下にうつとりとなつていらつしやる美しいお顔少し細すぎたお姿、青い月光に大理石の人形そつくりだ、「今夜は何んだか馬鹿

に金剛山が高く見えますわ氣のせいか知ら?」窓外から仰しやる仰ぎ見る葛城山脈黒くよこたはつて頭上に迫つて居る「大戸の峰から堺の大濱みえるつてね、來年の春は登りませうね、天氣が好かつたら明日でもいいんだけれど……」

火口の外へ黄色な火がはみ出てゐる邊はパット明るくなつた「宅の父なんか若い時あずこ越して大阪で用逹して堺へ戻つても太陽があつたつて云ひますわ、貴女おはひりなさいよ寒いから」「じや狹くても御免なさいよ其れから月が好いから閉めないで燈火を消しませう」柔らかい袖の香を含んだ湯氣が二人の血汐のみなぎつた、さわれば赤き血のほと走らむ肌の周圍をふうわりと巡つては、そゝる様な若い肉のにほひと融和されて其處に、ある若い若いものを引摺つては冷い大氣に吸ひ込まれて終ふ。開き肩ふくやかな雨の乳!水滴らん豐き髙髷!「何んだか惜しいわお閉めなさいよあんな荒んだものに觸れさすのが」パッタリ閉めて二人は笑つた瞬其刹那の笑ひ、感情、眞紅な眞紅なものであつた。私は私の心に醉はされて居た。

「いつまでも青春はとどまらないと今に見ておゐで自惚れにも程がある馬鹿らしい」誰かの冷笑と嘲りの聲が聞こえる。ぺり／＼と薄紙の様な處女のプライトをめくり去つて淋しさと、はかなさがひし／＼と襲ふてくる、いつか嶺は曇つて居た「一夜明くれば又氣も晴るゝ花の盛は栫屋敷」樂むさうな聲で窓下を唱つて過る。月はいつか暗くなつて火口の薪木はつきて居た。

「大和は五條の帶屋の旦那」と異つてえらい文章家になりさうだ、がしかし目を放すと金剛山のてつぺんから茅渟の海へ身投をしさうで危くてならない(評)

[redacted](評)

○おもひで

飯田町　琴子

田舎芝居のまねきの絵がどんなに美しく映じたらう?その廣告の樂隊の音は如何に快よく響いたらうさらに一座の中の洋裝の女をどれ程羨んだことであつたか。

嫌ひな母にせがんで無理に一度つれてつて貰つた後は——

敎盛を演じた若い旅役者の面かげを忘れることが出來なかつた、興行のあつた一週間と云ふもの何かにかこつけては家を出て來たんたらの幕をくゞつた、醉はされたやうな氣分になつて日のくれ／＼に歸るときまた明日——といふ儚かな希望につながれて居たが最後の一日はそれも消えて物狂はしく泣きたかつた、いつそ死んで仕舞ひたかつた。

——一座、旅から旅とめぐる間には思ひやられぬ苦しさもあらう、譯もない朋輩仲間の爭ひも興業主の壓迫もあらう、その間にあの敎盛を演じたやさしげな人は——霜の朝、雨の夕何を思つてゐることか、佗しい秋の落日にどんな怨を訴へるであらう、あゝあのうるみを帶びた眸に何を凝視めて居ることか。

白い洋裝のあの女は………

氣障な人眞似の文章である、北原白秋の詩と吉井勇の歌とを一つにして捏ち上ればこんな物はお茶の子サイ／＼で出來る、かういふ眞面目に氣取つた滑稽の態度を見ると、これでも女だらうかといふ疑惑が起つてくる、男ならば十八九中學の秀才で文章世界の短文に浮身をやつす一人である(評)

○暗い町

大分　美音子

叔母の家を出たのは、彼れこれ九時に廻つて居たらう。火の息と人の氣とで熟した體の全體から冷たい夜氣が骨まで透る様にぞく／＼沁みこ[redacted]

眞黒い空に、數知れぬ星が瞬きもせず見詰めてる、冷たさは一ぱいに充ちて、所々の街燈まで輝きなく氷つた様に寂しい。白壁土塀の長く續いた死んた様な屋敷町の、棒で敲いたら、かん／＼鳴り相な道に美代のチョコ／＼走りの日和下駄の音が耳にさゝる様に高い。無言に右に折れて左に曲つてしもたやの多い町に出た。少しは寒さの薄らぐ様に戸の節

穴や隙間から燈火が流れ出てる。マフラーに顎を埋めて體を小さくして歩んでると、

「あの今日、こゝの息子が兵隊さんから歸へつたのでございますよ」と突然言つた。時事報つて名の附いた、美代は毎日娃を負ぶつて出歩くので何でも能く知つて居る。振り向いて見たら油屋だつた。二階にも下にも明々と火が燈れて賑やかな人聲が聞える、が、道に高くつるした色目の分らぬ萬國旗が、はたはたと動きもせず黒く垂れてるのに、云ひ知らぬ哀愁を覺えた。——行き過ぎると、——二年の義務!!

私の一昨年の冬は高女四年！昨年は補習科！今は！と系統的に直ぐ閃めいて頰は熱した。

吁いつの日が來たら、いつの日が來たら、振り返つて笑む時が來るでせうか？——絕對の破壞力持つて我に凋落を宣言する時！それに向つては正面に見る事が出來ません。周圍の人に對しては、勉めて强く衒ふてゐても欺いてまで、泣く可き時に私の唇は冷笑ふてるが、吁時に對しては……………何事も知つて居ますもの、熱い涙が落ちます。

此二年！私は決して誰の田舍の娘の樣に無爲に暮したとは思ひませんが、見かへれば我經た道は只一色に何等の光りもありません。唯一線、只一點！輝ける紅を印したい計りに、何事も犧牲にして努力したが、吁！皆徒勞でした。けども決して今になつて徒勞や、すれちがつて「下手の橫好き」と唾吐きかけられて侮辱される苦痛に耐へられないのではない、が、我に制限あるタイムに心焦ります、吁もう自由の域も短うなりました。

過去も見たくない、未來も考へたくない。其日其日に、素質のないと知りながら起り來る此强い執着を、思ふまゝ滿したい。暗い思ひはつのる。

右に折れて初めて明るい町に出た、蘇生した樣な氣持ちがして俯向き勝ちの頭も上つた。

人つ氣のない兩側の店の電燈が、死人の目の樣に表情なく黄色に燈れて、黑い道の所々落ちた白い紙の色が冷たい。冬の夜の街は動かない。

いたましきは才ある女かな(評)

◎初戀の頃

信濃　世良田優子

唯寂しかつたのです、唯悲しかつたのです、唯泣きたかつたのです、それは何のわけか何の原因かどうかして見出さうとあせつても何物をもとらへる事が出來ませんでした。心は虛だつたのですもの、やたら人と話すのが嫌やで賑やかなのが嫌でした、よく家の者はお祭りや緣日に出かけましたが、私は決してゆきませんでした、行き度くなかつたのです、そして唯暗い處や靜かな處や寂しい處で泣きたくて泣きたくて耐りませんでした。楓の葉が暗い程茂つて六月の日光がきらきら光る窓の側へ眞白い被ひの枕を持ち出してごろり寢轉んで腕を兩方から頭の上でくんで澄んでゐる空をずんずんゆく雲を見たり、夕方など裏の靜かな戶によりかゝつて野からつんで來た白と紅の花の花瓣を一つ一つくづしてそれがハラハラ音なく足元に散らして日がくれる迄立ちつくしたり、河のはたをあてなく步いたりして、私はやたら泣くのを好みました、唯わけもなく泣きたかつたのでした、もし其時この涙に宿る或影が有つたらこの涙はそこに涸れてしまつたでせうに、あゝ幸でした、ほんとに私は幸でした、其場合に認かれなかつた事を感謝します、或物に……罪でせうか——もし罪としたらほんとに淸い罪だと思ひます、けれど私は今日までその淸い罪ではなくて淸い涙を有つ處女である事が出來ました、私は勝ちほこつた樣な氣がします、これから先處女の名のつく處までかうしてゆかうと思ひます。

今になつて漸くその折の心が解りましたそれは十五の夏でした。

これだけでは下さらぬ、破爪期の微妙なる處女美は「たけくらべ」に描きつくしてゐる、が白狀すれば自分などはみどりの母が湯かげんを見た心もちは知らなかつた。女ならでは筆をつくるによしなき題材であるもつともつといゝのが出來るでせう(評)

◎淨瑠璃

淺草　藤井若榮

私が未だ六七歲の頃、獨身者の叔父が外出の折などよく祖母と二人で

留守番に行つた。

ポンチ繪や千代紙の並べられた店の後に、私は三枚續きや二枚續きの錦繪を取出してはお祖母樣に芝居の噺を聞かせて頂いた。

今から一昔半も前の歌舞伎役者の似顏、團十郎、菊五郎、女寅、福助等で、廿四孝の十種香の場や、狐忠信の道行、御殿場、などくどい程色の濃い繪の具で塗られた、繪紙は華やかな目さむるやうな舞臺面を忍ばせて一度見たいと思ふ念を起させた、然し私は芝居を餘り好まないのでついぞ見た事もなかつた。

十になつた時だつた、直ぐ後の家へ常盤津のけい古にゆく樣になつた二つ三つ上げてお月ざらいの時には、始めは只床の上へ上つても無心に語つた、無論調子もはづれてゐたらう。

自分で彈語りするやうになつた頃には、少しでも上手にと思ふ念がわくせいかして、大勢聞いてゐる人があつても、はづかしいといふ樣な心は何處へか行つて仕舞つて、廿四孝を語つてもうつぼ猿を語つても、あの錦繪で見る樣な美しい場面が自分の目先にちらついて、それ等の人達が舞臺の上であざやかな仕草を仕てゐるやうな氣がせられて自分で語る淨瑠璃に涙をこぼしたり、口惜がつたり、おこつたりした事もあつた。皆樣は何んなお心持でお語り遊しますか？

彼の人形芝居を見ても使ふ人よりも、義太夫を語る太夫が上手でなくては引立ない、俳優が芝居をするにしても淨瑠璃が下手であつてはやはり引立つまい。

彼の、何々太夫と云はれる人たちが、高座で語る時の感想、感情が聞きたい――私はお琴を知らないけれど皆樣が三つの指に爪さしてお琴の前に坐つた時、ヴアイオリン肩に遊した時には――樂器が鳴ると同じ樣に心の持方も鳴るでございませう、――折があつたお聞かせ下さいませ今度の誌友會にはきゝものですね（評）

○聲のいゝお淑さん

佐渡　小田切錦子

わしのおもはく狀に書くならば八丈紙にも書きあまる――。シーンとした夜を通して、お淑さんの歌がハッキリと聞えました。マーなんと云ふいゝ聲でしやう。そして秋にでもすがつて思ふさま、泣きたい樣な親しみのある聲です。お家は旃家でそこの愛娘に生れたのだけれど、四歲の時あやまちで遂に失明の人となりました。それからどう云ふわけのつたのか、去年の春から兩親の止めるのをも聞かないで、あんま業を習ひ、毎夜一人の女を連れて天性のいゝ聲を張上げて、町を歌つて歩きます。「私は一生歌つて終ふのだ」と、語つて居る相です。此島の人はお淑さんの廻つて來るのを待つて居ます。或人は働きの中に、又或る人は夢の中に、聞いてウツトリと身を忘れて樂しむさうです。

此間も位ある都の人が、三層の館に滯在中、そのつれ〴〵にと呼んだけれど、私は座敷で歌はないのですと、キッパリ斷はつたと聞きました。

今お淑さんは十九、未來は長うございます。私は此人が淸い美しい心で、歌ふ歌の流れで、永久に此佐渡ケ島をつゝんで居てもらひたうございます。

永久におよしさんの聲を聞くお積ですか、それぢや横濱へはもう歸らないのですか、且那樣がロクロ首になつてゐはしませんか（評）

○くらさかげ

にひ潟　菊　子

「ためなんだものどうしても」

なきたくなつてしまつた。思ひきつて[illegible]、机の上に頰杖ついた。灰色の表紙をみつめたまゝ、あゝ今いたましいみぢめな、云ひやうのない思ひの中に自分は目をつむつていきてゐるのだ。

母さまも父さまも姉さまも……

一人一人にわきでる胸のかなしい思は、やつぱり或一點に集つてゆく

のだけれど多。

自分一人のなげきではない。強い心のころに、おびへた樣に筆をとつたけれども、手がふるへる。一つ一つ字をならべてせめて悲しい思を。書きとめようと思つて机にはよつてゐるもの〻修養もない私にはあふるゝ思ひを有のまゝに書きあらはすことが出來ぬ。

日毎にちゞんでゆくやうな自分の性をかなしみつゝもそれを自制する事ができぬ、心のはかなさ。

なつかしき土地にゆきて、なつかしき友にまみえてなつかしいと思つたのはほんの一とき。あなたは活潑な方ね、と友はいつた。しらず涙をぬぐひつゝも、あゝ私の終生の友たる人はないんだ。

かゞやきある布もておゝひし心の表面、たれがかくれたる裏面の苦痛をしるはずがあらう。

無理なのだ。自分の個性を人にしらしめんとしても、幸福に充てる友の及びもつかぬことなんだもの、歎きつゝ世を渡るさびしい女、意志の薄弱、かぎりない望はやぶれて路傍にさまよへるあはれな女。あゝいたづらに十八の年もゆかんとして。

師走の月はうるほひもない唯つめたい光をはなつて。



老たる母　　青山　中村弘子

枯れつくした雜木林の上を無意識に走つてゐる。

つめたい夜風がみをきるばかりにはだにしむ。

私はまどをしめて、燈火もつけないまつくらな一室にノートの上につゝぶしたまゝ

あゝせめて、かゞやかなりし幼時の思い出をわすれたい、さなくば此まゝいつてしまひたい、ひやゝかなるベットの上でもいゝ、唯永久に心のやすらかなる天國にゆきたい?。重い頭を上げた時にはつめたい涙が頰をつたふた。

何故?(評)

○暗い道を歸る時

伯耆　新田文子

「いゝぢやありませんか、こんなに暗くなつてから、女一人が歩いて歸るなんて、あんまり沒常識ですよ。」

理性一つぺんの、友は、冷笑的に斯うおしやつた。「今夜は、月のない夜です。」小い、歎いふるひを帶びた聲で、また一人の友は斯うおつしやつた。そして、ハツと視線が逢つた時、やさしい弱い女性だけに、ギラツとつゆが光つて居た。

姿は、これらの友の言葉を、聞い

ても、聞かない振りで、日暮れになつて校門を出た。小い田舎町の低い軒さきにはもう電燈がついて居た。

歸りたい――伯耆富士の裾の我が家、――

斯う、はりつめた、ひとすぢの心は、くろがねも、貫く程、堅くて強かつた。

夜が何であらう、月のないのがなんであらう。

女の弱い足と言つても、此の五尺に五分たらない體軀と歸るつていふ心さへあれば、月も星もない夜の暗い道位は、なんでもない。けれど初冬の夕ぐれの風は、暗い道を歩み行く妾の心を、やゝもすると、弱からしめた。

涙にうるんだやうな、おぼろな、小い月が彼方の山の端から、雲間をもれて出たが、また、厚い雲の間に、かくれて終つた。

放浪の旅から、溫い父母の家を戀ふて、歸り行く子には、月も同情しないのか、われから進んで出た、此の放浪の旅――つくゞゝ悲しくなつて、心ない月にまで、涙が流れた。

裏屋敷の、銀杏の落葉を、赤い鼻緒の草履を穿いて、カサリカサリ、つていふ、なつかしい秋の音を、胸に響かせながら、歩いた時、「あゝ、放浪の旅――」つて、どんなに、憧憬れたたらう、出來るだけ、詳しく神秘に想像して、放浪を慕つた。

ねがひ叶つて、實現せられた此の放浪の生活!!

紙よりもうすい人情のいくぶんを、知りそめた姿は、今更に、かつて慕ひし放浪の、夢なりしを、痛切に思ひ初めた。誰れの命でもない此の放浪の生活――、何故に自分は好んだのだらう？自問自答に、苦しむのである。

あゝ、いつも、鹿の子絞りの帯上げを、帯する毎に、そつと、背にあてゝ前にまはつて、結んで下さる母のいつでも、プーンとする、乳の香が、思ひ出されて。たまらなくなつかしい。

戀しい父母の家までは三里はある。三里の暗い道を女一人で歩くとはあまりに没常識な、愚者の眞似かも知れないが、矢もたてもたまらない父母の顔が、戀しい。没常識、愚者、こんな言葉は何でもない。

一人の旅人だに通らない、月も星もない暗い道を、襟巻に頭うづめて涙しつゝ、家路をさして歩いた。

この「放浪」に疑ひあり、學校へ遊びに行つたゞけで、放浪はちと恐入る（評）

○熱の記

本所かすみ

日は暮れ切つて、又私の面は熱く成り始めた。

「戀人の姿を夢に見ばや等思ひて熱き面伏せて見る「否々？私と彼の君との間には、戀の熱情は燃えて居ない筈だ、唯、懐かしい友として、交はつたのに過ぎないのだ。其れだもの、「我心よ戀等とは夢にも想ふなよ」想ふまい、想ふまい、戀などゝは。

打ち絶えし御消息無きに君を恨みて――その元様、私は今度、愈々いさぎ良く退社した。君に頼まんと、思ひし事も、現は頼むまじく別るゝ可き事か。

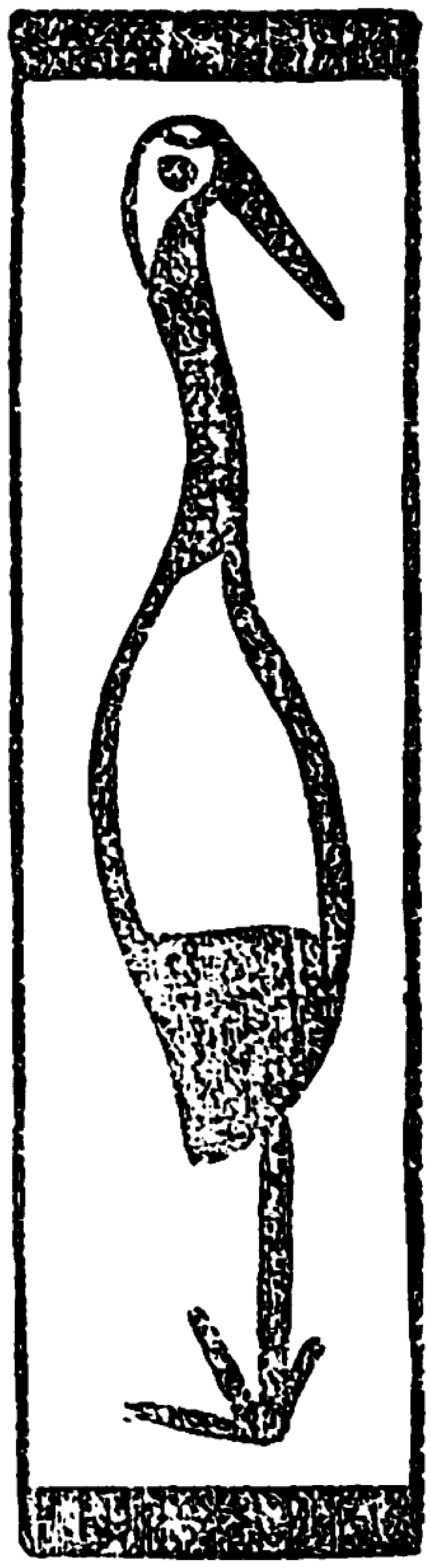
と。云ひそのみ別れんものかさにあれど
さにはあれどもなみだ濡るゝ
さらばいざ幸くと許り書きさして
さても怪しや筆の捗たひ

八日。私は彼の君より、此短かき手紙を受け取つた。……退社！別れる！分らない、分らない、退社なんて嘘らしい。

君に交はつて唯つた二ケ月！それで別れる――交はつて下さいと。私は頼んだのではない、お迷惑とは承知の上と君は私に向つて頼んだものを、私は、欺かれたのか？此手紙も私を欺かうとするのか？

御交り下さいと。云ひたら、今度は自分から別れる、と。云ふ。男と云ふ君は、斯んな冷淡なものなのか。――其手紙には彼んな事が書いてあるし、別れたくなつたものだから、退社等と、宜い加減の事を……其れならよい――私だつて！私だつて。

雨が降つて來た。賑やかな大通でも、雨が降れば暗く寂しい、商店の瓦斯の灯さへも心細くなる。フト！腦の中の何者かゞ囁き出す、あゝ忘れたい！



和歌　與謝野晶子選

○（天賞）　筑紫饒子

世の外になげ出されけん一日をおだしてあれどとがむるもなし

○（地賞）　麹町　牧野伴女

毒ふかき花なとりそと云ひしかどつひに君つむせんすべもなし

○（人賞）　宮城縣　齋藤静子

美くしきこの少女子が忍びつゝ手のひらに置く南天の實よ

佳作

○　京都　ほづ枝

絹絲の如く細々のぼり行く烟草の煙それもいとよし

○　備中　小見山春

わが歩む道に非ねば聖者達開きし路を横ぎりて行く

○　美知子

また人の思ふといふを憎み得ぬ二心の人を罪せよ神よ

○　伊豆　渡邊やす子

夕ぐれをゆき戻りして野に迷ふ旅人に似るふぢばかまかな

○　岡山市　立岡房之

夢に會ひ夢に語らひ誓ひつる君に似たればにくみあへずも

○　京都市　中野婦美子

かゝるべき神のさばきと少女子はおもへど涙頬をつたふかな

○　土佐　はぎ子

若きわれ戀よりさめし身の如くさびしき歌をいかでよむべき

○　大分縣　小夜子

新らしき鏡抱へてかへりこしわがはしたてそ春めかしけれ

○　本郷　平塚白百合

水色の初秋風のうるはしさ髪をすくとき櫛の歯の鳴る

○　近江　鈴蘭

京の秋永観堂に千代紙の模様の如く紅葉散り敷く

○ 伊豫　軒の雫

何故か心はひとりいら立ちぬ土よりのびし赤き芽を見て

○ 下關市　今井貞子

歌澤の師匠のうちの紅き灯にうつりて匂ふ君がかんざし

○ 渡島　佐々木惠津子

ことごとく神の子と見てことごとくうたがはざりきわれ昨日まで

○ 群馬縣　新井つま子

世のさがにやつれし人の横顔のいたましさもて秋の雨ふる

○ 信濃　長谷川赤女子

百人の男の子に許すてたへともあらぬ言葉われに君きく

○ 越後　幸子

乞食來ぬ萬葉集の歌一つ日にもゝちたびくちずさむ彼

○ 長崎縣　馬淵貞子

天女われ下界に來り夏の野の紅き苺をつむとおもへり

○ 京都　森本俊子

薄ぐらき冬の渚に傷ましくなげ出されし鳥のなきがら

○ 堺市　小林いし子

何げなく心に泣きて別れつる人の戀しさかぎり知られず

○ 府下　きよ子

にびいろの夕日かくれてしはふきのこゑひゞく家いとも寂しき

○ 渡島　岸浦露華

めでたかる女と生れ夢のこと若き日過し今日となりぬる

○ 埼玉縣　中澤高子

いみじかる我初戀の心をば我父母の知らぬ悲しさ

○ 大阪市　杉山花枝

泣くに馴れ涙かはきて笑む如き水仙の花かなしかりけれ

○ 神戸市　綠髮子

偽つきて覺めたる人ととこしへに病める少女といづれ悲しき

○ 豐橋市　浪崎照子

靜かなる朝戸によりて鶯の初音をきくかわが思ふ人

○ 大阪　田野靜子

檻の外に群れ立つ人をものともせずねむれる虎の心いとよし

○ 大阪　田野しか子

夢の如霞たなびく松の上白羽の田鶴の舞ふめでたさよ

○ 川越町　吉田ともこ

あな悲し枯れ野の原に花咲かばわが戀するに似んと云ふ時

○ 靜香

紅の香にうゑたる我はうら若きよその少女を憎むやまひす

○ 福岡縣　橋本かめの

あたらしきものを求めてふりにたるものをうちすて年は暮れてゆく

○ 千住　白妙女

六寸踏せる白き御髮にはゝ君のくしのせ給ふ時のめでたさ　神奈川縣　しうん子

○

深山路にたきゞあつむる賤の女のうたゆるやかに春のきたりぬ　岡山市　石井幸子

○

怠りし身をば悔めどすべもなし極月と呼ぶ日のうらめしさ　埼玉縣　とし子

○

さいはひかいなかは知らずあすの日に夢もつ駒はひた驅けりゆく　靜江

○

いにしへの奈良の都に來て見れば光明后のいますこゝちす　富山　村山吹子

○

淋しさのやるせもなげに庭の木は今日も泣きけり冬のはじめを　梧桐知登子

○

春の山まろく浮びて見ぬ國の人もそゞろになつかしきかな　伊勢　瀬木矢枝子

○

春立ちぬ戀のこころのほの見ゆる女子のごとく木々に芽のふく　東京　爲の榮

○

黒かみの一つ〱にしむごとくさびしく年の暮れてゆくかな　神田　伊藤かほる

○

訪へど君は居まさず木枯の寒く吹けりし家ありしかな　後志　櫻井露香

○

處女てふ誇りに愛でし黒髮を斷てとのたまふたらちねの聲　大阪府　辻井信子

○

胸をやみ一里ばかりの醫に通ふ車の上の春の寒けさ　岡山縣　蘆舟子

○

美しき小箱に秘めし歌の反古燃しとりなば煙たつらん

○

屋根裏を五尺のとかげ這ふと言ふ五尺のとかげ見たくもあるかな　豐後　夕草子

○

戀と云ふ匂ひの淡く泌み初めし處女心のおづおづしさよ　常州　大野つね子

○

棕梠の葉に霰ふる夜を只一人火桶の灰に文字書くはたれ　兵庫　紅雀

○

なつかしき友まつ宵のともし火にうつれる影もさむし初冬　佐渡　わくらば子

○

おん心われ知らざりし三年まへよみつる歌をすべて火に燒く　いばらき　浮舟

○

わが病かたらず笑まずひとりゐのさびしさに似る山をばよろこぶ　足利町　名無草

○

女てふ名の下にあるかひも無く髮の少きはづかしきわれ　茨城　磯の芦香

○

白粉のにほひ深ふ夜の樂屋師走の旅の女役者よ　神田　石田美子

○

枯野原一株赤き茨の實にいたく〱しくも時雨降る哉　青森縣　畑山たね

○

榾をたくむしろをのぞく野狐のかげおもしろき春の夜の月　青森縣　名久井きよ

○

今朝もまた霜ある大路車ひきゆく子となりぬうらめしけれど　上總　五木田きく子

○

髮にぬる香油が光る日が光る赤きコスモス風に光れる　大分縣　萩の雫

○　豐後　小屋凸凹生

人ならば袖ひかへてもとめましを逝く春の神おふすべもなし

○　島根縣　加藤茂子

ふるさとの五戸の小村のたそがれて白羽の鳥の一群すぐる

○　岡山　成美

をとめ子は取りて碎きてすてにけりばらの紅きに罪もあらなくに

○　相模　中村貞子

おもふこと今はうしなひ潮鳴りを夜毎きゝつゝひとり寢をする

○　周防　美女子

妹は調子はづれの三味をだき吾が泣く時も歌うたふなり

○　加賀　野口外榮

我が厭ふ男が我を思ふほど我思ふ人思へなど云ふ

○　加賀　勝崎きく子

うらわかきもゆる血汐をしづめんとあつき涙をはりする我は

○　埼玉縣　大郷米子

けふのみは我が頓白の胸の毛の赤く日に映え涙わすらる

○　千葉縣　伊東さく子

草も木も枯れたる野邊をわれ一人母のみはかに急ぐもかなし

○　信濃　世良田優子

泣くもうし歌はんもうしされば唯たゞ默してよりぬたそがれの戸に

○　岩代　光子

銀杏葉の一つ一つに歌書きて都の友に消息をする

○　福井縣　土屋智惠子

底しれぬ愛をかたけて訝する君がなさけに死なまく思ふ

○　三國　堀端夏花

水際にたゝずむ君が長き袖の風に吹かれて匂ふ夕ぐれ

○　草の門

しめやかに秋雨ふりて君おもふわれを泣かせぬ夜のあくるまで

○　群馬縣　塚越稚子

うつそみは終に死ぬてふことわりにわが世のことをおろそかにする

○　金澤　森きよ子

少女子の心ゆたけく一人泣くあとに擴がる室の明るみ

○　岡山縣　赤木あさ

發車の宣旨それより嬉しきは君の口よりもれしみことば

○　同人

菅かるゝ沼のほとりにひとり立ち遠ざかる君を思ふ寂しさ

○　美作　橋本榮

さし出づる朝日の影をなつかしみ顔そめて立つ福壽草かな

○　越後　清子

美くしく日記染めさせずわが生に何加へざる一年の日よ

○　備中　小見山春子

御神樂の群集どよめく中に居て戀をおもへばやゝ悲しかり

○　福井縣　佐々木さだ子

人こふる心のうつる心地して朝の鏡の恥しきかな

○　大阪　久子

人形に君が名つけて遊びにし昔こひしきふるさとの家

○　大阪　梅邑芦香

うらわかきはた美くしき都べの稚たくみ泊めぬ白梅の寺

○　小樽　白英馨

新らしき戀の粧にかゞやける冬のちまたの清き足かな

◎ 秋田縣 國子

初雪や紅緒の下駄の歯を埋めて少女なやめり川のあなたに

○ 鶴岡町 野口菊子

あたゝかき夜の情につゝまれて世の波風も知らざりし我

○ 靜岡縣 しをり

日をあびて庭に立たずむ百日紅少女の如く息つきてあり

○ 宮城縣 沼倉ふゆ子

ねがはくばこがらし強く吹きすさみ我が身をたふせまたさめぬまで

○ 靜岡縣 梅原はるゑ

秋一夜涙に明けし朝あるき小蝶の片羽蜘蛛の巣に見つ

○ 上毛 知世野

我が思ふ君遠くして玉章をいのちにすなれはかなけれども

○ 中澁谷 佐藤浪子

病む人の日記をひらけばあな哀れ悲しとばかり外は書かなく

○ 石川 正枝

なにものかもとめてやまぬ海の波それにも似たり少女のこゝろ

○ 渡島國 夕美子

大神の前に誓ひし戀人をうたがふ心のあさましきかな

○ 伯耆 新田文子

戀てふは二十を越えてあるものと人には聞けどうたがひもすれ

○ 大阪市 矢尾君子

わが窓に紅梅の枝立ちたれど寒月の夜の淋しかりけれ

○ 常陸 紫色女

梅櫻いづれ愛づると君問はゞわれのやうなる梅と答へん

◎ 美作 葉蘭

はかなかる戀を抱きて泣く如く殘りの月に尾花おのゝく

○ 福岡縣 長谷川梅子

夜更けて平原の闇走り行く汽車の音にも忘れず君を

○ 和泉 光子

愛らしき教へ子の顔見るごとにくらき心もうちひらけ行く

○ 琴子

枯野行く僧の笠などなつかしみ立てば杜のくらくなりゆく

○ 神戸市 田中港の女

幼子をすかすが如く樣々に慰むるをば知らず顔する

○ 大阪市 小泉さだ子

いら〱とものに抗ふわがこゝろいと靜かなるかのおんこゝろ

○ 渡島 宗原美津子

美くしき夢よりさめて舞ふ蝶と甘き香に醉ふ處女の己れと

○ 大津市 露草子

寶玉に似るとおもひしその人をけだものとよぶ變心者われ

○ 岡山市 柿園白花

捨てがたき顔よと女巡禮のやつれ姿に秋風のふく

○ 山口縣 梛見美那子

智惠たらぬ役者あがりの人なぶり女のむれの笑むあさましさ

○ 信濃 流葉

煙突のくろき煙の立ちのぼる上を月ゆく涙ぐみつゝ

○ 深川 佐久間貞子

心地よくうす雪ふりぬ寒間に出でし二階の初春の屋根

○
アネモネの花のあはれに見ゆる日の蒼ざめてゆく空の淋しさ　信濃　丸山榮枝

○
抱けりし手のゆるみより逃げ去りし心ひとつをなげきにぞする　埼玉　高尾

○
明らけき月見る度に思ふかなわが思ふ子の影やうつると　和泉　かをり

○
落ちつかできゆれ淡雪わが戀のをはりのごとくあとかたもなく　三重縣　駒越くに子

○
ことごとく思ひ出となる去年の日を新しき日に泣くは誰が子ぞ　堺　鈴木喜代

○
死ぬことをうれしきことゝ思はねど生くてふことを戀に思ふ　神戸市　雪の女

○
只一人泣かまほしさに砂山を歩める頬うつ夕みぞれかな　愛知縣　白百合

○
あたゝかき唇にもふれぬさびしさをおもへる人にとしはくれゆく　京都　潮香

○
幸あれと祝へもろ人ねの年を我も祝はん十九さへして　仙臺　妙香

○
此の夕べ浪いと高し海百里別れてあればさしぐまれぬる　長崎市　三根ちさ子

○
美しき花をつけたる毒草に似て恐ろしき心と云ひぬ　岡山市　桃の村

○
しもの路月にしらみて遠方の雪駄の音のさゆる明方　甲府　山岡はま子

○
仙臺　みつ枝

冬の月光ましろき冷笑に夜のものみなを見るがうらめし　越後　田巻てい子

○
匂ふ時なつかしきかな木犀の黄色の花は夢にしも似て　本郷　かね子

○
この里につゝみ名だかきまひめの小車過ぎぬ春の夜にして　深川　鈴木美喜子

○
佐保姫の御聲聞きつと思ひしは鶯なりきうたゝねの夢　紀伊　夕浪

○
春の日に別れんと云ふ酒つぎしさかづきめぐり我前に來ぬ　朝鮮　あき

○
玻璃戸より向ひの府のつらゝ見て身をふるはすと書きおくる文　下關市　倉田慮子

○
波を見て飛ぶ鳥の如怒きて戀に羽ばたくわがこゝろかな　下關市　龜田みつよ

○
ゆく方をさへぎるものは身より湧く惱とおもへばうら悲しけれ　下關市　石川獨子

○
重成の妻のことなど語らひつはらからはらと寄る大火鉢かな　島根縣　細田千代子

○
梅の花眞白につゞく柵間より朝の鐘こそひゞきくるなれ　深川　矢澤榮子

○
松葉ちる林に我は立ちたれどまた留まりて來る人を見ず

○
春來れど君かへらねばわが心ゆく秋の如いともさびしき　中澁谷　佐藤露草

○
紅き花枕にさきて寝たる夜は君とぬるべき夢や見るらん　淺草　藤井若葉

○　上毛　宮田くじ子
戀人の行きつる後の少女子の心に似たる霜枯の花
○　北海道　蒲原てる
事毎に胸のふるへぬやはらかき母のかひなをはなれし少女
○　茨城縣　中島九二
歌を書く筆をとゞめて燈に耳かたぶける春のわれかな
○　茨城縣　直井はる子
世のさがを母のをしへて云ふことの情あまりてわれも泣かるゝ
○　京都府　三宅嵯賀子
南國の柑子の金にかゞやける冬をおもへば旅のなつかし
○　越後　菊子
神無月うすらあかりに山茶花のさびしくゑめる山の家かな
○　福岡縣　しらばな
蝶をりをりまよひ來りて病室のいと靜かなり春の日のひる
○　岩代　Y子
夕月のかげさす窓にわれよれば人しのばれて都戀しき
○　會津　桑原仙子
しかすかにみにくき戀もさめざればうつくしからむそれにならはむ
○　松前　川原菲子
君と昔別れであらむ道なきや片時だにもゆるされぬ今
○　本所　河村みどり
朝の露日の照りながら降る庭に虹とも見ゆる秋草の花
○　長野縣　唐澤喜惠子
かなしくも仇をしめづれうらめどもあふるゝ胸をいけにへにして
○　本郷區　細川しづ子
血をはくと君はなげきぬ血はかねど心の病める少女の前に
○　岡山市　富山千登勢
うるはしく清く尊くやはらかき少女心をわれのみはもつ
○　上毛　ちひさきむね
年行かば行けよと響く鐘の音に小くなきぬこの惑かさよ
○　下野　高村タキ子
君戀ひぬ戀ひて淋しき歌うたふ少女となりぬわれの十八
○　水戸　さゆり
夜の殿に侍りて戀のうたなどもよむと知らゆな細く雨ふる
○　土佐　かたばみ
祖母君ののたまふ事の嬉しさにけふもとく起き落葉かくわれ
○　上毛　冷花子
いみじくも物思ひする母君の御顏淋しく春の日のさす
○　上毛　悲花子
騒がしき埃の街を三味ひきて灯ともし頃を行けばかなしき
○　下野　今井いま子
こがらしや森の大木につどひたる荒ぶ神らの勝ちほこる聲
○　東京　片岡浪子
はかなくも今日また暮れて來るべきうとましき世にひと日すゝみぬ
○　大阪　幸子
戀を知る少女となりし身のかなし花のちるにもふゝ涙おつ
○　長崎　松村登美子
かにかくに冷たき涙頰を流る除夜の鐘いま消えもゆく時
○　備中　小田美鳥
よきことのいつか來べしとまちながら老いても母のかなしき瞳



自然（散文）　編輯局選

○大盤振舞中

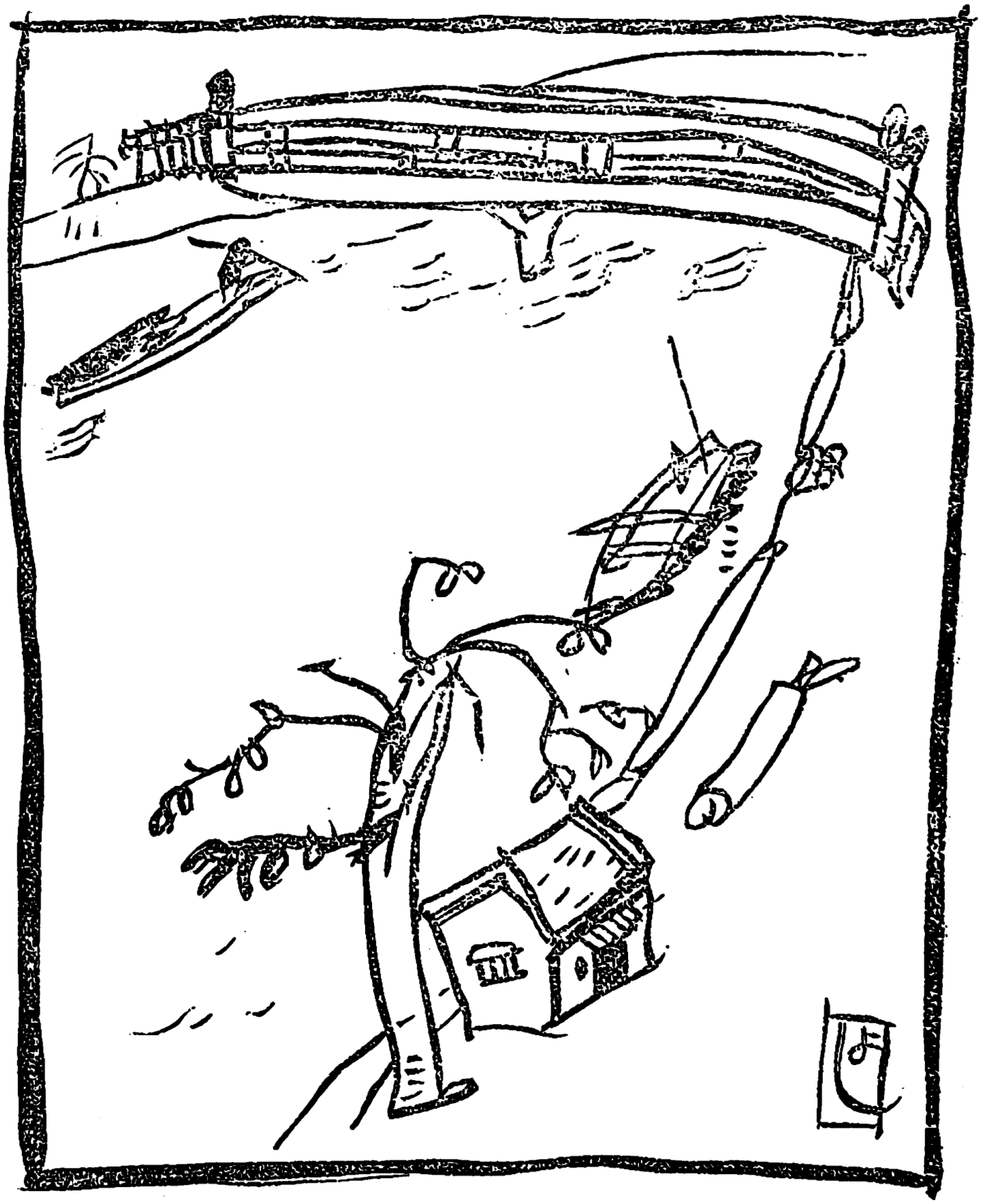
埼玉　碧草

中庭の切戸を出で一年中に幾度と數へる程しか開かぬ表門のくゞりを明けて石段を下りて、樹に近い枝々に少しづゝ見惡くしがみ付いた樣に葉を殘した銀杏の下をぬけて六七間行くと、ほんの家中で喰べる丈のお惣菜物を作つて置く畑へ出ます、私は毎日其所へ行つちやお菜を一株づゝ拔いて來ては雛にやるのです、それは本當に忘れないできつとやりますの、雛はプリモウス種で皆で六羽居ります、其縞細工の樣なからだを比較的大きな足で器用にコロ〳〵と親の後をピョ〳〵鳴きながら付いて歩きます、ぢつと見て居ますとまあてましいやくれな、親の眞似して足で地べたを掻き分けて喰べ物をさがしたり、くちばしで背中やお腹をまろくなつてつゝ突いたり、そうかと思ふとおどけた格好して首を振つてくちばしを土で拭ふのです、其樣子が本當に〳〵たまらなく可愛いのです、此頃では兩脇に親に似た白と黑とのまだらで翼の樣な物が出來てまゐりましたの、泥鰌をやるといゝつて云ひますから、串に差して燒いて置いたのを細く碎いては之も私が毎日やります、そうすると親はまるで夢中でコッ〳〵〳〵と云ひながら一つ所にぢつとして居られないでまはりを廻りながら自分は一つも喰べないで子に喰べさせますの、すると外の雛が來て雛をつゝ突いては取つて喰べようとしますから私が應援隊で遠くから見張つてやりますそれは可笑しいのです、此雛の本當の親どりは例のブク〳〵した不格好に大きいからだで夫婦づれで來ては知らないで居ると皆追飛ばして喰べて仕舞ひますの、だからにくらしいから激烈に遠くの方まで追つてやりますの、そうするとほらからだが大きいものですから、妙な格好してえつちらおつちら、お尻を振つて逃げて行くのがもらく可笑しくつて〳〵「ッニッ〳〵つて掛聲かけて何處までも付いてつてやりますの、「父に何んて種類でしよう」と聞くと、大盤振舞ひ申す、其う云ふのですつて、まあ其麼可笑しなのつてあるでし

ようかつて云つたら本當は横斑ブリモウスだとの事、ほんとうに大笑ひいたしましたよ、其れから私此間ひどいめに遇ひましてよ、あんまり雛が可愛いものですからあの綿の様な柔かいからだを抱へて見たくつてちつとばかし追ひましたの、そしたら親が怒つて方々突かれて血が出ましたわ、本當に雛でさへ怎麼だものを

（地賞）

これはイヤミが無いだけも心もちがいゝ蘇生法師ではないが、おのろけ文學にはもう飽きつちやつた（評）此君も能く主觀的な氣焔と感抑をないませにしたやうなものを書いたが、氣分を變へてかゝつたのは幸ひだ（評）



橋　町　安西よし子

○小春日

光子

夢を見て居るやうな、醒めてるやな、

……うつら〳〵して居る中あたりの暗はだん〳〵淡くなつて窓の障子をかつきり浮き出した。

朝飯後家の前へ莚を敷いて兄様と豆打ちをする。コバルト流したやうな空高く晴れ渡り、日の當る屋根や橋から水蒸氣がゆるやかに立ち昇る、靜かに淸い晩秋の朝である。返り咲した櫻の花がほろ〳〵と散つて、白南天の蜘蛛の巣に掛つた。トン、トン、トンと打ち下す槌の音が靜かな周圍の空氣を破つて、何處迄でも響いて行くやうに思はれる。「去年の今頃はまさか百姓なんかになろうとは思はなかつた」と一人言のやうにおつしやつた、ほんとうに私も夢にも思ひ及ばぬ事だつた。食客と云つても亡き父様の殘された財産を、叔父様に預けて置いたのだから、二人や三人は樂に遊んで居ても困らないんだから、何も大した世話になつて居たのぢやないのに、私が從兄の妻に成らないと云つたばかりで、叔父様は非常なお腹立ち、叔母様迄が其事あつて以來は何かに付けて私にあたら散らすので、都に居た兄様へ知らせて上げると、兄様もお怒りなすつて、二人で別居する事にした。そして叔父様に私共の財産を下さるやうにお願ひしたら、いづか五町歩の畑を下さつたきり、田も長屋も皆叔父様の所有として終はれた、其上、お前の父は××家の總領だからと云つて年老いたお祖母様迄連れて行けつて、いくらお願ひしても、お聞き入れなく、遂に二人して追出されて、兄様も學校を中途で止し、(尤も兄様は苦學しても卒業したいと云つたがお祖母様が承知なさらないので)畑の隅に今の家を立て、野菜を作り餘るでもないが、何不足なく暮して居る、種々な事を思ひ乍ら無意識に槌を動かして居ると、今迄沈默を續けてゐらしつた兄様が「光ちやんもうお晝ぢやないか、僕等はどうでもお祖母様に上げなくちやいけないよ」つて云はれて、初めて氣が付くと斜にうつつてた私しの影が眞すぐになつて振り上ぐる槌の影が目を突くやうに思はれる程日が廻つて居る。兄様七束私が四束打つた、豆がらを、物置の前へ美しく並べて、一息つくと、○○町から△△停車場に通ふガタ馬車のラッパの音が聞えて來る。

未練らしく散り殘つた柿の葉がカラ〳〵と梢の上で鳴るとまた櫻の花がはら〳〵と飛ぶ、弱々しい日光はあたりの寂寥なるにふさはしく柴垣の結ひ目に灰色の小さな蝶一つ羽を休めて居る。（入選）

何ぼ岩代のとばッちりにしろ、亡兄の財産を預かつてい、加減にごまかして了ふ人がありさうもない、親類もあれば世間の手前もある。小說としてもあんまり古いぢやないか（評）

これも純な自然を描寫したものでなく、身の上話が大半を占めてゐないけれど、それでも僅に描寫してある自然のみかたがおもしろいと思つた(評)

きなカルタも相手がなし何といふでもさびしい。
何故からも此頃は寂しいのだらう。

いかにもカチケタ字だ硯もこの通り凍つたとあるが、硯の水が氷になるのは私も見て知つてる、硯が凍ると、どうなるのかわからぬ。氷豆腐?氷こんにやく?あんな具合ですか　(評)

○靜まりし朝

兵庫　紅雀

氷てからもう一ケ月にもなるが、昨夜程の嵐は初めてだつた、今思ひ出しても身の毛がよだつ。

寄せては返し、返しては寄せ　岩にくだくる眞白な浪の花、其の度に、硝子障子へ霧の樣な、しぶきがさつとかゝつて、今にも家ごと海中へ引き込まれさうだつたさしもあれ狂ふた浪も、草木も眠るてふ丑滿時丁度月の出頃からやゝ治まつてもう今朝は夢の樣。

何となく疲れた樣な濁つた海の面には、藻だの木切だのが、浪のまにまに、彼方の岸へ行つたり、此方の岩へ寄せたりして昨夜の名殘を止め



踏切番の女　山口宇吹しげ子

○日記の一節

陸奥　百合香

新しい、いい雪、古い、いい家、陸奥の冬はあくまでもこの外に出ない。

形ばかりは美しいと言はれても、事實は寒くて一向有がたくない、寂しいから酒、寢られぬから酒、いやもう馬鹿々々しくて仕方がない。

筆が凍つて一向書かれない硯がこの通りあゝ冷たい。

今起きてみたら十二時を過ぎて十五分、寂しい、好

て居る。

白帆に一ぱい風をはらませた大阪通ひの舟、木の葉の様な小さい漁舟等幾百となく皆々今朝は蘇へつた様に心地よい旭を浴びて走つて行く。

昨日鹽積みに來てた汽船も、昨夜の嵐を山かげへ避けてたのかプーと汽笛を鳴らしながら、靜かに出て來た。

向ふの岩へ子供が五六人下りて頻りに何か掬つてる、何が居るの？つて危い崖を下りて傍へ行くと、其中の十歳位の筒袖着た漁村には珍しい可愛い女の子が「鰯です」つて籠を私の前へ出して見せた、澤山重り合つてピン〳〵はねて居た。

彼方此方の岩の凹んだ水溜りには、ピカ〳〵と銀の魚の様に鰯が泳いで居る。

子供等は面白さうに賑やかに云ひながら、網や手で掬つては自分の籠へ入れて居る、私も眞似して兩手をそつと水溜りへ入れて見ると敏しつこく逃げてなか〳〵掬へない、一時間程かゝつて漸く十五六尾掬へた其時にはもう前の子供等は何處へ行つたか見えなかつた、只一人話した女の子がぢつと私を見て居た。

私の手には澤山の鱗がついて光つてゐた。

十疋のいはしを何へ入れてお歸りになつたらう（評）

○磯の想

肥前　登美子

沈痛な凛々しい鐘の音が長く餘韻を響かせて幽かに果てしない所へ消えて行く〳〵又継きのが鳴り出す。

私は今永劫の過去から永劫の未來へ續いて居る磯を洗ふ潮の音高い離れ島の秋の夕の海岸に行ずんだ。

夕照にかすめる海の上には白帆の影も無く磯には人の姿さへ見えない……嗚呼美しい潮は深浪又淺浪、流れ〳〵て或る時は橄欖の風薫る秀麗なる伊太利の海岸に宿り或る時は氷塊が所々山の様に浮いた暗い死の影の様はつてる寂寞な北極の洋も經つたでせう……思へばなつかしい潮！かりそめの間も忘れ得ぬ兄様の居らつしやる北州の海岸も私の生涯ちげ

た越後の濱も洗つて來たでありませう……。

……靜寂な又悲哀な氣があたりをつゝんで……私の頰にはいつしか熱い涙が止度なく流れます。

死んで別れりやぜひないけれど……。

ぎゆつ〳〵と櫓聲と共にきこゆる肉聲……想から醒めて瞳を放てば夕照かゝる海の上を小舟こぎ來る海士、片はだ押しぬいだ、其腕は南蠻鐵の様……

夕ゆふべに渚にいでゝ

親ぞ思ふや兄忍ぶやら……

再度の歌に私は思はずぶる〳〵つと震へて砂の上に打伏しました……もしやこの海士は私の心を知つてるのではないかと高鳴る胸をおさへてその面を見つめました、けれどその大きい眼ははるか限りない沖の方にそゝがれて……私はホツと息をついて立ち上りました。

夕風寒く袖に吹いて又哀れな鐘の音が澄みに澄んだ海の底へ吸ひこまれる様にひゞく。

小島の秋の夕もまさに暮れむとして……。

も一息（評）

○雪降りの午後

安房　柴山靜江

午後になつて此の例年にない、雪は歇んだ、空がもがつかりした様にほんやりした、お君た騒いだ心も靜まつて、又水を汲みに出た時釣瓶の底は重く成つて抑へた鍵の手から外れ様として居た……

後ろの林はベツタリと俛首れた、冬の櫻にさらく〳〵と淋しい落ち様はしないで、與ひを持つた、雪は竹の梢をぎゆつと掴んで放すまいとして居る。

竹は苦しい呼吸をする様に小さな枝が一つ一つ、ぱらく〳〵と動いて其の壓迫から逃れ様と力めつゝあつた、樹々の幹も悉皆以前の姿になろうとして、ずん〳〵と雪を轉した、庭から先きの桑畑は只一杯に白かつた……

地上數寸の深さに雪は積つて居た、桑畑の端の方に畫に立つた、麥種の少し、黄色く彫れた畜は毅然と其の雪から伸び上つて居た……

其處らには枯れた莖も、ぼつり〳〵と白い頭に上體を擡げた、雪白か

何かゞ菜種の花や、枯蓬の陰の淺い雪に短い脛を立てゝ見たいのか、桑の枝をしなやかに蹴つて活潑にとびおりた、そうして又枝に移つた後ろの田圃では、水こけの惡い田には、降つてる内から溶けつゝあつたので畦が殊更らに白い線を描いて目に立つた。

其處にも堀の邊りに赤い寶の錆びた野茨の、枝に竪になつたり横になつたりして、ずん〳〵と消え行く雪を喜ぶ樣に、頰白がちよん〳〵と渡つた……夕方には田圃の白い線も途切々々になつた、何處の梢も白い物を止めないで、疲れた樣に濡れて居た、雪は悉く土に落ち付いて仕舞つた。

其の落ち付いた雪を突き抜げて、何處の家根でも白い大きな塊の樣に見えた、枯木の間には殊更ら明瞭に目に立つた…… 黃昏の煙が蒼く凋れた空に吸はれて靜な日は暮れた……

そして夜が來た、夜が明けた、この文が出來たんですね。ウルサイ「た」だ。（評）

○櫟林

土浦 大野星鬮

氣がつくと私は丁度堪へられぬ寂しみを抱いた人の一群の樣に、雜然として林を成してゐる、明るい午後の櫟林の道を辿つてゐるのであつた。林の中を冷たい風が這ふと、カサ〳〵と寂しい音を立てゝ落葉が摩れ合ふ。私は吸ひつけられた樣な心持ちで、なつかしい樣な心持ちで、偶と停んだ。

遙かな丘に灰色して、連つてゐる雜木林の向ふを靑々として麥畑が横たわつて居る、その向ふに私が住むで居る里が見えるのであつた。

あゝ私が病み初めてから、今日で最早五月餘、其間床の中にのみ隠れてゐたのである。

私が病み初めた頃は、この櫟林は靑々としてそれは〳〵若々しい希望の色を張らせて、日の光を吸ふては醉ふた樣に茂つて居たのに、今は其若々しかつた色は最早見る影もなくなつていた〳〵しい姿となつて終つた。懷しかつたこの櫟林、眼を遮る物總てが皆明るく寂しい冬の日の光を受けて、泣く樣に立つてゐる。

病みつかれた私の胸はぞく〳〵として堪へられぬ程寂しい。

薄い〳〵吸ひ入る樣な日の光が櫟林の中に滿ちてゐるのを見た時、はげしいおぼらかな匂ひが胸へ沁み込んで來た時、私は冷たい夢からでも覺めた樣にあつい涙がしらず〳〵頰を流れる。道を折れて林の中を步むた。木々の上には小鳥が樂しげに、私をあざける樣にしきりと鳴いてゐるひと廻りあたりの景色に瞳をくばつて、赤く重りあつてる殘骸の樣な朽葉の上に腰を下した。櫟林は森閑として只小鳥が囀づる聲と、朽葉のさゝやきのみが聞えるのである、時折冷々した死人の氣の樣な、風がフーツと身をかすめて又何處かへ竊む樣に消えてしまふ。私はするどい淋しさにこらへきれず、死……死……死の樣な櫟林……と强く叫んで逃げる樣に林を出た、振り返ると野も山も淋も皆もう寂莫として死んだかの樣……私は家へ戻つて泣いた。

小川未明の文になやまさるゝ人はすべからく此文をよむべし（評）

○朝

矢掛 夕美

昨日貰つた計りの猫を夜つぴて土藏の中につないで置いたら、今朝になつて鳴聲の方角が違つて居る。

チョッ〳〵。臥床の中で舌を鳴らして呼んでみるけれど來ようとしない。

黃いやうな靑いやうな曙光が戶の隙を洩れて、消されたランプのホヤと、店と茶の間の境の玻璃障子とにきしづいて居る。

土藏に這入つて見ると、梁中の甥の兵子帶の先きが輪に結ばれたまゝぶら〳〵下つて居た。

夜つぴてあがき續けたと見えて、引かいたやうな痕が叺の上や側について居る、ぼろ〳〵になつた切れ端の小さいのが隅々に散らぼつて居る。

荒い壁格子から拔け出て店の格子の內で鳴いてるらしい。

門をはづして戶を開けると雲が低く〳〵たれて、黃い銀杏の葉のやうな色が陰氣臭く街に流れて居る。

いやに暖い朝だ、逆上せて鼻先ばかり赤くて重いやうな心地がする、

手をあてゝ見ると餘程熱い、小鼻に汗が潤み出て居る。

猫は格子内の傘棚の上で自分計りみながら鳴く。中々手も屆かない、小さい木箱を二つ重ねて起きて來たばかりのやんちやに持つてもらつて上つた。

つかまつた足を強く引張ると『ナアオ〳〵』と撥つたやうな聲で鳴き立てるかみつかれちや大變だだから恐る〳〵。

傘棚の塵が猫がもがく度にちら〳〵顏の上にかゝるのでたまらない。大きなくさみが五つ六つも續けつぱりに出る。

其拍子に足揚げがぐらり〳〵動く、『大丈夫かい』『あゝ』ばさり！猫が乘つかつてた、やんちやの傘が下に落ちると、猫は勝手の方へ逃げて行つた。

『早く早く祖母さんに捕へてもらはないと逃げてしまふわ』

身體中びつしより、手がまるで灰をつかんだやうに汚れて居た。

黃色な街の色が段々薄らいで、靑黑い曇天の光りが上の方から抑へるやうに下つて來た。

「大丈夫かい」はて今の聲は男のやうだつたがなあ(評)

○平和なる朝

岩手　黃川田かよ

今更に、ひつそりと靜けき朝の、冷めたい空氣が身にしみる。早いのだ、だからよく時計を見て起きればよかつたに、今朝にかぎつて、何の氣なしにとび起きた、自分の輕率さがしみ〴〵と後悔される、もう床はたゝんじまつたし、と思ひながら暗い臺所を手さぐりに、お隣へ遠慮しながらソッと雨戸を一枚引いた。外はまひるの樣な明るさ、軒近く枝を延べた返り咲の枇杷の花の月の光にほやかに、霜枯の菊の花さへこき影を地にひいて、見まかふ樣な庭の氣高さ。

手も足も、凍える樣に冷めたいけれどなつかしい月の光に、閉じかねた障子を其のまゝ、ろばたに座つてマッチをすつた、パッと杉の落葉に燃えうつた火はほんのりと障子を染めて、目さめたらしい妹が母樣と何か話して居る。火がよいから起きないかと云つたら早速やつて來た所へ弟も起きて來る、三人たき火を圍んでよい位暖まると、淸ちやんいつものを思ひ出したらしい、あれ燒いてくれと云ふ、あお燒きよとすぐ贊成者が出る、仕方がないからお庭の大きいのを二つにして灰の中へ入れてやる、まだ灰がほてらないから燒けかたいよ、と云ひながら薪取りに出た。

月の光はもううすれて、明の星のみ一人、つみなき小女の淸らかなる瞳の如にまたゝいて居た。

よだれが垂れる(一)

誰が？君がか(二)

冗談をいふな、お嬢さん逃がさ(三)

○夜更けて

會津　B子

私は馬鹿だ、ばかに違ひない、つき落され〳〵惶々と起きて、「花の香に醉ひ花對に睡つてゐる人」を羨んで、私も這ひ上つて、と無暗にあせつてゐる、力がないのに、力がないのに、けどもこのまゝ動かないで、無神經になつて了ひたくもない、全くの木像でもないもの、皆が苦もなく笑ひ興じてゐる時、私丈はちつとも面白くない。自業自得と人はいふだらう。氣儘な奴、我儘な姉、相手にならない人、冷笑、嘲りの的となつて、誰からも除者にされてをるのだ。(机に伏して)

神妙にお仕事もする、臺所も働く、花も活ける。哀しい事を聞けば泣く〳〵これでも人は不具で狂的といふでせうか？つまらないやら、悲しいやら、どうする事も出來ない時、私は人に心を讀まれたくないと、笑つてはしやいで平氣を裝つて、却つて注目をひく時がある。今夜は宵から机の前へ坐つてゐた。風が吹く雨が屋根を打つ、襖越に幾度母に催促されてもねる氣になれない、後風が吹く、電線の物凄いうなりと、堤の巨木のゴウ〳〵といふ音丈でもう〳〵寒さう。傍にあつた丁のマントを被つてジッと座つてゐる内に時計の針が無暗とまはる。いつまでかうしてゐても、何もできないのだけど……睡…何も出來ない。思つたまゝを繰り返してみる丈………。(夜更けて)

夜會嘆の一也(評)

夜の和歌の浦

宇田すが子

出島の港へ急ぐらしい金剛杖ついた大峯山登りのかへりの旅人髑髏を組んでどや／＼と行く、ひる間きいたホラ貝の音はなかつた、みなせはしさうに、さつさつと歩く。

眞直にかすめて行くつばめの樣、自轉車に切つて行く風に着物の裾をまるくふくらかして、リヽリン、リンリン、ベルを鳴して行くきしやな若い男もある。

白粉臭いそれ者らしいコートの女と、脊の高いマントの男とが、離れたり合つたりして、左手の柳の彼方を行く。

ぞろ／＼と行く足拍子につれて、私もいつとはなしにずん／＼歩いてゐた。

何んとなく樂しいやうな氣持がしてきた、胸の底が擽られるやうにをどり出した。

かしうて行くと、どこかよい所へ——觀樂の聲が充實して髮一本すき間のない——そんな所へでもバツタリ行合すのじやないかと思はれて、心はだん／＼と先へ先へと急ぎ出した。

いつか出島と片男波との分れ路へ來た。

自分より向ふに居た足音はみな出島の方へ行く、自分より後の足音も片男波の方へ行かないのだ、私は何故か出島に用はない、今度は一人片男波の方へ行く、いつもの松原だが風がないためか、ピユロー、ピユローの、音もない、沈默を守つて居る、高くかゝげられたアークライト、白い霧の樣な息を針の青ぐろい松葉にふきかけて居る、あゝ針形狀葉と孤燈と。

海も極く平だ、靜だ、ひるの間は磯にぶつかつて、白い花の樣に白い粉の樣に散つてゐたものを、

これから先へ行き樣はない、精神をころして醉生夢死するより仕方ないと云つた風に見える、あきらめの中にも無限の恨みあり、靜止の中にも勞れがある、動機にふれては何時なんどき——私は今でもかうした心持の人はいくらもあるだらうと思つた。

月があると氣がついた、水蒸氣多い南國の空に浮いて居る、目鏡とられた近眼の男がまぶしさうに女を見る樣なシヨボ／＼とした星は所々にある、沖合のあたり鹽津の方ぼうつとかすんで居る。

夏だつた——海水浴の盛な時分、夜だ、ドンチヤンドンチヤンの活動しやしんの樂隊をきゝながらてゝら

を散歩したのは、一高の久敏さんと伯母さんと三人お隣のおば樣におしへてもらつて、片男波へ情死を見にきたのは、海で死に切れないので磯へ上つて硫酸をあふいだ男女のかほのたゞれ、オーチの木のすきまをもるゝ月かげにちらつと見たが――

書生下駄の音は、ガラリ、ガラリ、テニスコートのあたりから黑いかたまりが動いて來る、近づくと一人一人と云ふてとは分つた、七八人の連中、帽子の條で和中の生徒と知れた。

あしべや休所の所を南へ行きつめてすぐ西へ曲らうとしかけたが、磯際の男女を見て、中の一人は、

「コヤ〳〵、エー其方たちは、何をしとるか、何を」

「風儀に害があるよ、そう云ふちゆうそのてとは」

なんて、わざと査公の口眞似で、云つて、ウワッ、と一度にどよめきながら、肩をゆすつて行きすぎた。

私は北向いて不老橋の方へ歩を變へた。

近く奠共山上にかゝつたエレベーター、マンダリンの樣な美しいふるひ聲をたてゝ運轉してゐる、一人足早に進んで發動機すゑつけてある所まで行つたと思つたらすぐ元の所へきて、十九モートル、ですつて、と云つたのりゝしい顔はうかんで來た。

所々空にかゞやくイルミネーション、頂上にそを統御する白熱燈の光り山上にうでめく、すみの樣な人影ほの暗いとてろから私語が流れてくる甘い〳〵。

いつか不老橋の上に立つてゐた、下を見ると眠つた水にボートが二つうういてゐるのが見える、突如として大空を渡る鷺の聲をきいた、其の凄婉な調子も今夜にかぎつて何の感觸もあたへない、やつぱり今宵のやうな鳥の樣に思はれて、私はその聲の音を追ふて足を、あしべやの方へ向けた、美しい甘いぬくい夜の香がみにしみ渡つて花がすみの中を行くやうだ、枝と枝と打ち交す立木のすきから洩れて地におちてゐる月影は月宮殿の花のかげではあるまいかと。

あしべや本館の前、まぶしい花がすの光り、うたふ聲、鳴物の音、極彩色の舞姫、水ぎは立つた島田、はなやかな衣裝、浮世の中の別世界だとしみ〴〵思つた。

評論文

（募集）

「評論文」の欄は投稿が少いので、本號には省きましたが、婦人だからとて、評論の出來ない理由はない、文學、社會、家庭、其他一般の事を題目とした評論文の投稿を切望す……………記者

詩

河井醉茗選

○落陽と花（天賞）

本郷　望月れい

入日どき、
斷崖に顫へ咲く黄色な花はなやまし
く、
爛れた光に泣き笑ふ、

あゝあゝ海の彼方に
沈まむとして燃えかへる
夕陽の紅き光は呼吸ぐるし、
飛沫にぬれて反射する
斷崖の地骨の露出…………
――欷歔く黄色な花よ。

磯草の乾びた匂は、
強き光線に溶けにじみ、
葉裏にひそみたるあをばへは、
勢づきて翅をすり合ふ、

見よ、花の片頬は輝やかしく、
狂ほしきたましひは…………
斷崖にたゞずめる――黄な花を、葉
莖を、
――纖き根をはる形骸の束縛を――
のがれまほしと心あせりに、
――すゞりなく黄色な花よ。

海草の黒き骸を赫々とてらしつ
つ海のかなたに夕陽の舞ひ落ち
むとするひとゝき。――

女性にして此れだけ力のある作を成し得られるのは珍しい、作詩の態度は立派だ、只此詩には此詩だけの持つてゐる或るものがない、自重せよ（評）

○想出（地賞）

神戸市　足立　春子

濃きみどり葉の影
殘されし――花の痛まし
たゞ一つ…………
つやなき色の其上を
十二月中旬の
白き雨
音なく注げば
寂しき想出こそ湧け

山茶花の花
一つ散り、一つ咲く
もどかしさ
花は疲れて
なやましく萎めり

あゝ
漂泊のやるせなき吐息のみ
氷れる
ガラス窓を見守りて
恐ろしき闇の迫れば
想出のなみだ
しのび落つ――。

潤ひがある（評）

○小春日（入賞）

越後　翡翠子

小春日の
こゝろよい風の吹く日は
君に會ひたる如きうれしき心地して
…………。
見よ、窓をあけて
紅葉には羞かしいやうな日光の嘆息
遠い山も――野も――丘も――
コバルト色のうつくしさ。
小鳥は白い翅を休めて
まだ乳房に添ふ小兒の如き歌を歌へり。
窓をあけよ
小春日の美しきなやみ――
われは
永久にこの窓を離れじ。

好い感じだ（評）

○さらに

琴子

さらに、さらに…………
あこがれはいとも高き
麗はしき
紅の
この血汐の、ゆのごとも
沸りつゝ
歡樂の
さてゝ佗しや
街の赤き灯。
白く瑩き
茶山花の蕾、その
想ひやたらと……
いやさらに
求めばやと

咋をあげて笑む。

これでは人を動かすことは出來ない（評）

○黑き影

豐後　吉田夕草

何者ともわからぬ
追ひゆけど追ひゆけど尚逃れゆく
……黑き影……
霜夜の風は音もなふ
ふりかへりては呪ふでと
覗ふがでと逃れゆく
かの黑影の後を吹く…………
……月に明るき一筋道を……
うねり、うねり〳〵うねりゆく
これ
何者ともわからぬ
……黑き影――

何ものをも掴んでゐない（評）

○屍

港の女

いたましや泛べる死體
腹あかき蠑の屍
我は見にきぬ雨の晴れま
に
塀をめぐりて
水溜りの小さき死體を
なまぬるき午後の泥水と
眠れるけもの丶肌に觸る
るごとき
秋日の感觸
この屍うけて往ぬべき
大雨のふりもやせずや
何處よりか大水の流れて
こよや
いたましき我が屍よ

こんなにつきつめてしまうと詩が冬の池水のやうに凍つてしまひます、ゆつたりと溶けて居ねばなりません(評)

○習作

百瀨美水

秋の夜の長さよ――。
私ら姉妹は夜仕事をすましてから讀書する。
つり洋燈が消えて。
かはりに豆らんぷが机の眞中に置かれる。と。
姉妹はその前にすはつて。



牧場　澁谷　井上ゑと

本を開いて默讀——。
靜か——靜か——。
小さい目覺し時計の時をきざむ音と
時々、頁を繰る音とが
室内にひびく。
時は早や、十一時に近い。

裁縫室

廣々とした裁縫室の硝子窓はみな明け放してある。
日光がさしこんで、パツとあかるい。
百餘人の少女らは、
話しつ、笑ひつ、いとものんきに面白さうに、
青い着物を。赤い帶を。
裁つてゐる。縫つてゐる。
晝の鐘がカン/\と鳴つた、
としよつた先生が、
「お晝にします」と、いふと、
一同おじきをする。
先生は去る。
どつとどよめきたつて辨當箱の音が
ガチヤ/\/\。

裁縫室は好かつた、今一層細かい心持で見たら、佳作が出來たらうに惜しいことだ(評)

○煤煙

京都　中野婦美子

懶げに雲は流れぬ。
涯しなき空の愁の鈍色に
錆びし心に……

白枯るゝ木の葉のにほひ
塔は立つ——影のさびしさ古びたる
こゝろの墓よ。

われは聽く、小暗き胸に、
そが強き、はた痛ましき追憶の
緊なき聲を。

淡き日は空にかゝりぬ。
疲れたる我の光はなやましく
うち顫ひつゝ……。

風は吹く/\——草の吐息の
蒼ざめにわれはふと見る「我」の影
悲しき生命を……

おも/\しげに見えて、其處は[illegible]さしお話ゝ(評)

○夕ぐれ

菊子

白きカーテンに、さびしき秋の夕日が、
なゝめにながれた。
ゆるい、オルガンの音に、あゝ其哀音のゆく
あゝかすかに、ふるびをおびた肉聲と——
はなれ/\のさびしさをたどり、
又ともに同じゆくへにきえてゆく、
秋のさびしき調よ。
どこから、あの音がするのだらう、
あゝあの寄宿舍、
さびしさになないてる人もあるであらう、
むねせまつて樂器によれる人もあらう、
おゝ其人たちの調よ。
なつかしき夕べの空に、高く ひく ゝ……
はたゆる/\
かぎりない思を——夢の如くにつゝいてゆく。
なきたいやうな、あのふるひね、
じつとりした夕ぐれの空氣をふるはせて、
心の中にしみいるやうなあの肉聲——、
妙なる樂のしらべよ——。
夕ぐれの日は、まばら木をすけて、
はかない光を、なげかけてゐるけど、
しぼられた、白きカーテンのあたりには、
つめたい風が、ふいてくる。

何ゝ彼も皆言つてしまはうとする處は何うとても女だ、詩を作るにも女は女だ(評)

○初冬の月

越後　あは[illegible]

雲もなき中空に
十四日の月かゞやけり
黒藍色の空の遠さ……
星はまたゝきを止めて
月光のかげに顫へり。
あゝその青白き月光の下
限りなく大地は沈みゆき
地上のものみなは其冷たき
額をふせてをのゝけり。
細長き我が影ふみてさまよ
へど、
木立の淋しきさゝやきと
光りの中の冷たき香を
なにものも無し、甘くなつ
かしき
追憶のかけらの一つ……
あゝ初冬の白き月は
玻璃器の如き天地にかゞや
けり。

○晩秋のかなしみ

京都 兎本きみ子

たそがれはひやゝかに涙を
流し、
黄ばんだ枯草は、うつりゆく時を悲み、
森の梢は迫りくる凋落に噎ぶ。
冷たい秋雨のやるせない悲み、
すゝりなくコスモスの寂しい生命、
晩秋の天地のはかなさ。
病み衰へたわが骨を削るごとく、
ひしく〜と胸に沁む、
晩秋のかなしみ。
あゝ秋は悲し、
胸に鳴る追憶の共鳴……。



秀ちやん　信濃　工藤清子

悲哀のシーズン、
天地は「我の荒廢と凋落」を歌ひ、
心は「我の哀史と孤獨」を悲しげに物語る。

あゝ晩秋のかなしみ、
胸に鳴る追憶の共鳴……。

○花白き夜　紀伊　宇田すが子

おだやかな、春の晩
月はおぼろに、かすんで
地の所々には、
白い、紅い、はなびらの影。
通りすがりの、人かげは
うす墨に、ゑがかれた様に
それとも、影法師のやうに
音なしに、あゆんで行く。
ものしめやかな、唱ひごゑが
高樓の間から、洩れてきて
少しほの暗い、あたりには
低い笑ごゑも交つて私語き、
館の灯は、しめやかに
小屋の火はまどかに
花は白く、水は銀に
その豔麗の媚態をひとにほこつてゐる。

○蠟燭のもと　迷町　すゞ子

午後十二時。

都もいまは靜けし、
靜寂は襲ひ來る、走らすペンの先より、
せまる時よ。
混亂にうづまきぬ、わが頭腦は、
刻々せまる、十九の秋も、あゝ
落葉のごとく十九は近く！
さらば、と黑髮もてひとみ掩へど、
おゝ、ぬけはてしくろかみ、
掩ふにうすき燃ゆる瞳。
執着のほのほにあかき十九の女の
亡き骸。
血しほは青みぬ、頰のほそり、
ひしとあつる秋に五指はうるほふ……
……諦めの淚、はたちの沙漠を、
内陸河のごとく、あきらめの、
なみだぞしたゝる。

○水草　大阪　村田擴子

澱んたる水面は鉛色にとざされし
屈折せる光線のなげやり、
紅き草花の顫ひ、
雜木の青き葉の醉へる頃、
秋の音樂は歌はれたり、
小鳥は疲れたる羽根を梢に休め、
赤き〳〵ちばしにて小さく泣ける、
聲のすさび——、
水草の愁——靜かなる水面の輝、
あるかなきかの淡の雲は、
水底に沈みかゝり、
水のどよみのまゝにもてあそばるゝ水草に、
陽は青白く光りいで、
岸の葦の根元に貝殼と、
水草の乾きたる香と——、
音もなく流れよる、
秋の陽の靜けさ——。

新刊紹介

○春の夢（詩集）　福田夕咲著

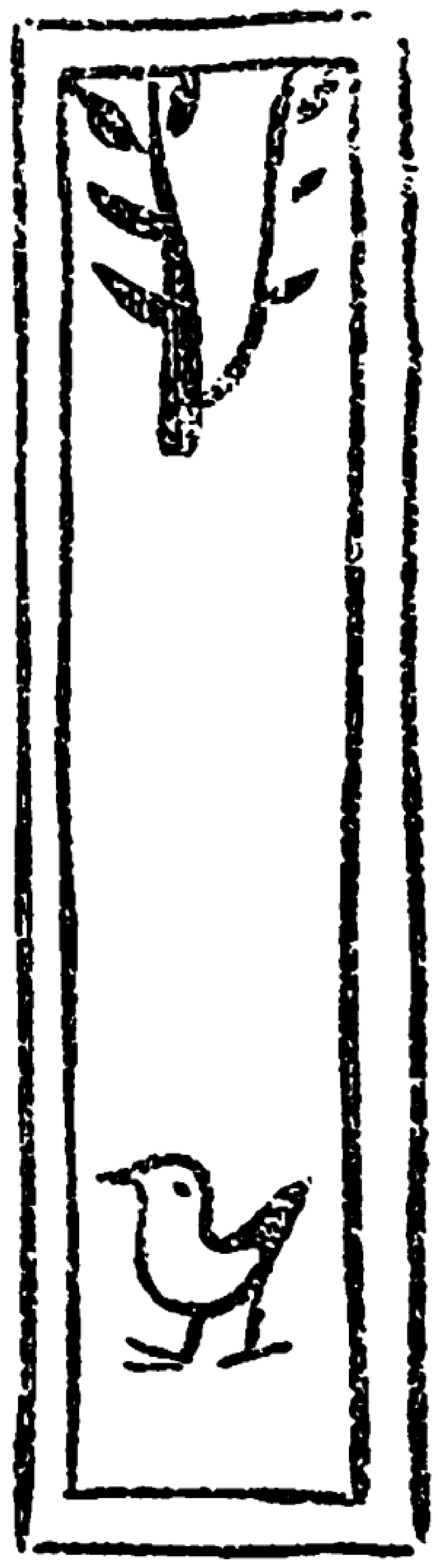
夕咲氏の作は、江戸時代の小唄や草双紙に見えたる人情を、明治式に出さうと苦心してゐるところが、稍他と異つた特色である

　流人のやうなさみしさは
　夜永の床のひとりね
　しく〳〵と咽び泣きする夜の雨
　人情本のあはれさが
　わが身の上につまされて

と云ふやうな情調の作が大多數だ、短いちよつとしたものが多い、自由な詩壇には斯う云ふ傾向もあると云ふことを知るべく、詩の好きな諸君は一讀すべきものであらう、製本の調子から見て既に江戸式を帶びてゐる（定價金七十五錢　日本橋區檜物町文星堂發兌）

○春の貢（歌集）　吉田楓花著

大阪の青年文士として知られてゐる楓花氏の短歌を蒐めたもので、現代青年文士の若き日の詩を窺ふに足る一つであらう（定價金三十五錢、大阪道頓堀田中書店發兌）



噫山梔子

樫田文子

先刻引いた白いカーテンがゆら〳〵と幻の様に搖れる窓を通して、青い深い晩秋の色が匂つてゐる。それをじつと見詰めてゐると驚いた瞳に何時かしみ〴〵と哀愁が湧いて來て、引締つた心がガックリと俯れるともう堪へ切れなくなつて、俯伏してしまつた。

執念くも生きよと強ふる言の葉を絶望の夜にきくぞ悲しき

と歌つた君だのに……益江樣！もう……何故十九日の日曜に行かなかつたろう。無理にもお目にかゝるもの。音樂會になんか誘はれて……あゝ。いつか七月頃だつた。

「臨終には是非來て下さいね、呼びに差上げますから」つて白いシャツに浮出したやうな瘦せた顏に、淋しい微笑を浮べて被仰つたのに。

私はすぐに金澤の家に歸つた。通知狀が來てゐたので今更乍ら泣かれた。

私はお母樣のお顏を見るに忍びなかつた。家内は人が餘計に居乍らしんみりしてゐる。佛の被居る奧へ案内された。紫のけさを掛けた僧が二人と尼樣がゐる。枕机に細い線香の煙がゆら〳〵と蠟燭の灯の瞬く每に立のぼる。丸で子供のやうに小さくなつて！リインとおりんを打つ。南無阿彌陀佛……。廣き世を狹き母の胸にのみすみて、乳を探らんばかりの君の事を思へば、涙しきりに落つ。されども只一つ母の說く宗敎にのみは頷くばかりであつた。他力を賴むには餘りに主觀的であつた。と云つて、病の床にも慰めありと神の惠を隨喜するでもなかつた。けれども私は一種異樣の安心立命を得られた事を確信してまだしもの喜びを感じてゐる。あゝ益江樣！二十一！短かい生で御座いました。又來ん世には幸多く來ませ！

額から合掌してゐた手を放すと濡れてゐた。

「亡つた夕方女子文壇社から書が屆きましてね、息ある內にと思ふと――。」つて美代子樣目を泣き腫らして

お話なさる。御靈前にクロースの本が二冊お供へしてあつた。

「東京や岡山のお姉樣は。」つてきくと

「まだ參りませんのですよ。」と屏風の蔭に淋しさう。

「まあお若い人がお氣の毒やね。何不自由とてないお體やけどね。」

「ほんまに――お幾歲やつたさ。」

「二十一やつて。若い盛りやのに。」

「冥土へお嫁入りやねえ。」

私はこんな路傍の人の話に包まれて柩を送るべくL樣と人込の中にゐた。

あゝ何も知らぬ人達よ。君が今度の宿痾癒えたればとて何條御身等の云ふ如き幸福の訪るゝあるべしや。

「もし母より遲るゝ事があろうか。」とそれのみを切に嘆かれし君を思へば淋しき悲しき祝福に、心は絶えずうるみなげく。とも知らずに、

「やあ立派なお葬式だな。橋場から六丁目まで續いてら。」と男の子。

「おいな。いくつあつたい。花籠や花車。」

「七十までよんだけれどまぎれてしまつたい、あ、今度は蒸籠をよもうや」と人込をぬけて行く。

やがて白丁が靜かに擔ぎ出す柩、さらばよ。――

頭をさげてゐる間に柩は通りすぎた。大波のよせるやうに見送り人がつめかける。玄關にお母樣の白衣召したお姿が見えたので、ばら〳〵とかけ出して、

「今日はお恙もなう……。」と後は手巾で目を抑へた。L樣と私はしつかと手を握りしめて夭死した友の冥福を祈つた。あはれ霜月二十三日!。空は今にも泣き出しさうであつた。

友と相知つたは幼い頃からであつた。まだわが腕白盛り、塀の上からぐみの實を取りに木登りしてゐた所を見たといつても笑草になつてゐた。女學校へ通ふやうになつてからは級もちがふので話など餘計にしなかつた。今年の二月であつた。女中が手紙を持つて來たので見ると君からのであつた。外へは出られない體だから、尋ねて呉れとあるので訪ねた。その度に泣かされた。いつか夜雨先生の事を云つて殘念がつて

「これでも私は浮薄なんでせうか。自分には誰もあればいゝ加減嫁にやつて呉れるだらうのつて、思つとるやうじや駄目だ。もつと深刻になれつて云ふんですも

め。あなた私がそう見えて？。」つて泣かれた。

君は又青春華かなる時を病床にのみ送られた事を度度口にせられた。

はかなしや入日の如くこの若き少女心は徐々に消えゆく。

また、

何のため髪むすぶらむ暗き子は櫛取る手さへたゆみ勝なる。

我心誰にあづけむ人もなし淋しさせまれば獨りなくのみ。

戀もなし希望もあらず、草花に慰めらるゝ我の哀れさこれらに至りては痛ましき極である。私とはお琴を合した事もある。「千鳥」を知らないので半分計り習つたのも七月以來床に臥す君を見るのみなのでそれ切になつてゐた。琴には非常に堪能だつたばかりでなく、音曲がすきで私がたまに江戸唄や追分を歌ふと涙ぐんで聞いてゐらつしやつたつけ…………。

春もいつか雪解の山が紫にぼつと霞んでゐた一日であつた。お二階の御部屋へいつてお挨拶するなり、「鳥渡、こゝから向うの山の光るのが見えてよ。なつかしいわ。四年振りだもの。」つてわざ〳〵杖をついて私をそこまで連れてつて下すつた。山は白く光つて見えた。何氣なく、

「いゝねえ。」と云つたばかり。あとで物足りない返事なので氣が脫けたつて大笑ひした。

作物によく出た雛といふ女中が他へ嫁いて、かはりに山出しのをかしい人が來てゐた時だつた。お使に出て途中で自轉車に打つかつて門口から「奥樣。」と大聲にわめいて來てその由を話した。すると奥で床についてゐた益江樣が大きな聲で

「厭だ〳〵ぼんやり樣は厭だ、使に出て自轉車に打つかつて來る。何て間がいゝんでせう。」と唄つたので皆がどつと笑ふと、女中はきかん孃樣だと云つたとやら、今は只思出てばかりに――、

山梔は遂に冷たく物云はぬ石にきざまる霜月の暮

いつか〳〵かゝるべしとは思はぬにあらぬ思のうらめしき哉。

あゝ冬の夜の靜寂にまたゝく灯を眞面に受けしうつし繪の影の蒼白さ…………。

各地誌友評論（四）

一記者

▲越後

◎雪と、石油と、美人と、それから今一つ獅子とに名ある越後の國、國が廣いだけに誌友も多い。

◎石油の産地として聞えたる新津には蒲原早蕨がある本姓は眞柄、夜雨のお才の國にも描かれた通り、地方の富豪のお孃さんであつたが、過ぐる年聟がねを取りて、今は賢良なる母となつたであらう。お孃樣時代の作物は度々本誌に現れたが、記者は其人の思想に注意するよりも、描かれたる事實に興味を持つてゐた、感情的の人ではない、理性の人であつた。

◎新潟は北越第一の港であるが、其地に自覺した婦人を見出し難いのは何か原因があるだらう、自覺した婦人はあつても文章を書く婦人がないのだらう、何しろ久しい間、新潟からは殆んど目に立つやうな投稿家が來ない。

◎然るに新潟に次いで最近ます〱開けて行く長岡市からは能く投稿する者があつた。越後式美人のタイプを寫眞の上で知つた佐藤涙子の君は、曉花の雅號があつて、二三年以前は盛んに散文を書いた、短い散文がうまかつた、此一ヶ年ばかり杳として消息を斷つに到つた。

◎長岡から今も現に作物を寄せてゐるのは、秋月すゞ子である、本名は暫く言はずに置かう、之は早蕨君のやうに富豪でも何でもない、母と二人つゝましやかに生活してゐる町の娘さんであらうと想ふ。此君も事實を書くと相當に正しく書くが、文章は熟練してゐない、文字も亂雜でいけない、何うせ書くと云ふ氣があるなら、今少しく凡てに注意したなら、外に競爭者がないだけ、同地の一誌友として眼に立つやうになるだらうそれに此君のはいつも自分の感情を正直に表はしてゐるから其人の風丰を悔いながら窺ふことが出來る。

◎才津と云ふ地に木村うた子がゐる、お孃樣とも奥樣とも分らない、力めて主觀を避けて天然を描からとする人だ、此君は折々思ひ出したやうに投稿するので、

際立たないが、自然を書いたものには好いものがあつたやうだ。今は既に昨年の話になるが、一月號に『冬がてひ』、第百號に『やよひの空』と云ふ文章が出た、それ以來餘り入賞はせぬやうだが、秀逸の部には能く入つた、雅樂と云ふ雅號を使ふ外に、一つ二つあつたかも知れぬ、女子が自然を忠實に描出しようとするのは非常に難事であると同時に、巧く行けば珍重すべきものだ。

◎春野胡蝶と云ふ名で『婦人ノート』『新文章』などに婦人の光明的一面を達者な筆で書いた人がある、本名は阿部秀子の君と云ひ、ふるくからの誌友の一人である。地方の官吏のお孃樣で高田に住居してゐるが、出身は東京の女子美術、勿論才媛であつたらう。

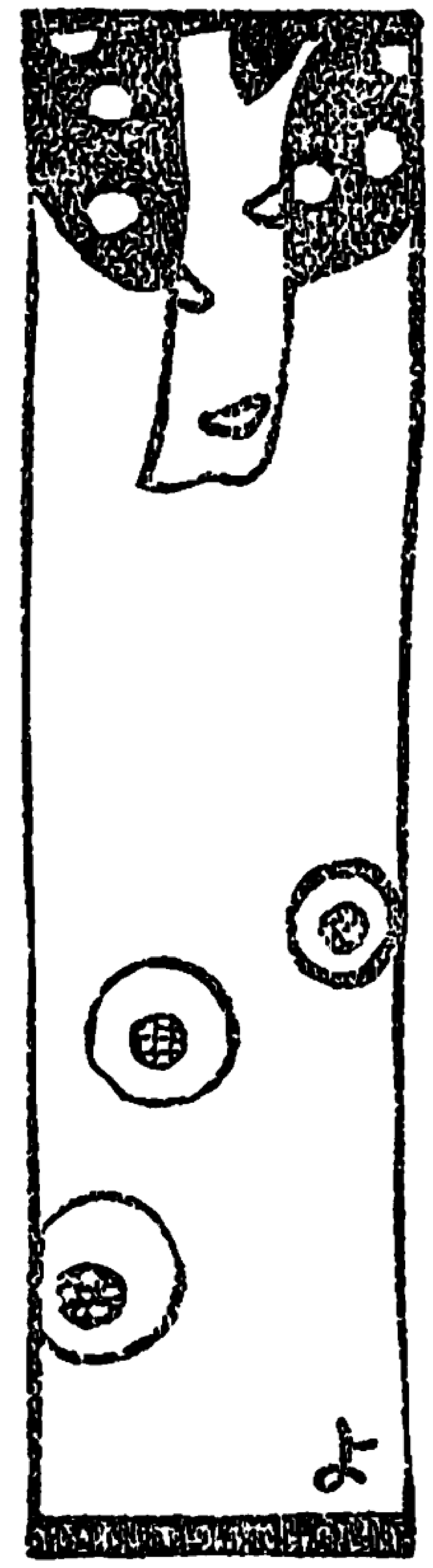
◎秀子さんは其境遇が順調に在ると見えて、書くものが凡て尋常に出來てゐる、それで平凡かと云ふに必ずしも然うでない、人を笑はすやうな、面白がらすやうな一つの感興を持つてゐる、世界が狹いから超越した見地もないが、或る意味に於て女性は之で澤山だとも思ふ、君は不思議に增刊ばかりに出る人だ。

◎新川幸子、雅號翡翠の君は新發田の人、文もうまく詩もうまく、俳句もうまく、和歌もうまく、何も彼もうまい人は、所謂投書家氣質を持つてゐる人で、種々の雜誌を讀むから時代の思潮に後れぬだけの覺悟は持つてゐる、摸倣も下手にはやらぬ――併しいつまでたつても上達せぬ。記者は此君を斯の如き投書家氣質の人として埋めて了ふことを惜む。

◎仍ほ且、此君は女らしくない、九分九厘まで婦人でなからうと思ふ。

◎去年の三月號に『朝のこゝろ』と云ふ詩を作つた枯尾花。九月號に『圓ひ綠の山』と云ふ詩を作つた星野かへで。二人とも越後だ、枯尾花は刈羽郡、かへでは北魚沼郡の人で　二人とも若い婦人らしい、殊に枯尾花の君は、何となくよわ〳〵しいあはれな婦人を聯想せしめる、作は多い方でない、また詩に對して深い造詣があるといふでもなく、感じた通りを貧しい句で表はす散文詩に過ぎないが醇和な點は記者の胸に殘つてゐる。星野の君も詩には熱心だがまだ技倆は際立つて進まない。

◎要するに、越後は一地方として々範圍が廣いだけに何ものか現はれさうに思ふが、今のところは以上の人達の名を印すに止まるので、もつと隱れたる婦人が現れて活動すべき筈ではなからうか。



俳句　内藤鳴雪選

○（天）宇治川や霰の中の一騎二騎　横濱　都鳥

○（地）病む吾を枯木とばかり冬の月　山口　椰良美那子

○（人）鶯の巣を知つてゐる溫泉守かな　小樽　白芙蓉

佳作

初風呂に大宮人の欠伸かな　宇都宮　松井玉子

日も暮て年も暮て人懐かしき　茨城　夢香

伊勢へ立つ日の嬉しさよ初暦　群馬　荒井よし子

[illegible]　京都　壽賀子

月に立つ君さびしさや脊の高く

小湊や舟の灯並ぶ夜の雪　下關　今井貞子

名月や今宵を語る古法師　新潟縣　西山しづ

踏切に女番して春のくれ　秋田　小島あるは

村小春鉦は千ケ寺詣りかな　府下　きよ子

朝霧に手ごたへありし一矢かな　下關　木本白蝶

雪の風俗一人に追手かな　岡山　柿園白花

辻占に耽る美人や宵の春　福井　佐々木定子

三味ひいて君を戀ひけり冬の暮　堺市　小林いし子

月あびてたゝく人あり寺の門　神戸　山村まさ子

春雨や仙が娘の酒買ひに　美作　十二子

乘合の人と人との御慶かな　金澤　井上みよ子

九谿の初々しさや今朝の春　品川　猶蓉子

木から木へ猿とびわたる時雨哉　岡山縣　中村繁子

豆腐賣るこゑに眠たきこたつ哉　富山　村山咲子

玉あられ天より落ちてくだけゝる　神田　蘆崎とみ子

書籍賣る洋人もあり冬の町　神田　伊藤香花

木枯に松の實とぶや闇の中　兵庫　紅雀

柿の木に大根白し夕月夜　茨城　浮舟

木枯の枝震ひつゝ暮れにけり　上總　百合子

霜どけの道の幾筋や初櫻　大分縣　小屋凸凹生

紅梅や嵯峨に住みたる烏帽子折　京都市　中野ふみ子

濱ぞひの松皆奇なり夕時雨　金澤市　絲夫

鉢の梅を庭に出したる翁哉　伊賀　中村こま子

繼ぎもして女詩人の日記かな　岡山市　立岡房之

萌え出る野中の草に露一つ　美作　橋本紫

寒月やあしたの米を砥ぐ河に　山口　白花

大井順子　野

春はまた寒し嵯峨の里のまゝ　京都市　知世子

人待てかるたの宴の暖かさ　上毛　夕美子

春の野や馬に居眠る村童

寒月に竹槍造る一揆哉　渡島國　小倉ふみ子

梅咲くや京へ三里の田舎道　麻布　小泉良子

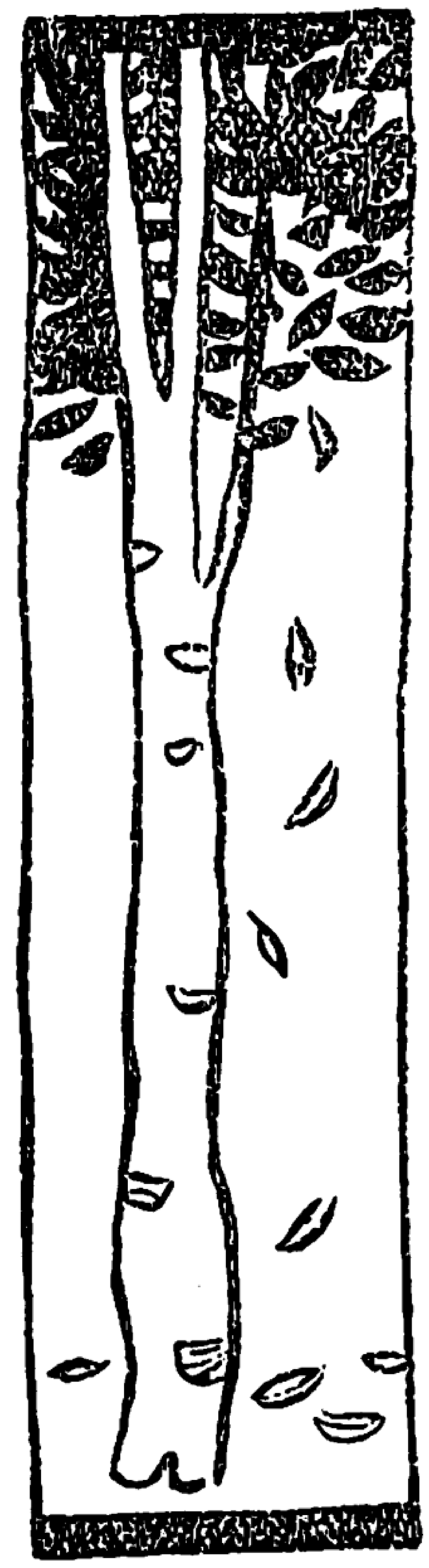
何やみに落武者潜む小舟哉　大阪市　倉増すゑ子

初霜に柚子の香りや日蓮忌　下谷　鈴圓

須磨に來て松風嬉し小六月　深川　佐久間貞子
初雪の上野はひろき木立哉　福井縣　土屋智惠子
卯の花や下駄新らしき女客　備中　小見山春子
馬市の殺となりし夕哉　横濱市　中島京子
來て見れば石の八陣殺哉　横濱市　新井新緑
みぞるれど首すぼめ行く乙女かな　朝鮮　おき
結たての髪ふく風や冬に入る　奈良縣　奥内みさを
大雪や波は靜かに磯の松　下關市　石川鶴子
夢醒めて師走の人となりにけり　下關　倉田窓子
番傘を二つ干したる柳哉　島根縣　細田千代子
蒲干した中に抽き出て菊の花　福岡縣　しらばな
時雨るゝや味噌つく杵の音靜か　岡山市　富山千登勢
淺間山又遠きて灰時雨　上毛　あいさきむね
山寺に經を聞く夜のしぐれかな　水戸　さゆり
風に鳴る葦の入江や冬の月　秋田縣　瀧本光子
しらむかと空を仰げば初鷄　上毛　美花
冬の日や京の場末のうらやさん　上毛　冷花子
十六の蕾殘して行く秋や　東京　片岡浪子
病む人の死を言へば冬の草萠えぬ　越後　幸子
提灯にふられたばしる年の暮　波島　田山清子
つれづれに歌流しけり春の川　城南　小島美雪
枯の水のまばらの道や冬の月　京都府　竹村槙子
金閣や池も古びて鴛鴦遊ぶ　三重縣　駒越くに子
馬の脊に月も氷らん廣野哉　神戸市　野の女
雪野原旅人見えず富士暮るゝ　愛知縣　中村白百合
雞の聲もなつかし冬の朝　伊豫　軒の雫
手枕や京の夢見る春の人　岡山市　桃の村女
なつかしき文見る窓や冬の月　舞鶴　雪子
山枯れて野枯れて淋し風の音　大阪　村田撫子
山茶花の枝より枝へ衣の梓　本郷　月見草

三味さげて女往くなり冬の月　京都　森本俊子
こがらしの窓に縫ひ居る春着哉　紀伊　宇田尚子
なべ燒の火の粉の走る夜寒哉　本郷　城木美知子
ひめ垣に春立ち顔のわか芽哉　宇都宮　宇佐美園子
水の雫水輪してけり浮寢鳥　宇都宮　宇佐美園子
むさし野は草枯れ果てゝ月一つ　大阪　舞草
煙吐く濱の汽船や夕時雨　香川縣　星野わさ子
たちのぼる里の煙や小春凪　靜岡縣　田中ゆりゑ子
秋晴れや落穗を拾ふ姫かな　廣島縣　高井りよ子
薪負ふめが影一つ枯野かな　上總　白木とめ子
旭のさしてかしこき菊の雫かな　宇都宮　松井清子
初夢や繪に似し京の祇園町　下澁谷　横谷ゆき
たをやめの夢ふみ居るよ冬日和　宮城縣　沼倉ふゆ子
ゆあみして花摘む庭に風薫る　美作　水田邦子
吼ゆる牛引いて行くなる花野哉　山梨縣　鷲谷とみ
石臼の目を切る音や雲の峰　同　鷲谷久子
冷々と明け行く畑や茄子の花　同　鷲谷やす
雛芥子に醜の手鎗や夏の雨　沼津　村瀬富士子
吐鵑啼かず月城上に傾けり　深川　花野芳香
月天心河原の果の水の音　知多　加藤靜枝
夜嵐に稻妻まじる岡の家　府下　山水溪子
男兒等が乘りし筏や青嵐　下澁谷　小原あい子
折り〳〵て殘んの菊の幾日ぞ　越後　藤原歌子
化粧する女あるらし青簾　沼津　春の子
螢追ふ小川の岸や草涼し　和泉　田中きよ子
釣床にたれし袂や百合の風　尾張　榊原銀子
天人の羽衣石や苔咲きて　越後　藤原泣杖
大原女の柴にそへたる百合の花　府下　倉増すゑ子
歌よまぬ田螺賤しむ蛙かな　下澁谷　逸見敏子
畠に立つ案山子怪しや夜の道　府下　横谷ゆき子

初作　編輯局選



○謎の女

美知子

町はづれの洋館のサファイヤ色に塗つたバルコニーの欄干にもたれてぢつと考へこんで居る金髪の女。あの眼は何を見てるのだらう。ちつとも動かない。何を考へてゐるのだらう。何だか謎のような。

その謎を解く責任のあるやうな氣がして私もぢつと立止まつた。バタバタといやな音を立てゝ自働車が走つて來たのであはてゝ無意識に歩を移した。少しいつて又後もどりして見ると謎の女はもうゐない、その代りに二階の窓から微かなヴアイオリンの弦のゆらぎが流れて來るそれが太くなつた時、女の美しいこゑが震へてまぢつた。歌は分らないが何となく謎を解くやうな感じがしたので急いで歸つた。十五の秋だつた。

（天賞）

謎を解いた女も平凡でない（評）

○あらひ髪

三重　みい子

二人の髪には、三つ輪が夢のやうに容つてゐる。

双肩へ垂れた毛先には、絶えず眞珠に似た玉が浮く。浮いた玉は、すぐ後からくる足早なのに追れて美しく散る。散る、走る忙しく浮いて忙しく落ちる、落ちる滴は時に七彩にきらめく。眼が勞れてくる。

私は、勞れた眼を閉ぢて、靜に何事かを考へようとあせつた。が、スウスと慘ない音が耳に入ると、もう眼はパッチリあいて、友の鉛筆削るのをみつめてゐた。

ナイフのきらめく度、血の通つて居さうな薄紅の木はそぎ落されて黑い骨が現はれる。見てる間に骨までも削られて針のやうになつてしまふ。いひしれぬ冷たい物が胸に迫るやうで、身顫すると、濡毛が顔にかゝる「いゝ日ね」、肩すてに立つた友は其儘スラリ窓によつて。

好い日といはれて氣がついた、私は後から暖かく日を浴びて居たのである。急に邊が明るくなつたやうに思ふ。——嬉しい——何か知ら嬉しくて窓による。塵一つ動かぬ大氣を強く吸つて、右手に眼を放つた。

畑には白手拭が二つ三つ動く、短い麥の間を鍬がキラキラ光る。……「ねどちら好き、美いさん」「え？」友は目を細めて大らかに空を見上げながら「雲よ、碧いのと白いのと」。空には白く輝く額をもつた可愛いゝ雲が漂てゐる。空の碧は別けて深い。

「矢張碧よ」空許りぢや無い、此色のものは何でも好き。友は默つて靜に流れて日に近よる雲をみつめてゐる。音もなく風が吹く、髪がサラリと頰を撫でる、暖かい、油でもない石鹼でもない幽かな香が胸に沁む。

白雲は、日に近づくまゝに碧ににじんで、一瞬毎にうすれてゆく……

友の瞳はかゞやいた。

「ま、日に溶けたのね、白い雲になりたいわ、私、白い雲に……」長い髪が艶やかにゆれる、結んだ新藁は解けさうに弛んでゐる。（天賞）

のどかな快い感じのする作（評）

○今と昔

日本橋　はな

昔し人が、土一升に金一升と云つた事は、それは日本橋邊から京橋邊までの商家の軒を列べた、繁華な地を云つたんださうです。しかし神田の今川橋邊から先はそうは行かなかつたさうです。今の駿河臺邊は旗本屋敷の土塀が限り無く續いて白晝と云へども人が通行しなかつたさうです。兩國の川の邊りは蘆が一面に生茂つてゐて、其の内を水鳥の群が飛立つた事もあつたさうです。燈と云へば行燈に提灯かお庭の石燈籠が、ぼんやりと闇の中に薄く點いてるくらゐで、闇の晩などには鼻を摘まれても知れなかつたさうです。

暗黑な江戸時代も時勢の變化には勝つ事はできません。此の二三十年の間に目醒しい程開けました。江戸時代の古い日本橋も最早や其の影だに見る事が出來なくなりました。駿河臺邊の旗本屋敷の高い土塀は見えなくなりました。今は唯二三のお屋敷が昔の面影を殘してあるだけです。電車通りのあの廣大な明治大學の校舍もいつの間にか出來上つて、若い血の多い青年が集つて來ます。隅田の流れに屋形船を浮べ、一日の豪遊を盡す粹人も今は唯錦畫で見るのみで御座います。唯便利になり繁華になりましたが詩的な趣きは昔しに劣つて、すべての事が呆氣無くなつたと思ひまする。行燈が洋燈になり洋燈が電氣燈や瓦斯燈になりまして、街にまで電氣や瓦斯が光り輝やく世となりました。暗い暗い昔の面影は何れいかに過ぎ去つてしまひました。其の暗い時代が私しはなんとなく懷しく思ひます。(人賞)

若い人の口から斯ういふことを聞くのも一つの面白みがある(評)



暇日　青森縣　稻葉たか

○電車にて

大阪　壽草

梅田行つと私は、口の中でつぶやきがら、片手にかたかけおさへて乗つた。

夕ぐれの、あはたゞしい空氣がみなぎつて、にぶい落日の光が玻璃越しにさし込んだ。煙の都の夕暮の色はちつとも活氣が無い。電車は、勞働者が一番多い、私は商人らしい人が立つたので小さく其後へこしかけた私の前にぶら下つて、ゆれる度に、重なる樣になつて來る人、泥の樣な醉漢がうるさくて仕樣が無い。私の前に居る學生は、銀ぶちの眼鏡なんか掛けて、あの藍色がゝつた帽子のいやらしさ、心齋橋！心齋橋！ふと窓外を見ると、さすが日本一の、電車廣告つて云ふだけに、もう櫻正宗、健腦丸等赤や青で、ついたり消えたり、ずーつと街を見ると、電氣でぼうと明くなつて居る。心齋橋から四ツ橋に行つた時勞働者は、大抵下りて、さつぱりした電車の中で私は、白いかたかけの、はしをまさぐりながら無意味に、暮れ行く街を、眺めた。

○夕の森

奈良縣　奥内みさを

ちら〳〵と朽葉の散る――その下で、沈まんとする夕陽をあびて私は立つてゐた。

淋の小な池の面を吹いてくる冷たい風は、枯葉をかさ〳〵と鳴らして、何處へか逃れて行く、其の小さな澄んだ水に、鬱蒼と掩いかゝつた木立の影が、沈默の内にうつゝてゐる。四時に來た時雨、しめやかな響が、彼處此處に雫となつて、木の葉から枝、枝から草へ、草から土へ、と沁みて行く其の林間の靜さ。

名も知らぬ小鳥がピイーと啼く、小さなやさしい尾をふつて。そうく思ひ出したやうに枯葉は散る、と只時雨の銀絲のやうな時雨が、さはやかな小さい音をたてゝゐる、其の音がいた〳〵しく私の小さい胸に沁み入る、時々葉先から辷つて落ちる雫は、微に閑靜な林中に響いて、淡い波紋を描く、と何處からか鶯の笹啼きが聞えた、其の聲が一種の悲みをおぼえて。思はず涙が浮んできた。

私は其の池のふちを辿つてそろ〳〵と歸りかけると、一寸とした森の中から、うら若い娘さんが二人出て來た、すると後から行く歳下の女が、私の顏をしみ〴〵ながめてゐたが、急に、「姉さん、姉さん、姉さんてば」と云ふた、すると姉さんと云はれた女がふりかへつて「何んですの？」「あの人あなた知つてゝ」と莞爾笑つてゐる、姉は一寸私の顏を見て、「私知らなくつて」「そう……」と話しながら顏を見つめてやがて、とある森にかくれた、私は其の見られるのが、何んだかはづかしかつた。

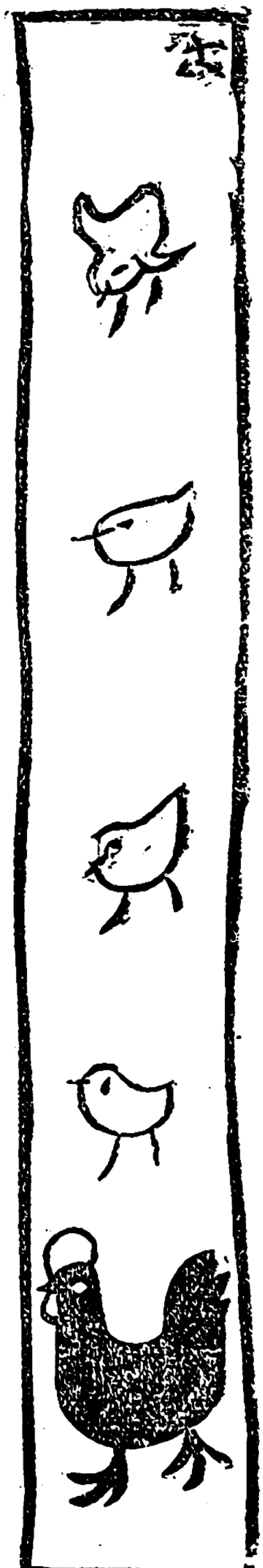
○叔母さんになつて

岡山市　土屋綾子

「桃ちやんも叔母さんになつたのだよ」、と云はれたときにはそうか知らん位に思つて居たが、今此樣して赤ちやんを抱いて居るとお母さんになつた樣な氣がする。乳の香が涙が出る程懷かしくつてならない。やつと見え出した眼できよろ〳〵と私の顏を見て時々顏の形を變へるのは笑ふ心算らしい。いゝ顏立だけれど、どうも鼻が少し低い樣だ。「高うなれやれ」と云つてつまんでやると變な顏をして私を睨むそれでも泣かないところがやはり男の子。

ご飯のとき美千代さんがいらつしつてお産の話がはずんだ。「姉さんどんなだつたの」ときいたときには「其樣なことをきくもんちやない、嫌なことだ」と云つたくせに何の彼のと好く話して居られる。「其れはもう二度としようとは思ひませんよ、中々かうと口で云へる樣な事ではありません」とおつしやると、「左樣ですかねー」と云つて美千代さんはやがてふくらむお腹を撫で・枕を高くしてはねられぬと云つた顏、側の私は只可笑くて、

御飯がすんで柿をおねだりしたら「叔母さんになつて何の事ですと叩しやる」叔母さんになつても欲しい物はやはり欲しいに變りはない。



読友くらぶ

年賀狀御禮

本年の正月も吉例に依り誌友の諸孃から年賀狀を送つて下さいました、大半は繪葉書でした。左に其芳名を列記して拜謝の意を表します。

府下 佃たつ子
信濃 工藤清子
美作 水田邦子
滋賀縣 上田八枝子
朝鮮 谷正子
宮城縣 沼倉馥子
府下 木村あやの
長野縣 下枝よし子
長岡 遠藤いま子
富山 稲來筆子
牛込 新免榮子
靜岡縣 山縣梅園
朝鮮 酒匂つむ子
長岡市 秋月すゞ子
長崎 三根ちさ
神奈川 木村湷子
臺灣 小林春子
淡路 濟木はゑ子
門司 野尻まさ子
宮城縣 沼倉孝子
淡路 岡菊子
富山縣 雄上千仭
大阪 櫻井花園
京都府 竹村まき
京都市 岸田ふみ子
長岡市 細谷百合子
伯耆 新田文子
大阪 吉田うすい
廣島縣 兒玉喜美子
浦賀 鈴木かね子
周防 重原・みめ
千葉縣 粕谷豐
千葉縣 櫻井たづ
秋田縣 小川篠香
紀伊 紫陽花女
麹町 齋賀寧子
名古屋 森部てふ
後志 櫻井美耶子
釜山 秋風凉子
山城 八田文子
伊豫 渡邊文子
備中 小林しづ
大和 河崎八重
秋田縣 那珂はつ子
伊豫 高橋政子
南千住 吉田清子
常陸 地疋福
名古屋 登貫靜子
富山 梶原雪子
越後 澤田あさ子
福島縣 利喜子
名古屋 原田寧子
小石川 草葉つゆ子
京都市 要司村ふく
大阪市 小泉貞子
大磯 中川とし子
淡路 鎌田麻之
赤坂 武林朝子
神戸 田中港の女
備前 松本みさを
山口縣 河村その子
千葉縣 夕ほし
神戸 足立春子
仙臺 小林のぶ
秋田縣 愛子
福岡 田中ゆたか
神田 鹽崎とみ子
大阪 杉山かしよ
群馬縣 關口ちよの
若狹 長谷川英子
岩代 木下はる子
明石 ふさ子
本郷 翠月れい
越後 高橋みほ
大阪 立石りか
尾張 佐分宮美子
越後 井上貞子
横濱 松井靜代
堺市 小林いし子
横濱 岡本千鶴子
備中 小見山春子
近江 磨志緒
岡山縣 時實某女
岡山縣 廣木俊惠
伊豆 加藤爲子
東京 佐藤萬壽子
神田 松村らく子
王子町 大浪せい子
淡路 國分光枝
大阪 田野しか子
兵庫 紅雀
近江 細野鈴蘭
周防 藤井白露
豐前 松田みね
紀伊 都田操
大分縣 小屋雛子
足利町 名無草
東京 黑田紫蘭
赤坂 町田靜江
茨城縣 川北とみ子
近江 撫子
大阪 笑花
越後 菊子
岐阜縣 大山百枝
大分縣 小屋らく子
神戸 寧子
茨城縣 田村はつ子
大阪 散りゆく花
岡山 石井洋月子
石川縣 御難みさを

佃さんからは特に美しい西洋草花を寄贈されました 御禮申して置きます

交　際

○

京都市東中筋御前通上ル
河野豐子方　うら野

▲京都より　此の度から私も愛讀者になりました、什うぞよろしく御交情願ひます。又、京都のお方樣何かによらずお敎へ下されませ、繪葉書の交換もお願ひ致します。

○

鹿兒島市上龍町七十番戸
松崎しま子

▲鹿兒島より　御交下さい 御懷しき誌上の姉樣方御初に御目もじ致します 田舍者で御座いますが 何卒よろしくお願ひ申します

○

備前赤磐郡豐田村大字小瀨木
矢部瑠璃子

▲美人繪葉書　私の手許に美人エハガキ 二十枚ありますから 何卒交換して下さいませ

○

京都市花屋町西洞院東
久芳ほづ枝
同大宮通七條下る松本方
江林うら野

▲和歌俳句　淋しい私達二人は 毎日の樣に樂つて和歌や俳句を作つて 慰めて居ります、誌友の皆樣 何卒御交際下さい
又御自作の歌や句に 三錢切手同封して御惠下さいましたら 京名物（繪葉書、扇子、京紅、清水燒）其他にて御返禮します

○

米澤市相生町
相田とみよ

▲米澤より　今年も相變らず親密に 御交際を御願ひ致します 皆樣小說本や雜誌各地の產物の御交換も御賴み致します

○

京都府加茂郡河守上村天田內
林田とう方　白菊子

▲俳句と歌　私は以前よりの 誌友の一人でございます 何卒 俳句や歌を愛さるゝ御方は永久に自作のを 御惠みくださいな私も及ばずながら

○

小樽區手宮町二番地
佐藤豐藏方　吉成愛子

▲北海より　親愛なる 諸姉上樣、嬉しいお正月もすぎて 春めき來たり、窓に梅や櫻の花待つばかり、姉上樣よ 北海道の寒さを思召し下されて御手紙に 繪ハガキの御交換を希望致します、私は十七の乙女です、但し 男子の方はお斷りします

○

奈良縣山邊郡二階堂村備前
上田郁子

▲大和より　私は新年號からの 讀者になりました。ほんとうに 何も出來ない不束者ですの、何うかお親しい御交りを 下さいな。私は町から田舍にあつて 懷かしい皆樣のレーターを待つてをります

○

深川　矢澤榮子

▲深川より　秋田の金子りう子樣 愛知の樋谷ともはる樣 淺草の松尾久枝樣岡山の渡邊松哉樣御手紙有りがたう御座いました 一々御返事を上げるつもりで御座いましたが 家庭でレターの交際は ゆるしてくれませんのでつひ失禮致しました 皆樣文壇の愛讀者と承りこゝに御禮申上候中には封筒面だけは やさしい女文字で中が五尺の男子なんて、あんまり馬鹿にして居るわ 始めからあんな事云つて まだ見ぬ姫に慣れてなんて失禮だわ 御名前はわざ〳〵申しませんけれどもそんなのが文壇愛讀者の中で五六人ありました 以後どうぞ左樣なのは下さいますな 私皆んなやぶいてしまひましたよホヽヽヽいゝ氣持よ 其の男の心はとんなでせうあゝやつと胸がすいたわホヽヽどんだ失禮申しました

○

廣島縣深安郡神邊驛紅葉山
兒玉別莊內　兒玉喜美子

▲廣島縣下の諸孃へ　なぜ我縣下の方は 文壇上に振はないのでしやうか、數ならぬ妾達もまことに遺憾に存じますわ 妾の住む所は戶數僅少なる極く閑散の地なのですけど 文壇の愛讀者が十五名ばかりも おありですよそして文壇誌友會（紅葉俱樂部）なるものを組織して 每月二回宛集會を開いて 會員相互の懇親を溫め智識の交換をしてをりますよ

○

備前國長岡局區內富山村圓山
小川方　花子

▲備前より　私は開けまして十六 歲になります御交際を願ふのは初めてゞ 何にも存じませんから色々御敎へ下さい、何方でもよろしい から繪はがきの御交際をして 下さいましな

○

千葉縣長生郡水上村大庭
伊東さく子

▲注意　誌友諸姉に御注意迄に一寸申上候 送付なさる雜誌中に 書面を入れてある方がありました 規則を知らずさる事するが大に不心得です 西谷きみ子さん 先日は失禮致しました雜誌の中

に封筒があるとの事で二十錢の價の本が不足税九十三錢には驚きました不足税故受取りませんできみ子さんは何程取られましたか一寸伺ます

○

下關市西細江町畑田方
山本芳子

▲下關より●●●● 南國の一隅にてある悲しみに悶えて居る十八の少女をいつくしんで下さるお方は美しいレター惠みてよ

○

京都府山城國笠置郵便局區内
高山　中谷とし子

▲笠置より●●●● 私は草深き山里に淋しく暮して居るものですが此度はじめて本誌の愛讀者となりましたのです何卒繪物や御玉章の御交換を願ひます

○

靜岡縣小笠郡中内田村杉森
田中ゆりゑ子

▲才なき方●●●● 私も愛讀者の一人となりました……が悲しい哉詩想に乏しく、とても詩文の投書などは思ひ見るさへもかたき業、せめても諸姉上さまの、懐しき詩想深き、御玉章をお惠み下されん事を願ひます、拙なき作らも御返事はさしあげますから……そして御交際かたがた御教導の程を願ひます

○

廣島縣双三郡三次町
金井千代子

▲廣島縣より●●●● 私は一昨年女學校に入學すると共に女子文壇を愛讀し始めました何卒諸姉様の御うるはしき御うつしゑ又はレター頂戴な

○

本郷根津八重垣町五十二
栃たか子

▲年始状●●● を戴きまして有りがたう御座りました一々御返事を差上げたる積りなれ共萬一にもかき落し今一つは御處が不明瞭の爲二三の方には差出しかねたが惡しからず誌上にて御詫び致し以後願交際

○

紀伊東牟婁那古屋町字中湊
中田靜惠

▲和歌山市●●●● の在方に御住居になる本誌愛讀者樣に御願申ます皆樣の内か又御地方に養蠶を盛大にやる家は御座いませんか御存じの御方は誠に恐入りますが下名まで其家の住所姓名を御知らせ下さいませんかしらぬ方に對してあまり厚顔な御願で御座いますが愛讀者の情誼を以て宜しく御願ひ申上ます

○

堺市吾妻橋通三丁目
高橋岸子

▲堺より●●● 誌友の皆様繪葉書交換をお願ひ致しますそれから東京の花房ます子樣年賀状を私方へ下さいましたが私の方にはのぶ子と云ふ者は居りません何かのお違ひだらうと思ひましたが御住所が分りませんので御尋ね致します

○

常陸土浦在沖宿堂前
大野星蘭子

▲土浦より●●●● 十一月から本誌の愛讀者となりました御交際を願ひます

○

備後深安郡湯田村
佐藤夕暮星

▲備後より●●●● 私は誠に淋しい思に沈みたる一少女で御座います清いレター度々頂戴よ不束な者ですが御返事はきつとよ

○

伊豫喜多郡大洲中町二丁目
安達醫院内　中野しげ子

▲轉居●● おなつかしいみな様葉書やレター下すつて有難う私は都合によつて右の處へ移りました相變らず親しき御交際を永久に賴みます

○

三重縣鈴鹿郡白川村大字
白木一色　若林ふじへ

▲三重より●●●● 淸き玉章の御交換を願ひます御禮は屹度致しますわ

○

神奈川縣久良岐郡金澤村富岡
佐野久美子

▲神奈川より●●●● 私は何も存じませぬ田舎者で御座いますが何卒御玉章繪はがきなど親しき御交りをねがひます

○

大阪南區笠屋町五十一番地
尾竹一枝

▲スケッチ●●●● 今迄今日の樣な春に醉つた心持ちで進むたなれば私達は桃仙境の天女になるかも知れませんね？誌友の皆様廣く御交際下さいませ。時折りは面白いスケッチでも御目にかけますから

○

東京市淺草區壽町三〇番地
渡邊保太郎方　松尾久枝

▲長崎と佐賀の方●●●●●● 御玉章繪葉書御寫眞の御交換を願ひます。特別に長崎縣下の人や佐賀縣下の人と……

○

東京市牛込區肴町二十七
萩子

▲繪ハガキ●●●● 私は十月より初めて本誌の愛讀

者と成りました 以後御交際を願ひます又繪葉書の御交換を願ひます必ず此方よりも御送りしますわ

○

千葉縣君津郡中小村
瀧澤九兵衛方　高橋　榮

▲千葉より　私は九月より本誌の愛讀者となり申候何卒御手紙繪葉書の交際下され度——男の方は謝絕

個人消息

▲御懷かしい椰頁美奈子樣、早々御葉書下さいましてありがたう御座いました、けれども御住所の不明には如何ばかり落膽致しましたでせう私今から御交際して置いて今年五六月頃には御地へも參るやも知れませんので、其の時は御宅も訪れ初お目もじもして親しく樂しい物語り等致しませうなど、こんな空想をのみゑがいて居りましたのに……一寸誌上をかりて御禮申上げます（靜香）▲新年號で椎名八重子樣をおたづね遊したサッポロの方に申し上げますア、八重樣は十二月一日或所で美しい、たましい一篇の哀史を殘して十九の花を散らしてゆかれました委しいことはこゝでは申し上げられませんがこれだけお知らせいたします（前橋、みづ枝）▲南千住の白妙女樣って湧子樣でせう私いつも御やさしい御手紙戴きながら失禮ばかり致して居ります その後御變りもなくって……年あらたまるとともにます〳〵御健筆御ふるい遊ばせ、（春賀子）▲大隈てゆふ樣に、お姐樣とは、何誰樣をのでせう？皆樣に頂いたお寫眞や室友で有った方の御うつしゑやを並べて考へて見ましても思ひ出されませぬ、星の輝忘れ得ぬ十一室？それとも青葉に涼しい九室なのでせうか御同室で有ったと云ふのは、姐樣の御名お洩らし下さいまし、柔い心になって美くしいクロバアの庭やさしい友の面影やを忍び度う御座いますから、そしてお所も（紀伊、操）▲神戸の港の女樣默移をお書きになりました御才筆自由に御臨ひ遊ずを私は只一人敬慕を逃しがたく存じます（下谷區上野櫻木町五、島貞子）▲橫濱の夢草樣三年振りに御手紙を拜見して嬉しう御座いました御手紙を下さいますなら芝區田町四丁目六番地大橋方として下さいまし姉妹のやうなおつきあひをいたしませう（東京にてゆり子）

書籍交換

○

靜岡縣沼津町川原
山縣梅園

△誌友の皆樣の内に源氏物語平家物語枕の草紙八犬傳何れか御所有の方は御ゆづり下さいまし御禮は必ず致します

○

德島縣名東郡上鮎喰
吉田一郎方　伊澤照子

▲持つて居る書「スヰートホーム、ホネームーン、一葉全集、新不如歸、新己が罪、マダム振り姿見かゞみ、順境と逆境、言海、金色夜叉」△讀みたき書「乙女の祕密日記、乳姉妹、伯爵夫人、眞人の自白、當世妻君氣質、右換品を乞ふ

○

茨城縣水戸局區内常磐村
公設屠場瀧田樣方
根崎久子

▲不用の分。小品論文、默想の天地、南方の花、創作、スバル、心の花、姉と妹、俳味、野の花、本年新年號各婦人雜誌 △入用の分。昨年十一月號女學世界、本誌增刊娘時代、青踏、詩と歌、昨年十二月號新潮其他短歌俳句雜誌何月號にてもよろしい 交換貸借又は讓り受けてもよろしい

○

千葉縣長生郡水上村大庭
伊東さく子

△女學世界增刊も（光榮ある人生の春）御持の方お貸しなすつて頂戴ね 私も「女子東京遊學案内」を持て居りますっからお貸し下された方に進呈致します前以て御一報なし下さいませ 尙「新詩自在」を持ておらっしゃる方はお貸しして下さいませ

○

京都東洞院錦下ル
武内爲子

△皆樣の内で、進行曲粹をお持の方は御ゆづり下さいませんか、そして下名まで御知らせ下さいませ。亦繪はがき交換願ひ上ます

○

福井縣三國町、宅方
堀端翠月

▲私の許に、内藤千代子さんの「スヰートホーム」藤村操の「煩悶記」窪田空穗の「作家自在」「美文資材」「新體詩作法」其他不用の小說雜誌等があります故「讃美歌」お持ちのお方と御交換を願ひます

○

大阪市南區惠美須町三丁目
岩本方　大出千代香

▲持て居る書物。金色夜叉、青山白雲、小女戀、ポケット用美文書簡全四、暁の力、女學生道樂小女十二物語、露子の運命上下
△求める者。皆樣の内で冬とぶ歌を御存じの御方は御知らせ下さいませな

○

大阪市西區四貫島町一五
板東勝三郎方　板東まさえ

△讀みたい書。西鶴文粹、我輩は猫である、三四郎、門、夢二畫集、それから、切抜帳より、小品作法、風葉集、七花八烈
▲持って居る書。煩悶、罪の行へ、自然と人生美文斷錦、月と梅、作文自在、記事論文範、ふた昔、女子立志編、山の家、父の罪、家の桂、女の夢、短力、あきらめ、早涼、うたがひ、お小夜

○

奈良縣生駒郡々山町新中
奥内美代子

△皆樣方に詩集(だれの著でも好いのです)御持ちの方はありませぬか女學世界、本誌の舊いの文章世界、秀才文壇、金色夜叉等の不用の方ありましたら、私の持つてゐる本と御交換を願ひます
▲所有の本。和歌入門、新式作文辭典、和歌辭典、婦人世界、不如歸、新小說、文章講義錄、等多くあります、本に繪葉書五枚づゝそへて御送り申しますから

○

下野今市小倉の里
高村朧月子

△誠にすみませんが姉上樣の内で夢二畫集何の巻でも宜しいのですが御持でしたら貸して下さいませ御禮には必ずく神かけて日光名所繪葉書か名物の品をお送り致しますどうぞ

○

群馬縣多野郡鬼石町相生町
福田方　司場小鳥

▲持って居る書。ツルゲネーフ散文詩、短歌評釋、小品文集夢、路傍の花、歌集小詩國及び凌霄花、文章新字典、幻影、三田文學秋季增刊
△讀たい書。詩歌の集めたるもの(新派)は何なりともよし、交換望みの御方はハガキで……

追　加

○

橫濱市常盤町三丁目四十一番地
大森方　須藤千歲

▲●●●●橫濱より　私は本誌の愛讀者ですが誌友くらぶにたすのは初めてゞす何卒末永く御見捨なく御交際を願ひます

○

日本橋區青物町三ノ一
日本橋病院　淺野花枝子

▲●●●●日本橋より　親しき皆々樣妾も今月から此の貴重なる本誌の愛讀者となりました誠に不束者で御座いますが末永く御交際下さいませレターゝ御めぐみの程も切に御願ひ申上ます

○

新潟縣三島郡片貝潟巢
五十嵐方　齋藤みさを

▲●●●●新潟縣より。　私は三年前の夏の中半頃より皆樣の妹となりましたが一回も投書致しませんでした今始めて致しますどうぞ永久に交際をくれぐれも御たのみ申します御情け深き男子女方樣にも宜敷願ひます

○

山口縣都濃郡久保村字久保市
木村方　岩崎文

▲●●●●山口縣より　幸多き皆樣方私はたまらなく皆樣がなつかしう御座いますの、私は無學な少女です、皆樣四時のつれぐに淋しいかなしい折ふしに得た歌が千首餘りになりましたの、御覽下さいますとなら何卒レターお惠み下さいましお願ひ申上ます。

○

愛知縣中島郡稻澤町大字石橋
住田秋花

▲●●●●編物細工　私は皆樣の御立派なる御手際の編物細工や美しい御寫眞をのぞみます御禮には粗末な紀念繪ハガキを送りますからどうぞ願ひます

○

北海道北見國常呂郡野附牛驛
鐵道官舍第四號二戶
服部嘉鶴子

▲●●●●北見より　妾は昨年八月から本誌の愛讀者となりました御察しの通りの田舍者のわからずやですが何卒以後よろしく御文通下さいませ

○

山口縣豐浦郡川棚
倉光いさを

△●●●●山口縣より　御なつかしい誌友の諸姉上樣私は淋しい田舍に語る友もなく暮して居りますどうぞ永久に御交際を又繪葉書など御交換を頼みます

○鳥取縣東伯郡小鹿村大字高橋
岸田繁子

▲●●●●鳥取縣より　私は、昨年五月より女子文壇の愛讀者なのよけれども今迄皆樣には御親しく御交際を御願ひ申しました事はありませんのだけどね以來はどうか御見捨てなく諸樣にても意のお優しきお方は繪葉書なり御手紙の御交換を御願ひしますわ然し決して男の御方は嫌ですよ

四月特別號大懸賞募集

『明るい心』『暗い心』（孰れなりと）

處女時代又は新妻時代の明るい心、又は暗い心のさまざまを其人其時に依つて、ありの儘に書き表はしたものを募集す、二十四字詰百行以上二百行以內、總振がな附贈賞一等金十圓、二等金七圓、三等金五圓四等金二圓、五等金一圓（一等は（正金）一人なれど、二等以下（物品）は數人を選拔す）

▲短　文▼

短い文章を募集す、清新なる自然の描寫にても、眞實なる抒情にても、題も材料も凡て自由、二十四字詰十行以上十五行まで、總振かな附、一人三篇以內とす。

贈賞　一等金拾圓（一人）二等金五圓（一人）三等金一圓（五人）四等物品（七人）五等物品（十人）

◎櫻の名所◎

全國各地の櫻の名所の記事を募る、澤山の櫻の名所にても、一本の櫻にても有名なものなればよし、其場所、其由來、及び花時分の印象等文章の長短は隨意、正しく且面白く書きたるものを一等とし、其他投稿されたるは沒書とせず出來るだけ多く紙上に掲ぐる方針とす、記事と共に其櫻の名所の寫眞又は繪葉書を添えられる時は更に結構、一等金五圓、二等以下優等者は之に準じて贈賞す。（原稿には『櫻の名所』と書き添えること）

原稿締切二月二十日

編輯通信

▲新年號　本誌新年號は發行即日賣切となりし爲め、一時注文に應じかねしも其後增ᐟ出來僅少の殘部あり、賣捌所に於て賣切のため未だ手に入らざる諸君は此際直接本社に注文あれ。

▲『夜雨集』發賣　豫報の通り『夜雨集』は一月中旬發賣を初めました、若き婦人間には爭ふて讀まれるのです。

▲賞品發送　編輯局繁多の爲め後れてゐた賞品發送は前月『娘時代』の分まで發送を終りました、此處に延引を謝して置きます。

▲四月一日特別號　四月特別號は昨年までの增刊と例號を合したやうなものですから特別に原稿を募集します上欄記載の通りですから昨年迄の增刊同樣盛んに投稿を望みます、外に例號に掲載する作物、小說散文（自然、人事）詩、和歌、俳句、初作誌友くらぶ等は例號の通りです、但し例號通りの作物締切は矢張二月十五日、特別募集の締切は二月二十日ですから、その積りで兩方とも盛んに投稿を懇望いたします。なほ四月特別號の本欄は新年號同樣、內容の質も量もゆたかな且おもしろい雜誌を編輯いたします。

▲新刊紹介　寄贈されたる新刊書の紹介は本欄の餘白にそれ〴〵掲載してあります。

雜報

御歌會始

宮中御歌會始は本年は一月二十三日午前十時、宮中鳳凰の間で行はせられた、詠進歌約三萬首當日の諸役左の如し

讀師	從二位伯爵	萬里小路通房
讀師控	正二位公爵	二條基弘
講師	從三位子爵	入江爲守
發聲	從二位伯爵	大原重朝
講頌	從三位子爵	大宮以季
同	從三位子爵	持明院基哲
同	從四位子爵	石井行昌
同	從三位男爵	西五辻文仲
同	正五位	長谷信道
同	從五位	大原重明

年賀狀の激增

新年の年賀狀は年々其數を增加して行く傾向あるが、本年は十二月十五日より十二月三十日まで特別取扱の年賀狀數、東京市だけで一千九十九萬九千五百七十四通に上つた、前年の七百七十餘萬通に比較して實に四割二步八厘の激增である、其他新年三ケ日の間に於て東京で取扱つた郵便物、小包、速達等凡て前年より幾割か增加してゐる、又以て東京市の通信機關の膨脹を知ることが出來るであらう。

大阪の大火

一月十六日午前一時、大阪南區難波新地四番町より發火し、折柄一秒時間に十七メートルの西南の烈風に乘じ、魔の如き火焰は八方にひろがりて忽ち大阪第一の熱鬧地たる千日前に拔出で、活動寫眞の小屋や、見世物小屋の大建築を瞬く間にめら〳〵と燃え盡し、午前四時頃には高津に飛火して小學校の屋根より燃出で、高臺に鎭座せし大社生國魂神社も遂に炎上の厄に罹り、火は三方四方に分れ一時何うなることかと百五十萬の市民の心膽を寒からしめたが、消防夫及び師團の出兵が死力を盡して漸く正午前、谷町九丁目の墓地で大さな火先を消し止めた、小さな餘焰はなか〳〵鎭まらなかつたが、先づそれで治まつた、燒失したる面積東西延長十二町二十六間、南北幅員三町二十間、面積九萬九千六百六十坪、戶數約五千と註せられる、實に先年の北區大火以來の大變であつた。

記者附言。大阪には本誌の愛讀者が大多數にありますから、定めて今回の大火罹災中にも愛讀者の方々があらうかと思ひます、其等の方々に御災難の御見舞を申上ます、また幸ひに附近まで燒失して災を免れられた方々も澤山おありでせう、併せて御見舞申上て置きます。

汽車、雪に埋まる

東北地方の大雪は例年の話だが、今年も一月十五、十六の兩日は更に信越地方にも大降雪あり、幾列車も雪中に立往生した、田口關山間の如き積雪七尺以上、吹溜りは一丈にもなり、機關車でも雪中に埋沒した汽車を堀出すと云ふ騷ぎであつた、或は前後四臺の機關車で一つの列車を雪中から救ひ出すと云ふやうなことも奧州の方にあつた。東海道線は降雪があつても深くて一尺ぐらゐだ、雪の多いのは關ヶ原附近であらう。此の如く北陸、奧羽諸國が毎日のやうに雪を降らす頃は、太平洋岸には雨も雪も降らないで快晴がつゞく、東京でも雨降らざること旣に四五十日、東北地方の雪の上を吹いて來る冷たい風が武藏野平に霜と氷とを持つて來る、霜柱は地に氷りついてしまふ、一寸もある氷が張る、空氣は乾く、雪は降らないが東京の冬は全く寒いのだ。

記者附言。東北地方は區域が廣いだけ、復多數の本誌愛讀者を有して居ること、信じます雪に閉ぢられたる東北地方愛讀者諸君の健在を祈ります。

各座の春興行

帝國劇場は梅幸、幸四郎、宗十郎、宗の助等の一座に女優を加へて、黃金五枚、紊襍落お染久松など狂言の取合せも巧みに、歌舞伎座は新築の舞臺新らしく、歌右衛門、八百藏、羽左衛門、仁左衛門の大一座、狂言は之も取合せに苦心して丹波與作、竹取物語、野晒、襤褸錦などを配合した、本郷座の河合一座、新富座の上方役者一座、其他の各座とも新年興行は何をしても大入らしい。

活動寫眞も到る所大繁昌だ、西洋もの丶新しいのより、日本の芝居などがうけるらしいが、芝居を活動寫眞で見やうとするのは不自然なはなしだ。

歌御會始

松上鶴

御製

あさつくひとよさかのほるやままつの
こすゑをしめてたつそなくなる

皇后宮御歌

すこもりのひなのちよをもさゝくとや
みかきのまつにたつのなくらむ

東宮御歌

こまつはらすゑはるかにもきこゆなりともよひかはすひなつるのこゑ

東宮妃御歌

山人をのせてかへりしたつならむつはさをさめて松にいこへる

海軍大將大勳位功三級威仁親王

神路山いはねのまつにちよよはふたつの聲こそたかくきこゆれ

勳一等慰子

さしのほる朝日をうけて山松のこすゑしつかにたつそねふれる

侍從長從一位大勳位公爵藤原朝臣實則上

すむたつも心のとかにちよをへて松のときはにおいせさるらむ

宮内大臣從二位勳一等伯爵臣源朝臣千秋上

松のへにちとせをよはふあしたつのこゑこそひゝけ海のうちとに

題者點者

樞密顧問官兼御歌所長從二位勳一等男爵臣藤原朝臣正風上

松のへにすこもるたつの聲きけは老かよはひものふへかりけり

發聲　從二位勳四等伯爵臣源朝臣重朝上

かきりなききみよにあえむとあしたつも大内山のまつにすむらむ

讀師　從二位勳四等伯爵臣藤原朝臣通房上

東山のほるあさひのかけをうけてみそのゝまつにたつの遊へる

講頌　從三位勳四等子爵臣藤原朝臣以季上

高砂のをのへのまつに君か代のちよをかさねてたつそなくなる

講頌　從三位子爵臣藤原朝臣基哲上

朝しほや今みちぬらむ磯さきのまつのこすゑにたつそむれゐる

講師　御歌所參候從三位勳四等子爵臣藤原朝臣爲守上

濱松につはさをならすあしたつは遠きしほちやこころさすらむ

奉行　御歌所參候正四位子爵臣菅原朝臣德長上

すこもらむ枝やたつぬるあしたつのみねの松原ゆきかへるみゆ

講頌　殿掌從四位子爵臣平朝臣行昌上

かけたかき松の梢にうちむれて君かちとせをよはふたつかな

講頌　從三位勳四等男爵臣源朝臣文仲上

二見潟波やこすらむあしたつのいほはなれて松にうつれる

奉行　從五位勳五等臣藤原朝臣敏夫上

年のたつあしたのとかに聞ゆなりみその松のあしたつのこゑ

講頌　正五位臣平朝臣信道上

松かえにすこもるたつの雛もけさ年のはしめとちよよはふらむ

講頌　正五位臣源朝臣重明上

みそのふの松にやとれるあしたつのちよよふ聲の高くもあるかな

選歌

樞典侍正四位藤原祥子上

朝日さす小松かはらにあしたつの千代の聲こそしけく聞ゆれ

千葉縣神里小學校訓導伊藤榮次郎上

あしたつも本を忘れぬ心よりすたちし松はたえすとふらむ

東京府士族　坂本芳子上

よるなみのほのみえそめて明方の磯の松原たつそなくなる

東京府平民　植松德子上

雛鶴の千歳をよはふ一こゑに老木の松も若かへるらむ

愛知縣平民　三輪彥年上

たつはみな元の梢にかへりけり濱の松かけしはやみつらむ

二月

二月は春立つ月です、昔の歌よみは立春の日を能く知つてゐたものと見えて、春立つ日よめると云ふやうな題の歌が澤山あります、如何にも節分が二月四日で、其日から立春の節に入ると暦にもありますが、實際はまだ〳〵容易に春らしくなりません。東京の二月は淋しく、寒くさうして雪や霙が能く降ります、十二月、一月の晴れた反動で二月、三月になつてから却つて雪が多いのです、其く〳〵せ梅の咲き出すのも二月です雪が降つても春は春の氣候は爭はれないもので木々の芽が色づき地にかぢりついてゐる草が心もち青い色に生きて來、偶には小さい菫の花を日あたりにみつけ出すのも、二月の末からです。

一月の遊樂時代去つて、二月の努むべき時が來ます、紀元節は寒いから餘り出る人もない、初午は地方〳〵でおもしろい行事の一つでせう田舍では麥が伸びる、暖い南國では雲雀の聲も空に聞えるでせう。雪降る寒國でも、もう冬のやうなことはなく、雪の下から暖い氣が催ふします、然うして都會の人も、地方の人も、老いたるも、若きも、男も、女も、早く暖かい春になれば宜いと待つ時です。

大祭日　十一日（紀元節）

日曜　四日　十一日　十八日　二十五日

▲注意　本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回（一月、四月、七月、十月）定期號を特別三百頁の大冊として發行することになりましたなは左の定價表を詳しく御覽下さい

○本誌投稿及び懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること、▲小說と詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類每に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつける こと▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸●●◦●一人一枚限。

◎投稿は每月十五日到着を以て嚴に締切る

▲小說と散文は　▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し短きものは此限にりあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇　定價　每月一日發行

四十五年一月より左の通り改定す

◎特別號一冊金參拾錢　送料貳錢五厘

◎普通號一冊金拾五錢　送料壹錢五厘

◎半年分（特別二冊 普通四冊）前金壹圓九錢　送料拾壹錢

◎壹年分（特別四冊 普通八冊）前金貳圓八錢　送料貳拾貳錢

特別號は一月、四月、七月、十月號なり、其他の月は皆普通號です。

▲從前の定期增刊は無くなりました

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと、郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵劵代用は必ず壹割增のこと最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料　申込期限 發行前月十五日

壹等割引　一頁貳拾五圓（半頁廿四字三十二行）

貳等割引　一頁貳拾圓　半頁拾圓

參等割引　一頁拾五圓　一行四拾錢（一行は敷字二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。文明廣告社。弘報堂其他いづれの取次店にても取扱申候

明治四十五年一月二十五日印刷納本
明治四十五年二月一日第八年第二號

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　女子文壇社
東京市京橋區大鋸町十、十一番地
電話京橋六〇七番
振替東京貳七九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、大阪盛文館外

寒氣は婦人の讎

寒氣はたゞ婦人のみならず、あらゆる生物の敵である、赤道直下の熱帶地でも人類其他動植物は生存が出來る、出來る所ではない、發育は却つて速く繁殖力は強い、併し北極地方では生物は生存が出來ない人類は愚か青い物一つ見えないと云ふ仕末、一寸の探檢でさへまだ完全に出來ぬ。に居る位である、而して北極はさておいて寒帶地方では生存が出來るけれども其發育が遲い、現に熱帶地たる印度人は、寒帶地たるエスキモー人に比較して發育も速く、且つ體格も大にして高いのは確かに寒氣が生物の生殖を防止する、例證である、故に人間生殖の大任務を有つて居る婦人が、寒氣と密接の關係を有つてある事は睹易き道理である

（一）女の腰は火にいけよ

といふ諺が出來て居る如く兎角腰が冷えるとか脚が冷めたいとかいふ特に昨今のやうに寒氣が劇しくなると、夜床に就いてから腰足が冷えて眠れず、其内に逆上が來て顔がほてつて愈眼が冴える、そうかうする中に色々の妄想が胸に湧いて來て、眠らうと思ふと猶眠れない、こんな事が二晩も三晩も續いて睡眠不足の爲めに身體は甚だ衰弱する人もある、これは子宮に故障のある人に特に多いので、つまり血液の循環が調はぬためである

（二）風を引くな

世の中は階の上げ下げまで頤で女中を使ふ奥さんばかりでない、氷張り詰めた水で洗濯や拭掃除をせなければならない、内職もある、火の氣一つない部屋で一日齷齪と働く女事務員もある、寒風に曝されながら體操させられる女學生もある、郊外散歩へ出れば冷めたいからつて蒲團の敷けに羅病者もある、かういふ婦人は冷込みの爲めに風邪に罹り易いから一段の注意が必要である、殊に月經中や姙娠中の風邪は往々子宮病を誘ふものでありますから、婦人は何人も風邪の豫防に注意が肝要であります

（三）寒氣は姙娠を妨ぐ

統計學者が出產屆に依つて其姙娠した月を調べて見ると姙娠は春に多く冬に少い、大寒は甚だ稀であるとのことである、鷄に例へて見ても寒卵を生む事は稀であるといふて居る、又寒地にて子なき婦人が温かい地へ移り始めて姙娠した例もあり、温かい土地の人が寒地に移つてから姙娠せぬやうになつた例もあるので、寒氣が姙娠の妨げとなる事は最早爭はれぬ事實である

（四）冷込み豫防の最良方法

冷え性の婦人には火鉢もよからう、重ね着もよからうが、併し外部の防寒用意丈ではいかぬ、特に寒い〳〵此寒中夜寢てから腰部が冷えて寢心地あしき御婦人は御休みになる前一寸一服中將湯御召しなさい、それこそ手から足まで温まつて甚だ心地よく寢られます、又冷え性でなくとも、此寒空に無理な仕事をする人などは風邪を引かぬ用心に、何か藥を飲んでおかうと思ふなら、朝仕事を始める前、晩仕事の終つた後、一寸一服中將湯を御上りなさい、最後に寒氣は姙娠を妨げることは上述の通りでありますが、御子樣無くて御困りの人は特別此寒中身體を温めて暫く續いつゝ中將湯を御召上りになるが肝心です、猶中將湯の定價は五週間分二圓五十錢、三週間分一圓六十錢、二週間分一圓十錢、一週間分六十錢、四日分三十五錢、二日分廿錢、本舖は東京日本橋區通四丁目津村順天堂で取次は全國到る處にあります

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

△[illegible]壹圓金拾五錢[illegible]